明治三十三年十二月廿五日（第三種郵便物認可）

四月十五日増刊

女學世界

悲劇十番



第十二巻第六號

博文館

明治四十五年四月十三日印刷納本（毎月一回廿三日印刷納本）


レートザヱリー
一個金貳拾戔
Laft
東京
大阪
平尾賛平
ナンノ
苦もなく
人に優れた
化粧するには
新たに生れた
白粉下
レートザエリ！の
愛用一つ
滴ろ許りの
顔の艶
花も及ばぬ
肌の色
自然に備はる
その効果

女學世界臨時增刊

悲劇

目次

第十二巻 第六號

十番

クラブ新聞

禁轉載

クラブおしろい
クラブはみがき
クラブ美身クリーム
クラブあらひこ
練香油クラブ美髪用ポマード

本店新案

蓮葉女

外濠外史

おとなしくない婦人を蓮葉女と言ふ事は西鶴の『一代男』に書いてある。長唄の『娘道成寺』の文句に『吾妻育は蓮葉な者じやえ』とあるのは、これを演じた役者の中村富十郎が自分を諷して言つた言葉である。大阪ではこの『吾妻育』を『都育』と唄ふさうである。なんでも蓮葉と云ふのは昔大阪の宿屋で客馳走の爲に置いた女の名ださうで、よく田舎などで物を包むのに竹の皮の無い時に、蓮の葉で包んで藁で括つたりする所から下品と言ふ事を蓮葉と言ふやうになつたのださうである。語源は果して然うかどうかは分らぬが、蓮葉と云へば、何となく薄つぺらな感じがする。よく階級の低い婦人に悪い白粉を無暗と濃く塗り立てゝゐるのがあるが、あれなども矢張り蓮葉の方で、自分が薄つぺらだから、せめて白粉で厚みをつけやうとしてゐるのではあるまいか。クラブ白粉の薄化粧を喜ぶ婦人に蓮葉女の絶無なのを見ても、それは分る。

一口噺

母『此子はどうして斯う亂暴なのだらう。本當に●●●●あらい子だよ』

子供『ソレぢや坊の名前をクラブと換へておくれ。』

●クラブ洗粉の愛用者は容色月の如く清妍也

噂の聞書

▲麴町の或將校の奥さんは貞淑の聞えある婦人だが盛にクラブ洗粉の優秀なのを愛でゝ居られた▲牛込矢來の秋原さんのお嬢さんは小町娘と評判のある美人で琴、活花、茶などに堪能だと聞いたが矢張り大のクラブ黨だとの噂▲四五日前新橋のお酌連からクラブの本店へこんな手紙が舞ひ込んださうな『妾はクラブが大好きよ、だから妾屹度新橋の姐さんやお酌さん達をみんなクラブ黨にして見せるわ』▲これも新橋だが處はステーション、婦人待合室にゐた二三の貴婦人が頻りに高尚な薄化粧の美を稱讃してをられたがたしか○○夫人と○○男爵令夫人らしかつた。

お早う！



お二人ともクラブ歯磨の愛用者です

クラブ都々逸

ほんにクラブはよい洗粉よ
玉の肌のつや〳〵と

ほんにクラブはよい歯磨よ
水晶見たいな歯がちらり

ほんにクラブはよい白粉よ
花も耻らふうす化粧

儿帳の陰



田中製版所三色版

逝く春



佐々木林風筆

校外生募集

●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●

產婆速成唯一の獨習機關にして產婆諸姉の好伴侶なり

東修五十錢月謝七十錢全科三圓三十錢五ヶ月卒業○毎月二回發行詳細規則書郵劵二錢を要す

私立 日本產婆學講習會

東京本郷區駒込林町百八十三番地

講義 本科○模型實習○質疑○受驗科○試驗問題答案○知名の博士學士等諸講師の口授せらるゝまゝを印刷し且つ挿畫を附して頒つものにして總ふりかなつき至極わかり易

内容 く生徒の文章添削質疑應答等其の人の學力に應じて懇切に教授をなすものなれば校外生と雖ども通學と少しも異なることなく一人々々に口授すると同等學力が得らる

◎造花材料營業目錄御入用の方は左下方の切取に郵劵二錢を添へ東京九段坂吉住商店宛申込まるべし

造花 材料 書籍

科目

造花器具及材料。造花及半製品。摘細工材料。袋物材料。刺繍材料。造果材料。瓶細工材料。

實用造花自在 正價一圓廿錢 郵稅八錢

實用造花圖譜 正價一圓 郵稅六錢

造花自在は造花の秘術を說き盡す造花術秘密の鍵にして造花圖譜は七十一花種の瓣、葉、蕚等の切形に一々鮮麗なる石版數度刷の着色を施したるを以て斯技に就事する者必携の好著なり

◎造花書籍内容見本御入用の方は左下方の切取に郵劵二錢を相添へ東京九段坂吉住商店宛申込まるべし

東京九段坂 吉住商店

特長電話番町二〇五六番

振替東京六六七九番

切取り線

四月號

女(甲の一)

醫學士 森友道君著

淘宮術と處世

要目

第一章 天源術と淘宮術
第二章 淘宮術と衞生
第三章 淘宮術の人性説
第四章 淘宮術の修養法
第五章 淘宮術の道德
第六章 淘歌と淘話
第七章 淘宮道德と新處世術
第八章 淘宮術と日本三大豪傑

全一册菊判和裝
紙數三百三十頁
定價五拾錢
郵税八錢

東京本町 **博文館** 振替口座東京、二四〇番

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵劵二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村 川名助次郎

●本法は 女髪結師安部歌子女史 多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者をして悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

ちじれ毛くせ毛
二大奇方劑
毛はへうけあい

●東京市麴町區三番町六十八 濟世園

第十四回

新學期開講

會長陸軍二等軍醫正 正六位勳四等ドクトル 渡邊鼎

通信教授
產婆看護

講習生募集

產婆科六ヶ月卒業
看護科四ヶ月卒業

規則要郵劵三錢

東京四谷區内藤町一ほの一
東京產婆看護婦講習會

女(甲の三)

寫生



寺沢孝太郎筆

黄梅



河崎蘭香筆

草 人 美



女子會員募集

家政講義

◎(每月二回發行 二ケ年修了)

會費 一ケ月五十錢 半ケ年二圓八十錢 一ケ年五圓四十錢 全學期分十圓

◎入會の最好期
入會金免除四五月限

入會者福音

將來家庭に入りて一家の和樂と生涯の幸福を望まるゝ淑女現在家庭の主婦にして更に進步改善を望まるゝ婦人の處世に切要の學藝を通信敎授によりて修得せしむるは本會講義也親切なる講述は通學聽講すると異らず如何に講述が平易懇切にして科目の撰擇解說に注意せるかは先づ內容見本によりて一斑を知られよ本會講義は獨學者唯一の修學機關にして好師友良參考書たり!

新學期開講

◀科目と講師◀

- 修養談……諸名士各學校長
- 修身講話……成瀨仁藏
- 教育……麻生正藏
- 實驗心理學……松本亦太郎
- 兒童研究……高島平三郎
- 法制大意……奥田義人
- 經濟大意……中隈敬三
- 社會衛生……三宅秀
- 家庭理科……近藤耕藏
- 家事……井上秀子
- 作法……小笠原清務

- 日本料理……笠木幸子
- 西洋料理……手塚かね子
- 裁縫手藝……櫻風會研究部
- 生花……兒島文茂
- 家庭園藝……佐々木祐太郎
- 自然研究……大橋廣子
- 文藝……武島羽衣
- 文學評釋……下村莢
- 其他科外として 歴史、地理、生理兒童研究

◎見本附き會則申込次第進呈

(その二)

編輯所 東京市小石川區目白臺 日本女子大學校 通信教育會

發行所 東京小石川久堅町百八 精美堂 振替東京二八三八番

大學

■鳩山春子女史著■

婦人の修養

▲菊版製本優美▲

定價金一圓二十錢

郵税金十二錢

本書は鳩山女史が深き素養と、廣き見聞とを以て婦人常識の修養を説きたる書にして、母たる人は育兒の敎へを聞くべく社交の婦人は交際の術を學ぶべく各女學校は最好の參考書として如何に偉大なる感化を受くべきか誠に得易からぬ婦道の木鐸なり。

■下田歌子女史著■

三體女子消息文

▲菊版洋裝全一冊▲

定價｛並製金壹圓／特製金壹圓二十錢

郵税十二錢

本書は下田先生が子女間に往復する通信文に就て其、起源、變遷、種類、組織、書方に至る迄を尤も平易簡明に説き、更に之れを雅文、候文、口語文の三體に分ちて萬樣の文範を揚げ以て思想、感情の表顯、應答の資料に供するなど本書の特長と云ふべし。

文學博士 芳賀矢一著

婦人美譚

■菊版洋裝全二冊裝幀優美■

定價各金壹圓五十錢・郵税金十二錢

上下三千載、東西一萬里、神代より朝鮮支那西洋各國の古今を通じ婦人の逸話美譚を一切網羅し而も極めて平易言文一致體に書き砕きし物なり。佳人才媛の美、貞女烈婦の壯、良妻賢母の實、俠女勇婦の奇、紙面は燦爛として花薫じ日に輝く、よろしく各家庭に備へて子女の敎養に資すべく、各學校に備へ修身敎材の絕好の參考書として適切なる物なり。

■日本女子大學敎授 笹木幸子女史著（再版）

年中行事 家庭儀式料理

定價金一圓 總クロース美本 郵税十二錢

菊版洋裝 全一冊 斯界の珍書

■日本女子大學敎授 手塚かね子女史著（好評）

家庭の友 西洋料理法

定價金壹圓 總クロース美本 郵税八錢

四六版一冊 割烹界の最新書也

東京 精美堂 小石川

東京 博文館 本町

女(乙の三)

宮内省御用達

天下一品

最上醬油

醸造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候



花はその色香ありて
人の目を樂ましむるも
日毎にかはる御食膳の御風味
こそ花よりも尚ほ樂みあれ
されど各異なる御嗜好もあれど要す
るに調味の奈何によるべし
御調味には**万上印**味淋を御使になれ
ば一しほの風味を増しどなたにも
譽ていたゞく御料理ができます

女(乙の四)

名流婦人



子爵松平頼和氏夫人保子の方、――徳川頼倫侯令妹

名流婦人



伯爵黒川通孝氏夫人知子の方、——島津忠重公令姉

女(丙の一)

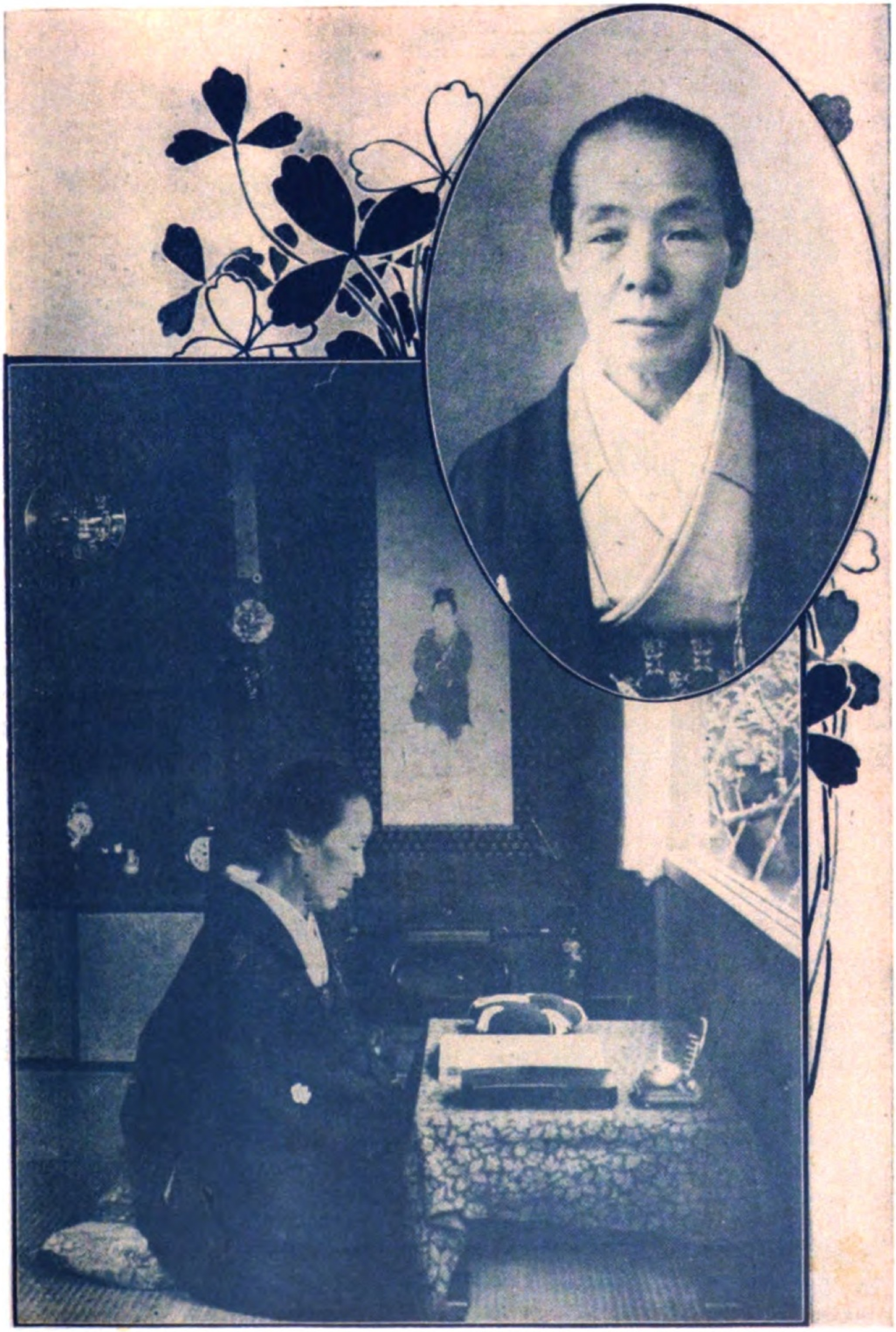
女(丙の四)

令嬢かゞみ



右中村富子孃、左塚本やす子孃

叙勲されたる兩女史



(右上)三輪田高等女學校長三輪田眞佐子女史 (左下)東京高等女學校長棚橋絢子女史


最上醤油
元祖
開業貳百六拾八年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一一番　振替口座五〇二一一番

御婚禮御化粧

御下命これ有り候はゞ館員（婦人）御尊邸へ參上仕り、御身支度御髪飾り御化粧一切の御用を相辨じ申すべく候、

右御化粧の義は當館獨特の方法により、御化粧料は歐米各國より輸入致し候物の中、優良なる物のみを撰擇致し使用致し候事故、容易に剝げ落ち候樣の事はこれなく候、

特に自然美を旨と致し、御素顏を損ぜぬやう、御召物との配合、光りの接觸、御祝言の御場所等に精々注意致し、適當の御化粧仕り候べく、續々御用命の程伏して奉願上候、

●料金の義は御一報次第委細申上ぐべく候

ライラッ東洋總代理店
理容白粉本舖　新橋竹川町十二番地

理容館

電話新橋二三〇二番
振替口座東京一四一〇〇番

ライラツク水



〔日本政府登錄〕
〔美顏術實驗有効〕

美しくなる素‥

コレが有名なライラツク化粧水ヨ！
お母さんや姉さんや私の艶々して美しいのは！自慢じやないけれど…
コレの御蔭です
ソレニお父さんも兄さんも四角張っていらしっても内々大の愛用家なのヨ
「男だつて綺麗に成り度いからナー」だつてホヽヽヽ

家庭の必要品！

定價一瓶金五拾錢
送費金八錢

窪田空穂君著

洋裝四六判
紙數約七百頁

近刊

註解 古今名歌新選

本書は萬葉集、八代集、重なる歌人の家集及び明治新興の短歌中より著者が日夕愛誦を措かざるもの千餘首を撰出せるもの是れを類題別に排列し鼇頭には各歌の大意を略述して解意に便せしむ著者が明治歌壇に一旗幟を樹立して奇才を弄するは世既に定評あり、其の詩的烱眼に觸れて拾收せる群芳秀英は皆是れ金聲玉振の響を不朽に傳ふるもの是れ軈がて後進作家の軌範にして又著者嗜好の半面なり。

全一冊

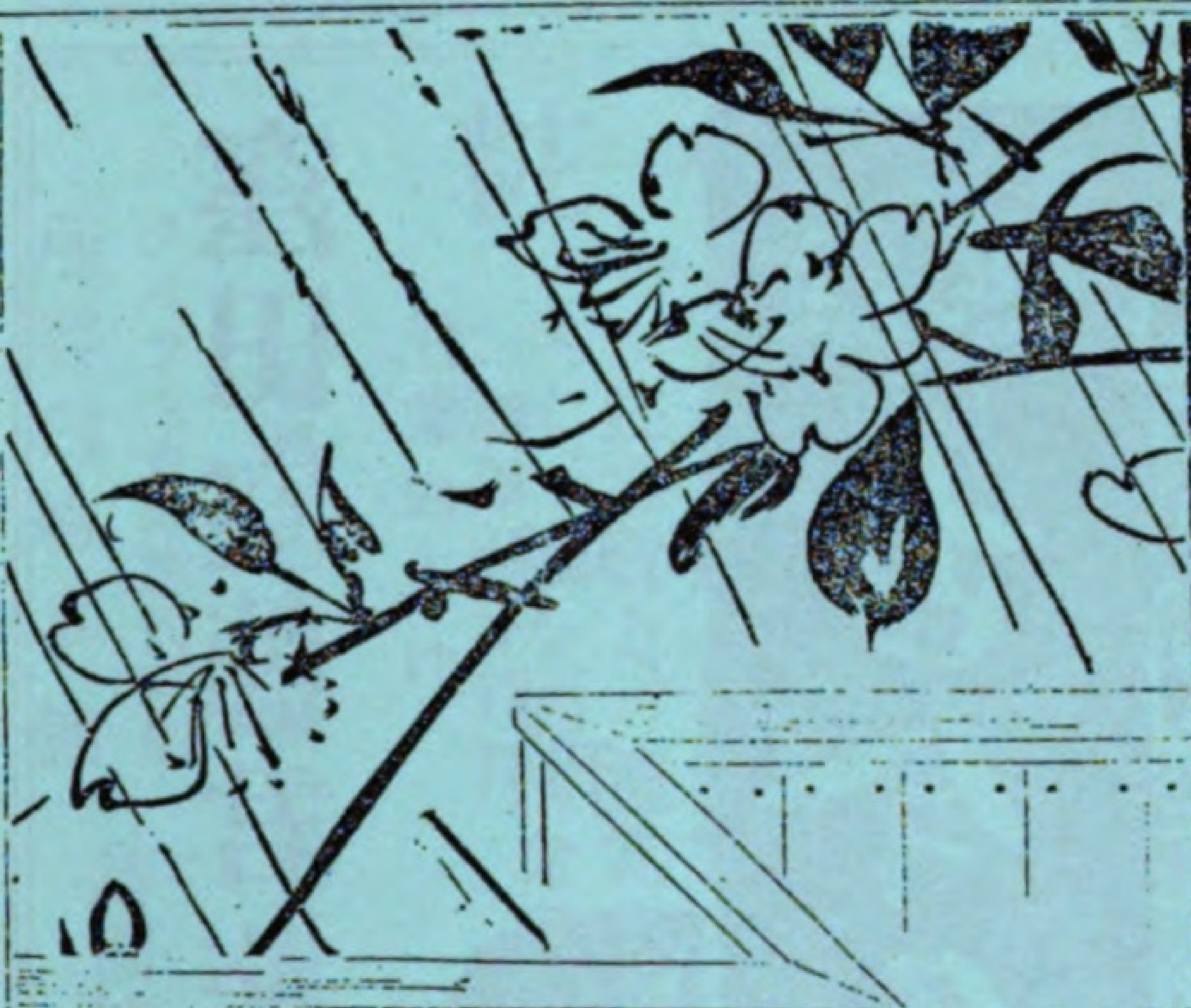
東京本町 博文館

女(丁の三)

岡田八千代女史編

閨秀小説十二篇

(發兌元 東京本町 博文館)



源氏の大作枕の草紙の雄篇現れたる平安朝は知らず才媛の輩出近時の如きは盖し未曾有の事なり殊に筆を小説に染むる閨秀に至りては未だ今日の如き盛観はあらず本書は現時の傑出せる作家より特に十二篇を撰びたるもの感覺の鋭敏にして感情の優婉に觀察の微細なる別に一境地を拓けり就中個々各異彩を放つて紅紫爛熳たる處近時出版界の美觀と云ふべし

▽最新刊△

洋裝四六判三百餘頁
裝幀瀟洒優美
定價金四拾五錢
郵稅金六錢

家庭小說

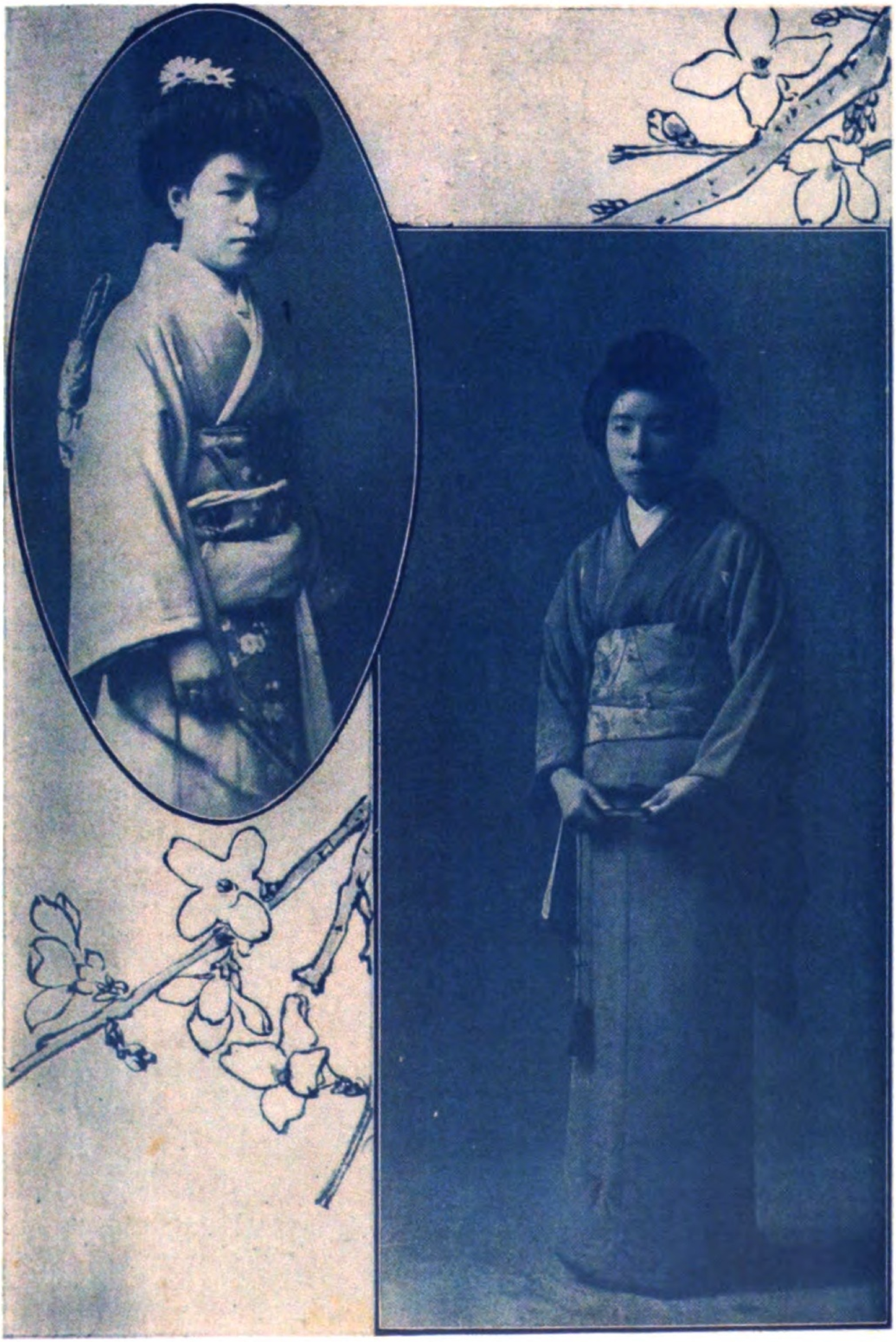
前田雪子女史抄譯

小姫君

洋裝四六判 總クロース南京綴 紙數二百八十頁 正價四十五錢 郵稅六錢

慈愛深い父母の膝下で、嚴格なる家庭の敎育を受けて生育つた、最と睦まじい姉妹の姫君は、浮世の戀愛を夢む時、父母に由つて定められた婿君を嫌つた。奇才に富み頓智に長けた妹の小姫君は、花もうら羞かしい十七歲の年頃に、その機智を遺憾なく發揮し、嚴父が豫想した婚約をがらりと外させ、日頃仲の好いお友達なる令孃を媒介して、孰れも滿足しかも幸福なる三組の婚姻を成立たせた手際の鋭敏なる所、ナイーヴな所、是れ本書の主眼併せて善良な家庭の有様も窺はれる、

蓮翹の花



左男爵川田龍吉氏令妹貞子、右坂本法學士夫人芳子

小笠原女禮式





上圖お汁のすゝめ方、下圖御飯の盛り方

少女世界第七巻第六號增刊

學校時代

四月十日發行

華やかで樂しい少女の學校時代！生涯の運命をさだめる大切な學校時代！この時代にはさまぐ〃の注意も必要ですし。またいつまでも忘れ得ぬ思ひ出もあります。その意義深き學校生活と、なつかしい思ひ出とを記した『學校時代』を、少女は必ず一讀せねばなりません。殊に、學校へ入學することの出來ない不幸な少女のためには、親切な學修法や教室日記も揭げてあります。

內容の一斑

◎女學の五ケ年
◎新らしい教科書
◎樂しいクラス會
◎忘れ得ぬ友垣
◎教室修日記
◎少女學法
○少女對話 同窓會
◎寄宿舍の夕
◎忘れ得ぬ先生
◎好きな學課
◎運動場のポプラ
◎女子師範より
◎遠足の歸途……巖谷小波



菊判紙數百廿八頁
口繪、三色版、石版
寫眞版等數葉挿入
正價十錢
郵税壹錢

東京本町 博文館

女(弐の一)

婦人世界春季增刊

賢母の鑑

四月十日發行　（卷六第七號）一冊 拾五錢　郵稅一錢五厘　（振替三二六番）

▽我が母の感化……三輪田元道／棚橋一郎

□□貧苦の間にニコニコしてゐた母の顏……國分操子

□□子供の盜み食は泥棒の初め……原胤昭

□□我が子の切腹を勵ました賢母……下田歌子

□□娘より嫁に味方する我が母……嘉悅孝子

家庭小説 ▼子寶……村井弦齋

□□七人の繼子を育てた苦心……醫學士夫人 栗本花子

□□子供を幼稚園に入れる利害……高島平三郎

□□子供の性質と母の手加減……川瀨富美子

□□賢母の心得おくべき育兒上の注意……加藤博士

▽東西賢母の鑑……渡邊白水

發行所 東京京橋南紺屋町 實業之日本社 （電話京橋八七四番・八七五番・八七六番）

女（戊の三）

治療顧問

女一代の衛生

處女の煩悶

年頃になつても月經の無い時、又は有ても經血の量が不規則で多かつたり少かつたり、或は來潮期が早かつたり遅かつたり或は二三ヶ月も滯たりし或は月經時に痛を感ずる樣な事があつた場合には如何に處置す可きものか

新婦の恐怖

新婚前後に於て最も罹り易き病氣の原因及び徴候如何なるものか、若し内診を受くるのが恥しくて直に醫療を乞ふ事の出來ぬ場合は手前療治で完全に治す方法が有らうか、又良人に淋疾の疑ある時は何うして豫防するか

主婦の悲嘆

夫婦共丈夫で居て結婚後幾年經ても姙娠せぬ婦人、只一回姙娠して途中流産し其後更に姙娠しない婦人、又幾回も姙娠するが何時も流産する婦人は何うすれば滿足に子寶を得られるか

醫學博士　土田卯三郎先生述　産科婦人科専門醫學士　佐藤得齋先生著

婦人病者の心得

無代進呈

實驗報告書添附

申込所　東京市京橋區新榮町　笹岡省三宛ハガキにて申込あれば直ちに送本致します

姙婦の心配

姙娠に惡阻は附き物の如く誤解して打捨ておく爲めに、早産流産死産等の不幸を招き甚だしきは命迄も失ふ婦人が尠くないが、其原因は如何なるもので何んな手當が必要か殊に初姙婦は何うすれば安産が出來るか

病婦の苦痛

永年子宮病血の道で醫者通ひ病院歩きこの藥あの妙藥と頭から浴びる程飲んでも一向効なく始終逆上頭痛がして下腹腰が痛み、こしけ強く蒼白い顏して、ブラ〳〵不愉快な月日を送つて居る婦人は何うすれば治るか

老女の誤解

月經閉止期前後に時々出血したり下物が有たり、足腰が冷えたり、手足に浮腫などの出來る樣な事が有ても老人だから子宮病ではあるまいなどゝ間違つた手當をしたり、平氣で居る婦人は何う云ふ危險が伴ふか

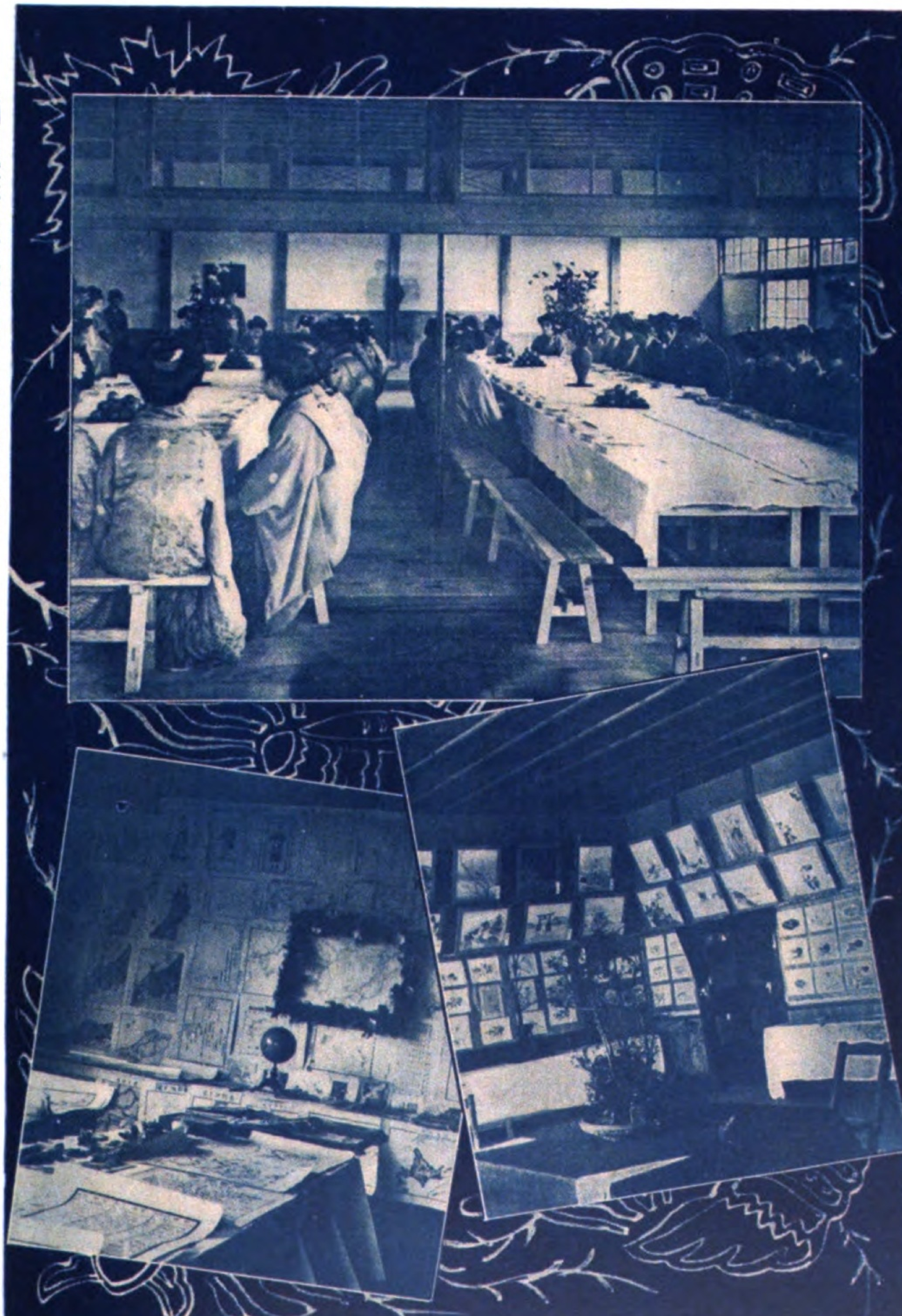
女(戊の四)

東京女子醫學專門學校卒業生



前列右より今村千代子、白木よし子、米山はつ子、椋木まつ子、稲田音羽子
後列左校長吉岡彌生女史、右良人吉岡荒太氏

淑德女學校の創立紀念會



上圖は紀念會の會場、下圖は同校生徒の製作品

塚原澁柿園君著

忍の秀吉

祖父物語りに『お市御料、淺井より歸り、御兄信長の許に居給ふ。天下第一の美人なり。筑前守深く心に懸られつれども、夫の敵とて承ひき給はぬを、三七殿と心を合せ、柴田これを迎へ取る。秀吉痛く憤り、勝家を越前へ歸さじと騷がれしを、人々寄りて和めたり』とあるを經とし。太平記の評判なる日置の九郎が『亡瑞の鎧』を緯として編み成せるもの、即ち此篇である。とは著者の自から口にする處である。武俠の澁翁、英雄豐公が情事を描く、既に是れ稀有の事なるに、例の史眼は彌々燃犀の光りを倍して、一掃の筆下、かの魑魅や魍魎やは、醜を當面に暴露せられて毫も遁るゝところ無し。正に是れ世態究竟の機微を穿てる一部豐家の衰亡史。若し夫れ一讀、深く味ひ遠く思はゞ、豈に惜紅愛紫の風流とのみ言はんや、國家の興廢に關する因果の迹の歷々たるもの有るを知るを得む。

全一册
菊判南京綴
紙數二百八十餘頁
正價金五十五錢
郵稅八錢

東京本町三丁目
博文館
振替東京二四〇

女(巳の一)

家庭整理の指導

家庭百科全書

全部五十册＝毎月一回發行

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須いざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て、編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

第一編 新家庭訓 三輪田眞佐子女史著
第二編 四季料理 石井泰次郎君著
第三編 裁縫指南 喜多見佐喜子女史著
第四編 和洋菓子製法 龜井まき子女史著
第五編 茶道と香道 水原翠香女史著
第六編 諸流生花指南 琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著

第十編 惣菜料理 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著
第十一編 編物指南 三木とみ子女史著
第十二編 婦人の生理と衞生 牧野淸子女史著
第十三編 教育お伽噺 木村小舟君著
第十四編 女徳の養成 前田長太君著
第十五編 家屋と庭園 內山正如君著

第十九編 家庭の趣味 文學士大森兜山君著
第廿編 家庭遊戯法 高橋忠次郎君 松浦政泰君著
第廿一編 書道手引 井田秀生君著
第廿二編 歌の手引 大和田健樹君著
第廿三編 刺繡術指南 磯村大次郎君著
第廿四編 摘み細工指南 山田興松君著

第廿八編 洋樂手引 前田久八君著
第廿九編 兒童訓話 母の知識 木村小舟君著
第卅編 洋食の調理 東京治庖會講師著
第卅一編 衞生と衣食住 福田琴月君著
第卅二編 東西名婦の面影 高須梅溪君著
第卅三編 婚姻のかゞみ 河崎醉雨君著

發行所 東京日本橋
販賣用電話本局二六二〇

婦女必讀の大全書

第七編 **育兒の務** 田村貞策君 朝夷孤舟君共著

第八編 **簡易治療法** 藤井靜子女史著

第九編 **禮式と作法** 佐方鎭子女史著

第十六編 **魚鳥家畜の飼養** 鹿野化骨君著

第十七編 **女子作文法** 遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著

第十八編 **子女の教養** 棚橋絢子女史著

第廿一編 **新式化粧法** 藤波芙蓉君著

第廿二編 **室内裝飾法** 近藤正一君著

第廿三編 **衣服の調整** 石崎蓬園君著

第廿四編 **交際と談話** 福田琴月君著

第廿五編 **婦人日常座右銘** 高須梅溪君著

第廿六編 **日用家庭理科** 一戸清方君著

第廿七編 偉人の妻

前田雪子女史著

何れの國、何れの時代に於ても偉人として世に立てるもの多くは皆内助の功に待たざるはなし、本書は古今東西に於ける英雄豪傑の妻、大政治家の妻、大學者の妻、大教育家の妻、大發明家の妻、大事業家の妻、大宗教家の妻、あらゆる階級の婦人を收む、貞女あり、烈婦あり、才媛あり、閨秀あり、家庭の良婦あり、交際場裡の女王あり、糟糠の妻あり、賢夫人あり、倘附錄には偉人を悩ましめたる妻ありて、是れ亦一興を添ゆ、苟も良人を助けて世に偉業を企てしめんとする婦人は、必ず一本を購ひ以て範を本書收むる所の偉人の妻に仰がざるべからず

第廿八編 家庭日常 公けの心得

小西眞雄君著

●公に於ける一人前の人と一人前ならぬ人(一節)●婚姻と離婚とに就ての心得(八節)●法律上の親子といふことに就ての心得(一節)●親の權利と戸主の義務に就ての心得(三節)●隱居と養子とに就ての心得(六節)●親族と家族とに就ての心得(三節)●親族會と後見とに就ての心得(七節)●養料扶助の義務に就ての心得(四節)●相續上の心得(一節)●戸籍上の手續に就ての心得(三節)●貸借に就ての心得(四節)●質物と抵當とに就ての心得(一節)●贈與と賣買とに關しての心得(五節)●法律に定められたる委託といふことに就ての心得(四節)●主人と雇人とに關しての心得(四節)●他人のものと自分のものとに就ての心得(四節)●住居及び身體の保全に就ての心得(五節)●隣同志の關係並に水と火とに就ての心得(七節)●他人の秘密といふことに就ての心得(一節)●自分の名譽信用及び業務を保全する上の心得(一節)●脅迫を受け横領されたる時の心得(一節)●證言を僞り虛僞の申告をしたら如何なる罰を受くべきか(一節)●親族間のものを盗み又は臟物を收受したり故買したりした、の處分(一節)●毀棄と隱匿とに就ての心得(一節)●逮捕と監禁とに關しての心得(三節)●文書を認め又は使ふ上の心得(三節)●過つて人に傷けられ又は傷けた時の心得(一節)●訴訟する時の心得(七節)●裁判所よりの送達書類を受取る時の心得(四節)●證人に呼出されし時の心得(一節)●差押を受けし時の心得(一節)●告訴若くは告發されし時の心得(四節)私人が犯罪人を逮捕せし時の心得(三節)警官に家宅へ侵入されし時の心得(一節)●犯罪の搜査を受けし時の心得(一節)●遺失物を拾得し埋藏物を發見した時の心得(一節)●貸借に於ける利息制限の心得(三節)●登記に就ての心得(四節)●寄留に就ての心得(四節)●印紙税と登錄税とに就ての心得(五節)●郵便電信及び爲替に就ての心得(九節)●郵便貯金の心得(六節)●電話に就ての心得(八節)●税金を納むるに及ばぬ事々に就ての心得(一節)●所得税に就ての心得(三節)●徴兵に關しての心得(三節)●鐵道に關しての心得(三節)●警察に對しての心得(十二節)●冗談から駒が飛出す違警罪の心得(七節)

本町三丁目 博文館 振替貯金口座東京二四〇番

故
樋口一葉女史遺稿
幸田露伴君序

一葉全集

全二冊菊判上製總布美木

前編 日記及書簡文範
紙數八百五十餘頁
正價壹圓七拾錢 小包料十錢

後編 小說及隨筆
紙數五百九十餘頁
正價壹圓貳拾錢 小包料十二錢

故樋口一葉女史の諸作は明治文壇の光輝也。女史が遺せる所の日記四拾四卷は、女史が晩年六年間の記錄にして、操持不撓なる一女性の立志傳なると共に、感情熾烈なる女作家の忌憚無き告白錄也。人生に對する僞らざる觀察誌也、亂調なりし當時の文壇裏面史也。增訂一葉全集は、從來刊行の女史が諸作に加ふるに、此比類無き祕書と、女史が小說及隨筆の未だ公刊せられしことあらざるものとを收む。前後兩篇合せて千五百餘頁、此稀世の女作家の眞面目を江湖に紹介するに於て遺憾無からん敢て薦む。



東京市日本橋區本町 博文館 振替口座東京二四〇

(女 巳の四)

女學世界

悲劇十番

第十二巻第六號





香水浴

諦三世

言葉たらず

女はなべて機轉利く可きなり、鑿と云はゞ槌、ごほ〳〵と咳し給はゞ吐月峯を、お出ましとあらば杖にお草履、萬づ身輕く先へ先へと氣をくばりつらむには、如何にむつかしき姑君なりとも、御心自然解くるぞかしと、我が祖母の語り聞かする序に、氣の利かぬ適例としていつも引き出







でたる話あり。

昔をこの嫁ありけり、その姑醴を醸して蒸るゝ間二階にうち置きける二日ばかりたちて、よき頃となりければ、嫁女をして下ろさするに、嫁は瓶の縁に手をかけ、さも〳〵重げに二階を降りむとす、姑下よりこれを見て、「嫁女よ縁を持ちては危し、尻を持たずや、尻に手をかけよ」と云ひたり、嫁女は直ちに縁より手をはなし、我が臀に手をやりければ、瓶はそのまゝころ〳〵と轉びて心づくしの一夜酒も、疊に吸はせて止みぬる。

されど今考ふれば　この姑も少し言葉足らざり　瓶の尻と云はゞ誰かあやまつ可き、はた底とのみ云ひても尙更宜かりしなり。

むかしの唱歌

かり〳〵渡れ、仲好く渡れとは幼稚園に通ひし頃優しき師の君のオルガンにつれて、未だ肩すぎぬ振分髪の幼な友達と唄ひたるなつかしき歌の一つなるが、此の程、父上晩酌例よりすごさせ給ひ、心地よげに昔思ひ出の物語りし給ふ時、「乃公共の若い時は漢學塾に通つたものだつた、今の學生の樣に唱歌なんか別に敎へてもらへなかつたが、その代りに詩吟をしたものだつたよ、中には隨分面白いのもあつたよ、さう〳〵これなんぞは無邪氣でいゝだらう」と、側の妹の手習草紙にさら〳〵かきつけましたを見れ

ば、

一雁呼ㇾ友成ニ兩雁一、三雁四雁五六雁
雁去雁來無ㇾ限雁　雁雁雁雁又雁雁

人の食猫の舌

白い額に紅のりボンひらひらさせて學校より歸り來りし妹、只今の御挨拶すむやすまぬに、あら玉ちやんねんねしてゐるのと、緣側に樂寢の猫を抱き起すめり、ね玉ちやんはいゝ兒さんね、私お飯上げてよと臺所につれ行きて、鰹節けづる音、一しきり賑なりしが、やがてざあと物の沸く音もし初めたり、何をするらむと審しく次に立ち覗へば小鍋を瓦斯の七輪にかけて御飯を暖めつゝあり、「お靜ちやんどうするの」妹「私の玉ちやんがきつとお冷飯で不味いだらうと思つて、暖めて遣つてこすの」

「ほゝゝゝお靜ちやん厭ねえ、猫は猫舌つて云つて熱いものは大嫌ですよ　お冷飯の方がどんなに好きかも知れませんよ」妹　あらさう　唯さへ圓き眼を猫の様にくりくりさせ。



花やろと堂守いふや子煩腦　（月波）

敬稱の安賣

うるさきは保險會社の勸誘員なり、忙しければと二度三度は玄關のみにて歸しもしつれ、それにも懲りで絶えず訪れ來るに、主人の君根氣負けし

て遇ひけり、まづは如才なき時候の挨拶より始めて會社の成立の理由基本金の額などすら〳〵述べ立て、その次に咳一咳、―この頃も〇〇師團長閣下某控訴院長閣下それがし判事閣下さる中佐閣下も御契約になりました、あゝそれからつひ御近所の△△判事試補閣下〇少尉閣下も御契約になりました、はいもう日ましに發展致しますので

閣下の大安賣なりしこそ可笑しかりしが。

教育保險



英國の女子大學生

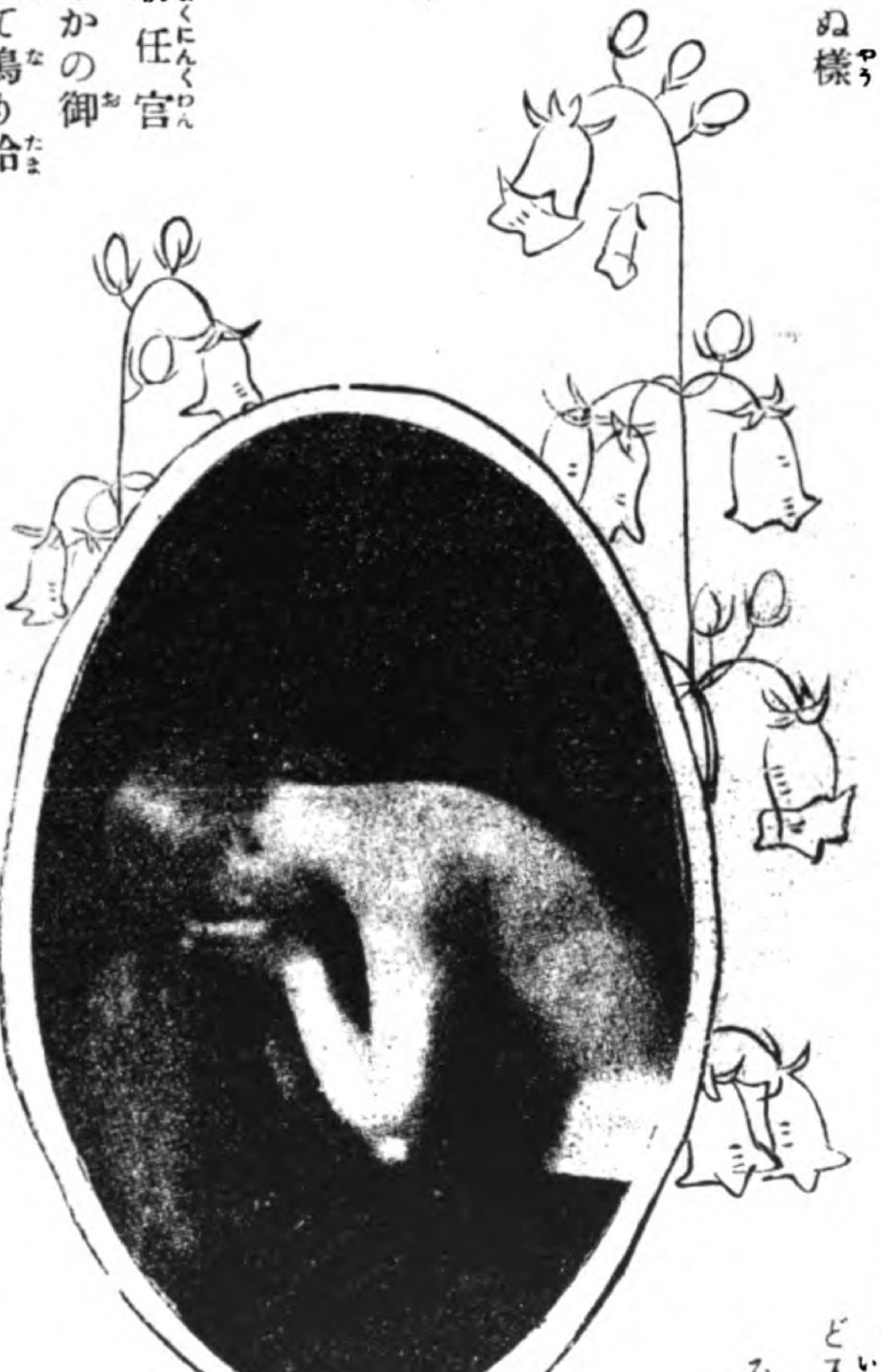
この頃知己を訪づれしに、入口には波の花夥しく撒かれ、奥様は何やら不興氣の面地なり、何事かおはせしと親しき間柄故、お尋ねすれば、今ね保險會社の人が參りましてね　子供の教育保險を煩瑣くすゝめる迄はよう御座んしたけど、ほんどに縁喜でもない、どうか本人が中途で死亡なれば掛金だけの額は返還する事になつてますから決して御損失はないなんて申すんでせう、ねえ貴女掛けがへのない一人息子ですのに、鶴龜鶴龜、

假りにもそんな事は聞きたくありません、もう〳〵私はあんな會社なんて御免で御座います。」

人の感情を害せぬ樣に、圭角の立たぬ樣に、事を云ひまはすは、案外むつかしきわざと知る可し。

某子爵の儉德

こゝに某省の勅任官在しき、二宮宗とかの御歸依深く奇骨を以て鳴り給ひけり、その君至りて邊幅をかざり給はぬもほど過ぎて一狐裘まさに十年、日毎の登廳に召す洋服は處々あやしき色紙さへ置かれたれば氣の利かぬおもらひの外は、只にても拜領はすまじき代物なりき、或るあさちその御洋服一着に及び、胸の邊りの内ポケットに銀貨銅貨紙幣とり交ぜ五六十圓はど入りたる財布を押し込み、兵隊靴にて、てく〳〵御徒歩ありけるが、途中の本屋にかねて御懇望の古書一部、かざられたるをふと見出し給ひ、直ちに買ひ取らんとポケットを探れば、ポケットは財布の重みに堪へざりけむ、切地やぶれて底無しとなれり、しかのみならず、大切な布財もなければさすがの君も、はたと當惑していかにかせんと身じろきし給ふ時、何處かにてかちや〳〵と音すめる



大空にたはむるゝ蝶の一番ひめにもとまらずなりにけり　（景樹）

さてはありけるよと尙かい探り給ふに、上着の裾いみじうふくらみたり、締めたとばかり此の君の事なれば體面もなう、店前にて上着をぬぎポケットの破れより手をさし入れ、財布を引き出し給ひけり、財布はポケットの破れより裏と表の切れの間を落ち行き・裾までも逃げのびしなり。

かくばかり御身分に似ず・御儉約なれば、嘸かし御家道の豊ならんと淺はかに思ひとらるれど、御懐はいつも寂しく、夫人も常は絹裾のものは召さゞりけり、何事に用ひさせ給ふと伺へばお道樂の三つ、書生道樂旅行道樂書道樂を答へ給ひし・

咲きそめし時より後は打はえて



世は春なれや色のつねなる　（貫之）

げにこの君の御玄關番より今は博士の君と呼ばるるやうになりし方の、かづ多くありと聞きぬ。

○迷の雲

胸一つに餘る思ありてとつおいつ定めかねし時人相見の何龍子とやらはいみじうよくあつるとひが聞きせし事を思ひ出し持前の好奇心も手傳ひてふと行きて見ぬ、世には我が類の愚者も、多くありと見え、その家のかまへの思ひしよりも嚴めしく、男女うちませて早や四五人もつめかけたり、室の上手には、算木天眼鏡等のせたる小机を置き

その傍に二枚重ねし郡内の座蒲團、肥えたる膝を高うして坐りたるは夫子に在す、順次に前に呼び出しては顏色をためつ、しかめつ、讀みながら今は運勢が下火故よく愼み給へ、女は三十三の厄がしか〳〵等とき聞すなり、やがて我が前に坐り居しお店者風の若者の番となれり、何事を尋ぬるならんと聞くともなしに聞けば「へえ私は實は金物屋の手代で御座いますが、この三月で年季もあきますんでへえ、實はその嫁をよびまして世帶を持ちたいと存じまして、一つ先生に見て頂きたいので御座います、えー私のその嫁と云ふのは何處の娘で何うして居りますでがせう、何處を探したら居りますでせう」頭かきつゝ氣まりわるげに云ひ出でしには笑ひを忍ぶに苦しかりし、さるからに夫子は溫顏忽ち怒らせて、大喝一聲、馬鹿！お前さんの樣なのを阿呆と云ふんだ、いくら世間に娘が澤山居るからとてお前の嫁に初めからきまつた女は一人だつてありはせぬ、私のとこに聞きに御座るなら　ちやんと候補者を此とか彼とか二人なり三人なりきめて何れを娶ばうかといふのが至當ぢや、馬鹿者奴、早くさつさと歸つて出直さつしやい、權幕におそれ入りて、這々の體にて逃げ行きし樣、又なく剽輕に見



九重の神のつかさの化しつめよの憂事も散ていぬめり（千秋）

えし、この一幕の喜劇みせられし爲め　幾日も幾日も八重にたゝみし悶の雲の一時に殘らず晴れて、心より笑ひくづをれ　かば、定めし我が壽命の七十五日は延びやしつらむ、その手代に密かに感謝の意を表するなん。

刺繍の稽古

あら花子さん!!!　暫くでしたわねえ、お變りもなくつて？

まあ時子樣、ほんとに暫くでしたわねえ、皆さんお丈夫？

はあ難有う！　お陰で皆なぴんぴんして居ますの、今日は何處へ？

あの私、お稽古、





松井すま子のノラ

あらさう　今何遊ばしてますの、

ほゝゝゝ私生意氣ですけど、泰西の詩集をお習ひしてますけど、むつかしくつて、

まあ貴女も!?　私も此の頃初めましたのよ。隨分面倒だわねえ、このオペラバックの模樣は私が刺繍ひましたの、ほんとに糸がどうかするとふやけて困りましたわ

但し花子のは詩集にして時子のは刺繍なり、花子の口邊に擽られたるやうな笑有り、時子の目許に「意外の感」浮ぶを見る、

麗かなる午後、屋敷町の角にて若き女の會話、何處からか甘い沈丁花の香が漂ふ。











西班牙宮廷の





同じ歐羅巴の中でも、西班牙の人情風俗は、他の諸國とは頗る異つて居る。例の闘牛の興行に、人と猛牛とが互ひに朱に染みて奮闘する慘澹たる光景を觀て狂喜するなどは、餘程風の變つた此國の特技として有名なものであるが。此國の前の女王時代に行ばれた年中行事の中に、闘牛以上に更に風の變つた慣例がある、

それは、一年に一日、女王陛下が、親ら手を下して貧民の足を洗つて呉れることである。

其儀式は皇居の内の大廣間で、各國の外交官、國務大臣、貴族、顯官等綺羅星の如くに列を正して威儀堂々たる式場に於て行はるゝのであるが、此日に限り馬車に乗ることが禁じられてあるので、大禮服を着飾つた顯官、花の如くに裝ほふた貴夫人も、マドリツトの街道の小石道を徒歩でザク／＼させて歩かなければならぬから、皇居から遠隔














奇なる行事

の處に住む人の爲めには此日を一大厄日の如くに思はれた。

儀式には豫て選ばれた男女各十二人の貧民が宮中へ召出され、大廣間に設けてある長卓子の前へ背を向けて後向きに坐つて居る。そこへ寶石の飾り燦爛たる美服に盛裝し頭に寶冠を着けた陛下は、靜々と貧乏人に近づき、其前に跪いて一人毎に侍臣の捧げて居る黄金の水鉢の中から海綿を取出して、素跣になつて居る貧民の足の甲を順次に拭はるゝのであるが、侍臣は其側から乾いた布片で、陛下のお拭きになつたあとを拭ひに行く。スルト他の諸役人は、其あとから靴下や靴を穿く手傳へをしてやる。其式が了ると大饗應が始まり、陛下が手づから配膳の勞を取られるのである。

この面倒臭き奇怪な儀式は　萬乘の御身として煩瑣に堪ぬことであらうと思が、女王には始終微笑を含み少しも厭はせらるゝ氣色はなかつた。

鳥追

（謠曲俚諺解）

延命冠者

九州薩摩國日暮しの里の領主に日暮殿と云ふ人があつた。或年領地境界の訴訟の爲め都に上つたが　其後十年餘にもなるけれど、一向何の便りもない。其留守の間は左近尉といふ家來が萬事を預かつて、殿の奥方と、若君花若殿を保護して居た。

此日暮の里といふところは、前に大きな河があつてそれが湖水に續いて居る、秋になると其湖水から群鳥が田に上つて稻を啄むので、里の人は、毎年稻の實のる頃はなれば、河へ舟を浮べて、思ひ〳〵の鳴物を鳴らして鳥を追ふ習慣である。

或年の秋の事である。毎年の如く鳥追舟を出して田面の鳥を追ふ時節となつたが、右近尉は自分の田の鳥を追はせる人が無いのに困つた。そこでふと思付いたことがある、主人は都に上つてから十ヶ年以上にもなるが、一向消息が無い、さぞ〳〵花若殿を連出して、鳥を追はせてやらう。と早速主人の邸へ赴き、玄關から案内を乞ふた。

「若殿がお在で御座りまするか、左近尉が參りました」内からは何の返事も無い。左近尉の顳顬の筋はピリ〳〵と動いた。

「やア花若殿それがしが參りたる由御取次下されい」と語氣頗る穩かで無い。中では小さい足音が奥へと消えた。

「母上　左近尉が參りました。」

「こちらへ通しなさい」取次の返事を待たず、左近尉はツカ〳〵と奥へ通つた。

「唯今參りましたのは餘の儀でも御座りませぬが、都同者の話によれば　殿は此秋御歸國遊ばさるゝとのことで御座ります」

「それは近頃耳寄りな、誠殿が御歸國ならば嘸花若が嬉しく思ひませうぞ」

「御尤もで御座ります、若樣の御悦び　嘸かしと推察

仕ります。時に、當年私が田に鳥を追はせる者が御座りませぬ、それで甚だ恐入りたる儀で御座りまするが、若樣に舟遊び旁々鳥を追つて頂かうと、それを御願ひに出たので御座ります

『何、花若に鳥を追へと申すか』奥方の唇は顫へた。

『花若は如何に幼年なればとて主人ではなきか、主人に鳥を追はせやうとは、餘りと言へば情けない事では無いか』。

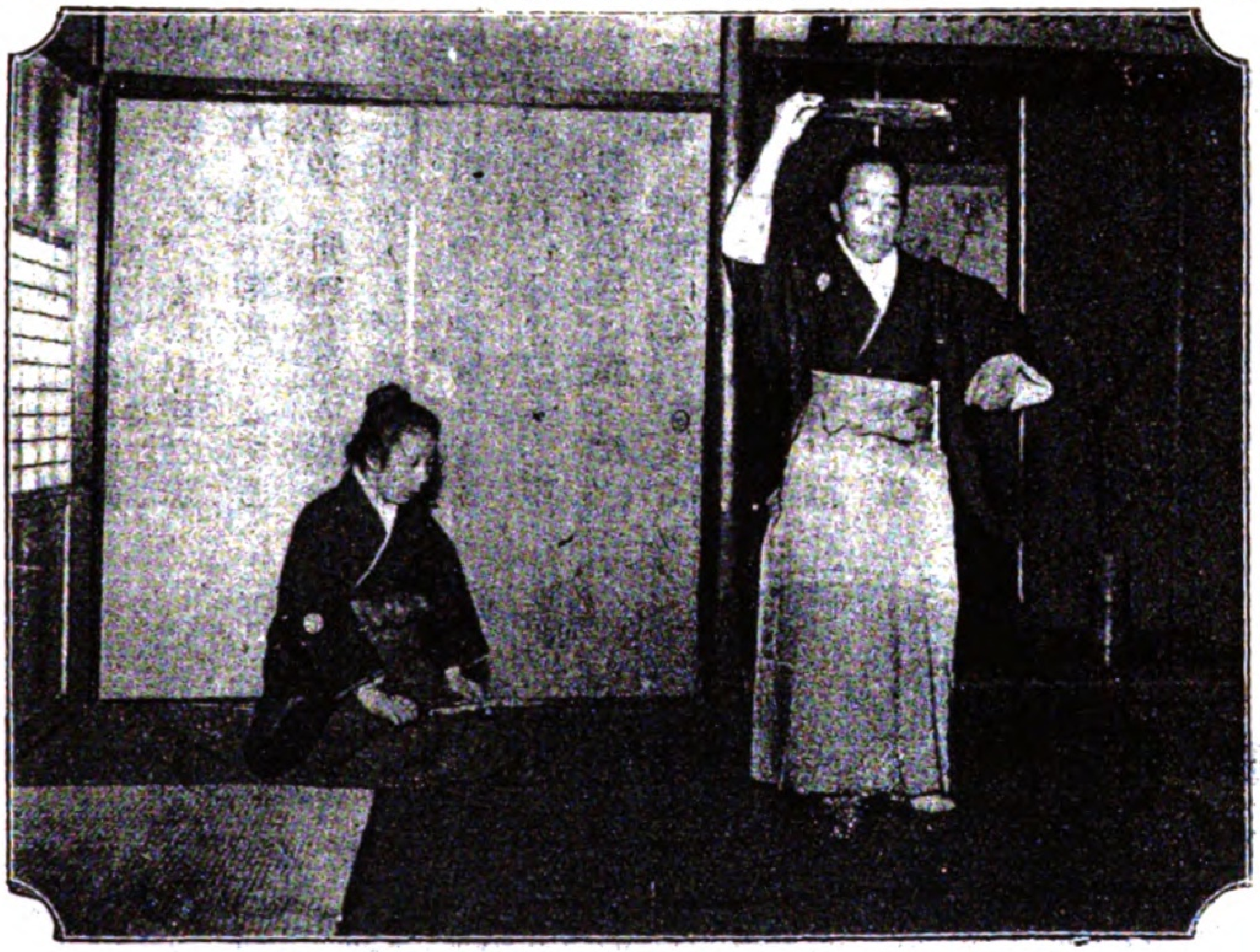
『奥方には此左近尉を情なき者と仰せらるゝか』、開き直つた左近尉の面魂に、底の意はあり〳〵と現れた。



雲雀なく野は一面の霞哉（富兒）

『先づ考へても御覧ぜよ殿御上京遊ばされて以來、既に十年以上、其間御二方を今日迄守護致し居る此左近尉が、何で情けない者で御座るか、所詮言葉多き者は品少しとか、花若殿御出あつて鳥を追はれないとあらば、此家を某に明渡して、何處へなりと御出なされい』。奥方は非常に驚きもし又憤りもした、けれども取付くべき島もない　女の弱い心には、先立つものは只無念の涙ばかり、何とすべき術もない。

『長の年月盡し呉れた其方の心を無にするも心無き仕



もろともに老けらしなし昔わが野邊よりひきし鶴の姫，（安房）

打ちであらう、然り乍ら花若は幼ない身なれば、妾が出て鳥を追ひませう」

『イヤそれこそ思ひもよらぬ儀で御座ります、花若殿は御幼少であるによつて、鳥を追はれても苦しうは御座らぬが、殿の奥方ともあらう御身で鳥を追はれるなぞとは以の外の儀でそれでは某が世間から惡しざまに云はれます、其儀は斷つて御無用になされませ』

『それならば　花若と一緒に鳥追ひに出ませう。

『それ程迄に御出なされたいとあらば最早是非も御座りませぬ．笠を深々と召されて人知れず御出あるならば、定めて人も見物の衆と思ふことで御座りませう、然らば明日は舟を出して御待受け致しますから、必ず〳〵御出でなされませうぞ』。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

思へば花若程世に果報拙い者はあるまい、領主の若君と生れ、蝶とも花とも愛しまれた身で、下司がするべき鳥追はうとは。

（原文）共に涙の露滋き稻葉の鳥を立てんとて、人も

問はざる柴の戸を親子ともなひ立出る。

△舟の中

『早苗植ゑたもまだ昨日あたりのやうな心地がするのに、何時の間にか鳥追ふ頃とはなつた』と左近尉は田の景色に見とれて居るに引き替奥方と花若は、云ふに云はれぬ物思ひである。

(原文)鳥も驚く世の中に我等がわざこそ現なき。實にや夢の世の何か譬ひにならざらん、身はうたかたの水鳥の、浮寝定めぬ涙枕、打なびく秋の田の穂波につれて浮沈み面白の鳥の風情や、此ごろは猶ほ秋雨の晴間なき水かけ草に舟よせて我等も年に一夜妻會ひもやすると天の川、うはの空なるたのみかな。

殿は此秋御歸國との事であるけれども、それも言葉のみで、頼みになりさうも無く此末とても何うなることか、我身はたとひ何うともならばなれ、只だ花若の行末が案じられる、よしや訴訟は叶はなくとも、殿さへ御在まさば、花若に、此やうな淺ましいことはさせ



我宿にさける藤波たちかへりすぎがてにのみ人のみるらん　(躬恒)

きいものぞと、奥方は涙に曇る許りである。

父上はよしや長々の御在京でも、左近尉の心の底に温かき血が通ひ眼に一滴の涙もあらば、此身を下人同様に扱ふこともあるまいに、果報なき此身は兎も角も、母上に御心痛をさせ申すは、何たる心苦しいことであらう、何とかして此恨みを遠い都に御出遊ばす父上にお知らせ申すことは叶ふまいかと、年少い花若の眼にも涙である。

『是は二方とも、何を歎きなさる、悲しいことがあるならば家に歸つて心の儘に泣くがよい　餘處の田の鳥はあの通り皆飛んで了ふのに、左近尉の田の鳥は一羽も立たぬ、鳥を追はせやうとて舟を出したのに、泣いて居ては埒が明かぬ、鳴子を引くなり、羯鼓を打つなり、鳥の立つやうに追ひなされい』左近尉はます〱無禮の態度である。

家來にさへも此やうに恐れて居る我身がに追へばとて、鳥も驚きはしまいと、思ひながらも母子手に手に鳴子を引いて鳥を追ひ立てるのである。

（原文）あれ〱見よや、餘處の舟にも打つ鼓、空に鳴子の村雀、追ふ聲はほう〱扨、何時も太鼓はとう〱と風の打つや波の花若よ悲しくとも追へや〱水鳥、いとせめて戀しき時は烏羽玉の夜の衣を打返し夢にも見るやとて、まどろめばよしなや、夜寒の砧打つとかや、恨は日々に増されども、あはれとだにもいふ人の、涙の數そへて思ひ亂れて我心、しどろもどろに鳴る鼓の筋なき拍子とも人や聽くらん恥かしや、家を離れて三五の月の隈なき影とても、待つ恨みとことばに心の闇はまだ晴れず　すは〱村鳥の、稲葉の雲と立去りぬ、又何時か逢坂の夕つげ鳥か別れの聲、鳴子太鼓打連れて猶もいざや追はうよ。

やれ嬉しや、やうやく鳥が立ちまして御座る、先づ舟から上つて御休みなされエ」。左近尉、鳥が立つたのでやうやく機嫌が直つた。

△日暮殿の歸國

都同者の言葉の如く此度こそは、訴訟安堵して日暮殿はいよ〳〵歸國した。長亭短驛の旅枕に幾夜の夢を結んでやうやく我領内に入ると、今日しも鳥追舟に田沿の河は賑はへて居る・十餘年の月日を都に送つて、久振りに見た故郷の鳥追舟心なつかしき眺めであるので、餘念もなく見取れて居ると、鳥追ふ舟の多き中に、鳴子に羯鼓を飾つた舟が一段と目立つて面白い。



あれはてゝ今は野となる庭の面に花の莚をしくすみれ哉（慶永）

『それに鳴子・羯鼓を飾つた舟を此方へ寄せい』。日暮殿は聲をかけた、左近尉は、夫れとは夢にも知らぬのである、近い中に日暮殿を押領して權威を振はうとのみ心に考へて居るのである此左近尉が舟を此方へ寄せい杯と、無禮千萬である、如何樣是は我威勢を知らぬ通りの旅人であらうと考へた、スルトと再び。『あの舟早く寄せい　といつた、左近尉は心に憤り乍

らも、何者であらうと不審しつゝ、兎も角も舟を漕よせて、扨近づいて見ると 只の旅人とのみ思ひ、近寄つて大喝してやらうと思つたのは、思ひもよらぬ、主君の日暮殿である。十餘ヶ年殆んど消息なく、生死の程さへ不明であつた主君である。左近尉は餘りに呆れて平伏した。而して

『御訴訟は如何遊ばしました』とより外に言葉も出なかつた、けれども日暮殿は、今日の鳥追の事情を何にも知らないのである。只鳴子、太鼓の囃子が面白いと思つたのみで、其舟を呼寄せたのである。

『されば、訴訟は悉く安堵して、只今歸國したところであるが、あの舟に居るのは汝の子であるか―

極めて幼ない時に別れて父の顏を知らない花若は、舟の中から、自分は日暮殿の子であると答へた。スルと。又、其處に居るのは汝の母かと訊ねたから、花若は然うであると答へた。

『何とて其やうな賤しき者のする業をするか』と事情を知らない父は聞咎めた。花若はそれでもまた、自分の年頃慕つて居る父であるとは心附かない。

『父上は久々の御在京で、更に音信れもありません。頼みに思ふ左近尉は 田に出て水鳥を追へ、若しそれが不承知ならば 家を明渡して何處へなりと出て行けと申しますから、是非なく舟に乘つて此やうに羯鼓を打つて淺ましいことを致して居ります』と身の境遇を訴へて同情を求めやうとした。

『それは言語道斷の次第である 弓取の子は七歳にして親の敵を討つと云ふのに、況んや汝は十歳に餘りそのやうな賤しきことをするのは定めて無念であらう、是といふも畢竟は予が長々在京した爲めである。此上は、汝の眼の前で、左近尉を手討ちにして與れやう。左近尉、汝は奇怪千萬の者であるな、予が長々を空け置いても、汝に妻子を托しある上は、聊かも案ずることはない、それにしても長の年月嘸煩はしい事であらう、孰れ國許へ歸つた上は、如何やうにも恩賞を與へて汝の辛勞に報ひて遣はさうと都で心構をして居つた甲斐もなく、人も有らうに、女子供と侮つて現在の

主人たる者を下人同樣に召使ひ、田の鳥までも追はせやうとは言語道斷である、それとも何ぞ云ひ譯があるか、さ何うだ、何故返事をしない』

烈火の如くに怒つた日暮殿の手が、太刀の柄にかゝらうとするを、奥方は走り寄つて、しばしと留めた。『左近尉の罪を御叱り遊ばすもさる事では御座りますれど一つには殿が、久久に打捨て置かれた御手落も御座ります、何は兎もあれ、十餘年の訴訟





安堵して、目出度く御歸國遊ばれた今日しも、御內の者の血を見るやうなことは不吉で御座ります、今日の目出度さに妾が此程の恨みは聊かも申しませぬ程に左近尉の身の科を御免しなされて下さるやうに』

(原文)此上はいなとは如何が、いなむしろの、小田守も秋過ぎぬ、はや〳〵免す左近尉。扨其後に彼人は、家を花若つぎ櫻若木の里に隠れなき五常正しき弓取りの末こそ久しかりけれ。(了)



琵琶嶋川物語

太田三郎

上

東海道線を西へ下られた人の中、注意深い方は、名古屋驛の直ぐ次に、琵琶島と云ふ小驛の有つた事を覺えておいでゝせう。更に物覺えの可い方は、汽車が其驛に着く少し前、とゞろと渡る鐵橋の響きに瞳を轉じて、其處に水の碧い沙の白い、美くしい川を目撃された事を思ひ出しなさいませう。

私が今お話しやうとするのは、其川の岸に住む人々の間に、古くから云ひ傳へられて居る、うら悲しい物語なのであります。

それは治承の昔、彼の巨人平相國が、傲奢と虛榮と邪淫とに耽溺して居た藤氏の一團を、都會から放逐した頃の事です。其頃、この川から東南へ三里ばかり距つた井戸田（今の水穗村）といふ寂しい部落に、これも其逐はれたる群れの一人、大政大臣藤原師長が漂泊の身となつて居りました。



驕樂と權威とから遽に引離されて、何等の色彩の無



い何等の變化の無い境に打捨てられた貴族の生活は、實に慘めなものです。甞て玉簾の中から憧れて居た名所の濱の眺望も、來て見ればさうした土佐繪のやうに優しい美くしいとのみのものではありません。琴の調べと歌に聞いた松風は、波を蹴り沙を捲き、而して容赦なく綾羅の袖も捩るゝ許りに吹煽つて、暖かい唇と滑かな黑髮と、ほの匂ふ練絹との外の接觸を少しも知らぬ柔軟の皮膚に迫る辛さ、纖弱な都會人は、詩を想ひ繪を想ふ前に、先づ自然の壓迫に備ふるの努力をせねばなりませんでした。

が、それはまだ渠の堪へ得るところ、如何にしても堪へ難いのは、無爲の月日です。無聊の情です。どうと寄せてはどうと返る波の響きの單調な連續、貧しい濱の民の峻酷な勞働、朝夕に見聞くものは唯こればかりなんですもの、刺戟の多い都會に住み慣れて、而も樞要な地位を占めて來た渠にとつて、如何にそれが苦痛であつたかは云ふまでもありますまい。

此場合たゞ纔かに其心を慰めたのは、日頃の嗜みの



琵琶です。緊張した四條の絃から生るゝ纖細な音響は總身に蛆のやうに這ひひろがる倦怠を消すべく大に力がありました。けれどそれも唯ほんの一時です。幾分かの無聊はそれが爲に消されても、なほ無聊は無聊として日から日に續くのを止める事は出來ませんでした。加之、藤原氏末の此種の貴族は、到底一の樂器を擁してのみ生き得らるべき人達ではありません。渠等の旺盛な本能は一日も其道連れ無しに過されないのです。渠等の頽廢的な神經は、脂粉の刺戟なしに一時も居られないのです。——で、幾程もなく倦み而して餓ゑたる貴族は、さもしい心に或る欲求の矢を番へて、部落の若い女達に眼を注ぎました。

軈て現はれたのは里の長の娘、恁うした潮臭い所に珍らしく頸の白い女でした。射て落したのは勿論です渠の地位と美貌と、慣れ切つた手腕とを以てして、世を知らぬ女のウブな心を占めるのは、宛で右の手を左で握るよりも、より易い事だつたのです。

下

話は射留められた女の上に轉じます。

不憫さうに女は、思ひも懸けぬ雲の上人から、思ひもかけぬ事を私語かれて、十九の處女の清い血潮が、

たゞもう胸も裂けよと高鳴るばかり　身も魂も茫として了つて、不圖羞しいと思つた頃は、もう自分の體ではありませんでした。

けれど勿論あそばれるなど丶は夢にも思ひません。彼女にとつては、それが、若い日のやんごとない光の中に綻びた初花の、二度と得難い高い薫りであつたのです。――――で、暫しは、兎に角に悦しい日と夜の味ひを味ひました、

併し夫れは、ほんの春の夜の手枕の夢、間もなく彼女は、遽ち男の心の醜い姿を、まのあたり見せ附けられねばなりませんでした。輕薄な貴族は其翌年首都の使が赦免の状を齎すと、雀躍りして直ちに歸り去らう



と云ふのです、女ははたと胸潰れて、せめては水仕事末の賤しい召使ひとしてなりとも、俱に都へと掻き口說きましたけれど、それすら頑として聽き入れなかつたのです。

斯くて鳴く鳥の音の悲しい或る日、男は終に配所を出でました。

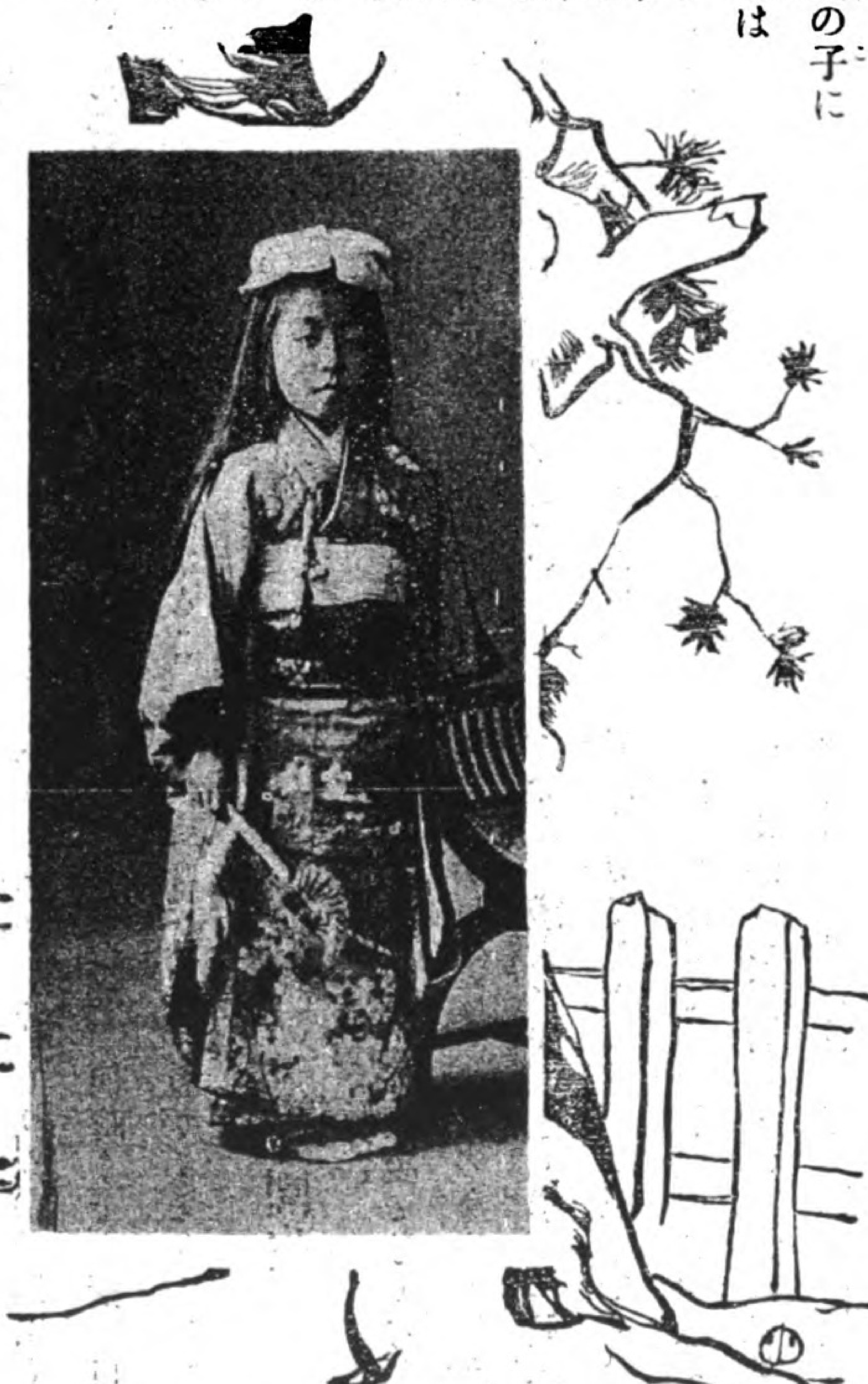
後には取殘された女一人、一時二時は唯ひた泣きに泣くばかりでしたが、軈てつく〴〵と思へば、さうした男の心とは露知らず、井戸田の噴井の底の底から淸い情とのみ一途に信じ込んで、處女の誇りの貴いすべてを獻げ盡した口惜しさ憤ろしさ、恨めしさ。滿身の血は宛で火のやうに燃え立つて、もう一刻もぢつとしては居られなくなりました。果てはいつそ、いつそまだ遠くへは距たらぬ男の後を追つて、あの薄絹のやうに美くしい肌に隱れた眞黑い心臟に、づぶりと一突き刄して、返す刄先に有つて甲斐ない此わが生を斷ち切らうと、恁うのぼせ上つて、前後の辨へも無く矢庭に戸外へ奔り出ました。

追ひついたのは、土器野の里（今の琵琶島）の或る川の岸です。丁度其時一行は渡船の纜を將に解かうとするところ、女はひらりと舟中に身を躍らして、じりじりと男の側に詰め寄りました。が、あゝ女は終に弱い者です。今の今まではち切れるやうな憤怒の情に驅られて來ながら、斯く目のあたりに美くしい慕はしい面輪を見遣つては、さしもの決心もはたと鈍つて、たゞ物をも云はず其手にひしと縋り着いた許り、呑んだ刄の柄には小指の端さへ觸れ得ませんでした。

これ程までに慕はれて、男も今は有繫に瞳を濕さずには居られません。思はず強く其憫しい手を握り返すのでありました。が、都會人の心臟は幾部屋かに仕切られて居ります。飜つて思へばもとこれ東關僻邑の一賤女、これを己れの情人として、あの衣香扇影五彩眩ゆい都の貴婦人達の中へ携へて行く事は、如何にしても其虛榮心が許しません。渠は靜に、執られた手を振り離しました。

かく〳〵女は、樣々に騙され賺され、白菊の琵琶を形

見にあてがはれて、また河畔の沙に殘されました。：：：午後の日の灰色の光は、うすら寂しう絶望の子に這ひかゝつて、水は悠々として音もなく去つて行くと忽然、喪神の女を繞つて、黒い或る異樣の影がスーと横切つたと思ふ刹那無殘にも脆い命は彈かれたやうに岸を離れました。——湧き返る水に、ちぎれ雲の影が傷ましく映つて、青深い底の彼方から、琵琶に觸れる黒髪の幽かな〳〵音響の顫へ：：：：：：



春雨のふるにぞいとゞ燃えまさる
いつかと花につけし心は（文雄）

其川が、即ち前に云つたそれなので、斯うしたことから名を琵琶島川（今は枇杷ートと書く）と呼ばれてるのであります。情深い方は、此後若しあの地方に旅せらるゝやうな事があつたならば、次の汽車までの時間を、此小驛に費して御覧なさいまし。其亡き骸を埋めた塚、琵琶を納めた寺なども、あの川近くに散在して、昔の悲哀を永へに語つて居ります。

處世の道しるべ

志摩景陽子

△お世辭の催促

女は兎角詰らない事を賞めて欲しかつたり、お世辭を使つて欲しかつたりすのもので、時々謎をかけることがある。私の所の子供は黑ん坊で困りますなどゝ言つた時に、如何致しまして貴女、大層お色が白くつてお可愛らしいぢやございませんかと言へば、ほく〳〵喜ぶけれども、向ふの言葉を眞に受けて、左樣ですねとでも言はうものなら、御機嫌甚だよろしくない」と或る老大家が申しました。强ち女のみとは限らぬでせうが、人の弱點を穿つて居る。

△晝泣の妙藥

或人が、子供が晝泣をして困るといふので、醫者を迎へて診察して貰つてゐると、知人が訪ねて來て、其の晝泣を治するに最も簡單な療法が一つある、それは奥樣が一週間外出しないで家においでなさい、屹度全快しますといつたので、三日程外出せずに子供の守りをして居たら、すつかり癒つたといふ事があります婦人の交際も大切でせうが、用事もないのにのこ〳〵出掛けて行つて、何時までも無駄口を利いてゐる人には何處かに手ぬかりがあるやうです。

△花のなき園生

旣にお嫁に行つて人妻となりながら、社會に出て職業に就かねばならぬ人の身の上を悲しますには居られません。或人は夫婦とも學校の教師をして居ますが、外から見ても實に冷かな家庭です。主人が夕方てくてく歸つて來ると、妻君は旣に夕飯を濟まして翌日の調べ物にかゝつて居るといふ始末、勢ひ主人は獨りで飯を喰つて、湯を呑んで、楊枝を使つて、話し相手欲しげな顏をして妻の後姿を眺めて居るが、花なき園生の樂しからう筈はなく、妻君にしても無論面白くないに

極つて居ます。そして職務の方に精を出せば家庭の方は忽かになり、家庭に忠ならんとすれば職務に不忠とならざるを得ず。詰る所虻蜂取らずに終るが常です

△足袋の中の爪

先日ある處で見受けた婦人は、身なりも立派だし、絹の白足袋なんか穿いて澄して居ましたが、足の拇指の爪が長いために、其處が突上つて居るのを見てがつかりしました。日頃の行状その人の品格さへ見透かされるやうて、見よいものでは



洛東清水の櫻花

ありません。

△夫の爲めは自分爲め

西洋の諺に、新婚の夫人が、生死を共にせんと良人に誓ひながら、幾何もなくして、良人に生命保險に加入せよと勸めたといふことがあります。良人の死後の準備をするのが、子孫の爲に計るとか、或は良人の體面を損せぬやうにとかいふのならば兎も角も、良人の死後に己が途方にくれぬやうとか、困らぬやうなどの利己



櫻はな日かさの上に散り掛る音さへ響にまかへける哉（直好）

心からとすれば甚だ心細い親切です。

△裁縫の兩得

女が裁縫を習つてよい譯は、第一女子に落着をつけます。細い針と細い糸で薄い物を縫ひ合せるのですから、亂暴にすれば指も突かうし、針も折れやうし、縫ふ事が出來ません。また裁縫は切れ〳〵の物を縫ひ合せて新らしい形を拵へ上げるのですから、女に物を構成する工夫を與へます。これはまた身代を作り上げる工夫と趣味とを與へるもので、女に最も大切な事柄です。また縫ひかへしをして姉の着物を妹の羽織にしたり、兄の單物を弟の袷にしたりするのは、內政の機關を操る事を教へるもので、大なる外交政略も此等の工夫から生み出します。

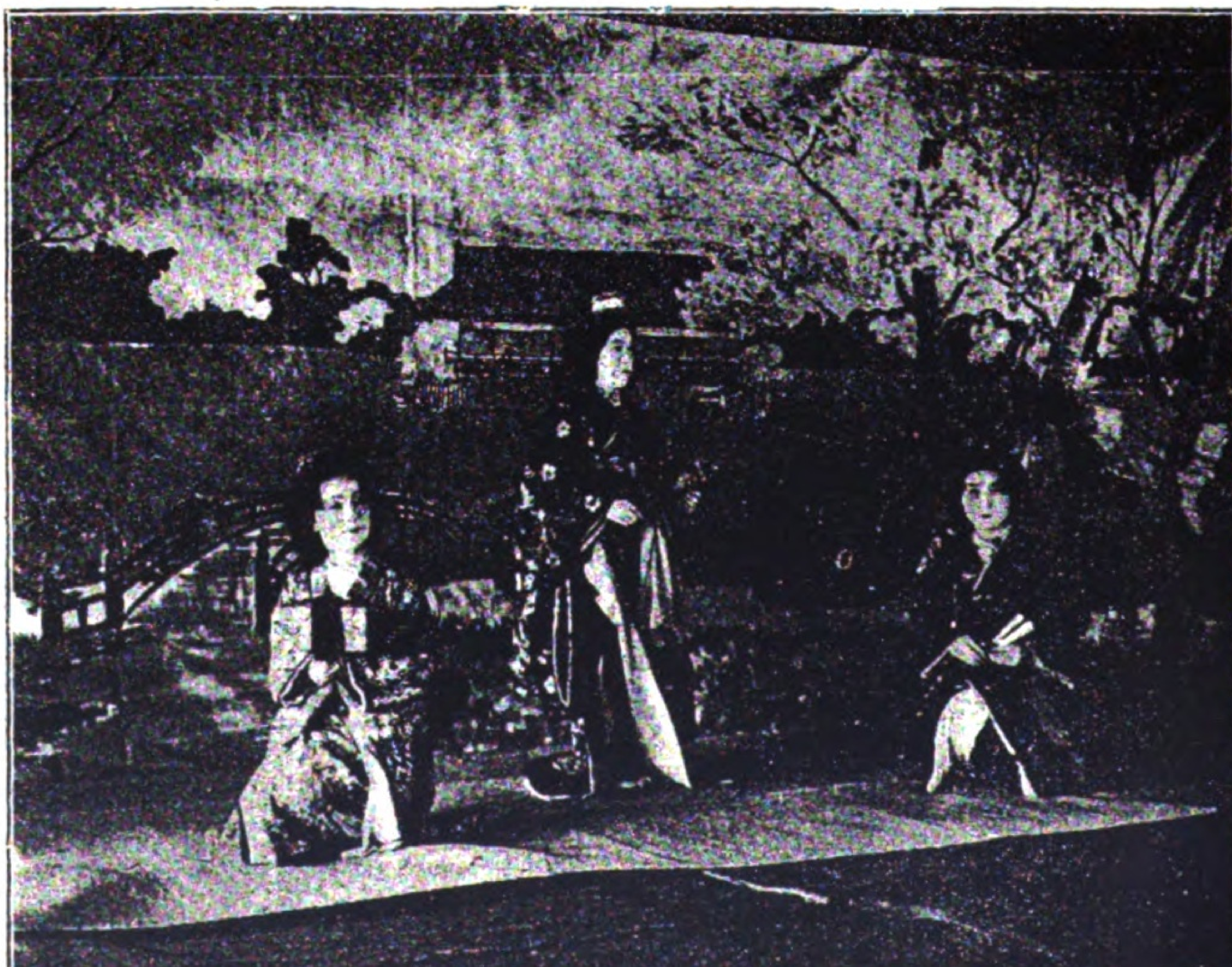
△お嫁さんも容易でない

昔はすべての事が單純で、お嫁さんも、たゞ子を生むの位に考へて居たが、世の中が進んで凡ての事が複

雜になつた今日では、なか〳〵其樣にゆかず、お嫁さんといふものは、たゞに子を生むといふ事ばかりではなく、勝手元の事から座敷の拭き掃除一切を一手に引受けた上に、兒女の教育、下婢下僕の管理、親戚間の交際等、夥しい重任を負はなければならぬやうになりました。それで玉子燒が黒焦になつたり、子供がふざけて出額を打つて負傷したり、伯母樣の待遇が行き屆かなかつたりすれば、內助の功を全ふし得ぬと言つて劍突を喰はねばならぬから、お嫁もなか〳〵呑氣では居られません。

△人樣々の娛樂

人間の樂しみは數限りのないもので、人各々好む所が違ふから、如何なる娛樂がよいだらふと選び得るものではありません。また娛樂といふものは、何時でも何處にでも轉つて居るものではなく、營々と働いて居るといふ事が、何より人生の娛樂を生み出す母であります。自分は菓子が好きである、芝居が好きぢやと言



涙りなくぐ花の別れのなしきかんな心た閨のさそふなりけり……（撮景）

つても、終始お菓子ばかり食べて居た日には、樂しみ所か、仕舞には胃病が起り、却て苦しみの原因となる。せつせと己れの務むべき仕事をして、之を濟したら彼の甘しいお菓子を頂かうとか、面白い芝居を見に行かうとかするのが眞の娛樂なのです。

△外國婦人の野外趣味

先年英國の一婦人が、某女史を訪れて、共に榛名山に遊びに往つたが、女史は用務の爲めに先きに歸京したので、慰める積りで一書を認め、「さぞお一人で淋しいでせう」と言ひ送つたら、英婦人は之れに對して、「山もあり、川もあり、湖水もあり、鳥は囀り、草木は妍を競ふて美を呈してゐる、この天然の美園に居て、何とて淋しいといふやうな心が起りませう、何日一人でゐても決して淋しくはない」といふ返書をよこしたといふ事ですが、西洋の婦人は、日本婦人とは違つて、さすがに野外趣味に富んで居ります。



餘花ほろゝ散る下水や都鳥（化紅）

△次第に減じた琴の緒

琴瑟は、支那の堯舜時代には五十絃であつたが、何時の頃にか二十五絃となり、近世になつて又十三絃となつたもので、最初五十絃であつた頃は、複雜な音調であつたが、二十五

絃となり、十三絃となつて、其の音も次第に單調となつたものなさうで、二十五絃の瑟などでも、彈いて見ると、隨分優美な趣きがあると申します。それを何うして絃數を減らしたかといふに、五十絃では其の器が餘りに廣過ぎて彈手が屆かぬ位だから、音調を顧みないで、便宜上縮めて十三絃にしたものだらうといふことです。



落花して隣の羯鼓聞えけり（北渚）

△手數のかる内職

或る官吏の細君が内職を初めました。内職をやつたのも善かつたが、其のやり方が甚だおかしいのです。其の内職といふのは、ゲートルの釦を附けるので、ゲートルを製へる家からゲートルを持つて來て其れに釦を付けて完全なものに仕上げるのですが、自分の名を出すのが厭だといふので、日頃別懇にして居る者に賴んで、其の人の名で仕事を取て來て貰ひ、出來上つた物も同じく其の人に持つて行つて貰ふといふ工合にすべて二重の手間をかけて居るのです。世人は、勞働は神聖なりと口では言つて居ても、内々は、どうだか位に思つて居ります。勞働は神聖かも知れぬが、ジッとして居るのは尚ほ一層高尙なものだ位に思つて居ります。特に今日でもまだ階級的の觀念が失せないで、苟くも官吏の細君たる者が内職などをしては、家の估券にかゝはるといふ様な考があるから、こんな事をするのでせう。





死蛇の報

毒だみ

「天」

お前達はもうお寝み、朝が早いからと、お歸宅なければその手前も恥しい下婢どもを休ましてから二時間は經つた、生温い春の夜は靜かに更けて犬の遠吠がわびしう聞えて來る、結び上げた博多の帶さへ晝の儘端然として文机に向ひ、今迄讀んで居た書に絹房の栞をはさみ、夫人は傍の桐火鉢に有るか無きかの火をほせりつゝほつと深い息を吐きたゆげに眼を閉ぢた、今夜もお歸宅遊ばさない、柳暗花明、蘭燈ほの暗き處、潰し島田の艶なる姿つと目の前にあらはれる、新婚の夢うら恥しかりしも幾何ならず、賴み少いこの身とおさげすみか、冷酷なお仕打の恨めしいとは思はねど悲しさが先に立つ、宿醉の御介抱と不平の遣り場所當り場所に私をいつも遊ばして、たま〳〵のお歸宅さへ白面でお出ではたえてない、あゝしてお出で遊ばしてはいかな事にも御身體がもてないであらう、あゝどうしたら好いものか、寧そこのまゝお離緣しようか、そして一生をすきな繪筆を取つて暮らさうか、それがお互ひに幸福ではないであらうか、――あゝ飛んでもない

私とした事が入らざる物を思ふて胎兒にさはつてはとり返しがつかぬ、良人は良人、私は私、つくす可き道だけつくしませう、良人があゝいふ御所行なら私は一層胎兒の爲めに忍ばねばならぬ、さあもう寢みませうと夫人は遣る瀨ない、寂しさをとり直した時、透きとほるばかりの冷い音、簞笥の上の置時計が三時をうつた。

おゝ春の夜は程なう明くるさうな。燈にそむいた肩のいかにも影うすれて。

「地」

確りして呉れ、私が惡かつた、うむ芳子の事は心配しないでも好いよと云ふ良人の言葉が斷末魔の苦しみの中にも解つたのか、莞爾と淋しい笑見せたまゝ產褥の肥立惡く床就いてた夫人は芳魂永しへに還らずなつた、忘れ形見の芳子は母の百ケ日がすぎて後、乳母諸共田舍の伯母さんに預けられた、伯母さんは芳子の母さんの實姉、これも良人に遲れて實家の近くに瀟洒な隱宅を建て、餘生を侘しく送つて居る人なのだ、伯母さんやお母さんの生れた本家は其の村で聞えた家柄だつた、田舍には珍らしい大きな冠木門があつて、幾棟かの白壁は朝日に輝き夕日に染り、作男だの下女だのゝ高笑ひに日がな賑はしう響いた、そこの伯父樣も伯母さんも從兄逹も芳子の爲めには好い人許りである然し何を云つても隱宅の伯母樣と乳母やとが芳子は一番好きだつた、伯母樣は飽く迄きやしやな作り、一重瞼の品よく目尻が釣つて、鼻筋の直ぐなお笑になる度に薄い朱唇からちらちらと金齒が見える、乳母は又これと反對に赭ら顔の頑丈な三十恰好の女だつた、芳子はいつも伯母さんや乳母の側で繪本を見たり折紙や押繪細工をこしらへたり滅多に外に出た事はない、伯母さんが里の童はお行儀が惡いと遊ぶのをお止めになつてるし、本家や外の親類の子も皆町の中學校小學校に行く年齡の者許りで、芳子のまゝ事相手は一人も居なかつた、芳子は疳は可成り強い方だが平常は無口な陰氣な小兒らしくないませた處のあるのを、上品だの大人し

いの怜悧だのと獨りでよろこんで被在る、伯母さんは若い未亡人だし乳母も亦薄命な女だつた、乳母は芳子の處に來る前に一人の男兒を持つてたが、いふに云はれぬ義理合とかで男兒を棄て、嫁づいてた家を出て乳母奉公をして居る、何にしろ皆逆境で拗ねた女達に教育される芳子は果して幸福かどうか。

『芳ちやまは貴女に肖似りで被在います』『ほゝゝゝさうかねえ私が見ると芳は阿母樣に肖似りだよ』『まあ左樣で御座いますかねえ、矢張り御標緻好でお出でになりましたでせうねえ、お可愛想に芳ちやまもお母樣が御在世になりますとお幸福ですのに、でもまあ私の樣にこんなに生き別れして居りますのもありますから』『あゝ何事も前の世からの約束だよ、因果だからね人の力ぢやどうする事も出來ないけれど芳ちやんのお母樣も可愛想だつたよ、芳ちやんを生產む前に酷い心配をしたのが基らしいんだよ、勝氣の人だつたから實家の兄さん達だつて私だつて一寸も知らせなかつたけども芳ちやんのお父さんと云ふのが隨分遊んだものだからね、若い夫婦かけ向ひでよさゝうなものに反つて誰れにも氣兼がないものだから、男といふ者は我儘なものね』『ほんとに殿方はお若い中はどう致しましてもねえ』、——伯母さんと乳母がよくこんな言を云つてるのを芳子は聞いた、時々面白い機械じかけの人形だの目も醒める樣なきれいな着物だのお父樣から送つて下さるから、芳子はお父樣のある事は知つてたが、さりとて父樣と云つてもお顏もしらなければ懷しくもなかつた、田の畔に若草もえて、國境の山々が日増に淡う紫に霞み初めた頃、芳子の家には珍らしくお客があつた、白晳の脊の高い洋服のきつしりと似合ふお髯の人だつた、本家や新家の小父さんも小母さんも狹い隱宅にぎつしりつめかけて何やら相談があるらしい。

『長々手鹽にかけて面倒を見て下すつた者を、餘り我が儘な申し分ですがかうしていつまでも置きましては親子の間柄が、益々疎遠になる許りで將來の爲めにいけませんと思ひますから、濟みませんが今度は斷然連れて行かうと思ひます』

「それはもう貴方からの度々のお手紙でよく解つて居りますが、せめてもう二三年あれが十位になる迄」――と隱宅の伯母さんが涙ぐみで被在るのを本家の小父さんは遮る樣に「姉さん、それは貴女が無理と云ふものだ、川井樣の被仰るのに無理はない、いつまでこんな田舍に引き止めては芳の爲めにもよくない姉さんこゝはよく諦めて下さい」「あゝさうですかねえ」と隱宅の伯母さんの聲は怪しく震へて居たし、居ならぶ女連の中から歔欷がもれる、本家の伯父さんの眼にも涙があつた、芳子はその晩いつもの通り伯母さんと寢んねして種々のことを聞かされた、今日お出でなすつた洋服の人は貴女のお父さんだよ和女は近々の中、東京にお父さんとお歸宅りするのです、東京には和女の新しいお母さんがあるし弟もあるさうなお行儀よく叱られない樣にするんですよ」よし子は厭よ厭よとすがり付いて居た。



「玄」

『芳ちやんよく來ましたねえ、貴郎嘸まあお骨が折れましたでせう。』

『芳子、お家だこれがお前のお母さんだ、はゝゝ疲れたらう』――と父樣は抱つこして俥から下して下すつた、都にはそ

んなに遠くないとは云へ、山懐の温いひつそり閑として田舎から、山も木も川もあべこべに走つて行く汽車にのり、やがて目眩しい都會の兒童となつた、芳子の幼い柔い小さい頭には前後の關係も成行も事情も知れない。新奇な事件がごつたに起つたので、云ふにいへない變な心持がする、殊に汽車の中からよく聞かされて來たお母さんは朧げながら伯母さんに似た人と想像して居たのに出迎へて呉れた人は、かつて見た事もない大きな髪を結つた若い美しい人だつたので何だか幼心にも騙された樣に思はれる。

芳子の今度のお母さんといふのは若いに似合はない親切な行き屆いた優しい、さうして何事もねちねちする事が大嫌の快活な女だつた、實子の太郎が三歳になるが腕白で元氣よくいきいきしてゐるに比し芳子がいかにも弱々しさうな一枚物でもかぶつた樣に陰氣なのをひどく氣にして、隔てなく興味になつて介抱もし慰藉もした。

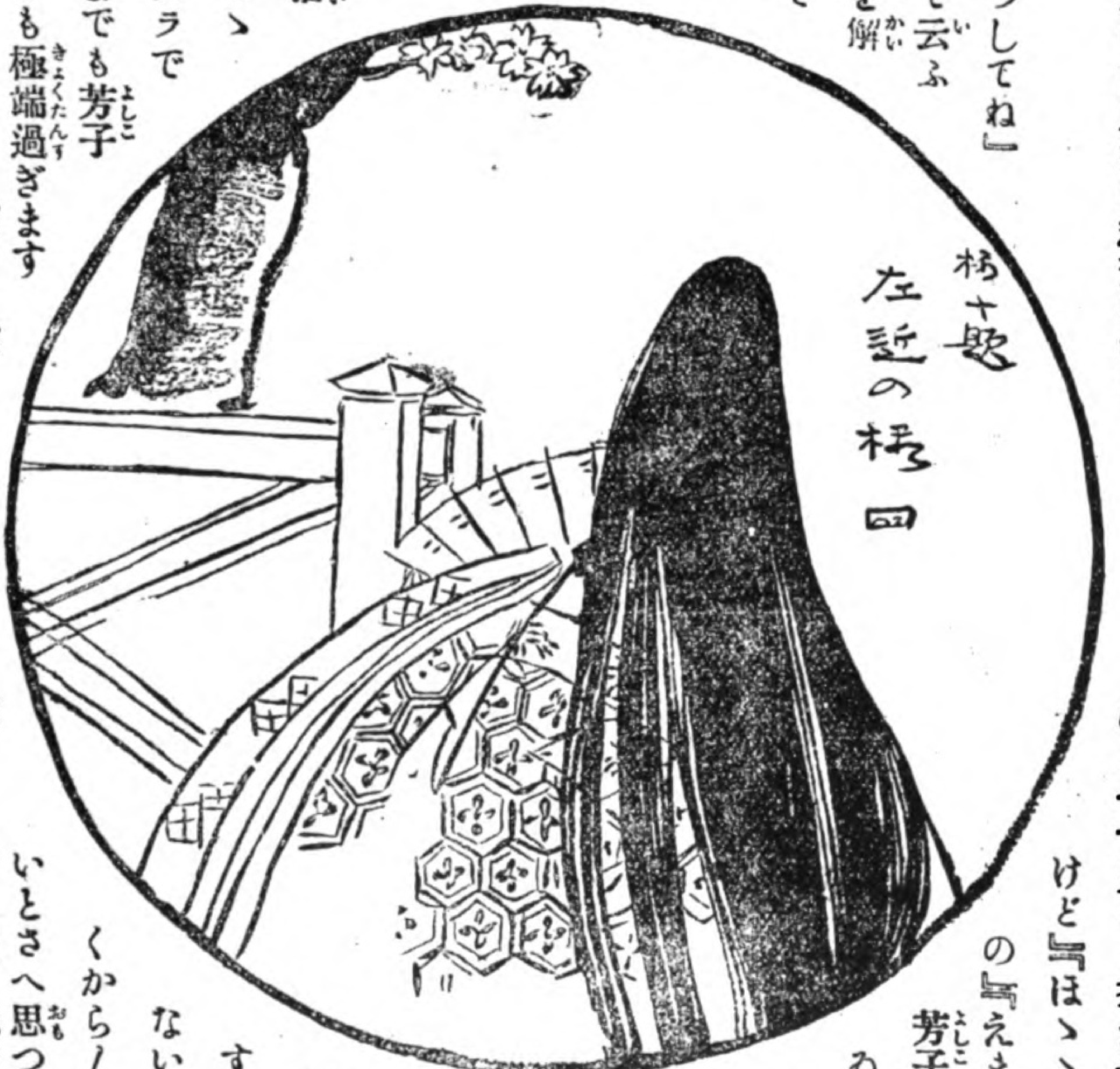
『貴郎芳ちやんは身體が弱い加減でせうけれど陰氣で困りますから、今度の日曜には何處かに伴れてまゐりませう』なんて夫婦で太郎さんと芳子とを伴れて郊外や上野邊りによく出かけた、芳子はだんだん馴るゝにつれてお母さんのいゝ人といふ事が十分解つた、優しい懐しい方とも十分思つたが、どうしても氣が置ける優しくされゝばされる程、尚更馴れにくい、抱つこして甘へて泣いてみたい樣な氣がつひそこまで出て來ても、一重の物の隔てはどうしても取れない、芳子は幼心にすまないと思つた、濟まないと思ひながらお母さんの顔を見るとどうしても重苦しい氣が先に立つ。

「黄」

芳子は東京に來てから早や十年になる、その間に弟の次郎ちやんや妹の花子が生れるし、お父樣もお役がずんずん御立身なすつて、芳子の上には兎も角平和な月日が去らなかつた、お母さんは依然として優しいお母さんである、芳子も明けて十七、臙脂紫縹色、虹と匂ふ強い色彩は全く缺けて居たけれど、幽谷に匂ふ寒

蘭の花、楚々たる落ち着いた風姿は群芳の中に異彩を放つた。

『ほんとに變つてゐらつしてね』『あんな方を詩人肌つて云ふんでせうね、メスで蛙を解剖したり折角咲いた花でも散々に搾つて見なければ氣がすまない私なんかには彼女の氣が知れないわ、飛花落葉に涙するつてあの方の事よ』『餘り因循過ぎるわもう少し現代的婦人は活快でなくては』『ほゝゝゝさうよ貴女の樣にハイカラでなくつてはね』『あら厭よでも芳子さんの樣では大人しいのも極端過ぎますわ』でも交際つて見ますとほんとに優しい方なのよ一寸見ると煑え切らない眞がありさうですけど』『ほゝゝゝその筈だわマ、ですもの』『えまゝつて何の事』『ほゝゝ芳子さんはお母さんが違つてゐらつしやるんだつて』『まあさう、それから思つて見るとあゝいふ性格もお無理はないわ』——



女學校のお友達はこんな噂をした事もあつた

芳子は全く小學校の昔から孤立であつた、芳子は皆と同化して浮々する樣にはどうしてもなれない、芳子は心の底から快よくから〳〵と笑へる皆の友が羨しいとさへ思つた、芳子は可笑しいの面白いのと云ふ事は滅多になかつた、テニスなど

で騒いでるお友達をさけていつも文學書を耽讀した、高踏的な親み憎い冷い人と皆に思はれて、後には誰もそれで通した。

空は綿雲が幾層も重なつて、茫然と金色の春の日が下界を照して居る、重苦しい風は甘い花の香を載せて何處からか漂ふて來る、春の悲哀とでもいふのか、こんな日には妙に人の心が濕めり勝だ、芳子は常になくそわ〳〵して學校から歸つて來た、蒼白すぎる頰は上氣して常よりも反つて美しい位、居室で何かお仕事の切を廣げてゐらしつた母樣の側に身を伏せて、母樣母樣私は……と許り泣きじやくる、まあ此の娘はどうしたのえどうおしだえ、學校で何かありましたか、眉をひそめて母樣のお尋ねになるのも聞えぬのか、突然濡れた顏をあげた時、眼は充血し唇はかみ占めぞつとする樣なすごさ、あゝどうしませう母樣どうしませう――物狂ほしく室中を馳け廻る、母樣は只ならぬ樣に、まあ芳ちやん氣を鎭めてね、よく譯をお話しとやつと手に縋つて坐らすれば早や潸然と膝にもたれて泣くばかり。

芳子はもうその日から後は正體がなかつた、原因は何だらうと兩親は學校の方やら他の方面やらを調べるけれど、的確とそれらしいのは見當らない、日に數回烈しく發作してどうかすると馳け出さうとするので、とう〳〵精神病院に送る事にした。

「日月星辰」

『あんな厚い煉瓦塀で世間を遠く區劃つた、病院の薄暗い牢屋の中で芳ちやんのやうな、いぢらしい美しい若い娘を狂はせて置くかと思ふと私は實際身を切られるよりつらう御座います、これも私の行屆きませんからで御座います』と夫婦して病院に送りつけて歸つてから母樣は、その夜しみ〴〵云つた。

『あゝさう云つて呉れては私の方が身を切られる樣だお前があの娘に少しの隔ても置かず優しくして呉れるのは私は蔭で手をあはせて居たよ、お前にこんな事云ふと感情をわるくして呉れては困るが、實は私は常か

ら芳を不憫に思ふてた、あの娘の母の死といふのが私の爲めには精神的大革命の原因なのだ、それまでは私は斗酒敢て辭せない方で勢にまかせては芳の母を隨分いじめたし、無理も云つたのだ、お孃樣育ちの世間馴れない芳の母には隨分利けたらう、平常でも芳は母に酷似だもんだから、彼女を見ると死んだ母が思ひ出されてつらかつた、あゝ發作して凄い顏する處は私の罪が蘇つて責めつけて來る樣でな、醫者の診察では本復には隙どるらしい――薄命なのは芳の母だ、自分が早世するばかりかやつと遺した彼女の生命――芳



までも生きながら葬られる、私は私が播いれ種だから私が刈らねばなるまい――唯優しく育てゝ呉れたお前に對しいかにも氣の毒だ。

男なれば千行の血涙、じつとこらへて。

外面は春の逝く風荒荒しく吹けば、爛漫たる枝上の花、明日は空しく泥上に委す可く――

――

或彌生の末、山東京傳の家に來客あり折しも晝飯頃とて茄子のシギ燒を出して飯を侑めたるに客之を見て「茄子さへ瓜實顏にまけじとて、くしをさしたり油ぬつたり」と詠みたり、京傳之を聞て、「油つけくしを挿したはよけれども、色の黒いに味噌をつけたり」と詠みたれば、客も客たり主人も主人たりとて皆其即妙の才に感じたり

呪はれたる蕾の花

花筐

一

恰度嵐の鎮まつた後のやうに、子供の聲のひいて行つたのを薄暗い襖の蔭に、おみよは沁み〲寂しく思うた。

　そして、つひ先刻迄、自分一人が除外者にされて居た事も、いぢめられて泣いて此間へ隠れたことも忘れたやうに、何となく懐かしさに堪へられませんでした。母親の丹精に作らへて與れた双子の羽織の袖附が、三寸も裂かれてゐるのを見守ると、さつきの有様はまざまざと眼のあたりに見え乍ら、あの時のやうな口惜しい、悲しい氣分にはどうしてもなれませんでした。

　默つて立つて障子の隙間からのぞくと、もう人影もない。夜の氣は、もう四疊ばかりの仕事場（桶の箍だの、錆び腐つた金箍だの木屑だの、亂れた隅に、まるく縮ねた青竹の裂いたのや、新らしい手桶、留桶の三つ四つが、それでも順序よく並んでゐる――）と、少し高まつた座敷の六疊にも迫つてくる。おみよは距ての障子を明けて、その暗い中を仕事場へ下りてゆきました。

　裏の井戸端で、母親が米を磨ぐ音は、ざく〲〲とおみよの胸に響いて來ます。先刻は居なかつたやうだから何にも知るまいけれど、この綻びを見つけられると又叱られる。さう思ふと、急に怖氣が付いたかして、延ばしてあつた足を引込めました。けれど、それに拘く心を傷めてゐる事もなく、障子に寄つてぢいつと暗闇をみつめながら、さま〲の他のおもひを胸に運ばせてをりました。一しきり夕餉の支度に忙しなかつた勝手元の音が落付くと、障子一重の座敷から、

「おみよ、おみよ」

と呼ぶ母親の聲がする。と、物総ろいたさまに立ち上りました。返事より先に羽織を脱いで小さくまるめて仕事場の隅に隠して澁々と上つてゆきました。

座敷には、三分心の洋燈が細々と燈されてあつた、そして塗りの脱ちた箱膳に、二つの茶碗と箸と、薇蕨の煮付けたのを盛つたお小皿が一枚、小さい丼には澤庵が輪切に切つて入れてありました。

酒と賭博の好きな父親の源十は、桶を作るのを忘れたやうに、今頃は留守で、夕飯は定つて二人して食べた、それがおみよにも母親にも、どんなにか氣樂であるかしれません。酒癖の惡い、言葉の荒い人を前に置いてゝは、旨しいものも胸に支へる、ぢれつたさうに叱りはするけれどおみよには矢張母親が一番懷かしい人でした（とりたてゝ愛して呉れる人を持たぬ身ですから）それ故、歸らぬうちに斯うして早く、濟ませて了ふのが習慣となつて了つた。



おみよは母親のつけてくれた冷飯に、鐵瓶のお湯をさして貰つて食べる。薇蕨の太いところを選つて一つ宛箸に挾んで口に入れました。一膳を濟ませると

『今夜は暖たかいんを御馳走しやうなあ』

機嫌よく斯う云つて、別の飯櫃からたきたての黒いのをよそつて呉れた時、おみよは嬉し相に微笑ました。そして其飯に、ふう〳〵と息を吹きかけて食べるのが、どんなに快樂であつたかしれませぬ

小皿を持ち上げて薇蕨を箸でおさへて、濁つたお汁をかけると、御飯の中をめぐつては底の方へ流れて沁み込んでゆく、それを掻きまはして、息をもつかずせつせとかきこんで見ました。二口三口は喜こばしさのうちに、噛みしめてゐましたが、ふと羽織の事を思ひ浮べて、母親の顔を上目で見た。

　何にも知らないでゐる――

思ふと、安堵した中にもまた罪を犯したやうに思はれて、おみよは二つたべると箸を捨てゝ了つた。

『もう可いんか』

だまつて打頭くと

『茶でも呑んだら好いがな』

　さういふのにも頭を振つて後退りをした。

　母親は自分の茶碗に茶をしたんで啜り乍ら、眼叩きもせずおみよの様子を眺めてゐました。

『おみよ、さつき阿母が着せて呉れた羽織はどうしたん』

　はつとしてたぢろぐ、胸は早鐘のやう、だまつて膝を突いてゐると、それがまたわけもなく震へます。

『どうしたんだ、何故に着ねえのよ、また何か悪さしたな、持つて來てみせな、え?!』

　茶碗を片手に、右手の指先に楊枝をあやつりつゝ、歯の間をせゝり乍ら

『持つて來う、よ』

　うるんだ眸で母親の顔をちらとみると、こんな様子をしてゐるので、たよりなさげに立ち上つてまた。仕事場へとおりてゆきました、そして手探に先刻の羽織を拾つて、音のせぬやう埃を拂ふと、そつと顔に當て鼻汁を啜つて、暫くは抱いた儘に立ち盡しました。

　誰よりも一番優しい人だと云つても、度重なつて叱られたり打たれたりすれば、その本心にどの位の愛があつてもたゞ怖ろしく思ふほど、おみよの心は幼う御座いましたから、縋り付く程な懐かしさは、矢張母親にも得る事は出來ませなんだのです。それ故、叱られるのを豫期するやうに、おづ／＼と傍へゆくのを、引きたぐつて母親は一々調べて見ました。

『ほれみろ、阿母の云つた通だ、こんなに袖を切らしやあがつた、またいぢめられたんだな、弱蟲！、そんなとでどうするんだ、馬鹿！』

烈しい剣幕に肩をゆすつて、不圖、思ひ返したやうに手を引いた　賃仕事をして漸々に得た銀貨の中から、夫の目を忍んで買入れた紅寒冷紗の梅の簪が、おみよの小さい銀杏髷の前に震へてゐる、泣きちやくつて、爛れたやうな細いちひさい瞼のまはりを染めてゐる。色の黒い、鼻の低い、唇の厚い子の醜い顔を見ると、強い言葉も咽喉で消えて了ひました。



醜いばかりでいぢめられる子。

『もう戸外へ出ないがいゝんだ、早く寝ちまいな』

憤の餘勢をこの一言にをさめて、とんと茶碗を置く、長煙管取つて火鉢に片ひぢもたせ乍ら、煙草をつめつめおみよの小さい身體を見守つてゐました

おみよは彈ちかれたやうに立ち上つて、低い押入れから夜具を出すと、片隅に床を延べて帶を解く、金巾更紗のせまい帶は、流れるやうに疊に曳いて、その毒々しい色彩が、丁度太い蛇のやう、おみよの足元を搦んでまつはるかと見えました。

すつくりと肌を脱ぐと、冷い〳〵筒袖と着更へて、其儘默つて臥床の中にもぐり込む。

「簪さして寢てどうするんだ」

おみよは衾のかげから手を伸べて簪をぬくと、枕邊にさしおきました、それをぢつとみつめてゐた母親はこの時始めてほろりとしました。

もうちつと容貌よく生れさせてやりたかつた。あの醜い顏立の爲に、どんなにうとまれて來た子であらう生れぬさきに父を失なつて、二つのとしに源十を、父と呼ぶ身になりはしたけれど……靜かに眼をつぶつてゐる母親の胸は、過來しかたの辛さと、現在の懊惱と行末の不安とに、千々に亂れて果もないやうでした。夜なべ仕事の片手間に。自分の晝夜帶やら袢纏やらを解いて、おみよの爲にと心を碎いて居りましたけれどよいものを裝ふだけ、醜さはきはだつて現れてくる、口さがない村の人々は、やれ『着物が泣くだらう』の何のと云ふ、遠慮を知らない子供逹は、よい惡口のたねに使用て、おみよは平常この言葉に泣かされてゐました、人に勝つた風體をさせもせぬものをと思へば腹立たしく、

「乞食みたいな風させろつて云ふんか」

母親も怒つて涙を零す、けれど人に向つて啖呵を切る程強くもなければ、すれても居ませんでした。

「こんな奴ぢやあ女郎にも賣れやしねえ、せい〳〵で機場の女工が關の山だなあ、融通の利かねえけちな阿魔だ」

おみよを前に置てつけ〳〵いふ源十の言葉を、母親はおみよの行末を暗示してゐるやうな心地がされて、その時すら怒る業さへしりませんでした。

酒癖の惡い繼父の手に打たれ、訶嘖まれする小さい肉塊、先の夫の遺兒、自分のたつた一人の血を分けた子、それを……それを……、どうして自分は此樣な情ない心になつたのであらう。母のみを世の一人のたよりとして、泪も汗もその袂に拭はうとするおみよは、どんなに情なく悲しくたよりなく思つてゐるであらうと思ふと、身も世もあらずひし〳〵と、おみよの身の

みを案じる心にせめかけられて、母親はとめどもなく泪を零しました。

　現在でさへ彼樣だものを、もしこの上に後でも出來たらと、五月だといふ腹の子を思つて、何だか罪深いやうな感じがされてなりませんでした。

　世に數多い例もある、あんな薄情な男ではあるけれど、自分の眞の子は可愛からう、生れたなら…あゝおみよが可哀想だ…。

　鉋屑の散らばつた仕事場を打ち見やつて、そこに酒臭い亭主の姿のないのをみると、また賭博かとうらさみしい心の中にも、嬉しさに胸を開いて、何思うたか母親は、膳を疊むといそ〳〵と立ち上りました。



二

子のまはりをめぐる親の情は、尺などでは度りきれぬほど、廣くそして深く大きいものなのでした。

　いとしいおみよを安全な位置に置きたいばつかしに、人知れず呑んだ烈しい藥の利目に赤ん坊は闇から闇に葬むられて行つて了ひました。

　けれどもそんな怖ろしい藥が何で母體に禍ひを及ぼさないで置きませう。豐かであつた母親の頰の肉は日増に落ちて、艶やかだつた髮の毛は拔けて、細い

しなやかな肩の骨が、袷を重ねた肌に痛々しい程に見えるやうになつて來ました。果は病心地に床に就くともう起つすべもないほど、重たさに上げ得ぬ枕もとに泣じやくるおみよのいたいけな姿を見ると、母親はもう〳〵、どんな事をしても生きて居たい。誰も庇つて吳れぬ此の子の行末を見屆ないで、どうして死ねやう自分許りをたよりにしてゐる子、たつた一人の母親の袖の影でなくて、何處にこの子の息をつく住家があらうと思つては冷たい夜具の襟を濡しました。

おちこちの家の門の梅が咲て、暖かな春の魁が、銀鈴をころばすやうな音で啼きしきつて、やがては嬌艶な春の容姿が、この世の舞臺を占めやうとする、名殘の冬の夜、戀も覺め、熱も血も冷えた三十過ぎの女は唯子を思ふ恩愛の中に身を悶へて、盡きぬ執着をとゝめ乍ら、可愛い娘の手に縋つて、つめたい冬の繪卷の裡に、永久にあへなくなつて了ひました。

* * * * *

大遠寺の境内に櫻が散つて、やがて青葉に代らうとする四月の末からおみよの姿は村の何處を索めても見當らなくなりました。

とり〳〵な村人の噂の中に、暫く姿を消して居た源十は、一人つきりになつた寂しい家に、朝から晩までお酒に浸つてをります。このお酒の犧牲には、どの樣に可憐なものがさゝげてあるので御座いませう。(完)

ダリヤの栽培

ダリヤ。種類は芳香、單瓣咲、牡丹咲き、八重咲き大輪、管咲き、一重筋入り、一重咲き、及び内瓣と外瓣と咲分けの一重、八重混咲きの九種であります。ダリヤを專門に栽培して居る處が英國にも米國にもありますが、米人は狂咲き、英人は八重咲き大輪、獨逸人は一重咲きを好む傾きがあります。日本では多く大輪と狂咲きを好みますが、夫れは我國の菊花に似て居て、夏の初から咲き初めます。花が咲き終ると、根元一尺位の處から切りますと、其處から新芽が出て、秋又咲きます。一つの莖に球根が幾つも着いて居て、其儘此頃の植付時に地に下しますと、發芽します。又肥料は餘りやらぬ方がよい、

棚橋刀自の叙勲祝賀會

巾幗の身を以て異數の光榮に浴した棚橋絢子刀自の門下、及び其他の發起にて、盛なる叙勲祝賀會は去る三月廿日、日本橋倶樂部に於て開かれました。徳川侯爵夫人米子、蜂須賀侯爵夫人隨子、岡部伯爵夫人富子、岡部子爵夫人抵子等の方々を始め發起人一同は午前中より參集して種々の準備に甲斐々々しく立働かるゝ樣、忙しげなる素振りの中にも顔の色喜びに輝きて餘處目にも床しく思はれました。請待によつて參會されたる紳士令孃貴婦人踵をついて樓上の休憩室は宛ら百花繚亂の概がありました。斯くて午後の一時に餘興が始まり、落語家三遊亭遊三の『殿樣おしろ粉』罪のない可笑み多き話に、互ひに眼を合せてほゝ笑を半巾に包まるゝお下げの令孃、果は我知らず笑ひ聲を漏さるゝ令夫人など其處此處に見受けられた。次は俳優澤村某々の踊『石橋』長唄の囃子にて目出度舞納めて後、發起人惣代として嘉悦孝子女史開會の辭を逃べられ、門人惣代として龜井まき子女史祝辭を朗讀し、續いて蜂須賀侯爵夫人、長谷場文部大臣代、阿部府知事代尾崎市長代の祝辭あり、法學、文學博士男爵加藤弘之翁、やゝ老軀を壇上に現はして、祝意を表し併せて若い婦人のハイカラ攻撃の演説に苦笑を漏らさるゝ向も見えました。最後に棚橋刀自は、壇に上りて、今日の光榮は一期の面目なれば死に到るまで教育の事に力を盡しますとの意味にて答辭を逃べ、式了つて後再び餘興に移り萩岡、町田、山室、野村等名手の聞え高き人人の箏曲『松上の鶴』、『松竹梅』、吉住、杵屋連中の長唄『うつぼ猿』などがありました後立食の饗應あり、午後五時頃散會されましたが、來合された人々は木戸公夫人、山本藏相夫人、酒井伯夫人、山脇、三輪田、櫻井三女史等始め約三百餘人にて歡喜に滿ちた盛會でありました。(とし子)

滅びゆく肉體

痩地の花

門を出て俯き加減に五六歩出ると、母様が早足で追つて來た。止るともなしに立ち止ると母樣は覗き込む樣にして、

『決してそんな短氣を起しちやいけないよ。ねえそれにもうお前だつて唯の身ではなし』と云ひ切つて、女の誇とする帶を締めても、もう恰好の惡いお腹のあたりを熟と見る。

私は今更の樣に輕い戰きを覺えたが、さあらぬ體にさびしい笑に紛らして、

『あゝ云つたのは一時の行掛りなのですよ、矢張私は剛情なんですね』

『いゝかね――本當に。』

『あゝ。』

暫し無言で立つて居ると、遠くで汽笛が聞える。暮に近い春の日は足もとの小さい黄い花に流れて居る。

『ではお姑さんに宜しく。』

『さよなら』と五六歩去つて振返ると、母樣は近頃めつきり瘦れた肩を窄めて、淋しい家の中へ這入つた。

何時か卒業式に着る着物のことで矢張り剛情を通して今の樣なやるせない心を抱いて、此門を出た事が浮ぶ。けれどもそれは萬事やさしい母の調停で、ふくれた顏がもとの通りになつて、一時間の後には珍しくも臺所を働いて居た。

思出の糸を辿ると、幼い心を抱いたありし日がありありと思浮ぶ。けれどもまたそれが餘りに內容のない空虛な生活の樣にも思はれる。と云つて、この苦しい遣瀨ない今の惱みが、果して自ら誇とするに足るものでありませうか。私は惑つて居るのであります。

『女に學問なんどさせるものぢやない…馬鹿が。』

と醉つた父樣は酒臭い息を吐きながら、かう仰しやる。而して二言目には直ぐ『何を云ふんだこの馬鹿が』と、かうなんです。この馬鹿と云ふ音調が餘程お氣に召し

て居らしやるらしい。

『はいどうせ私は馬鹿ですよ。馬鹿でなけばあんな趣味のない家庭の人にはなりませんわ。』

態と、つんとした平氣を裝つて見る。

『何を下らないことを云つて居るんだ、汚染の塵のつて…もつと聞き好い言葉を使ひなさい——女の癖に。』

『お父樣に聞き好い言葉？　私たちには馬鹿にラッパ節は出來ません。』

『誰がラッパ節を歌へと云つた。』大きい煙管で火鉢をぼかりぼかりと敲かれる。

赭く光つた額には青筋が動いて居る。桑原〳〵、もう反抗なんか出來ません、山雨欲來風滿樓ですからね。



茶の間で大きな長い振子を持つた時計が三時を打つた。もうお父樣なんか高尚な趣味性を失つて居るんだ。幾代となく續いた舊式の雜巾光りのする暗い茶の間に、五尺もある大時計！何て不調和でせう——時計屋ではあるまいし。

凋落の秋だ——もう我が家は、お祖父樣が丹精した梅の鉢も、十里四方にないと誇つた松の鉢も、何時の間にか不生産的だと云つて賣られて了つた。それなら生産的と云ふのは何でせう？　お酒の席でラッパ

節を歌ふの――

私だつて矢張りラッパ節を歌ふ資金にされて了つたんだ。――體のいゝ家の爲とか何だとか云ふ言葉に計られて。

計られたる女には自由はない――私はさう思つて今の境遇が却つて當然であるとも思つて見た。

丁度路は小川がやゝ廣い川に合する處にさしかゝつた。

顧ると背に杉の森を脊負つた我家は小さい幾つもの草葺の農家の間に際立つて見える。

母屋の瓦屋根の漆喰の剝れて居るのは見えぬが、土藏の白壁に大きな罅の入つて居るのは明にいゝ眺めをなして居る。夕日と廢邸、確にいゝ配合であります。

春風は靜に吹いて川には白い漣が立つて居る。私は二つ三つ胸の痛む咳をした。何時か浪子の歌が口を衝いて歌はれ出した。

堤の傍には菜の花が盛りと吹いて居る。

不圖私は瘦地の菜は早く咲くと云ふことを思ひ出した。何時か學校で先生が竹が花を咲くのはもう肥料を喰ひ盡して了つた時であると云つた事を記憶して居る。

木でも草でも終りが近くと花が一面に咲く。成長の激しい中は花は咲いても哀れなものである。丁度我が家はもう花が一面に咲く草の樣なものである。兄さんは都の空に繪傘を抱いて放浪して居る。父樣は毎日お酒ばかり飮んで居る。終りはもう近いた。血と肉との混亂した人間には矢張り病的なたゞ一時の花が咲く。丁度腐りかゝつた果實の非常に甘い樣なものである。滅び行く肉體はもう生存と云ふ埒外から出て、必ず一種異つた精神上の狂花を咲かせなければならぬ。あゝローマの遺址、ピラミッドのあたり、雪と白い洋裝の婦人となつてカンパスを立てゝ美の世界に住みたい。私は兄さんと一緒に繪傘を抱いて世界を漫遊した吉田ふじをさんが羨しい。

賢い人は云ひました。女の使命は妻となり母となる事でありますと。それは全く大切なものではありませ

う。然しそれは社會に對して教へらるゝ言葉でありまして、各個人についての行路を說明するものではありません。

私は個人としてもし欲するならば、必ずしも約束にのみ束縛さるゝものではありません。ノラは家庭を脱れて自由な社會へ出た。

けれども苦しい人間の制裁から離れるのは同時に柔い寢床、樂しい食味から離れなければならぬ。女は男ではない。ヨハネの樣に沙漠に眠ることは出來ません。

しかも惡魔は囁いだ。

愚な女よ、お前の腹を見よ。



思ひ惑つて居る中に、もう

お前は人の母だ——

自然の力は知らない中に、

お前を乘せて牢の中へ行く。

＊

自然の導くが儘に進む時、その前に立ち塞るものがある場合、祈るのは無益だ、悲しむのは愚である。たゞ其處には一つの途がある。その指す處は靜寂なる死の床である。

＊

川は白く光つて居る。

何處からともなく暮鐘が鳴る

私は下駄を脱で白い素足で柔い草の堤を辷べる樣にして下りた

京子様、私どんなに驚いたでせう。過ぎにし日はもう語るまい。語るに偲びませんからです。それにしてもお痛はしいのは赤さん、本當に男でしたつてねお悔み申します。明後日の日曜には是非御見舞致します。ゆる〳〵お轉婆時代の追憶談でも致したいと存じます。どうも今日は風が荒れていけません。生徒等が驅け廻つて居るものですから餘計砂が立つて机の上も本の上も砂だらけであります。鳥渡晝休の時間に一筆書き送ります。　さよなら

私はこの友の手紙を病院の白い床の上で讀んだ。鉛の様に重い頭には何の感覺も無かつた。

三月は夢と過ぎ櫻の噂は病院の内でのみ聞いた。五月になつてからやつと病院を出た。出た翌日私は實家から來た母様に連れられてお寺詣りをした。

樓門の前の畑には遲い鶯が啼いて居た。向ふの方では白い手拭を被つた女たちが燥いだ聲で語りながらお茶を摘んで居た。

空には雲の峰らしい白い雲が浮いて居る。

『お前草臥れやしないかえ。』

『いゝえ、いゝ運動ですわ此位歩くのは――。』

門を這入ると廣い長い道は杉林の中を貫いて敷石の苔は滑かである。華やかな日は杉の木の間からころころ漏れて光つて居る。

鶯の聲が靜寂を破つて聞える。

『山奥へでも行つた様ですね、鶯が啼いて。』

『それにお母さんあの道にさし懸つて居る若楓ね、あの新芽がいゝわね。』

『鹿が居ると、どうしても繪だわ。』

『櫻谷さんの若葉の山と云ふ格ですか。』

『本當にね。』

腰の曲つたいつもの爺さんがそろり〳〵と道を掃除して居た。私たちが近くと徐に曲つた腰を延して、

『幡谷の奥様、御參詣でがんすか、誠にはや結構なお天氣で……へ……精が出ると云ふ譯でもありませんが餘り日が永いんで晝寢も倦きますから、はゝゝゝ。』

無遠慮な大きい笑ひ聲が杉の木立を透して響いた。

本堂の傍のしだれ櫻はもう葉櫻となつて茂つて居る
廣い庭には羽蟻が飛んで居る。
參詣して念佛堂の方へ行くと、
水を下げて爺さんが待つて居
た。
『爺さん毎度ご苦勞樣です
ね。』
『へいどう致しまし
て。』
聲が莫迦に大きいの
で羽蟻がばつと飛び立
つ。——眞逆驚いた譯
ではあるまいが。
お線香とお花を買つてお
墓へ行く。
新しい玉垣の繞つて居る家の
お墓へ這入ると、まづ檜の二寸角
の墓表が目につく。



花は新しいのに更へ線香や水などを上げて、三人は
無言の儘暫く立つて居た。
白い雲は杉の森を離れて碧い空へ
ふつわりと浮いた。
白木の墓表には妙蓮白露童子
と墨黑々と書かれてある。
私は眼を瞑ると熱い不覺
の涙が頬を傳るのを覺
えた。
母は側の大きい墓石
へ線香を上げなどして
居る。私は相對して居
る先祖代々の靈へ默して
何物かを誓ひました。
爺さんは玉垣へ倚りかゝつて
安煙草をぽくり〳〵と燻らして
居た。

妙子のころ

醉蓮

「ぢやあ、いよ〳〵お別れねえ。」
「お體をお大切に。學校にもチョイ〳〵遊びにいらしつて頂戴。」
「私達も日曜に伺ひますわ。」

職員室を出て三年A組の前迄來ると待つてらしつた皆樣が口々に別れを惜しんで下すつた。

「えゝ、難有う、何卒ね御勉强のお暇の時にはいらしつて頂戴。お待ち申して居りますわ。」

人樣のお裁縫やらお洗濯を遊ばしてなれない身にはお痛はしい程お働き遊ばす母樣を只見て居るに忍びません。「どうせお前卒業たら敎員にでもして貰ふから然うすれば母樣だつて助かるし今はマア如何にかかうにか成るんだから決してそんな心配おしでない。」つて此間も仰しやつたけど、東京に居る兄樣の學費が却却大きいし、小學敎員を遊ばしてゐる姉樣が毎月俸給の全部を母樣にさし上げても月末には情無さ相なお顔を遊ばす樣なわけだから、其の內から私の學費が出ない樣になつて、其の上お役にも立つまいけどお洗濯のお手傳ひでもする樣に成れば、母樣のお體も少しはらくになれ樣かと昨晩よつぴて母樣にお話した末に二人して泣てしまひました。こんなわけで今日先生に退學屆けを出しに來ましたの。職員室で先生方のお優しいお心に逐ひ泣いてしまつて、今こゝに來ると一つクラスのなつかしい皆樣も心から同情して下すつた。

何時迄居たつて名殘は盡きぬ。「ぢや。さようなら」昇降口迄來て下すつた皆樣とお別れする。三浦さんは御門迄送つて下すつた。

「餘り御心配なさらない樣にね。」

三浦さんが肩に手をかけてうるんだ聲で仰やつたから

「一つ土地に居るんだしいくらだつてお目に懸れるけど同じ室に机を並べられないのが悲しいわ。」つて云つたら、

「ほんとうにねえ、妙ちやん母樣や姉樣に宜しく。」

「さようなら三浦さん」一度は離した手をまた固く握りながら三浦さんは泣いて下すつた。

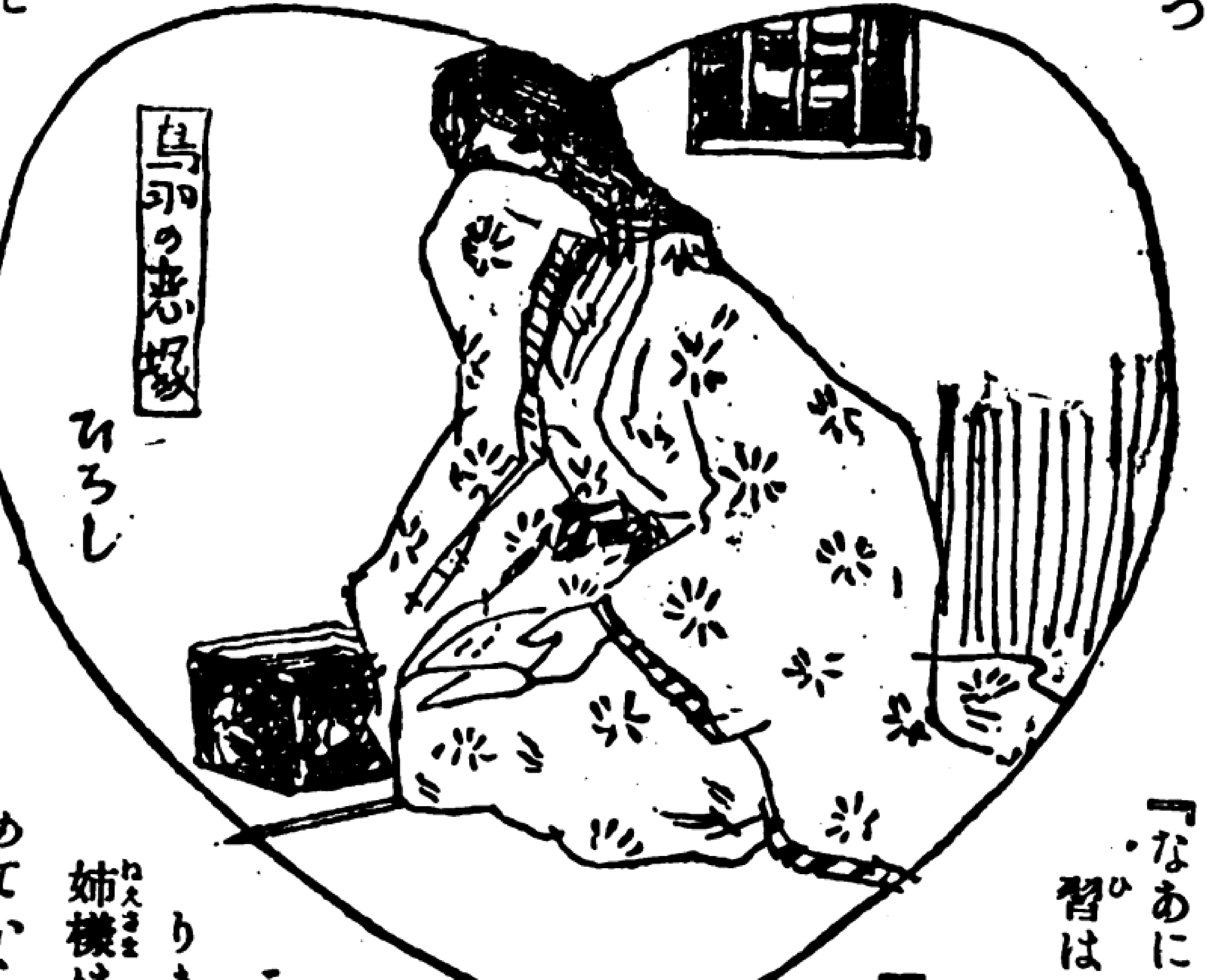
三年の間日毎々々に仰ぎ見た白堊の大講堂を後にして淋しい思ひに家路をたどる。

『只今。』ガタピシしながら格子を明けると。

『オヤもうお歸りかい。早やかつたねえ』何氣ない風に母樣がお顔をそむけて仰つしやつた。

小野さんのお羽織を明日の朝迄に仕上げないとすまないいつて薄す暗いランプの下でセッセと針を運んでなさる。

細かい縞のねぢり袢纏召して無雑作なくし巻き姿の



母樣を見ると意氣地なく涙がうるむ。

『母樣お手傳ひ致しませうか。』

『なあにちきに出來るから。夫よりお前お復習は……』ハッとお氣附き遊ばしたかチラと振り向いて

『妙や惡るかつたね堪忍しておくれ』

『もう母樣いゝんですよ。それより明日のお汁の實でも切りませう。』もう〳〵耐らなくなつて何氣ない風して立ち上る。

小さなおいもを七八つと細い大根を三寸許りいてふにきつて……これで母樣と二人一日には充分。餘ります位。

姉樣は五里許り離れた田舎の小學校に勤めていらしつて毎土曜日に泊まりがけでいらつしやるきり。だから土曜の晩は姉樣の分だけ小さいけれ共お魚の切身も添へる。日曜には一つ五厘のき

んつぱか大福の五錢も買つて久し振りに親子三人が談り合ふ。

母樣も日曜が餘程待ち遠しい樣で、もう金曜日邊りから樂しんでいらつしやいます。

此間も兄樣からお手紙が來て五拾圓許り是非都合して送つてくれつて云つて來たけどもどうしたものかねえつて昨日邊りも母樣は大分頭を痛めていらしつた樣だ。

かうして親子三人が苦しい思ひをしながらも兄樣にだけは不自由な思ひをさせ度く無いとかんがへて足りぬがちではあらうけど。

月々にかゝさず十何圓て送つて上げるんだもの。少しは家の事も察して下さりあいゝのに。やれ袴がひどくなつちまつたからせひつくつて貰ひたいとか、伊勢崎か何かの羽織を一枚送れのつて何不自由の無い家の積りで云つてよこすんだもの。其の度に母樣の眉の邊りに暗い雲がたゞよう樣な氣がして……

またそんな時に限つて妙に二人共默り込んでしまふ

今度の五十圓だつて全體何に使ふのか知れたもんぢや有りません。それも卒業とでも云ふんなら餘分なお金も要るでせうけど……卒業つて云へば兄樣は去年一年間ヤレ胃が惡るいの心臟がいけないのつて私達の目からはさつぱり惡るくも見えないのに休んで許りゐなすつてとう／＼一年だけ後れてしまつた。それに母樣は只つた一人の男だし頼みにするものに病らはれもしたら大變だからなんて大事にかけてゐなさるので兄樣はます／＼つけ上つてのらくら遊ばしてゐた。姉樣なんか着たい着物も召さず、一寸した半襟一つ買ふさへ一一母樣に御相談なすつて、萬事を遠慮勝にしていらつしやるのに……二人の妹達を少しでも可愛相と思し召したら兄樣も少ししつかりして戴きたい。床に就いてからこんな事を思つていたのでます／＼目が冴えてしまふ。十時もきゝ十一時もきゝ十二時をうつゝの樣にきゝながらうと／＼して五時にはもう眼が覺めてしまふ。

母樣が少し胸が痛むなんて云つてなすつたから今朝

の御飯はちつと柔らか目にたきました。御飯がすむと殘つたお火で昨夜の羽織に火のしをかける。

『妙や御苦勞だけど小野さん迄行つて來ておくれ。』

お羽織を風呂敷に包んで渡される。裏の通りをまつすぐに東に上つて右に折れた三軒目が小野さんてお宅、一寸大きな小間物やさんです。

度々家の前だけは通つたけど仕立物なんか屆けに來たのはこれが初めて。

見世からはいつて、可いものか惡いものか、うろ／＼してゐたがフト氣が附いて一寸右手を見ると『小野勝手口』と云ふ小さなふだがかゝつてゐる。くゞりに一寸手をかけるとガラ／＼つと高い音がして明きました。



びつくらして顏を上げるとぢき目の前が流しになつてゐて意地惡る氣な下女がお米とぐ手を留めてジロジロと見てゐました。

一寸會釋して

『〇〇町の森本から參りましたがお仕立物が出來ましたから。』

母樣から今教はつた許りの口上を苦しい思ひでやうやく云ふと

『さう一寸待つてお出で』

バタ／＼と勝手の方に馳せて行く。何だか妙に情ない様な氣がして悲しくなる。

五分も立つと

『一寸々々こつちへ來て頂戴』庭の方からさつきの下女が手まねぎする。流しから勝手迄の道がひどくぬかつてゐてうつかりすると下駄が土にすひ着いてしまふ。氣許り急きながらやう／＼

近づくと
「おみなさん、おみなさんつて無遠慮な大きい聲で呼びました。
腰高の障子がカラッと開いて丸顏の女中が……
「オヤ、もう出來たの。大變早やかつたこと。平常でもかうだといゝんだけどフヽ」
なんていやに笑ふ。
「ほんとにさ。夏物は冬。冬物は夏頼むと丁度いゝなんてんぢやちつと心細いね」
なんて失敬な人でせう生れて初めてこんな口惜しい思ひをした。
「寸法は如何？大丈夫かいいつでもなか〳〵あぶないんだから。」意氣地なくもう目の中が熱くなる
「お前さんも縫ふの？」
「いゝえ」頭を振ると
「オヤ〳〵然うかい」餘りだわ耐まらなくなつて
風呂敷取つて歸りかけると。
「アラ。仕立賃は？」ハッと氣が附いて立ち留まる。

「たゞで好いんなら結構だけどそれぢや鼻の下が干上つちまうわね。今度からも少し低價くする樣に歸つたら云つて頂戴な。ちつと高過ぎる樣だからね。」
銀貨をポーンと投げ出した。こんなお金不要ないわ欲しけりあいくらでも呉れてやることよ」つて口の邊りにぶつつけてやり度い程口惜しいけれど、あのお氣の毒な母樣が夜の目もろくに睡らずに、おかせぎ遊ばした此のお金をたとへ二十錢か卅錢であらう共一時の情を制しきれずになんでそんな事をしてすみませう。お母樣、妙は餘り心が小さかつた。涙なんかこぼすものか……
張りつめた心も家に歸るとゆるんでしまふ。机に突つ伏して思ふ樣泣きました。
少し出て來るからつて母樣は二時頃からお出かけ。きつと兄樣から云つてよこしたお金の御都合なんでせう。四時頃お歸りに成る。とう〳〵此家迄抵當に入れなすつた相で
今度は少しまとまつた金が出來たけど幸の學費に手

を附けずに取つときませう。ほんとにおしまひには如何んな事になつちまふか。」情なさ相にため息して冷えたお茶を呑んでなさる。親の心子知らずつてよく云つたもの。こんな御様子を兄様に見せ付けて上げたい。

此頃めつきり白髪が多くなんなすつたかうして二年三年とたつうちにどんなにお弱り遊ばすか私は女に生れたのがつくづく口惜しい。男ならなんで内地にぐづぐづしてゐ樣。さかまく怒濤を乗り越えて行衛遙るけき外國にきつと父無き家を興して見せる。

こんな事許りかんがへてやきもきしたつて始まらない。あゝ寢ませう、寢ませう。せめて樂しい父様ゐます昔の夢でもしのびながら‥‥‥母様がお仕事なさるお側で洗濯をする。



あはせ一枚、洗つて張つて縫つてそれでやうやく廿錢。

二枚許りしか洗はないのにもう十一時「今日は姉様が歸るねえ母様」と二人樂しみながら晝飯をすます。而して例の通り魚多に行つて切身を買ふ。ひらめの小さい切が一つ八錢だなんて隨分今日はいゝ値です。歸つて鹽燒きにする。姉様は五時頃お歸り遊ばすと、すぐ夕食迄の間を母様のお裁縫のお手傳ひこれ許りは父様ゐます時のまゝの食卓かこんで母子三人が箸を取る。

「母様召し上れな。妙ちやんもお食んなさいよ。」

姉様がお魚のお皿を母様の前に上げると

『いゝえ私しや餘り好かないから。お前ひらめは大好きなんぢやなかつたかい？』

『嫌ひてわけぢやありませんけど、下宿の賄ひがねえ却々いゝんですよ一週に一度はきつと肉が附くんですもの。もうこんな心配なさらない方がいゝわ』

『サ妙ちやんお前もお食べな』

一片の魚に母子三人が代る〴〵はしを出す。

母様はお齒がお惡るいから召し上るのが遲くつていらつしやる。ご飯がすむと三人が火鉢かこんで談り合ふ。

『妙ちやんの羽織も隨分ひどいんぢや無くつて？何か安物で一つつくつたら』と姉様が仰しやる。

『私なんか家に許り居るんだし何だつて好いけれど姉様こそ今月は是非一枚着なすつた方がいゝわ』

『淸さんや、妙もあゝ云ふんだから明日邊り何か見てお出でな。而して今着てゐるのを妙に下げれば同じわけだから。』

『然う。然うなさいよ姉様』

『すまないわねえ』つて姉様は仰しやる。何のすまないことが有りませう。每月の月俸は少しも手を附けずに兄様の學費に廻してしまふ。今年廿の姉様は一體いつになつたらお嫁き遊ばせるか。月々に積るお金なんててんで無い位ですもの。こんな事ぢやたとへ三年四年と待つたつて嫁入支度の足し前にもならぬ。

父様のゐます頃よく母様のことを子に甘くて不可ん不可んつて口癖の樣に仰しやつてたが全く母様はおやさし過ぎる。あのじだらくな兄様になんかも少しピリッとしたところが有つて戴きたいに。

お母様はお座敷へ。姉様と二人は六疊に枕並べて床に就く。

『おすまさんのことは如何なつて？』呫やく樣に姉様が

『駄目なんですよきつと。いくら貧乏したつてあんな女が嚊アだなんて云へるかいつてかうなんですもの。』

『困るねえ。』

『姉様、おすまさんて方知つてらしつて？』

「一度會つた事があるけれど兄樣が云ふ程厭な顏ぢやありませんそりやあ東京の方許り見慣れた目にはね。本當に母樣も御心配が絶え無いねえ」

兄樣がおすまさんを承知して下されば母樣だつてこんな苦勞はし給はぬ。

あんな娘でも貰つて下されば失禮乍ら幸夫さんの學費も當方から送りませう、つて先方のお父樣がわざ〳〵いらしつてお話し下すつても、あんな容姿おや困るの一點張り先方のお父樣と家のお母樣はいとこ同士に當るし御當人て方が大層氣立ての好い方だ相で初めは是非是非とお進め遊ばした母樣も此頃はあきらめつちまいなすつたと見えて一言もお口にさへ遊ばさぬ。

『寢ませう妙ちやん』『えゝ眠りませう。』



＊　＊　＊　＊

朝ご飯すませて姉樣と二人表通りの松川やと云ふ呉服店に行く。

銘仙の中でも横に紡績の入つて居るものは三圓いくら。其の中から紫つぽいかすりを一反取つて、『何か木綿物を』と仰しやる番頭さんが取りに立つた後で。『何うなさるの？』つて小さな聲で伺ふと、『母樣がね少し良のをお買つて五圓だけ下すつたけどこれで澤山だから妙ちやんにも何か。』つて仰しやる。菊大島とかつて大きい好い柄のかすりを一反。兩方で四圓八十錢。裏は古いのがあるから間に合ふわつて姉樣は云ふ。角の紅葉堂でカステーラを母樣に・・・今頃兄樣は何を遊ばしてるでせう？

見やう聞きやう



昔、能といふものを見たことのなき遠國の人が、始めて「鉢の木」の能を見て歸つて來てからの話に、今日のお能は、何でも大雪の日主人の留守中に一人の旅僧が來て何卒宿を貸して吳れと云ふに、只今は亭主が不在故、お貸し申す譯にはなりませんといふ、そんなら御主人のお歸りまで待ちませうといつて外へ立って居るところへ亭主が歸つて來て宿を貸すことになつた、旅僧は一夜亭主と物語りなどして暇を告げて歸つた後に、亭主は疑を起し、留守中に怪しいことがあつたらしいと心付き、非常に立腹して長刀を持つて旅僧の跡を追かけた、聽て鎌倉まで出て見ると、以前の旅僧は打つて變つて大層な立派な姿になり居り、亭主に一札の詫狀を出して漸く事濟みになつたと云つたといふ話がある。又故梅若實が曾て「熊野」を勤めた時、それを見た或人の評に、今舞臺に出てお かめの面を被つてつぎはぎの衣裳を着けてるのは一體何といふ能ですと傍の人に訊れたといふ話がある、其時に梅若の掛けた面は若女といふ銘作の面で、つぎはぎと見られた裝束も、同家秘藏の段織の唐織であつたとの事であるが、それをおかめだのつぎつぎだのと見られては情けない始末だと梅若が人に語つたと傳へられて居る。又昔田舍出の女中が、主人のお伴をして一日能樂を見に行き、歸つてから、今日のお能は面白かつたかと聞いたら、何だかよく分らないが、初めに萬歳が澤山に出て來て、鈴をやるとか、やらないとかといふ爭ひから、段々と色々な人か出て來て、刀を拔いて切合つたり、長刀を振廻して騷ぎ廻つたりして却々面白かつたといつたと。又始めて忠臣藏を見た山出しの下女が、家に歸つてから毎日あのやうに腹を切つたり、殺されたりして、よく役者の種が盡きないものだといつたといふ話がある。又始めて義太夫といふものを聽いた人がある、どうだ今夜の義太夫は面白かつたかと訊ねると、左樣何といふ太夫であつたか知らないが、隨分と巧まいものであつたといふ、語物は何であつたかと訊ねると、それはその：お俊傳兵衛仇敵討の段サ

大聲俚耳に入らざる諺もあるが、自分の知らないことに浮つかり口を出すと、時としては、頓珍漢なことを云つて物笑ひの種となることもあらう。

人知れず泣く義理の仲垣

雨やなぎ

五時うつ音が微かに耳に入る……昔友達のよし子さんや友江さんの姿は消えて、燈火の影淡く昨夜のまゝの六疊に、俊夫の小さい息と夫の鼾とが入り交りにきこえる許り、ア、又しても夢。

美しかつた伯母樣に、チゴ髷結つて房のながい簪さしてもらふのが嬉しくて〳〵、祖母樣から母樣、兄樣達にも見せてあるいて喜んだ、その昔がたまらない程なつかしい。

思へば伯母樣も不幸な人だつた、お若い頃には佐野のお藤樣とて、人にも歌はれた美人で、十五の時に强てと望まれて、當時勢力並ぶものなきお國家老の郡部へ御入嫁。

昔の時節で八千石から一萬二千石へやるのだもの、嬉しくて〳〵支度だけに半年かゝつて漸く出來たやうな騷でね、祖母樣なんかその間夜もゆつくりは休まなかつたよと、古風な針箱前にキチンと坐つて、大きな眼鏡かけて何十年もの昔を思ひ出し〳〵お話し遊す祖母樣のお言葉にも、その折の混雜が偲ばれる。

間もなく維新の變動、正義派の頭目と仰がれた舅樣は、反對派注目の目標となつて、一日下城を待ちうけて致命の重傷。

二三日が間時世を嘆じ主君を思ふて、悲憤の最後なされたのを傍で見る子の悲しさ、百ケ日も濟まぬ頃から何となくお氣色只ならず、遂には救ふ事叶はぬ狂人となつて、逢ふ人毎に敵よ仇よつてお騷ぎ遊しますのでお役目も勤まらず、座敷の一間へとぢ込め、それから後の伯母樣をほめぬものはありませんでした、物狂はしき夫に仕へ乳吞子抱へて姑樣の御機嫌とり、日にまし世帶は苦しくなるばかりなのを心にもとめず、それは〳〵働いて、發病後三年間一日も變らず夫を慰め姑樣に事へて、三月ぶり、夫より先にお死去なさ

いました、その伯母樣の姪ですもの、如何して私が幸福に暮し得るものですかと諦らめながらも……。

お貞樣はお幸福ですね、御大身のお一人娘で、お金に御不自由はなし、義兄樣の御人物はよしつて羨しがられてゐた私が、今のこの有樣、義兄樣には後れて、只だありし世を偲び音になくばかり、父樣のお顏さへもおぼえぬ私には、不運が當然かも知れませぬけれど……。

お前の愛情が足りないからだ年を取らないつて、女が二十一歳にもなつて子を育てる事も出來ぬやうで如何する。

毎日々々俊夫が泣く度に叱られるあのおこゑが、頭の中にハッキリ殘つて身がヅンとする。

いやだ……身を切られるやうなあのお言葉。思ふまいと夜着の襟引かぶれば、憎や夫のかほ。俊夫の泣顏、寫眞で見た先妻の顏、ア、。



さだ、

ハッととび起れば、

おそくなるぞ。

胸なで下して臺所に出る。この頃こそ慣れたけれど、初めの頃の苦しさ、火は燃えず、俊夫は泣く、出勤の間に合はぬと云つちや怒られて、その度にご歸宅はいつも夜半、近所の手前惡しと玄關閉めるのも恐る〳〵するのにお構なく、大きなお聲で何が面白いのかお歌ひなすつたりお笑ひなすつたり。

さだ酒だ〳〵、と仰有るのを止めたら大變翌朝はお茶碗さへもない有樣。小野に酒さへ飲ませなければ、屹度役に立つ男だが、惜しいものだつて局

長さんも仰有いますつて、今のやうな有様では、學校時代の俊才の名は誰の手に移ることやら、頭は荒んで氣みじかく、これが中學時代に品行方正と校長からほめられ、高商の三年間も將來を望まれてゐた幹太さんかと、結婚の翌日驚くよりは呆れてしまひました。お隣の奥樣のお話に、俊夫が生れて二十日ぶりに最愛の子を殘して死んだ先妻が、涙ながらに諌めましたつてその最後の血の涙も無効でした。

出勤を送つて跡片付け、俊夫を負ふて洗物する。白地に桐の模樣の浴衣は一昨年母樣のお好みによつて買つて頂いたものを、今は我子ならぬ子のお襁褓にして………。

奥さんお早くからお洗濯ですか。

なつかしい聲に涙拂ふて母なく姉なき身には何よりもなつかしいお隣の奥樣、母樣とも呼ばまほしきお年頃とて、何かとよく世話して下さる。

坊ちやんを抱つこしてあげますからね、早くお仕事なさいましよ。

洗つたものを干してミルク暖めて持つてゆくと、

奥さん御察し致しますよ、どんなにお辛いでせうね。

昨夜のお小言は何でしたのと、優しく問ふて下さる。

女は優しかれ、夫に從ふべしとのみ敎へて下さいました母樣も、祖母樣も、おゆるし下さいまし、私は最早や堪へ得ませぬ、弱い心一つで悶へるには堪へませぬ。

やさしきお言葉に包みきれず、一時に悲しさ込み上げてなき伏しました。

奥さんあなたも御運がお惡いのね、二十一位ゐで繼子を持つて、坊ちやんはお弱し、旦那樣はお氣短かなり、お若い身に坊ちやん負つてお洗濯なさるのを見ますとね、私だつて覺えある身ですもの、お察し申ますよ。御實家の母樣が御存命なら、到底も見ては入らつしやいませんでせうに。

難有う御座います。昨年の春母樣に別れてから、私のために泣いて下さるのは奥樣ばかり、いくら血をわけた兄樣だつて、別れて八年、海山とほい北米にゐま

して は………
アヽ母樣々々　お亡くなり遊す時、伯父樣を呼んで、
貞子が氣にかゝります、兄樣くれぐゝもお願ひ申しますつて仰有つた時には流石に伯父樣も涙を流して、必ず心配するなつて仰有つたのをきいて、さも安心したやうにお笑らひ遊したあの時のお顏やお姿ありありと……
泣いてお斷り申たのを、
十九や二十で後家が通せるものか、いつまで此のままで濟むものぢやなし、若い中に身を固めて佛に安心させなさい。幸あの幹太が是非にと云ふから丁度いゝ事だ。子供の一人位ゐ辛棒の出來ぬ事もあるまい。酒は飲まず、煙草も吸はず、月給は七十五圓だけれど、二期の配當もあるし……。
好い事づくしで押しつけられて、無理に島田に結はされて、私の涙は其の日からでした。何がさてお酒を飲むまいぞ、毎晩九合や一升飲まねば寢られぬと云ふ猩猩瓶、七十五圓で如何して樂にゆけるものですか。月末はいつもキリ〳〵舞をするのに……思ひ餘つて伯父樣のお情にすがらうとすれば、
貞さんは幸福ものよ、姑はなし、幹太さんは人柄なり、不足を云つちやすみませんよ。
ほめるとも冷かすともわからぬ伯母樣のお言葉に話の腰を折られて、また其のまゝ歸りました。
過にし春は夢と諦らめても〳〵、忘られぬ義兄樣、



敬太郎樣。

お酒も召し上らぬのに、いつもイキ〱して面白さうに、誰彼の別なくよくお交際なさいました。

オイ貞君、散歩に出ませんか、天神樣のおまつりだよ。

なんてよく連れられて歩きました。京都へ御出張のお土産に、大きなゴム鞠、これ如何しますのつてお尋ねしたら、

君にやるのさ。

アラこんなもの。

だつて君は小さい時から鞠が好きだつたぢやないか。ソレあの隱居所の縁で隣のお孃さん達とよく鞠もつて遊んでゐたね。

さう〱私は兄樣達から鞠子つて云はれてゐましたつけ。鞠が好で、大きいのや、小さいのや、澤山持つて自慢してゐましたが……

あれも夢……これも……

十八の年を人妻と呼ばれて樂しく面白く暮したのも僅か一と年にたらず、いま斯かる憂き目見る程ならば、敬太郎樣、何故私を殘して下さいました。

母樣までが……、

昨日でした俊夫を負つて八百屋へ行つたら、內儀さんの云ふのに、

奧樣さぞお困り遊しませう、お若いのによくこんなにお世話遊しますつて、

嘘々、人は知らぬと思つて、馬鹿にしてる。

手にかけて見ると可愛いものでね。

左樣で御座いますとも、けれどこの坊ちやまお仕合せな方でございますね。

聞くのもいやだ。二三日前大家さんへ來て大きな聲で。

若い繼母にかけられた子ほどみじめなものはありませんね。

あの聲の憎さ。

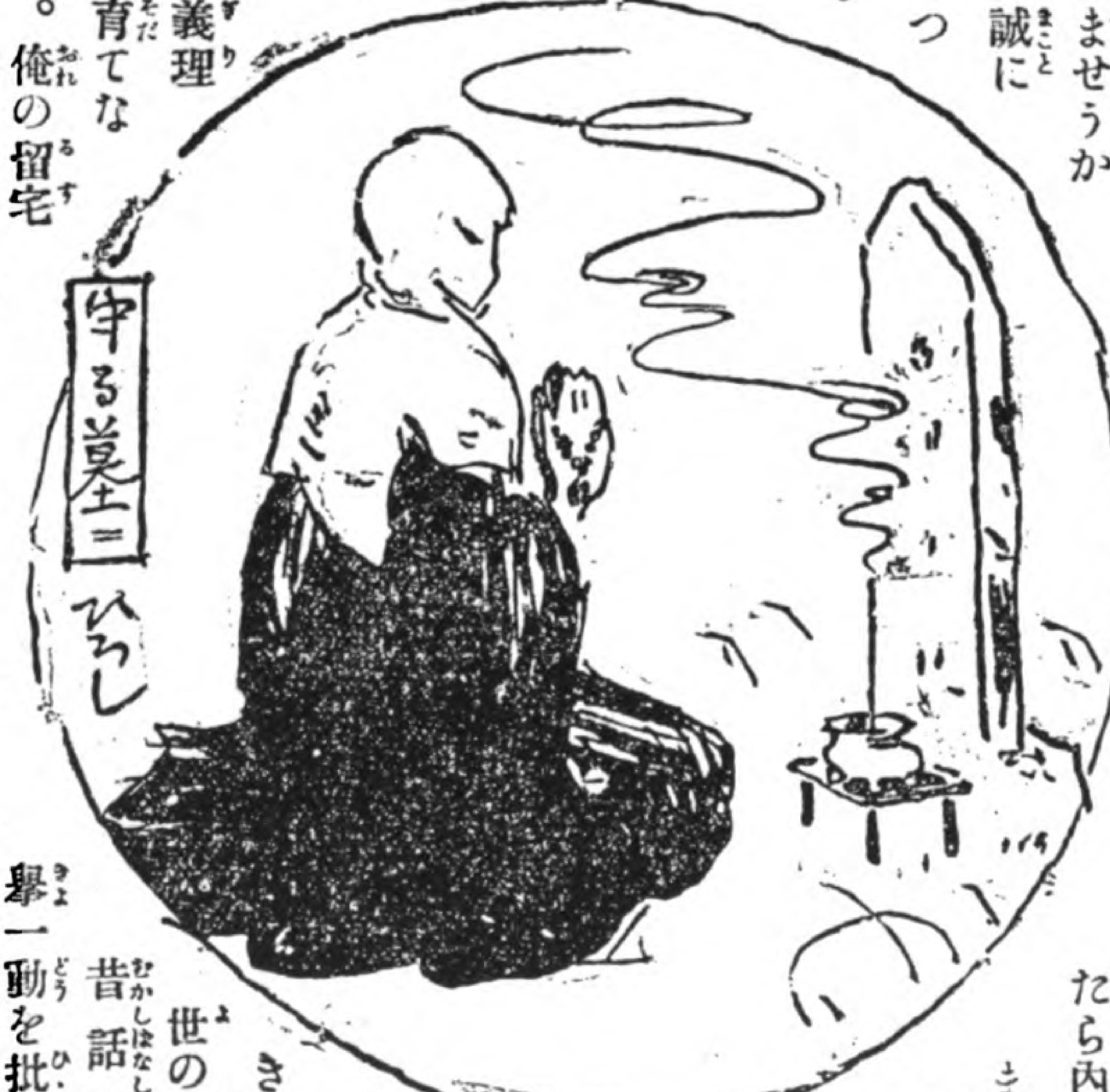
玉子とメリケン粉を臺所にそのまゝ、泣きました。

なぜ繼母はかくまで人から憎まれるのでせう、私に何

の罪がある。
まだこんな口惜しい事もありました。旦那様も御心配が多いでせうし、奥様もお身重ではお困りになりませうから、お預け遊しませんか、誠に好い人で、子がほしい〳〵つて云つてるものがありますの……

昨夜大家の内儀さんが來て話したつて、夫のあの怒り様、恐ろしくて返辭も何も出來やしない。だまつて聞いてやれとチッとしてゐれば、

貴様は全體心得が違ふ。義理ある子なら猶更大切にして育てなければならないぢやないか。俺の留宅中はこの子は泣き通してるに違ひない。如何してこの子がそんなに憎いのだ。



既に煙管でも飛んで來さうな勢、泣くにも涙の枯れた私は、俊夫を抱いたまゝ、返辭しなかつたら内儀さんが驚いて、

まあそんなにお怒り遊さないで、決して奥様が坊ちやまを荒くなさるなんて事はありませんのですけれど、只如何やらお目出度いやうですから、つひ申上げましたのですつて、切りに止めたその時の口惜しさ。なぜ人も夫も斯くまで情れないのでせう、お祖母様のお話にきいてゐて憎んだ昔噺の繼母、世の人は明治の今日でも未だあんな昔話を眞として、疑ひの目で私の一擧一動を批評してゐます。泣けば乳も飲ませる、守もする。抱いてもねるその

昔、他家の子がしつこなどすると、二度とその着物は着ないと云つて母樣困らせてゐた私が、しつこはか丶り通し、臭いものさへも始末する。この子が憎くて出來るものですか、わが手に受取つて半歳にもなるものを、何で憎みませう、憎いほどなら、田舍の預け先から連れて來た時……奧樣がお若いからつて婆の危んだのを無理に引取りはしませぬ。

義理ある子ぢやないか。といつも夫は申しますけれど・私は義理の二字にから・……まれて、人の手前作る事は出來ませぬ。昔のむかしの江戸時代の作者が、理想として作つた淨瑠璃を・今の世にも持つて來て、サーこの義理の型に入れて責め立てたつて無理です。明治も廿五年に生れた私です。

いつそ一と思ひに……夫にせめられ、人に疑はれ、何樂しみに生くる身ぞと、時には古風なことも考へて見れど、ア丶それもやはり思ばかり、人の子の親!!

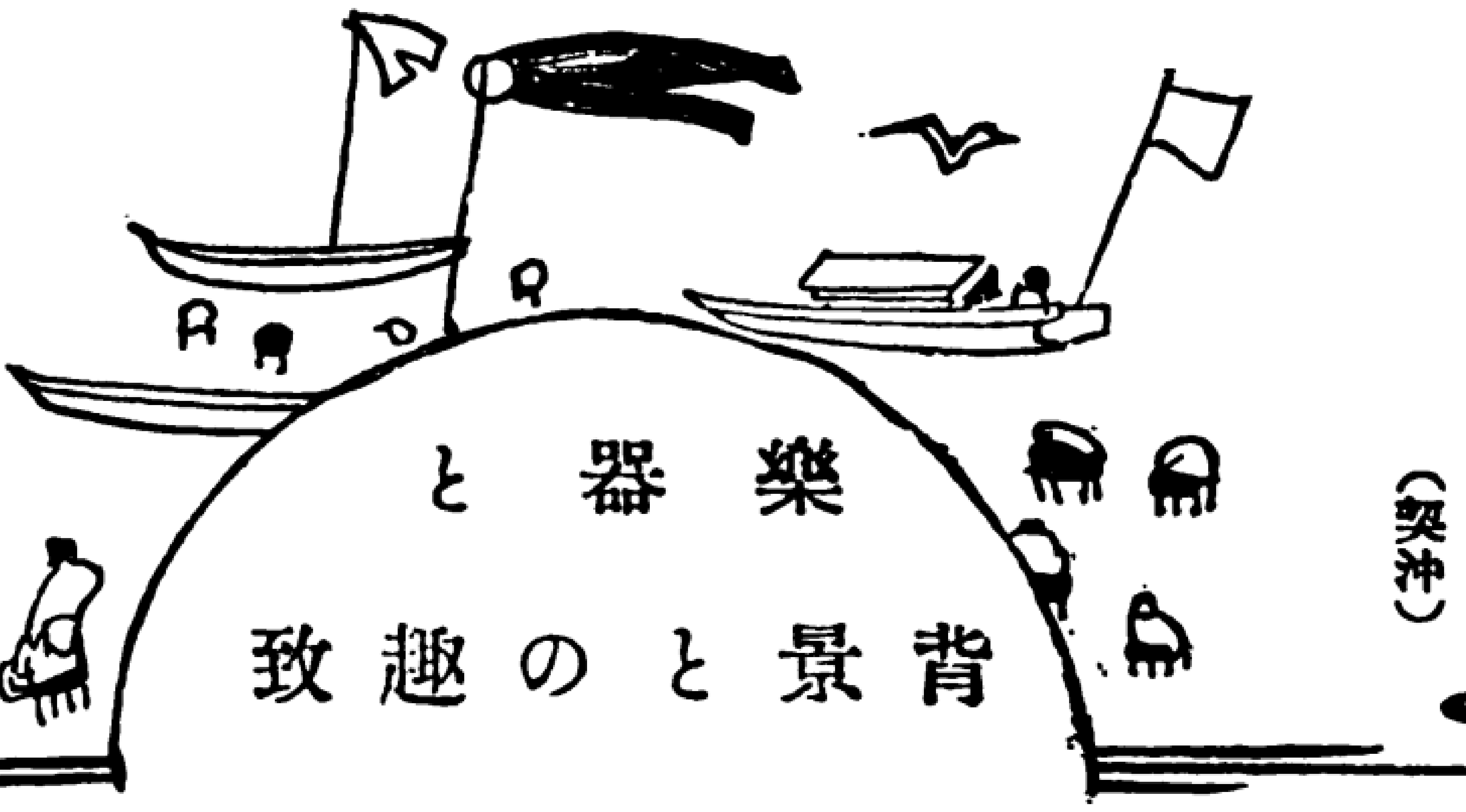
春なく、秋なく、いつも冬のやうな月日を今後幾十年、苦しんで泣いて、暮さねばならぬのでせう。苦しんで泣いて、その上でこの子が私を親として人の批評には耳借さず、なつかしんで呉れませうか……思へば心細い身の上、その上秋にもなつて我が子が生れたら、人の疑はますく深くなりませう、初めて見る我子の顏さへ、人にも夫にも心用ひてせねばならぬとは……

人の子の母になつたとて、私はまだ二十一です…

昔池上の本門寺の門柱へ、何者のいたづらとも知れず、六字の名號を書いて貼る者がある、取つて棄つれば、何時の間にか又貼つて置くので、其趣訴へ出でたところ、時の寺社奉行大岡越前守は、それは奇怪千萬の事であるとて、軈て筆を取り「西方の主と聞きしあみだ佛、今は法華の門番をする」と一首の狂歌を認め、之を門前へ貼り附け置き見よとのことに、その通りしたところが、其後はいたづらをするものが無くなつた。

春の海の沖つ遠山霞む日は
心もなぎぬ汐路はるかに
（契沖）

春來ぬと濱ものとかに
わたの原八十島かけて
霞棚引く （自寛）



樂器と背景との趣致

日本の音樂は器樂でも聲樂でも至つて單調であるのは、古い時代に出來たのが其儘に傳つて、只演奏者の技倆の熟不熟によつて、比較的巧くも聽へるのであるやうにしか思はれない、殊に宮廷の式樂たる雅樂に用ゐらるゝ篳とか、篳篥とかいふ樂器によつて吹奏さるゝ變化に乏しき聲調の如きは、其道以外の人の耳には殆んど何等の感興をも與へるものでないと思つて居た時代もあつたが、フト或る場合に際して、其時まで音樂的の眞價値を疑つた篳と篳篥になつて、殆んど名狀し難き程の靈調妙音の眞味を會得させられたことがある。

只見る森々たる杜の木立に圍まれて神寂びたる宮居、長き年迄の雨露に色あせたる丹塗りの神々しき玉垣、草一つ塵一點だも止めぬ坦々たる廣前、常には鳥の聲、御たらしの水のせゝらぎの外物音さへも稀なる、賀茂の明神の境界も、今日は葵の祭の當日とて下馬門の外には蟻の如きの群集。祭式の行列門外に止まり、先登に進みたる二列八人の樂手は、馬を下り、右方の四人は篳を捧げ、左方の四人は篳篥を手にして、門より寶前さして靜々と進むのである。何れもさびたる紫色の直衣の裾を長く曳き、卷纓追懸の冠に葵の葉を髷し、大口に太刀を佩き、何やらん樂を奏し、其聲律に合せて悠々歩調を整へつゝ、やがて社壇を昇り、右に四人、左に四人、何れも直衣の裾を勾欄にかけて下に居つては尚合奏の音を澄ますのであるが、其喨々たる聲木立に響きて、神も感應ましますかとばかり得も言ひ難き靈妙の感に打たれたのである。

我等は雲深き大内山に催さるゝ雅樂の光狀を觀たことはないから如何なる御舞臺に於て如何なる樣式に取行はせらるゝかを知るべきよしもないが、此の糺の森の聲によつて、幾分か其有樣を髣髴することが出來ないでもない。同時に總ての音樂は、如何なる場處に於ても其妙趣を發揮し得べきものでなく、必ず其趣きに伴ふべき相應の背景の必要なることを感じたのである。

例の磯節の如きは、酒屋の小僧もうたへば藝者もうたふ。其單調なる曲調は容易に模倣し得べく、隨て巧妙の喉を弄するものも少なくない。又追分節の如きも、北海道を本場とはして居るが、北越殊に新潟に其名手が多いといふことであるが、それでも水戸の大洗で漁師のうたふ磯節、北海道の荒波寄する磯邊に土人のうたふ追分節に比すれば酒屋の御用の名人も、新潟美人の美音も殆んど顏色がないといふことであるのは、要するに是も亦背景との調和如何によることであるに違ひない。

貧の盜

軟匕首

一

閏月があつたので十五夜は一月ほど遲れた。

長い間降り續いた雨は丁度前の晚から晴れ上つて思ひ切り大きな月が、東の空から浮彫の樣に鮮かにあらはれた。そして、何でも時候後れの大畑村も、今年ばかりは賑やかな飾壇の上を一つ一つに照した。飾壇の上には紫水晶のやうに水々した葡萄が山のやうに盛られてある。鉢の中には莢も破れさうに膨らんだ枝豆か笑つてゐる。側に並んだお供餅も德利も例年に無く引立つて見える。

子供達は鉢の中の枝豆とマン圓いお月樣とを等分に見較べながら、『お月樣幾つ』と歌ひ出した。上戸連は飾壇の上の德利に喉を鳴しながら、今年の出來作を語り合た。平和な時代後れな大畑村は、所謂二十世紀の世では見られぬやうな幼稚な浪漫的な風習に富んで居る。

『餅突きも』確かに其一つに數へられる。日がトップリと暮れて、お月樣が飾壇の上を一つ一つ明るく照らして居る時、不思議にも此村には、頭の黑い手に鎗を持つた怪物が幾つとなく往來し始める。その怪物といふのは云ふ迄もなく村の少年である。村の少年が頭からスッポりと着物を被つて、手に手に長い竹竿の先へ五六寸もある釘を縛り付けて持つたのが、この怪物の正體である。

怪物共は頻りに村中をねり步いて、急に物蔭から飛出して竿の先で飾壇の上の餅を釣つて消えて仕舞ふ。これが『餅突き』といふのだ。『餅突き』といふのは大畑村だけに用ひられる通語である。

飾壇の上の供物が多いだけそれだけ今年の餅突きは賑はつた。

『皆で餅突に行かんかナ』

腕白屋の隊長の權次が、竹竿を小腋に斯う叫ぶと、何處からとも無く例の頭の黑い怪物が二十も三十も集まつて來た。此等の怪物共は、權次が一令の下にバラ〳〵と四方へ散つた。これは權次の命令で各〻餅突きの仕事に出かけたのだ。



權次の勢力は恐ろしいものだ。村中の少年は皆かう云つた風に權次の配下になつて居る。だがこゝに權次の配下でない餅突少年が、今年から一人あらはれた。それは才吉といふのだ。

二

才吉は村端れのお俊といふ盲目婆さんの、たつた一人の孫である。お俊婆さんが此の村へ移つて來た當時は相當な暮しを立てゝ居たが、才吉の兩親が赤痢病で失くなつてから以來、眼の見えぬ老人に子供の二人暮しになつて、孝行者の才吉が僅かばかりの日雇の日給で日を送ることになつた。こんな僅かな金では、お盆やお正月の祝ひは愚か、明日の米にも差閊へるあはれな有樣である。だがお俊婆さんは他村から移つて來たといふので、村中に誰一人構つて吳る者もない。

『オヤ、お月樣が出さしたかや。』

お婆さんが見えない眼を無理に見張りながら斯う云つた時、才吉は胸を刺されるやうに感じた。

『あゝ出たとも、大きな綺麗なお月樣が出たぜ。しかしお前には見えないんだね。』

『さうよ一寸も見えやしない。俺には暗夜でも月夜でも同じことだ。せめていゝお月樣でも見たら平常の辛い目も少しは忘れ樣になあ。』

訴へるやうに云つて、婆さんは見えない眼からホロホロと涙を流した。才吉はその痩せこけた顔の皺と眞白な薄い髮の毛を見て、急に胸が一杯になつた。

『ほんとにもう老先の無い身で一寸は樂しみもしたいだらうに……お月樣は見えないんだし、それでも年寄は子供といふから、お團子や枝豆でも澤山食べさしたら少しは嬉しがりもしように、それさへ買ふお錢が無いんだもの。俺は如何だつて構は無いが、せめて婆さんに丈なあ――。

と才吉は身も世もあらぬ思ひがした。

才吉は默つて暫らく考へて居たが、急に何か思ひ出したやうに立上つた。そして、

『婆さん。俺一寸旦那樣の許まで行つて來るよ。』

と云つて出て行つた。

三

權次の配下が大びらで村中をねり歩いて居る間に、才吉は極り惡さうにコソ〳〵と『餅突き』の身仕度で歩いて居たゞ權次の仲間に見付かるまいと、正直者の唯おぢ〳〵しながら歩いて居た才吉は、運も惡く裏道の角で、權次はじめ二三人の者に、ヒヨクリと行逢つた。

『オイ誰だい。』

と権次は自分の配下の積りで聲を掛けたが、才吉はたた恐ろしさと極り惡さに默つて居た。

『何だ、才の野郎で無いか。』

と目敏い一人の配下が叫ぶと、権次は火の様に怒つた。そして唐突才吉の襟首をつかんで地面へたゝきつけて、

『こら才の野郎、よく聞け。餅突きはな……餅突きはな。俺達の仲間で無いと出來ないんだぞ。それに貴様、俺の配下でも無い癖に出かけるなんて、生意氣な。』

と云ひながら竹竿を振り上げて五つ六つ續け様になぐつた。そして、

『野郎、村の餅なんか一つでも取つて見やがれ、唯は置かんからな。』

と捨言葉を殘して、権次は配下を連れてヅン〳〵行つて仕舞つた。

暫らく經つてから、才吉はシク〳〵と泣きながら立上つて、懐から鼻紙を出してソツと膝頭から流れ出る血を拭つた。

『俺は一寸も食たくは無いが、何時も何時も憂い目に逢つて居る婆さんが、何か食べて嬉しがる様子が見たいばつかりに此處まで餅突に出掛けて來たものを……こんな傷まで受けてオメ〳〵と空手で家へ歸られようか。あゝ口惜しい。』

と叫んで才吉は強く唇を噛んだ。噛んだ唇は破れて血がにじんだ。才吉の顔色は凄い迄に靑かつた。

四

『昨夜盗人が畠を荒した。』

といふ評判が村中に傳はつた。

『家では薩摩芋を澤山掘られた。』

『俺ん所では枝豆を折られたっ』

『小盗人だから、村中の者に違ひ無い。』

『足跡が小さいから子供の盗人だらう。』

騒ぎは次第に大きくなつた。兎に角村中の者が寄合つたら大方の見當は付くだらうといふので、其晩村の鎭守様で集會が開かれることになつたっ

こんな事には案外熱心な村人は、日暮頃からドヤ〳〵と押かけて規定の七時には殆んど全部集つた。然し其の中にはお後婆さんの姿も才吉の姿も見えなかつた。

『もう大抵揃つたやうだから始めませうか。』

と今夜の議長の一人の重立が口を切ると今迄ガヤ〳〵云つて居た皆なはヒツソリと鎭まつた。重立は村會の時の口調其儘で、昨夜の盗人一件の大略を述べた。述べ終

ると又一座は例のガヤ〳〵に返つて彼處にも此處にも勝手な話しが取交はされた。その中に誰やらが、

『今夜お俊婆さんの家からは誰も來ないね』

と叫ぶと、

『さう〳〵來ないのはあれ丈だね。』

と側から合槌を打者がある。『お俊婆さんお俊婆さん』の呼聲は間も無く一座の凡ての話に打勝つた。

『どうもあのお俊婆さんと才の野郎の素振が怪い。』

と云ふ聲が何處からか聞えた。

『今朝彼家の側を通つたら、裏の塵溜の中に枝豆のカラが一杯あつた。』

『さう云へば薩摩芋の皮も其の中に交つて居た。』

と話はだん〳〵鰭が生ひ尻尾が出て、どうやら盜人一件はお俊婆さんの家へ落着きさうになつた。此の時議長は、

『それでは皆さんの御意見のあるところも大抵分りましたから、調査委員二名を擧げて事實の取調べにかゝる事にいたしませう。』

と例の議會振つた口調で述べ終ると、皆はドヤ〳〵と人浪を打つて社を出て行つた。

今迄賑かだつた社内は、急にもとの寂寞に返つて、裏の叢で鈴蟲が寂しく啼き出した。

＊　＊　＊　＊　＊

其の夜、一人の少年が盲婆さんの手を引いて、悄々と大畑村を出て行つた。それはお俊婆さんと才吉であつた。

△迷惑な握手

米國大統領及同夫人の先づ第一に學ばねばならぬ事は握手の方法即ち堅く相手方の手を握る事及び自分の方から前に握手を求めるとである。然らざれば相手方は痛い程彼等の手を握るが故に之がため思はぬ苦痛を受くる事がある。現大統領タフト夫人は頗る懇篤なる握手をなすが爲め時には多數の握手に依り後悔する事があるさうだ。ヘーソン夫人は常に片手に花束を持ち片手に扇子を携へて握手の呵責を避けた。クレヴランド夫人は餘り多くの握手を交換したるがため右手が左手より大きくなつたと云ふ事である、嘗て同夫人が握手しなかつた事がある、すると其場に居つた一人の上院議員は非常に憤り攻撃の矢を巨人クレヴランド氏に向け氏を犬だと罵つた。爾來ク夫人は決してその上院議員とは握手を交換せず唯だ輕い一揖をする而已であつた。

青き焔の影

黒髪



私は不圖眼を覺した。半島の浪はゆるやかに、潮鳴りして腐れかゝつた肺に響く。お茶を呑まうとした手は、哀れにも、力なく折れて、涙に濡れた枕に、さゝへられた。あゝ……私は肺病なのだ。蠟燭の消えて行く樣に、たゞ死を待つばかりだ。慰める物つて一つもありやしない。

毎日聞えてゐるあの海の響と、枯びた咳が、室中に反響すると、身體はおびえた樣に戰く。あの絶えず出る咳は、少くも、私の死を刻む時計のセコンドだ。絶望つて人は言ふけれど、絶望つてどういふのを指すのだらう、私の樣な者かしら?！イヱ〳〵異ふのよ。私は初めから望が無いんだから……心はとうに、死んでゐる。人は絶えず出る咳を聞くから生きてゐる……止つたと思つた時計が、カチ〳〵動いて聞えると同じに死なゝいと思つてゐる。けれど何の望みもなく、其日其日を同じ處を動かずに寢て居るのは、墓に眠つてゐる人と少しも異つてゐない。名殘りの入日に、夢の樣に浮かんだ帆や、いぢらしいほど波に揉まれてゐる月光や、なつかしい初島の漁火が消えた時、私は甦へつたの。早やくお父さんの處へ行きたい。私が死ぬ時はどんな顏をするだらう。ジーと心がとろけて行くやうな鏡を手に持つて、私の顏を見ながら、否な人の顏を逃れて死んで行きたい。寢てから鏡といふものを見る事がない。やはり血色の好い昔しの顏かしら？乾度お父さんのやうな青い干涸びた顏色だ。オゝいや〳〵思ひ出しても。抱いた乳は無くなつたやうに小さかつた。私は夜つてものが一番淋しいの。ガタ〳〵して居た音や風や、息を潜めると湯殿の湯の栓がタラ〳〵流れる

音までハッキリ聞える。たまらなくなつて、漸々電氣をヒネると影がすうと逃げた樣に思はれて、ウト〳〵寢入る。ガラ〳〵戸の開く音がすると、私の室にも、戸の隙き間から、幽かに朝日がもれて、夜具の花が浮いた樣に咲きます。太陽は赤かく波に輝いて居るでせう。早起きのお婆さんは、屹度拜んでゐるに違ひない。私も小さい時は、女中の脊でお婆さんの拜むのを、不思議に見つめた。赤かくギラギラ光が海に浮く〳〵と、恐ろしい者のやうに、頭を女中の脊に伏せた。お婆さんはまだ何とかいふて、合掌して居らつしやる。あのお日樣はどこに住むのでせう。今夜の樣に嵐が強い晩は?!やはり海におゐでになるのかしら?!おぼんの樣な滿圓が、お皿のやうに缺けたら‥‥其れは無駄な考へでした。お日樣はいつもの樣に、丸く圓く出て參りました。かうした不思議



は幾日も〳〵、私の小さい心を亂しました。お婆さんは屹度私の身體や、不幸な兄さんを、祈てゐらつしやる。今柏手の音が聞えたもの。眞赤な日を身體一杯に浴びて、不亂になつて祈つて下さるお婆さんを見ると、急になほつた氣がします。いくら難有いと思つても、私には駄目!!お腰をなでる事も出來ません。お婆さんは、不幸な人です。賴みに思つたお父さんには死なれるし、兄さんは、お酒ばかり召し上つてたわいもない。寄席で見た手品といふものを覺えておきたかつた。なまじ肺病になどなるよりも、盲目と啞の、馬鹿ネと言はれても、聞えぬ耳をもちたかつた。兄さんが不身持でなかつたら、お父さんだつて早くお亡なりはしなかつたんだわ。忘れもしません八月!!ほんとうに蒸し暑い晩でした。緣先には人が大勢涼んで居りました。

軒の提灯がフッと消えたと思ふと、ドヤ〳〵駆けつけた。丁度此の室だ。私も此のなつかしい夜具を着て、眸を閉ぢるの。

お父さん…お父さん…

亡くなつたお父さんの枕元には、線香が靡いて、並ゐる人の心を暗くした。泣いて居らつしやるのは、お母さんばかりぢやない、夢の樣に咲いた花が、シツトリ濡れた。チヨコ〳〵這ひまはつてゐた小さい子は、哀しみの染みて行く鐘の音に、ウツトリ寢入つた。夢の樣に御詠歌が響く。「何にも知らないでネ」熱いキツスは頰におぼえた。何氣なく探つた乳は、まだ小さかつたので、ワツと泣きだした。

「オヽ…いゝ子、いゝ子。」

其れが何處の姉さんか、忘れましたが、今も白い指だけ覺えてゐますの。

お父さんがなくなつてから、時雨るゝ天のやうに、曇つたり晴れたりして、暗い濕つた家になりました。庭つゞきは土藏で、其の白壁に波の音が微かに響いて居ました。夕日に戰いた鷄頭は萎んで、秋は幾度も來ました。あの赤い鳳仙花が綻ばれる頃、お婆さんと一緒に隱居所に住む事になりました。隣家は大層陽氣で、笑聲が夜遲くまで聞える。二階からは低い屋根が波のやうにうねつて、隣家の物干臺に慘ましいやうな赤い着物の裏が弱い秋の日光に輝いて居ました。着物の裏は赤く…赤く血の色に光つてゐました。

「お父さんの血のやうネ。」

父は肺病で、時折吐血するので…弟は何氣なく、また、「お父さんの血だ。」

私はたまらなくなつて、豐ちやんを固く抱きしめました。

波の音がドーと聞えると、肺が痛い樣に響く。お父さんの肺にも響いたに異ひない。胸に手をやると、血がトツ〳〵と動いてゐる。あゝ私の血は、見るも可厭な色に靑褪めてゐる。穢れてゐるんだわ…此のシーと天井を、見つめた眸も、乾度恐ろしい色をたゝへてゐる。蛾は夜具の花でも吸ふ樣にチヨロ〳〵這つてゐ

る。其のまめ〳〵しいのを見るにつけ私の不幸も大きく思はれて、憎い者のやうに強く揉んだ。蟻はバタバタ足を悶躁いてゐる。手に乗せたけれど、何の叫び聲もしない。死といふ者が來たなら斯う無造作に死に行くでせうか。蟻はバタ〳〵悶躁いて手から滑つた。私も此の夜具の襟の天鵞絨を心行くまで頬に押しつけて最後の藥を取る手がはかなく崩れた時が、「死の道」を歩むんです。灰色にあせた砂原の樣な「死の道」を白雲のごとく音なく歩む。其に付けてもなつかしいのは夜具の襟の黒い天鵞絨よ！あゝ……御前と私は盡きぬ緣でした。其の軟かい膚ざはりは、母の昔の頬ずり！けれど、どうしても離れなければなりません。されば最後の日記に記しませう。

……おゝ黒き襟の天鵞絨よ、その軟かい膚ざはりは……なつかしき母の……昔の頬ずり。



日は黄色に漸く傾いた。終焉の期がいよ〳〵近づく。先漸やく苦しさを忍んで都からの弟の手紙を投り込んだ。火鉢は蒼々と燃えてゐる。また二ツ三ツ投げた燃ゆる樣な思のパンジーの花や、なつかしいカーネーションなどが蒼々と燃えて行く。オリーヴ色の淡い角封筒に男らしくペンで春好生と、火の光で輝いて見える。春好さん……貴兄は波路はるけき大島に居らつしやるんですつてネ、繪筆抱いて行く風浪

の音を聞いてお出での、姿が浮かびます、なつかしいわ。春様が大島……近かづいてハッキリ見える時は雨が降の。けれどあの三原山の烟が瞳に棚引く時はうれしいの。眞赤な椿がボタ〳〵夕日に落ちて、その中を桶を乘て行く大島の黒髮の女！さぞスケッチが澤山出來上つたでせうね。見たいわ……春様御目にかゝりたいわ……大島は赤い夕日の海に浮いてゐる。手紙を皆な投り込んだ。パッと青い焔が、戀や愛！悲しいなどといふ字を燒いて燃え上る。此の世から其等の總てが、滅びて行くやうに燃え上る風がサット私の髮を亂した呪ふ様な青い焔の中へ脫髮を投げた。髮はジーと燃えて、小さい青い焔は燃え終た文殼をなめまはつた。

突飛な舞踏會

由來歐米人間には隨分思ひ切つた突飛な事を演じて自ら快とする風習がある去る二月三十日の夜紐育市支那街にある有名な料理店でエドマンド、フッセル氏及アレン、ソンメル夫人主催の下に開かれた浮浪人會の舞踏會などは來賓はシナクソン、ゴーロード夫人エデル、フオン、グロアス男爵夫人、フオン、ロッテンタル男爵夫人フランシス、ホッター氏他二百餘名で支那料理の晩餐終はるや假裝せる一人の賓客がつとソンメル夫人の下に歩み寄り其手に接吻すると他の一來客は憤慾の色をなして彼の頰を毆りつけた、直ちに組打が始まり兩人共小刀を拔き連れて眞に劍舞様の踊を始めたが、多くの賓客は此兩人が決鬪をなして居る者と思ひ、誰かゞ電燈を消したので、或人々は兩人を分けやうとした。支那人の給仕人は喚き叫んで室から飛び出すと云ふ有様、暗中にドタン、バタン、凄まじい騷動であつた。再び電燈をつけて見ると、此は如何に、一人は床上に仆れて居る、是は大變だと云ふので一同の來賓が恐る〳〵檢死しようとすると打ち殺されたと思ふた彼は突然立ち上つて恭々しく一同に向つて敬禮すると同時に音樂隊は「エプリボデースドウインゲイット」の曲を奏し始めた、一同はアッと胸撫で下ろして始めてアッと笑ひ興じた。殊に甚だしきは年老いたる一匹の熊を室の中央に引つ張り出してソンメル夫人が口輪を箝めた熊と所謂熊踊りなるものを踊つて雷の如き喝采を博した。

夜櫻やいさゝか來る蚊手で拂ふ



薄街道

松平鏡子

一

石の喰ひこまつて凸凹した道を、ちやらん〳〵と鈴つけた小荷駄馬が、沓懸の方へと曳かれてゆく。行く手の驛路はもう霞んで、丈の延びない尾花の中に、やがては馬の足掻も鈴の音も、幽に幽かに消えて了ふ。

街道の道は山から山、野から野へ、分れて這ふて傳うてゐた。まだ春の薄の葉も若く、色の緑さへしなやかなのが、渡りゆく風に誘ひ合して、さや〳〵と小さく鳴る僅かだけれど高地に建つてゐるのだから、障子も緑も見えるのでしたけれど、薄の葉に穗が延びて、大空一ぱいに秋の氣がみなぎる頃は、襖の蔭にも蟲が啼かうと思はれる。(薄の蔭には、一軒の平屋造があつたのでした)。

まはりは低い扇骨木垣が一重、門には小さく「松波」とのみ書かれた木札が打ち付けられてあつた。裏手へ拔けるところにさゝやかな枝折戸があつて、廻縁がそこを戸袋で仕切られて、その向ふは四角い肱掛窓。裁縫をしてゐるお澄さんの上半身が、江戸繪のやうに美くしう見られました。

もう五日ばかり經た桃割の鬢のふくらみがほつれて輪廓の好い圓顏の頰に亂れて居ました。張のある大きい目は一重だから、零れるやうな愛嬌はありませんけれど、口元の可愛い人で、黑つぽい袷の色合が、くつきりと中高な面を引つ立てゝゐます。

お澄さんは十九だけれど、華奢立だから年よりはずつと若い、桃割に羽二重の摘細工をかけてゐるのと、荒い羽織の隙間から見える帶の色が華美だから、餘計さう思はれるのかもしれません。

五月の冴えた空の色は、お澄さんの背景としてどんなにふさはしいものだつたでせう、薄紺靑に艶をもつて光つて、恰度孔雀の羽のやうに見えます。

磯部の鑛泉せんべいをお盆に載せて、この時母様が

入つて來ました。思ひ切りよく髮をぷッつりはさんでゐるけれど、まだ四十には足らない若さで、お澄さんには餘り似て居ない。母樣の顏はやゝ長かつた。

お澄さんは笑ひ乍ら縫物を片寄せる。母樣は急須のお茶を湯呑に注いだ。

「磯部から取寄せたんだつて今持つて來て吳れたんですよ」

「母樣は何してゐらしつたのかと思つた。」

「何故？」「ちよつともお見えなさらないんですもの」「二人してい ままた遊びに出かけるつて云ふものだから」

さう云ひ乍らお澄さんの裁縫を見返つて



「おまへあんまりはかゞゆかない樣ね」

「だつて寂しいのですもの、一人ぼつちだと何にも厭に成りますわ」

お澄さんは羽織の紐をまさぐり乍ら

「お暖かいのね母樣」

「信州だつて思つた程でもないね」

「ほんとうにさうですよ、私達馴れて來たんでせうか」

「さうかもしれないよ」

「私厭ですわ、こんなところに馴れて來たなんて」

ぱつちりした眸をわざ〳〵大きくする。

「だつて貴女もう東京へなんて歸らないつてお云ひだ

つたぢやあないの」

「厭ですわ、みんな別々に暮すのは厭ですわ私、英ちやんやなんか皆して世帶持つて、自宅からお辨當こしらへて學校へ遣り度いわ、母樣東京へ歸りませうね」

子供らしい口調で事もなげに云はしましたけれど、お澄さんの胸には涙が溜つてゐたのです。

「お父樣は輕井澤で亡なりたいつて仰有つてゐらしたのよ、急のお病氣でどうにもならなかつたけれど、あんな風でなかつたら、屹度こゝへゐらしつたのだらうさうすれば私達にしたつて、此處が一番好いところぢやあないか」

母樣の前ではあんまり泣いた事のないお澄さんは、この時默つて立つて、向ふの壁ぎはに押しつけられてある小さい机の抽斗を拔きました。

「母樣英一ちやんからお手紙が來てますよ」

「何とか云つて來て？」

「先日のお禮ですわ、停車場までわざ〱送つて下すつて難有うつて、……お禮ばつかしこれで三度目ですよ」くる〱と卷紙をほぐして

「……姉さんはちつと瘦せたやうに僕には思はれました、姉樣は餘り神經をつかひ過ぎる、何か打ち明けていい事なら、僕にだつて話して呉れたつてよかりさうなものだと思ひ升だつて、母樣！ 姉さんは神經をつかひ過ぎるんだつてホ、、、」

先刻讀んだ時は、わざ〱裏まで泣きに行つた癖にもうさも可笑い事でも思ひ返す樣に笑つてゐる。

「さうね、お前ちつとお瘦せのやうにも思ふよ、神經をつかふのかも知れないね」

「打ち明ける話なんて無いわ、私そんな神經をつかひ過ぎるやうなこと持たないもの」

「どうだかわからないよ」

「瘦せたのは時候の爲ですわ」

母樣は冷めたお茶を、ぱつちやりと窓から捨てゝ

「先日操さんからお寫眞を送つて下すつたんぢやないの」

「えゝ」「どうしたの、母樣には見せないのね」

「つまらないんですもの」

さう云つたけれどいなみもしないで、立ち上るとさつさと同じ抽斗から、袋に入つた儘のを持つて來る。

「好いお召がお出來なすつたぢやあないか」

「えゝ」知らん振してお煎餅を割つてゐた。

「貴女も此様なのが一枚でも有るとよかつた、お父様がちよつともおさせなさらなかつたから….おまへなんてとう／＼好い装をして見ずに了つたね」



「可いのですわ私、私着物の事なんて今迄一度だつて思つたことはないのですもの」

お澄さんは身體中で一番元氣の好い聲を出して云ふ而して潤んだ心の中でお父様のお葬式の時白無垢だつて整のつて居やしなかつた事だの、もつと華美な思出を幼さい時に殘しておけばよかつた、もう今になつては何を着る事も出來ない、縮緬の着物は覺えてから一度も着ずに了つた事だのを、交代にくり返してゐました。

「おまへがそんな事をお云ひだから、尙着せてやりたいと思ふのですよ、女の子を持つて、思ふやうにして遣れないのが一番辛いものよ、」

母樣はさう云つて默つて了はれた。

「私何も痩我慢してゐるのぢやあないんですもの、小さい時から着物の事で文句云つた事はない子だつて、母樣も仰有つたことがあるでせう」

斯う云ふ場合にはいつもかう云はねばならぬやうにお澄さんの心は仕立上げられて居たのでした。で、さう云つたけれど、白けてくる座の寂寥を退けるやうに

「英さんがいまにこしらへて呉れますわ、母樣にも私にも……」「着物より何より、その位には是非なつて呉れなければ、母樣がお父樣に申譯がない」「英一ちやんなら大丈夫屹度成功しますよ、だけどちつとお察しがよすぎるのね、姉さんが神經を病んでるなんて……」

褄下を右手で、ぐい〳〵引張る。

「お前をどんなにたよりにしてゐるかわからないんだもの、姉樣々々つて云つてゐるのだものね、それを其樣に痩せて了つてゐるから心配するんですよ」

「今度の休暇迄には肥りますわ、」窓に片肱かけて

「此邊は夏でないと寂しいのね」

「永田町の邸が賑かだつたからですよ」

「さうですね、隨分賑やかでしたもの、日曜なんて皆さんがゐらしつたりして……」

三枚きり殘らないお煎餅を、一枚母樣の膝に載せて自分も取つて割り乍ら、「もうぢき一年になつちやいますね。」お澄さんは笹木さんの事を云はうと思つて、云へなくつて別の言葉を云つた。

「途中からはぐれてお了ひなすつたけれど、笹木さんが一番だつたねえ、學問はお出來なすつたし、それに優しい方だつたし」

「さうね」

今度は氣乘のしないやうに云つて見たが、故意とらしく聞えやしないかと思つて

「優しい方だから間違ひがあるんですわ、野本さんだの本田さんだのどんなにしたつて、迷ひつこはありや

あしないわ、相手にする者だつてないのですもの」

さういつて、水の様になつたお茶を啜りました。

「餘程迷つてらしつたものと見えるね、父様の仰有る事もおきゝなさらないでね、……もう女の年は笹木さんより多いつていふ話ぢやないの」

「いゝえ、その時が丁度二十一か、やつと二位なんですつて、笹木さんよりも若かつたのですわ、いろいろな事を人は云ひたがるんですよ、年上の女に關係するつてことはないなんて、野本さんなんか惡口ばかり仰有るけれど、私が男だつ



たつて迷ふわ、濱香つてそりやお綺麗な妓よ、母様」

「貴女より六つも年が多いのね」

かゝはりのないお澄さんの年齢を、母様は何故か引合ひに出しました。

「えゝ」わざ〳〵大きい目をして、

「一體周圍の者が惡いのですわ、早く夫婦にさせて上げれば深入せずに濟んだでせうものをやい〳〵云ふばかりでかまひては無いんですもの、濱香つて人の思ふやうな女ぢやありません、笹木さんにだつていくらよくして上げてるかわからなかつたのに、皆して寄つてたかつて……人の箔を落して了ふのよ」

こんな思ひ切つたことを云つたけれど、お澄さんは泪ぐまれた。

「さうもならなかつたのですよ、種々な事情があつたりして……」

いろ〳〵の事情の中には、自分の事も含まれてをる――自分が居なかつたら少しはよかつたのだと思ひました。それだのになほ、「何故でせう?」

それでも母樣は默つてました。

「事情なんて無ければよかつたのね、有つても父樣が破壞してお了ひなさればよかつたのですわ、お父樣のお力ぢやあ出來なかつたのでせうか」

これだけの事を云ふと、もう胸が一杯になりました自分が聞かない前の心で居さへすれば何でもない、知らないで嫁つて了へばよかつた、笹木さんは何にも御存じなしにゐらつしやるだらうものを……もう今の心では、如何さばいても裁き切れない、お澄さんは遣る瀬ない思を抱いて其儘默つてをりました。

「外國へいらしつてね」

「えゝ英さんが送つたんですつて、一人つきりですつて」

さう云つたら、いろ〳〵な思が言葉を吐かせやうとして、ごた〳〵と胸へ登つて來る。其癖云ふ言葉もわからなくつて、唇が只びりゝ〳〵と小さく痙攣します。

「輝ちやん達どうしたでせう」

云ふのをしほに立ち上つて窓に寄りました。

目の前に聳ゆる愛宕山……あゝあの麓!　女子大學の夏季寮、女子大學の夏季寮!!　夏には知つた人も來やう、自分も一度はかゝる寮舎の生活を、するつもりではあつたのだけれど……。

何にも云へなくなつて眸を落すと、窓からつゞく芝目の下に花莚敷いて、利ちやんと輝ちやんが草の葉を弄つてゐました。

「音無しいと思つたら、あんなところに居ますわ」

お澄さんは振向いて母樣に云つた。

「利さん輝ちやん!」おいで〳〵をすると、草を一抱

へかゝへてとんで來る、二人とも。
八つになつた利ちやんは、紺絣の筒袖きて黒メリンスの兵兒帶をしめてゐます。くり〳〵した眸は、よく英一さんに似てゐると思ひました。輝ちやんはまた髪が頸にとゞかない。お澄さんのを直したらしい唐縮緬の被布を着てゐます。今年四つで、お父樣の顏をよく知りません。
「どこで遊んで來たの?」
あつちつて利ちやんが云ふと、輝ちやんも彼方つて野の方を指さす。
「好いのね、もうこんなに花が咲いて、餅草が澤山あるのね、指の尖で一つ〳〵摘み上げて」



「お菓子を上げませうね、よく遊んで來たから」
笑ひながら、母樣の渡すお煎餅をわけてやる。
母樣はお茶碗を片寄せ乍ら
「此邊に枸杞の木は無いかしら。もう芽をつむのにはちつと遲いかも知れないけれど」
「さうでもないでせう、探して摘んで來ませうか、もし無かつたら餅草でも取つて來ますわ」
さういつて立ち上ると、前髪にさした蒔繪の紅い櫛で、鬢の毛をそつと掻いて
「四時迄には歸りますから、何もかも待つてゝ下さい

な、……利ちやんも輝ちやんもも一度行つて來ませうね」

下駄をはくと二人を連れて、お澄さんは小さい門を出ました。

二

松波工學博士の遺族が、この地に引き移つッたのは去年の九月、高原の秋色闌な頃であつた。

故博士在世の砌は、麹町永田町の廣やかな屋敷に、質素な生計を立てゝゐました。肥大な體軀にも荷ひ餘る名聲徳望、それを慕ふて寄る青年の數も少なからぬそれ故博士の家には學生の出入が繁かつた。

笹木さんはその時工科大學の生徒でした。堅固なる意志と、卓越したる學識との他、知人のない孤兒といふ一事も、いたく博士の心を湧かして、やがては名は變へずとも自分の子として、いつくしみたいと思ひました。年の違ひも恰度いゝと、もう子供一人を多く得たやうな心地に、それとはなき話柄が、博士夫妻の間にしば〳〵とりかはされてゐたのです。けれどもそれは誰一人知るものもありませんかつた。しかし口さがない者の中には博士が鍾愛の度を科つて、とり〴〵な噂を立てゝゐましたけれども根柢のない事と笹木さんは氣にも止めずに過ぎてゐました。

一年二年はまもなく去つて、やがていく度目かの春が來る頃から、あらぬ噂が笹木さんの身の上に立ちそめました。不圖した馴初から迷ひ出で、笹木さんは紅燈の影をくゞるやうになつたのです。女の名は濱香、新橋切つての男嫌ひの名取妓がと、どちらを知る者も驚きあきれました。

餘程な耽溺のしやうであつたのでせう、迷ふたのか迷はされたのか、人の嘲笑も痛罵もちよつとも耳には響かぬ位、誠心籠めた博士の諫言も、聞えたかきこえなんだのか、それから後は學校へ出る日も少なくなれば、したがつて博士の宅へも足遠くなつて來ました。

有つても費へば足りなくなるのがならひの、ましてたより少ない笹木さんの事ですもの、自分の名前になつてゐる地面をかたに金を借りる、道具や着物を入

質するはまだしも、果は教科書まで賣り盡しました。

こんな噂は噂を生んで、早くも友人間に馳せ傳はりました。人の手前は怒り乍らも、博士は尚も僅な執着をその身の上にとどめてゐたのです。

十五の年が暮れる迄お澄さんは何事も知らずに育ちました。平和な心に石を投たのは十六の春、ふと通りすがりの杉戸の蔭に、兩親の語らふ言葉を耳にしたとき



お澄さんの小さい胸は、もう驚愕と羞恥とに震へてゐた。恰度その時分笹木さんは、女の家に入り浸りになつてゐて、新聞の艶種は、盛んに何か書きたててゐました。新橋でも屈指の濱香の姿は、方々の雑誌や新聞の華美なカットの中にさま〴〵の風姿をしたのが掲げられてありました。濱香々々と夢にまで見る位忘られなかつたけれど、さりとてこの人を憎しみの眼でみるやうな心はもつてはをりませんでした。今迄は

何氣なく云つた笹木といふ言葉も、その度に顔見れるやうな氣がされて、その事については一言も言はない樣になつて了ひました。

けれども笹木さんの暖かい夢は間もなく破れた。濱香がある富豪に落籍されて、××町あたりに圍はれるやうになつたと聞いたとき、お澄さんは幽かな勝利の感じの中にも、餘儀なく距てられた女の心の佗しさも、身に沁みて思うてみました。濱香を奪はれた笹木さんは、恰度醉心地を冷たい川風に當つたやう、ふつと眼が覺めると、自分の歩いて來た路筋を振返りました。あやまちに氣が付いた時はもう、遲かつた。戀した。あやまちに氣が付いた時はもう、遲かつた。戀失なふと同時に、すべてのものはもう失はれて居つたのですもの。

「お可哀想だ、どうかして上げたいねえ」

母樣はお澄さんが何にも知らないと思つてゐるから普通の人の事を話すやうな言葉で云ふのを、お澄さんは胸轟かせて聞いてゐました。さうしてどうかして立ち勝つた方になつて下さればいゝ、自分は笹木さんの惡い噂は、一つも一つもきゝたくない、と、庇ひだてする言葉も吐かれぬお澄さんは、始終から思つてをりました。

いつのまに幾廻かの月日がめぐつて、お澄さんが十八の夏が來ました。過度に費ふた腦の爲に、松波博士は自宅の書齋で卒倒した。急報に走せつけた幾多の人の中には、お澄さんの夢寐にも忘れ難い人も交つてゐたのです。

勘氣に觸れた身は懷かしい師の門をもくゞれず、馳せちがふ人群の中に、ちつと柱のもとに立ち盡してゐた。

恰度玄關を拔けて廊下へ出やうとしたお澄さんは、開いた障子の隙間から、ちつとその姿を見ると、電氣にでも打たれたやう、眉根を上げて立ち止まつた。覺えもなく湧いて來る泪を袂でおさへて、襖の陰に隱れて泣いた。

母樣に詫びして上げたい。

さういふ思は胸一ばいに漲つてゐたのだけれど、そ

の人に就いては一言も云へませんでした。

僅に夫人の情に、幾年振かの敷居をまたいだ笹木さんは、注射に蘇生つた博士の枕元に、男泣きに咽んでゐました。頭もあげ得ぬ丈夫さうなからだを、後に坐つてゐるお澄さんは、抱へて起して上げたい程な思がした。

病の爲に氣が弱く成つたのかも知れません。博士は笹木さんの手を握つて、わけもなく泪を零した。自分の多くの門下の中に、取り分けていつくしんでゐた人ですもの、いくら放埓に身を持ちくづしたからとて、何で憎む心が起りませう。半ば失ふた、意識の中にもこの人ばかりの顔は分明つたものと見えます。しかしもう、口きく事は出來なんだのですから、お澄さんのことについては、笹木さんにも母樣にも、一言の詞さへ殘して下さりはしませんかつた。



僅一日を病で二日目の夕方、博士は遂に長逝された。

もとより豊かな財産のあらう筈もなく、親戚の者のことばにいなみかねて、夫人はお澄さんと小さい二人の子供を連れて、信濃の別所に隱れて了つた。十六になる嫡男の英一さんばかりは山田の小父さまに引き取られて、そこから學校に通はせて貰ふ。わびしいうちにも最早一年は去らうとしてゐます。

女といふ階段を一つ宛登る毎に、お澄さんの心はた

とへやうもない苦痛に捕はれて來ました、その癖いくつもの縁談は、まとまりかゝると片端からみんなこはして了つた。

未練といへば未練でせう、わづかな父母の思はくのみに結ばれた二人！、いまはつながれない緣とは知り乍ら…何故その人が懷かしいのか、それさへわからないのでした。結婚を夢見たことは一度もない、たゞ笹木さんの身の治まりのつかないうち、自分が先に他家へゆくのは、何となく罪を犯す樣にも思はれたし、自分と同じ心を向ふも持つてゐるのではないかと、ありしひのその人の言葉を繰返して、わづかな疑ひが胸から離れなんだのです。笹木さんが奥さんをお貰ひなすつたら、忘られた自分と思うて何處へでも嫁かう、少しもの執着は殘したくないなぞ思つてゐました。それ故笹木さんの身の治まりを祈り乍ら、一つの心はまたそれを呪うてみたりした。

そんな思ひに胸の中を惑ひ盡し乍ら、勝氣なお澄さんは言葉にもそぶりにも、そのやうな事は穂にも現はさないでゐました。

どうかして英一は父樣のやうな立派な人物に仕上げてみたい、姉の力で成功がさせてみたい。利坊は軍人にしやう、海軍の、海軍の…こんな獻身的な尊い思ひをすごしてゐるかと思うと、もう身一つになつて何處へでも走つて行きたい。當もなくあせる心に任せて家を離れて漂泊たい、ぢつとしてゐる苦痛は、どうしたつて堪へられないのだものなど思ひ乍ら、何の不滿で自分の母を捨てやうとするのだらうと、他の冷たい心で客觀すると、何といふこともなくたゞ泣かれました。

改心すれば笹木さんは立派な工學士、海外から歸朝られたなら、どんな位置に雄飛せられうやら、昔と違ふ境遇にゐて、こちらから云ひ出す話ではないと、思ふ母樣の心もお澄さんには知られず、かうして二人の心は離れてゆくのでした。元結や油を買ふのから、懇意になつた小間物屋の店の上り端に腰を掛けて、お澄さんは平べつたい重ね箱の中の葛引やら、友禪縮緬の

狆ころがけやら、幾色ものすが絲を卷いた細物などを凝視て、自分も此樣は稼業でもしてみようかしら、さうすれば弟達の學費が作られるなど思う中、店の娘の愛嬌作つた顏を見ると、どうしたつて私なんかに出來るものか、空々しい追從なんて口惜しくつて云へやあしないと考へ返す。その癖家へ歸ると

「母樣私　商賣でも始めてみやうと思ひますわ」

重大なことをさも輕々しく笑談のやうに云うてゐた時としては、自分の一身を左右にする別路だと思ふこともありましたけれど、大抵はそんな事はどうでもいいと思うてゐました。

三

この夜頃、厭な夢ばかり見つゞけてゐるのを氣にして、お澄さんの面やつれが一層に眼立つてきました。

私は今年の中に死ぬのかもしれない。

こんな怖えた心に、髮をも撫で付けず日を過しながら、誰もの人の前に出ると、元氣らしく笑ひ興じてをります。



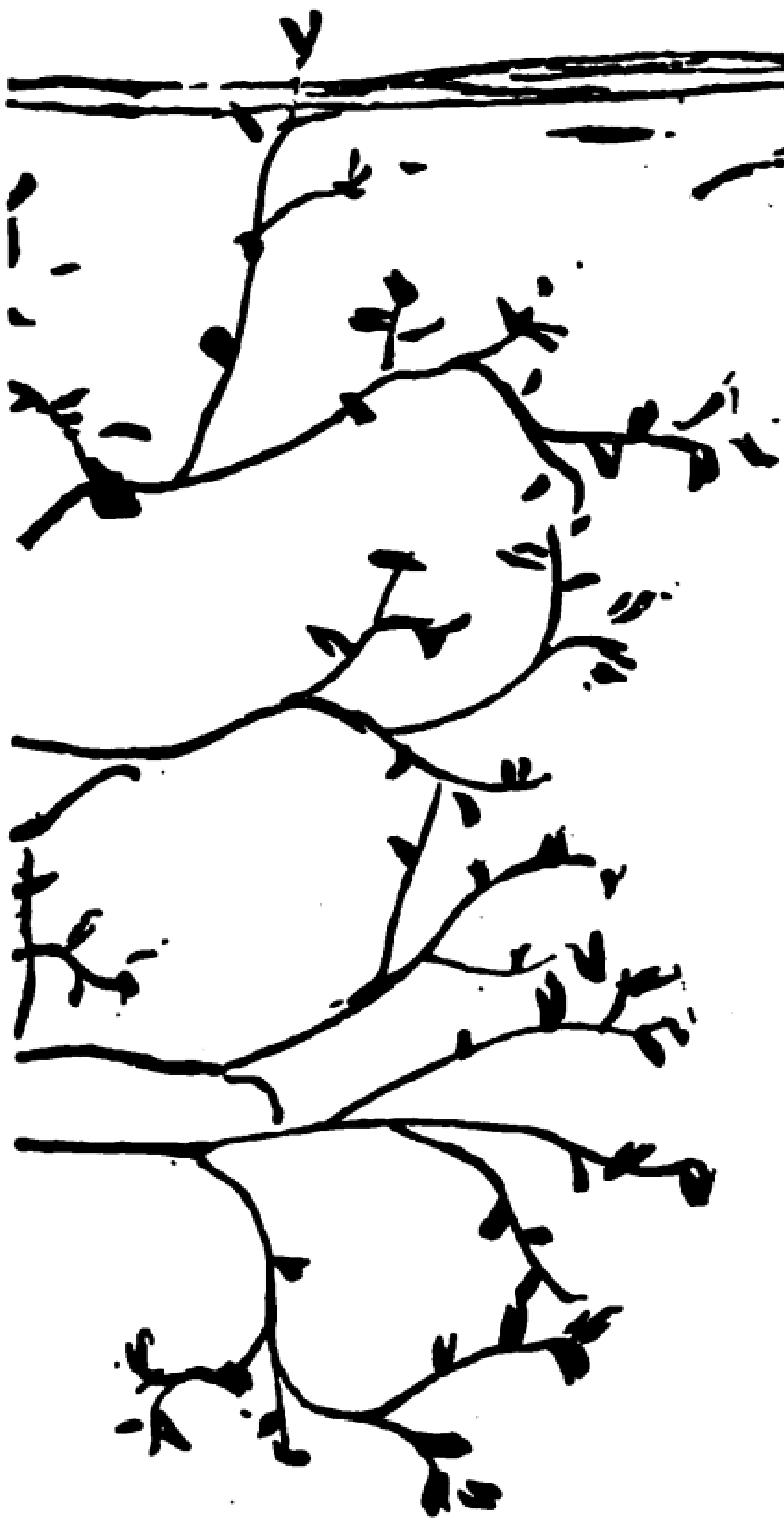
自分は此儘狂人になつて了ふのぢやないだらうか。眠られぬ夜半をおもひ明した事さへあるに、何故か悲しさの泪は見られなかつた。

母にすら知らしめざりし美くしき物語を抱いて、消えてゆく自分を思うたとき、お澄さんの心は幽な微笑と誇とを持つてゐました。

矛盾した心を擁して、お澄さんはいま信濃の高原に立つてゐます。

（了）





逝く春

小田の蛙、諸聲に啼きつれて、雨をよぶ。
朝來の空、庭前の水、花ほろ〳〵と朧なり。
溫泉の宿の三日は、桃源裡にさまよふて文反古を積みぬ。
夕べの思ひに逍遙えば、
あな昔し懷かしのことのみ多き。
春はもの〻心急く間に逝きしかな。
溫泉に浮て心耳靜かや遠蛙。

花　仁


TSUNE



藻汐草

蛩乙女

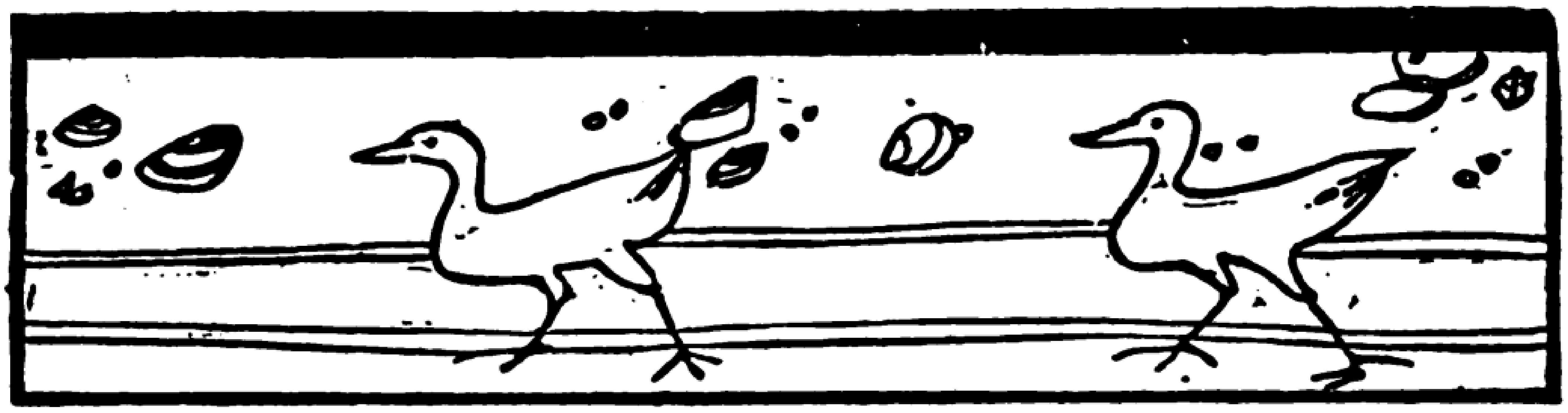
さる夏のたそがれなりき、父君母上などつらなりて夕餉の膳に向ひける時、我、皿なるに胡椒ふりかけんとて、お薬味瓶逆に手荒らく打ふる。折柄颯と涼しき夕風ふき入りて、眼には見えねど父の方にや吹散らしけん。ふと咳き入り給ひて、嚏に咳に交々難み給へり。こは如何に爲給へる。とて母の不審み思すを我れは胡椒故と知るからに、云ひ出でんも樣惡しく、をかしさ將た念じあへず、ともすれば溢れんとする笑ひをば、口一杯に物を頰張りて防ぎけり。

されど報いは覿面にて、多く鵜呑みせしかば胸に支へさせて、苦しき事限りなし。茶よ湯よとて母の勞り給はるが心苦しく、頓て收まりての後、實はかく〳〵にてと申せば、あな惡く、心づから苦しみけるものを、懲りやしぬらん、さるものは心してこそ扱ふべけれ。とて訓へ給ひぬ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

老い給へる人は、今樣の言葉中々にのみこみ給はぬが多かりけり。

我が母の、常にプラットホームの事を、トラホームと眞面目にのたまひ出でゝはよく笑はれ給ひき。又時としてはハンモック、ハーモニカなど語呂の少し似通ひた



るは、皆共通にして口より出まかせに仰せけり。

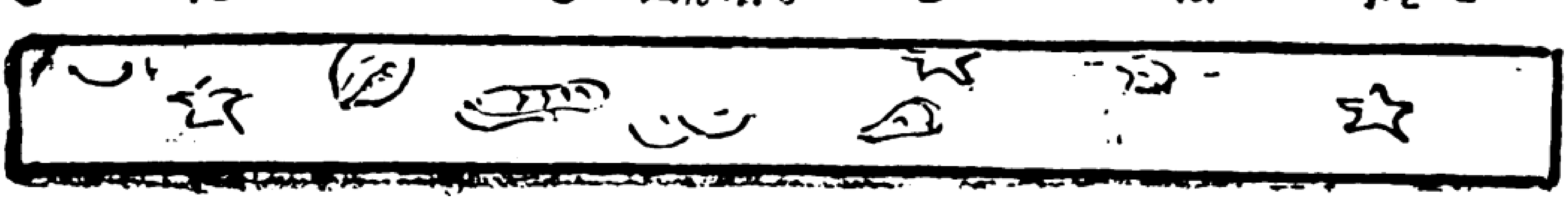
蟲にさゝれたればハーモニカ出してよと仰するは、アンモニアとさとりて參らせけれども蒸暑き夏の朝などに、ふとハンドルガンお釣りなどいひ出で給ふは何の事とも分らず、伺ひ直すに、彼處の松蔭につりなば涼しき風や通はんとにて、漸くハンモックと知りぬ。かゝる事にて笑ふはしば〳〵なりき。それも在まさぬ後にてはなつかしき思ひ出となりけり。

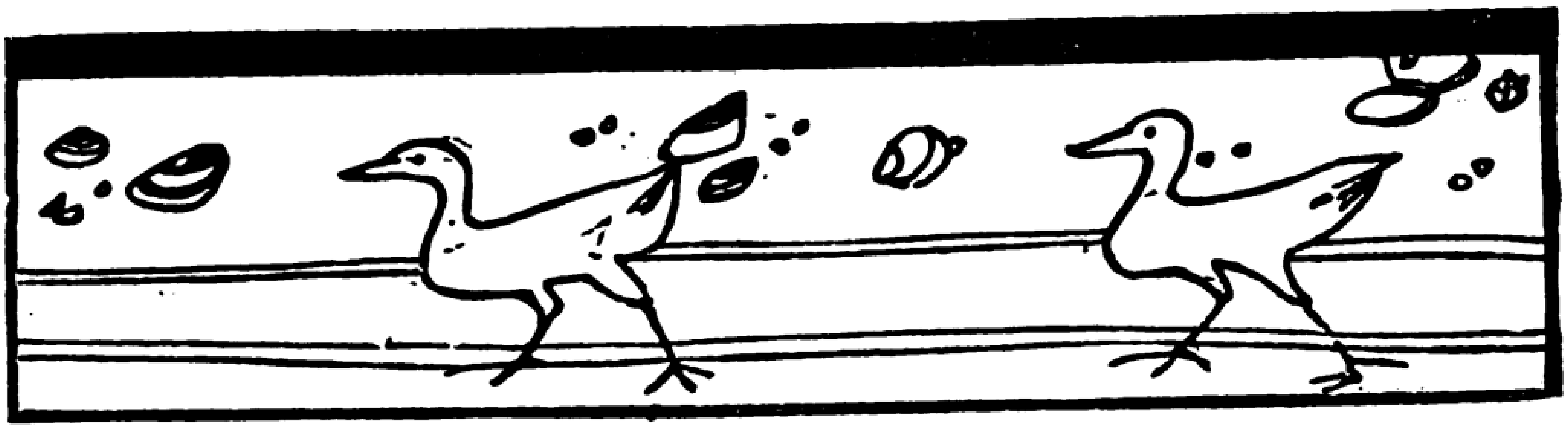
* * * * * * *

年の始め、ある御振舞にてお茶碗盛の種に、貝の柱と土筆四五本とを入れありしこそ、時節柄とて嬉しかりけれ。しか心利きたらん程のものは味もよかりき。幾許の味をますとにも有らねど、そへて嬉しきはとろゝに青海苔の薹、さては春まだ早き櫻鯛の潮汁にみやうがたけの浮び居たる、いつしかと待ちもあへぬ間に田樂に木の芽の香り高き、又期節ならぬ折のさや豌豆の青やかに甘煮の上に打ちらひたる、それも梅雨の頃ともなりて日毎のお總菜に惜しげもなう鉢に盛らるゝは、一とつ品とも思はれずうとまし新里芋に青柚子おろしかけたる。フライに添へたるレモン、猶一ッ一ッ數へ立てんはくだ〳〵しかるべき。

中に就て御酒の膳に、からすみの五六片、うにの些ばかり小皿の上に黄に匂ひたる、こは上戸ならぬ人の窺ひ知らぬ處なるべし。

去年の暮、親しき人々と會食しける時、我けふの御刺身のつまの美味しき事よと





いひけるに、さらば我のも持ち行き給へ、此方よりも參らせんと、忽ちせん獨活菊の酢漬けなど我が皿に集まりぬ、うづ高う積りては箸下さん心にもならず、こはすずろ、人惡るき事を爲給ふと、つま搔き退け〳〵下よりお刺身ほりかへしつゝかこてば、いかでさは、只、好み給ふに召させんとにこそ、とて打興じ居たり。思ひても見給へ、程よくお刺身に添ひてこそつまにも味はあれ、かく噂天下なるは難有からずといふに、それいひたきにこはおはしけめ、とて皆々笑ひけり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

近きわたりに、今宵嫁とり有りとて人々のいふを聞けば、まづ夕方に婿君は媒人と共に嫁となるべき人の家に迎ひに行く、若し婿取りならば反對に女の方より迎ひに行くとぞ、かくて伴ひ立歸りてより三々九度は始まるなり其の折大豆を升に入れて緣に出し置く、こは近隣の若者集まりて花嫁花婿に投つくる爲にて、もし出さぬ時は小石瓦などにて亂暴するとか、をかしきは式の折に鹽あんつけたるいと大きやかなる萩の餅をば　嫁女に食はする事なり、こは良人を甘く見ぬようにと誡めにするなりと聞きぬ。

三枚重ねの裾重々しう着なしても、嫁く時俥を用ひずときけば、さらば雨降りにて道惡しき折など、如何にしてか行くと問ふに、

いつか新田の家の婿取りの時、ひどい大降りでがんしてな、嫁さんは尻端折に赤毛布着て草鞋ばきで・婿様迎ひに行かしやりましたわと答へける、お志は淺からぬ



事ながら、赤毛布とは如何にも御念の入りてこそ。

* * * * * * * * *

久しう續きし五月雨、稍晴れ方になりける夕べ、飯したゝめつゝ有りしに、あれ時鳥の……聞かざりつや。一聲なきけり珍らしき事よの、またもなかんと母のいふ。廿年、我未だ時鳥の聲を知らず、いかで聞かばやと、しばし箸打おきまちけれど、又鳴かざりけり、人の心おどろかしに一聲ばかりをなど鳴きけんと、再び打ち喰ふに、それ鳴きたり、こたみは聞きつらんなど仰すれど、定かならず。遠き彼方の空にて、キッキッキキキと徹りたる高音の、あれにてやと申せば、さなり昔は小石川あたりにては、晝さへもよく聞きたるものながら、今は跡を絶ちけんなど仰す。

まだ聞かぬ先に推し量りしとは、餘りに相違してめづ可きものともおぼえねば、猶不審しさに知るてふ人毎に、時鳥の聲色はよしとやきゝ給へると問ひ試むるに、裂帛の文字は當りたれど、しか勝れたりとも覺えず、彼れは耳にて聞かんより、詩に歌に偲びつべきものにこそ侍れといふ。

さらば我が聞たりしも、まことのなりけり。

* * * * * * *

母君の在はしける頃、よく御足さすりに參るお初さんと云ふ女按摩ありけり。或る時云ひける樣、つひ今の先御伺ひ致しましたる御宅にて、旦那樣が紅茶もて來よと、お女中に御云付けになりましたれど、紅茶と申ますると何の樣な味の致します



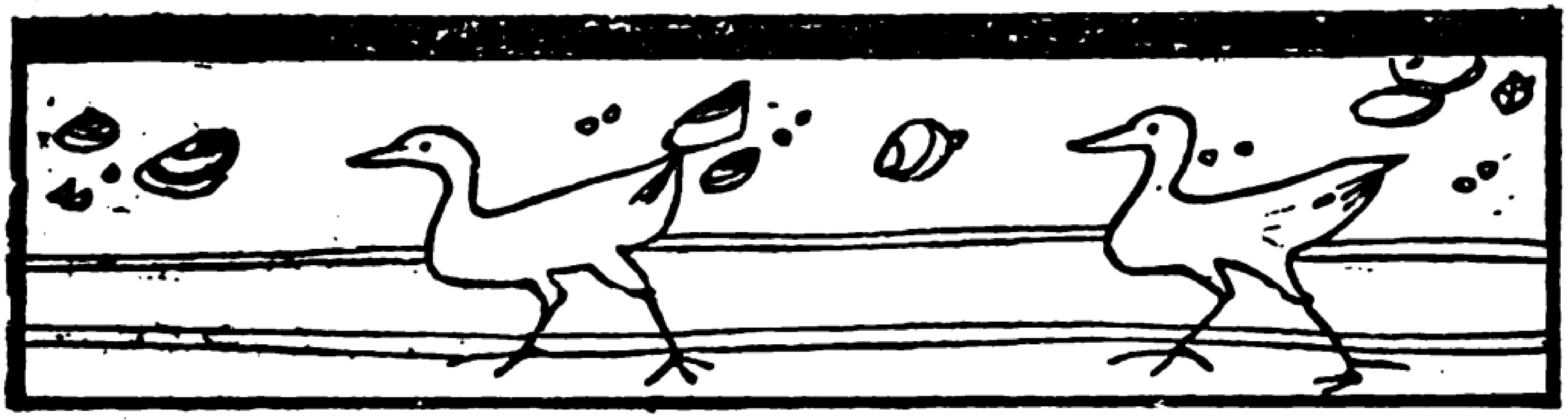
るもので御座りませう、普通の品より香ばしいとでも申ますものにや、といふに恰度入れたるが有れば、一トロ御風味を御覽、とて未だ不馴れなる女中に彼の土瓶のお紅茶に、みるく入れてついで御出でといふに、それはメリキを入れませねば呑めぬものにや、私は不調法に御座りまするさらばお砂糖二ツも入れて甘くしてお上げ我は今もの欲しうなければお初さん丈けに、とて持て來さすれば、なめる樣にして味ひ居たり。よければ澤山お飮りといふに、もはや充分で、大層結構なもので御座りまする、とて歸りぬ。後にて我も一口とお茶の間に行けばお紅茶の土瓶見えず、女に問へば彼のお土瓶の方なら先刻あけて仕舞ましたといふ。さらばお初さんにやりしは何れぞ、といふに其お土瓶ので御座ります。

笑止なりけり、晩茶の煮枯しにお砂糖入れたらば、四月花御堂に供へまつる甘茶の味と、そも何れぞや。

翌日又來りける時、免し給へ昨日のはかく／＼なり、今日のこそまことの紅茶なるを。とて笑ひつゝ侘ぶるに、道理こそ私共の頂きまする御茶に似て、味が甘いと存じました、といひ／＼打ちすゝる、後にて、私共にはやはり昨日頂戴いたしました方が、口當りが結構で御座りまする。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

日毎に幾度となう鏡に打向ひ、樣々に造作は施すめれど、我顏といふものゝ怪しう覺えられぬ、謎の樣にこそありけれ。某といふ君のよくも君に似給へる、瓜二ッ



とは實に是をやとさる友のをしへけり。其の似たりてふ君見まほしく、いかにぞやさて見たらん時、餘りに醜く君しあらばからかりなんとたゆたへるも、女の心なりけり。

* * * * * *

月の所在の其處とも分かず、み空は一様に白く薄光りせり。檐に松風の音絶えたり、内に侍從はくゆらさねども、梅香自ら薫じ來る北窓の下、春の燈なつかしう心のどかに南華の編をひもとく折柄、遠き〳〵彼方に、ころ〳〵、ころ〳〵、ころゝ、と蛙のなく音聞こゆ、初音もをかしけれど、彼の鳴き初むる聲はあやしうなつかしきものなれ。耳をすませばいつか夢の國に引き入れらるゝ様に、我かもすゞろになりにけり。此の趣、都の人は得しらじ。

△珠數と錫杖▽

芝居好きのため、商家より出でゝその道に入り込みたる男あり。不器用ものとてつねに往復はがきの綽名にて通りものとなりゐたるが、師匠にしたがひて地方に出でしに、一日、師のなにがし、野崎村の狂言にてお光に扮し、ふと、水晶の珠數をわすれしに、心づき、かの男をよび、小聲にて、珠數を持ちてこよと云へば、かしこまりて間もなく持ちきりしを見れば、張子の地藏尊なるに、師なる人は、是れや〳〵と手をあはせて拜むまねをすれば、男はヤッと呑みこみ、又とつかはと出で行きしが、こたびは空手にて、師の耳元に口をよせ、生憎手を合はせて居るのがござりませぬ。





樣々の花がたり

△勿　忘　草

昔の事である、獨逸の國はライン河畔、靜かにかたむく夕日の影が、滔々たる川波にはゆるたそがれ時、かたみに腕を組み合して、あゆみを移す青年男女がある、近き未來の樂しい新生涯を語りあひながら、小さなブリユー色の草花を摘んでは、燃ゆるやうな空想に耽つてゐた、ところが俄然、青年は靴踏みすべらして、あはやといふ間もあらばこそ、スル〳〵と河の中に陷ちて、情なき流れに浮きつ沈みつ……。今しがた摘んだ草花を、あれよ〳〵と狂氣の如く泣き狂ふ少女の足もとめがけて、私を忘れな給ひその聲も悲しげに投げ與へて、あへなく水底の藻屑となつた、あはれ今の今まで共に語り共に笑みながら此花を摘んだのを、數分の後にかゝる悲劇のあらうとは、神ならぬ身の知るよしもない、それより後は人々その意をこめて人に送るも、昔なつかしきセルマンの戀物語、その名も高き勿忘草。

△ヴワイネレット

むらさきの、ゆかりの色濃きすみれ草、若人の心には如何ばかり懷しく聞えるであらう、むかし歐洲に、さる高貴なき方が坐しました、夫婦の御仲合ひ甚だ睦しく、他の見る目も羨しい程であつたが、郎君の城外に出行きたまふ時は、夫人は只の片時も離れ難き思ひに、我が常に愛せる鉢植のすみれ草を二莖三莖ちぎり來て、郎君の襟にはさみ、何卒歸り來ます其時まで、此花の薫りと共に妾を忘れ給ふな、此花の君が胸の邊にあるは妾が眞試の束の間も離れぬ徵ゆゑ、必ず仇し人には手だに觸れさせ給ふな、と言ひながら常に玄關に送り出たとやら、それよりは愛を現し愛を捧ぐの意味となつて、後世では、之を意中の人に贈つて己が心を示す方便となつたのである、されば西洋では、相愛の仲でない限り、迂濶に此花を贈るのは却つて失禮の



事としてある。

△ローズの花

ローズの花の如何に美しきよ。されど立寄りて手折らんとせばあなおそろし、其本には蛇の棲めるを、とは西詩に見ゆるところである。花瓣とり〴〵、色さま〴〵、清き匂ひを放ちながら、ひそかに刺もて人を刺すは、外面如菩薩内心如夜叉、執拗陰險なる女性のやうである、半可通のハイカラ紳士などは、よく電車の内などで、バラの花を襟にはさんでゐるが、それは餘ほど變なもの、西洋では求婚廣告を出し置いて、何曜日の何時頃、A公園で胸間に黄バラの花をはさんでゐるのが廣告主であるなどの注意まで爲て置いて、扨て、其時になつて、公園に行つて見ると、募りに應じた美人の一群がそれと見るより馳せ來つて、さかんに握手を求める、其方便に用ひられるとは、ちと活動寫眞にでもありさうな話。

△百合花

櫻花散りて緑も深き初夏の頃、涼しき木陰になよ〴〵と立つたる風情は、佳人愁ひを含んで深窓に倚るとでも譬へたいやうであるが、佛國では此花を國花として一にも二にも百合の花を愛して已まぬとやら。

△國花のとり〴〵

終りに各國の國花を記して見れば、獨逸では馬肥しを勝利の意を含んでゐるとして尊み、米國では彼のゴールデンフラワー（西洋女郎花）を國花としてゐる、さすがは黄金崇拜の國として此の黄金色の花を撰んだところに趣味がある、英國のローズ、印度のあざみは孰れも刺のあるのが怕しく、支那の牡丹は散りぎはに歡樂極まつて哀情多きをあらはし、偖て我國の櫻花に至つては咲き初の優美、滿開の瑰麗、花の吹雪の散ぎはの潔よきとは何に譬ふるものもない。

暗き影

むらくも

一

兩側の松並木に夕陽が射して、冷える空氣が肌に沁みる。車や、人や、馬や、田舍街道の夕は可成に賑だつた。

私の踏みそべつた鞋から立つ塵で、お眼鏡縞の可愛い鹿の子が、黃ろに汚れてゐた。手と甲も脚袢も「四國八十八ケ所同行二人」と淡い墨の痕のある白木綿の上着も、皆汚れてゐた。小きざみに早く行く母の後を着いて歩むのは非常に辛かつた。

夕陽はもう黑ずんだ森にかくれた。西の空だけが一抹の明みを見せて、天地は次第に夜の幕に入つた。其のあたりから、松並木が切れて道の兩側に麥畝が續く。所々に浮き出したやうに菜の花が見えた。道を通る人も少くなつた。時々提灯持つた車等に出會ふ。

私は何だか悲しくなつた。そして後れて來た母に追ひ附いて、呼びかけた。母はすぐ私の手を取つてくれて。

「疲れたでしよ、もう少しだから辛抱お爲」と優しく慰めてくれた。

軈て青白い月が昇つた。山の端が輝き出した。四方が烟るやうに月に光つて見えた。巡禮姿の親子の影が短く動いてゐた。朧な中を、母の顏色の青かつた事だけ記憶してゐる。足が棒のやうになつて、無我無中で步いた。

菜の花や、麥や、鎭守の森や、水車の小屋の前を縫つて流れる小川の土橋の上で、荷車曳いて鼻唄を唄ひながら來る若者に、母が多度津までの里程を尋ねた。

「左樣！もう八町とも無えせ。」

若者は無雜作に云つて退けた。

母は幾度も禮を云つて、橋の欄干に身をもたせて、流れて行く水を瞻てゐる私を呼んだ。私は又トボ〳〵と步みかけた。

其夜八時頃、親子は多度津町へ着いた。そして、海岸通の淋しい宿屋へ落ちついた。

夕飯を了へて、湯に入つて、疲れた身體はすぐ寢床に横にはつた。北向の其室は、波の音も汽笛の音もよく聞えた。

私は母の胸に顔を押當てて寢た。寒い風がはた〳〵と戸を搖る。知らぬ間に涙が頬を傳はつて居た。疲れた頭の中に搔きまはしたやうな悲しさを感じて——。



＊　＊　＊　＊　＊

低く、高く、思ひ〳〵に立ち並んだ別子鑛山街の鑛山町煉瓦造りの烟突の高く空に聳えて、機械の響が山の間を傳ふ。淋しい哀れな鑛山町。私は茲で生れて育てられた。

眼に入るものは、頂に赤土の露出した木の影の薄いお鑛山ばかり。そのお鑛山の上には私の父が働いて居る。ほつほとした白雲が頂きに迷つて、奥の方から機械の規律立つた響が流れて來る。私は鑛山の上を見あげて其所に働いてゐる父を慕ふことが度々である。

幼心に刻み附けられてある父の面影は、脊の高い、色の淺黑い、無口な、そして何所となく荒々しい人。鼠色の作業服着て、カンテラ片手に鶴嘴を肩にした。

父は仕事の都合で一ケ月に二三度しか家には歸つて來ぬ、もし歸る日がくると、何時になく早起きして、獨り騷いで、鑛山鐵道の停車場までお迎に行つた。

父はよく酒を飲む。荒い仕事してゐる父にとつては酒と睡眠が第一の慰藉なので——。私はこの單調な境遇で何も知らずに唯平和に育つた。遊び友達もなければ、自分からしても表へ出ては遊ばなかつた。家で母の傍ばかりに着いてゐた。

それは丁度六歲の時、鑛山の中腹の雜木林にも椿の花が咲いて、世が漸く春めいた頃、私の家には不安と沈默とが續いてゐた。

去年の秋頃から不圖父の歸宅するのが少なくなつた。他の坑夫達が歸つて、近所の家が賑うと、何うしてお父さんは歸らないの？と訊いて母を困らす事等も有つた。

偶々歸つて被來つしやつても、お酒の量が大變增加して、母にひどく邪慳に當つて怒鳴り散らす事さへあるやうになつた。

氣の弱い母は、父のお酒の前でハラ〱して、小さくなつて俯向いて居る。私はこの忌はしい冷たい空氣の間に居て、譯もなく悲しくなつて母の膝に抱きついて泣き出した事など度々あつた。

能くは知らぬが、父にはお千代と云ふ女があるとやら……。

母の顏色は日增に惡くなつて、盜むやうに吐息を洩して居るこの町に珍しい緋桃の花が裏庭の垣根に二三輪蕾を膨らして、時を知らせ顏なのに我家はまだ春ではなかつた。

雨上りのカラリと鏡のやうに晴れた或る初春の日、鑛山から歸つた父の仲間が家に尋ねて來た。藍の山の影のうすく見える八疊の間で、母とその人とは談してゐた。男の人は澁茶を啜りながら窮屈さうに坐つてゐた。そして氣の毒で堪へられぬやうな言葉づかひであつた。母は始終俯向いてハンカチで眼のあたりを拭つてゐた。恐ろしく引きしまつたその人の顏と、ほつれ毛の多い青白い母の顏とを見くらべながら、私は分り

もせぬ二人の談を聴いてゐた。その人が歸つて行くと、母は俯伏して聲を上げて泣いた。

それから母の影は非常に薄暗くなつて來た。すぐにホロリとしたり、獨り考へ込んだりしてゐた。私は譯もなくウロ〳〵としてゐた。幼心にも母の身の上に何か大變な事が起つたのではないか知らと思つた。

ある夜、不圖夜中に眼が醒めた。私は、私を抱いて居た母が、歔欷くのに氣が附いた暗の中を私は眠い眼を開けて、『お母さん！』と呼んだ。母は默つてゐた。私は二度呼んだ

今度は『起きて居たの？お寢なさい』と沾んだ聲で云つて、私を強く抱き締めてくれた。

私は眠り就かうと思つて眼を閉ぢた。



暫くして、母は又、抱き締めながら斯う云つた。

『恒や！恒やはネ、高松の祖母さん所へ行くのは否かい？』

私は眼をパッチリ谿いて。

『エ、お祖母樣の所、お祖母樣は好い人？』と訊く。

『えヱ、お祖母樣は好い人ですとも、屹度恒やを可愛がつてくれます。』

『だつて〳〵お父樣も行くの？』

其頃久しく顏を見ぬ父を想つて居た私は、何氣なく訊いた。所が母の言葉は、もう沾んでゐた。

『お父樣はネ、もう恒やのお父樣では無いのですよ……』

『アラ』私は思はず小さい驚愕の聲を揚げた。

「恒や、お父樣は、お母樣よりはお千代さんの方が可愛いのですつて……」

と母は夜着の襟を嚙み締めて泣いた。私は始めて此間尋ねて來た人の事を悟つた。そしてお千代と云ふ女が恐ろしく、恨めしく、色々に感じた。私は私等を捨てて逃げた父よりも、その女を憎く思つた。斯うして私達の平和は破れて了つた。

「恒や、未だ起きてるのかい。明日は朝早いんですからもうお寢よ。」

寢て居たと思つた母が――。矢張り考へ事を仕て居るのだらう。

私は强ひて寢就かうと思つて眼を閉ぢると、枕元のランプが弱い音で油を吸ひ上げて居る。それに凝ッと耳を傾けてゐると、目の前に父の顏お千代の顏――等が廻るやうに浮んで、明日行く高松の祖母さんの屋敷や、從姉の事迄も想像して、何時の間にか深い眠に落ちた。

翌朝私達兩人は、高松行の汽車で多度津を立つた。祖母の家に引き取られてからも、暫くは床についた。

二

それから事なく五年は經つた。

それは私が十一の歲の夏――落日に照された甍がキラ〳〵と空氣を燒いて、息のむせるやうな狹い町、破れた障子の奥で肌ぬいだ女や、子供がだらしなく、何事かを仕て居る穢い家。それらの家が集つて町をなしてゐる或る貧民町を通つた――學校の歸りにと記憶して居る。

路の眞中に棒の切れだの、紙屑だのが亂雜に散らばつて居る中を、急ぎ足に通りぬけた。と或る角へ來ると狹い路に人集りがある。然もツイ〳〵騷いで居る。私は好奇心に驅られて人を割つて中へ出て見た。その瞬間！私の眼に映つた忘れ難い悲劇！

白服の巡査に圍まれて大聲で我鳴る脊の高い男。顏の色は眞青だ、グッと揚つた眉の先がヒリ〳〵と動いて眼の輝、唇の紫、凝ッと腕を組んで――。それが五年前に別れた父であると知つた時の私のおどろ

き！

父の足許に、長い黒髪を亂して、苦悶しながら唇を嚙み締める女。それがお千代だと分つた時の私の恐怖！。お千代の顏の半面は眞紅の血！血のしたゝり！私の額からヂリヂリ油汗がにじむ鼓動が激しい。息がはづむ。唇が戰慄く。全身の血が一時に硬張つたやうで、身體の自由がきけなくなる程驚いた。そして半ば無意識に人を押し排けて息を切らして家へ馳せ歸つた。

『只今！』と荷物をなげ出すなり、茶の間の襖を開けた。見ると黒の被布着た祖母の前で母が泣き倒れて居る。

『オヤ、お歸りかい』と祖母は顏を揚げて眼鏡越に私を見た。母は矢張り泣いて居る。

『祖母樣はお母樣とお談があるからお前は少しの間餘所で遊んでおいで。』又眼鏡が光る

私は一生懸命に馳せ歸つた勢が挫けて、返事もせず襖を手荒く閉めて、二階の隅で獨り心の行まで泣いた。



けれども貧民町の事は一言だに人に話さなかつた。母は屹度知つてゐるだらうと思つてゐる。

寄宿舍へ

つゆ草

○

土曜日の午後私は、舍監の先生から一夜外泊の許しを得て久しぶりで單身寄宿舍を出た。

袖丈豊なセルの單衣に紫紺の袴、桔梗色のパラソルかしげて私は今さらの樣に校舍を振り返ッたのである。

一點の浮雲もなく、紺碧に澄み渡つた、秋の空に高く拔ん出たブリツクビルデイング、午後の光線を受けた半面は其の黒ずんだ赤色に光を添へて、恰も櫛風沐雨炎熱に鍛へ上げた勇士が肌もかくやとばかり。

冷たい規則と束縛から暫時が間でも脱し得た事を自覺すると、にはかに心も廣ければ身も輕い。

丁度籠を逃れた小鳥が久しく見なかつた青空を見た時のそれと同じ思だらう、思へば憐れな生涯ではある。

さて、私はこれから何處へ行く……？保證人の家？おゝいやだ、誰が誰があんな叔父樣の家で泊るものですか、一學期間の通學でこり〳〵した。喧しい叔父樣に默つたをば樣は好個のコントラストを作る爲に出來て居ろ、それに職人がたくさんかヤ〳〵……とあゝ嫌ひ。思ふもいや、私は三ケ月前の事を思ひ出して思はず電車の片隅で眉をひそめた。

電車がもつと早く走ればいゝ、夏休みから、以後に行くのは今が初めて、姉さんも喜んでくれるだらう、義兄樣も嫌ひぢやない、治さんにも暫く逢はない事、もう學校から歸つてるかしら、それよりもあの隆雄ちやん、行つたらきつと「姉ちやん」つて飛んで來るだらう。可愛い子、大事の〳〵一人つ子です。

十八で人妻となつて、普通ならばまだ花の盛の廿一だもう三つの子の母となつた姉樣、縹緻が優れた丈私は氣の毒な氣もするが、現在の境遇に滿足してる人に別段同情を寄せる必要も無い。けれど姉樣はほんとに美人。

縞お召しに瑠璃色縮緬のお羽織なんか着て、すらりとお立ちになつた姿、まだ赤ちやんなんか抱かせ度くありませんわ、なる事ならもう一度あの丸髷を高髷にして、あの裳を緋鼻緒の上にゆつたり波うたせたら……と我姉ながら恍惚眺める事がある。お母樣はいつも云ひます、姉さんは一番先に生れてお前達の縹緻をすつかり取つて仕舞つたんだよ」つて。

然し思つて見れば姉さんは幸福な人！　羨しき其戀よ滿足なる初戀のほゝゑみはつひにホームの光となつて永久に消えないのであらう……？

けれど、けれど其裏には…ブロークンハートの果、輝く前途を身と共にダークに附した多望の秀才も一人でないとの事。思へば〳〵罪な人！　罪深い人！

けれど汐汗に見えぬ沖の石のそれならで、夜着の衿の乾く暇なかつたのは、姉樣の女學校卒業當時のライフでしたとか。あゝげに紅顏人に優れば……!!!

○

「姉ちやん。上げて、よう、よう。」

私の聲を聞いた隆雄ちやんはお風呂の中で駄々これてゐる。「さ、も少しです、姉ちやんは歸りやしないよ、温順しくするんです。」と卄に滿たないお父樣にすかされすかされやつと洗つてもらつて上つて來た。薄絹のやうな顏の頰を林檎にそめて大きなまつ黑な目、あらい飛白のネルの筒袖着せてもらつてニコ〳〵しながら二三册の畫帖抱へて來て「お話な。」と促す。

私は繪の通り出鱈目な事を云ふと、じつと眼をすゑて口をつぶつて聞いて居る其顏！ほんとに男には勿たいないわ。

後から姉樣は髮を櫛いてやりながら、

「お露ちやん、治さんの次にお入んなさいな、今夜は活動寫眞にでも行きませう、義兄樣と一緒に、いゝでせう。」

「嬉しいわ。」と心から云つた。

其うちに義兄樣も上つていらした、辨慶縞のあらい浴衣を無雜作に着ながら緣傳ひにお座敷に來て、

「長く來なかつたね、何故夏休みに來なかつたの？」

こんな事云はれるから挨拶の仕方もない。

姉さんに呼ばれて返事しながら手拭提げて二階からトントンおりて來た治さん、「や。」とでもいふ人かつて決して白い齒並を一寸見せて會釋したきり足早にお湯殿へ入つてしまつた。それでも中學は一年前に濟ましたんですつて。義兄樣の――他人も同樣ですが――まア從弟ですが私より三つ兄樣で今年廿、然し去年だから十九でした。春に今の學校の試驗受けて入學してそれからは姉樣所から通學してゐますの、お友達とよつた時はどうか知らぬがそれは温順しい人。

始めて逢つた時なんか――五月でした――人が話し掛けてるのに返事もしないで「隆ちやんおいで、さ。」なんて

隆雄ちやん抱いて二階へ上つてしまふぢやありませんか私「何だらうこの人は。」と暫く呆れて物が云へなかつた話の序に姉樣に「治さんて何？人が話してるのに返事もしない人ね」つて云つたら姉樣は笑つて「治さんはまだ恥しがりよ世馴れないせいで人が好過るんです、あれでも尙つと人中へ出るやうになればいゝ可げんになりますよ」つて。そして庭球とボートの選手でいゝメタルを持つてるなんて聞いた時は唯不思議だつた、然し可成り顔や手の黒いところを見ると成程とも思はれた。脊が高いから十九なんて見えませんわ、どうしても一つか二つ上ですわね、いつかも洋服屋が「貴下ならお羽織は三尺もお召しでせうね」つて云つたつて。あゝ話がつひ横道にそれてしまつた。

姉樣はお湯殿の入口へ行つて、

「熱くありませんか？膀に水を持つて來させませうか」

「難有う上加減です」といふ聲がする、姉さんは一寸此方を見てね「貴郎、治さんより貴女の方がよく肥えて居らつしやる位ですわ」

セルの着物と着更るとねそべつて新聞見てた、義兄樣は得意然として

「そりやもうこんな體にならなけりや駄目さ。」

治さんも負ずに

「それよりこんな色にならなけりや不可ん。」

「何だつて何方もこよりみたいだわ」一寸間から憎まれ口利くと

「何だと？」義兄樣も負けてゐない。

「それだけいふ價値は確にあるねお露ちやんの體」

「オヴコース！」「何云つてるんだい。」

「仕樣がないのね」姉さんが笑ふと湯殿の中からも笑聲がした。

「治さんお痩せなすつたのね、あまり勉强なさるから」と姉樣、

「夏痩したんですよ、僕左の肺はあまり丈夫ぢやありません、肺病になるかもしれませんよ」

「嫌な事ッ。肺病なんか大きらひ。」と湯殿の戸を〆て、姉樣はこちらへ來る治さんは笑つて居た。

○

昨夜京極から歸つたのが十二時だつたんで今朝は寢坊してしまつた。私等は八千代館へ行きましたの。土曜日の夜なんぞ學生が大部を〆めてますわ。私は西洋の寫眞が見度いんです。日本の演劇なんぞちつとも見度くない

歸りは隆雄ちやんが眠るし、七條から電車がなくなるしするから、姉さんと勝が困つたつけ別にこれと云つて飛びぬけていゝのは無かつたが、唯あの、「佐野次郎左衛門」の時出た癩病の女乞食の幽靈の姿、それにあの時の、い、はやしと「この恨晴さでおくべきか——」とあの聲とが今朝もまだ印象に殘つて居る。

早起の治さんはもうお庭掃除をしてるのに、寢亂れ髮のまゝの自分が堪らず恥しかつた。隆雄ちやんは、まつ白のエーパーン掛けてもらつて、小さい靴をはいて飛び石の上をおぼつかなく飛んでゐる。治さんが「隆ちやん手傳つてくれない？」と云ふと、

「そらアキマヘン」と小憎らしい京都辯。

けふは日曜日。商業學校の庭球大會で、治さんも他校の撰手の中から選ばれて午後に出陣すると云つて居る、私は朝飯後寄宿舍へ歸るつもりで居たが、今日は義兄樣も在宅で、「お露ちやんの歸つた後は姉さんがいつも泣いてるから。」なんて仰つしやる。私だつて好んで寄宿舍なんぞへ歸りたくありませんから、また遲くなつてとう〳〵お晝も戴いて仕舞つた。

食後早々治さんはすつかり用意してお友達の來るのを待つて居る。

「來ませんか？見に」と縁の鴨居に片手掛けながら、庭を見てた治さんは、敷居ぎはでハーモニカの拙い音を立てゝた私を見返つた。

「だつて女で見に行く人はありますか？」

「いゝえ」「それ御覽。」

「けれどこないだ三高でやつた時二人來てましたよ、それから大學でやつた時に一人來て居た、えゝ女學生。そりやよく目に立つんだ、だから皆に顏見られてたつけ。」

「いやだ、」ひどい事を云ふ人だ。

「けふのメタルは－銅牌つまらないのね」

「大きな〳〵奴、」「二錢銅貨ほど？」

「もつと大きいの、」私噴き出してしまつた。

「それでも下げてる奴がありますよ。」

「貴方のメタル見せて頂戴な、治さん。」

見上る顏をぢつと見下して、

「一つしか無いんです、今年の五月三高でもらつた奴が友達が皆持つて歸つて仕舞ふから。」

「三高やつぱりテニス？」「えゝ。」すると、表で誰かの聲がした。

「や、來た。」と奥から筒ぬけに玄關へ走つて行つたが、すぐ戻つて來て。

「ぢや行つて來ます。」「ホヽどうぞしつかり。」

治さんは笑つて「けふは負けます。」

ともう縁から靴をはく。「從兄さん行つて來ます。」と帽子の縁に手を掛けると、新聞見てた兄樣は、障子越しに「ウン」と。

「しつかりやつて頂戴よ。」といふ姉さんの聲と、「左樣なら。」と云ふ私の聲とを後に、ラケット片手に木の枝に制服姿をかすめて表の方へ行つてしまつた。

せめてあの位の兄樣でもいゝ。私にあつたら……と突然こんな感じが湧いた。

姉樣はお裁縫、隆雄ちやんも晝寢して居るので私は所在なくつて仕樣がない。ハーモニカ片手に高い空を見ながら、思はずあくびした。そして奥の樣子にそれとなく目を配つた。隆雄ちやんの罪ない愛らしい寢顔、其の枕もとに針さし据ゑてモミの切れをいじつてる姉樣！お納戸の半衿からぬけ出した樣な白い細い頸すぢに、少し亂れた丸髷のほつれ毛が二三本かゝつて、黑地に赤の小模樣の手柄がまたなくうつりがいゝ、ほんのり上氣した頬の紅に、長いまつ毛を伏せた其横顔の美しさつたら……新聞の上にへたばつてる義兄樣がいつそ憎らしい樣だ。

然しかうじつと見てると……いつしか三人が一つになつてしまひさうだ！あゝ幸福な人等！

私はホツと息をついた。そして何か一人別物の樣な氣がして急に寂しくなつた、またそれに違ひないのだもの、

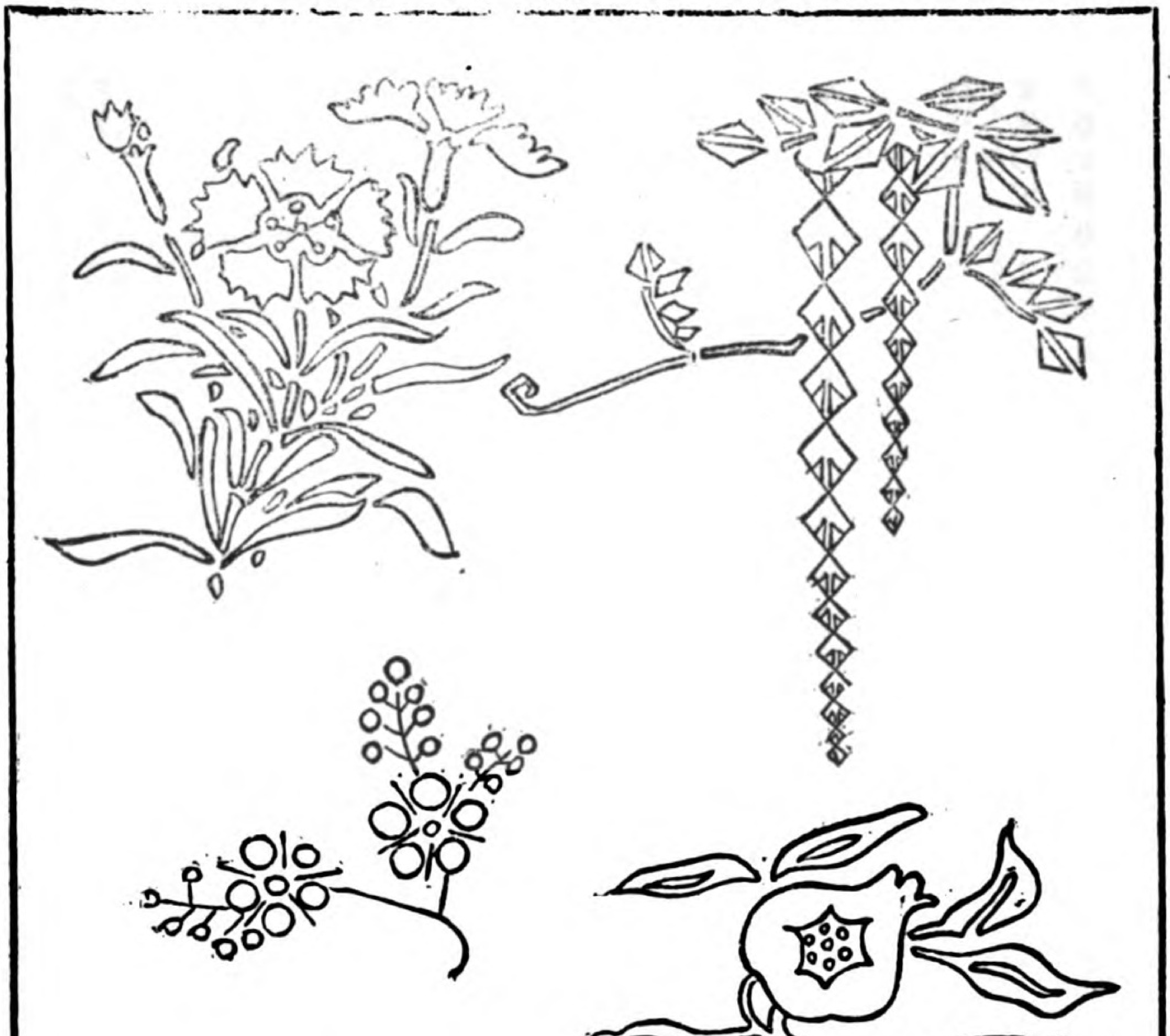
あゝ治さんも出て行つた。私さへゐなければそれで姉樣の家は……今私が去れば後は殘るものは唯姉樣の樂しいホームのみ。あゝさうだ。さうだつた！よくない所に氣を引かれて人の心の樂しさを妨げるのぢやなかつたのに……。と思ふと私はにはかに穴の中へでも入り度くなつた、穴の中へ入らなくともいゝ私の行くべき所はあるんだ。何故もつと早く歸らなかつたらう、何故今朝かへらなかつたらう。無用な所に止つてつまらぬ休息を求める身でもないのを……束縛を持つて滿された寮舍。そこが今の私の止るべき所なんだ。行かう、行かう、今歸らう!!!

私は何故か涙ぐんだが、やがて身を起した。

かはづ鳴く神南備河に影見えて
　今や咲くらん山吹の花　　厚見王

藤の花折りてかざせばこむらさき
　我が元結の色やそふらん　　源[illegible]善

新案草花模様



△藤 △撫子 △柘榴 △姫かづら △桐 △菫 △男郎花

兄の病中に書きたる日記

木村柳子

うら〳〵と長閑に渡る春の日の光に、靑々と燃ゆるやうな若草がいき〳〵して、何所からとなく鶯の音が聞えて、春めいて來た。私の心は却つて限りない感傷を受けて何となく淚がこぼれ、亡き兄樣のことを思ひ出しては人生の悲哀を感じ、ひとり物思ひに沈む。所在なさに去年の丁度今時分の兄樣の御病氣中に書いた日記を本箱から取出して讀む。あの頃は御病氣ではあつたが、まだ今に比らべれば望があつた。まさか歸らぬ旅路におもむき給ふとは夢にも思はず、唯御全快を祈つて居たのだ。あゝこれを讀むにつけても淚の種子、實に人生は果敢ないものだ。私はもう唯た一人の兄樣を失つてしまつて、今までの希望は失くなつて了つた。あゝ薄倖の身！　夢のやうだ。是から先き私の身はどうなる事やら、自分は一生夢見心地で暮すのかしら……。

一日

まだ餘寒は身にしみて寒いが、流石に晴れ渡る空は日毎に靑く澄む色の深さを增して、日の光りは萌出る若草の綠を一層鮮かに照らす。兄樣が病院からお歸りになつてからもう三月程になるが、未だ捗々しく快くならない。

昨夜もお咳嗽が烈しく出てよくおよれなかつた。お熱は此二三日よい鹽梅に平らで少しも上らない。

思へば實に悲哀の極だ。兄樣が永い間病魔になやまされてゐらつしやるのだもの。あゝもう三年の昔となつた。偶とした事から假の床にお就きなすつたが、初めの程はかう永くならうとは神ならぬ身の知る筈もない。一度ならず、二度迄も紅の痰を吐かれた。其の時の私の心はもう今になつてもおそろしいやうな氣がして、胸騷ぎがする。何事も運命とは思ひながらも、實に情なくつて深い思ひに沈む。

あゝ兄樣が丈夫でゐらつしやれば、もう一年で三田

の理財科を御卒業が出來るものを、それにボートのチャンピオンで、何時も私はお友達と一緒に見に行つた事もあつた。

あの頃の事思ひ出すと、まるで夢のやうだ。もう一度あの時代になつて見たいものだ。私とても今は青春の血汐燃ゆる處女時代だもの夢見るやうに花やかに暮したい、またあこがれても見たいが、今の私にはとても思ひも及ばぬ事である。唯もう兄様の御病氣が一日も早く御全快になるのを祈りもし、また望んで居るのである。



二日

午後、兄様のお友達H様御來訪。

夜る、社用で福島縣へ御旅行の父様へ兄様の御病狀を細かに書てお知らせした窓外を仰げば、一痕の寒月晝の如く冴え渡り、なんとなく淋しい晩だ。

兄様今朝は少し頭痛がなさるので、朝から氷をお當になつた。

鈴木さん(看護婦)が灌腸をかけてくれて、御便通が澤山あつた。此頃は食氣が振つてこられた。午後お汁粉を拵らへて上げたら、お旨しいと仰有つて上つたので、嬉しかつた。

今日はS博士御來診、經過がよい方だと仰有つた。十日許り前にやうやく讀書を許されたので、毎日雜誌ばかり見てゐらつしやる。まあ御病氣中は讀書が何によりの慰藉なのだから……。

お友達の早稲田文科の森川様御來訪、ちきにお歸りになつた。私兄様のお友達の中でこの方が一番嫌ひだ。學生のくせに何時でも絹のお召を着て、近眼でもないのに眼鏡など掛けて、其のスタイルがまるで役者の出來そこなひのやうだ。そして大變見榮坊な方だ。

芳子様へ此間お手紙差し上げたら、今日やうやく御返事が來た。そして御姓名もお名もすつかり異つて居るが、御筆蹟はたしかに芳子様だ。封を開いて見たらお嫁きになつたのださうだ。そして良人様のお妹とお名が同じなので、變へられたさうだ。まさかまだ嫁らつしやらうとは思はなかつた。私と同じく隨分子供らしい方だつたが、こんなにも變るものかと今さら驚く。私など、母様がいつでもお前は子供らしくて困るつてよく仰有る。そして又お友達が皆様肩揚げをおろしになるけれども、私はどうしてもおろす氣になれない。わけもなく肩揚げがなつかしい。少しでも長くおろさずにおいて處女の時代で居たい。

夕方から風まじりで雨が強く降り出した。

三日

昨夜の雨はまだやまない。靜かに音もせずに降る。春雨も花を養ふのであると思へば、點滴のしらべもいと床しく聞える。

兄様、今朝血痰が三つばかり出たのですつかりふさいでしまはれた。そして御胸の所へ氷を當てた。折しも今日は日曜なので、御親友の小坂様がお見舞に來て下すつた。丁度淋しい處、大變慰めて下すつたので、

兄様もお喜びになつた。

實際御親切なよい方だ。私も此方が大好きだ。凛々しくお優しくつて、お眼の涼しい、そして淡白な書生肌の方。今一ッ橋に御在學未來の商學士。

いろ〳〵とやさしく御親切に慰めて下すつた。兄様もこんな優しいお友達があるのは御幸福だ。あまり長く居ては却てわるいからと仰有つて、二時間ばかりでお歸へりになつた。



今日は終日お胸に氷をお當てになつた。夜に入り雨はすつかりやみ、澄みわたつた天にかかれる星斗は燦然と明らかである。

四日

今朝は空朗かに霽れ渡り、長閑

な好天氣、此頃は一雨每に暖かになる。

兄樣今日も血痰が少し許り出た。お熱は平らかである。兄樣のお好みでヂャムを求めに竹川町の龜屋へ行く。序にバタも買ふ。

丁度電車の中で三人程三田の正服着た學生が乘つて居た。そして何んだか快活に話し合つて居た。あゝ兄樣も御丈夫でゐらつしやればと思つて、羨ましくてたまらなかつた。

前途に光明快活なる希望を抱かれつゝ、あたら有爲の青年が藥石を友とせられ、むなしく病床に呻吟してゐらつしやる兄樣も、さぞ果敢なく思召すだらう。

私の留守にM先生御來診。

夕方から惡寒が發して、體溫三十七度八分。

五日

空は淸く晴れ渡つて一點の雲もなく、春風が心地よく吹き、何所よりか梅の香の音便がする。

日の光は窓帷を透して部屋一杯に射込んで居る。

兄樣はお熱が高い。血痰もまた依然としてとまらぬ。今日も大變ふさいでゐらつしやる。そして私に「好い時候になつたね、かうして寢てばかり居るのは實につまらん、早く治つて郊外散步でもしたいものだ、どうして僕の病氣は長いんだらう、お前にも氣の毒だね」としみ〳〵仰有るので、私ももう〳〵悲しくて泣きたくなつたが、わざと平氣で「兄樣そんな事仰有ちやいやですよ、母樣と私との思ひでもきつと治りますよ、どうかそんな事仰有らないで頂戴」と申上げたら、「ああわるい事を云つた、つひ僕がつまらないと思つて居るので、男らしくもない、あゝもうよさう〳〵」つて强ひて快活な御樣子をよそはれたが、お睫毛に一點の淚を湛へられた。

父樣からの御手紙、今會津にゐらつしやるさうだ。そして今なほ雪が降つて居るさうだ。さぞお寒い事だらう。

母樣が一週間許り前から每朝御咳嗽が出るので氣にかゝる。また兄樣のやうな御病氣になられたら大變だ。母樣も御心配遊ばして、明日S博士に健康診斷をして

貰ふ事になすつた。

六日

昨夜は少しも寢られなかつた。私は此頃どうしてこんなに悲哀の感じを起すのかしら、感染したのだらうか。思ひ出してもおそろしい。母樣が兄樣の御病氣に感染でもしたら大變だ看護婦が居ても母樣が一番餘計兄樣の事をして下さるのだから御身の上が案じられて、胸が迫つて來て、熱い涙が止めどもなく湧いて、どうしてもねむられなかつた。それで今朝は頭痛がしてたまらない。



母樣は午前の中にS博士のお宅に診察に行かれた。そして診察の結果、少しの御異狀もないさうだ。たゞ呼吸因が少し微弱だから用心してよく滋食物を上つた方がよいと仰有つたさうだ。あゝ嬉しかつた。いくら不幸な運命でも、この上かなしみを與へやしまい。兄樣も昨夜盜汗が出たのでよくおよられなかつたので、午前に少し許り眠られた。

午後、豐子樣御來訪、久しぶりで御目にかゝつたので嬉しかつた。いつも變らぬおやさしい御心で私を慰めて下すつたので、珍らしく半日を樂しく過した。

豐子樣は昨年虎門出の才媛、御父樣は實業

界に音の聞えた方、それに御器量はよし、御縁談がふる程あるが、まだ御縁がないと見えて、まだお宅にゐらつしやる。此頃お茶の湯のお稽古を初められたさうだ。私なんか久しく爲ないからもうすつかり忘れてしまつた。

風月のマシマローを兄樣のお見舞に下すつて、そして夕方お歸りになつた。門の外までお送りしたら、もう夕映の色は疾うに消え果てゝ仕舞て、僅に名殘りの一線が地平線上にかすかな光を見せて居た。

夜る在米のK樣へ手紙を出す。男の方にレターなど出すのは不本意だけれど、この方に外國語學校に在學中英語を少し許り敎はつた事がある。そして今度領事官附きで渡米なすつたのでわざ〱御手紙下すつたから、御返事を上げないのもわるいから出した。

今夜は看護婦に盜汗止めの藥を腹用して上げる事を頼んだ。

七日

今朝起きたら春雨がしと〱と降つて居る。兄樣は昨夜はよくおよられたさうだ。

午餐に盜汗の藥になるから牡蠣のフライを拵らへて上げた。

雪子樣から御手紙で、お姉樣が永眠されたのを知らせて來た。そして矢張りお胸の病！

あゝお可愛想に、兄樣の御病氣と同じだから、餘計御同情する。美術に御心を深くよせられ、美術學校も御卒業を遊ばした方、ほんとにお氣の毒だ。雪子樣のお心もちは如何であらう。早速お悔み狀を出す。

午後、久しぶりで湘南の病院に居る從兄弟の正夫樣が尋ねて來て下すつた。そして兄樣を診察して下さる。つひ去年までは角帽かぶつた蠻殼スタイルであらしつたのが、今は湘南の某病院の副院長になつたので、すつかりハイカラになられた。そして聽診器持つ手つきなど可笑しくて微笑まずには居られない。私には唯た一人の從兄弟だから、なんとなく懷かしい。今夜一晩だけ無理にとお止めしたけれど、病院の方が忙しいからと仰有つて、終列車でお歸へりになつた。

雨はやんで、星は空一面に覆ひ、柔しい蒼い光をちらく\と落して居る。

八日

空は紺青に澄んであたゝかく、好い時候になつて來た。兄様もだん\/に御全快に向ふだらう。あゝ嬉しい。

兄様が御秘藏にしてゐらつしやる縞蘭が大變勢がよい。兄様は、縞蘭が枯れれば僕の運命も定るのだから、枯れないやうにしたいものだと仰有るからもう毎日手入れをして大切にして居る。今日は大變御氣分がよいので、詩の本を出して御覧になつた。



S・博士來診。今日は處方を取りかへて下すつた。午後吉川の小母様が私の事でお出で下すつた。そして兄様が御病氣だのにこんな事申上てはお氣に障るかもしれませんがとの冒頭をおかれてのお話、それは私の縁談なのだ。

御自分の從兄弟でお年は二十四、帝大出の工學士、鐵道院の技師二三年經てば洋行をなさるのださうだ。まだお早いとは思ひましたが丁度よいと存じましたのでお話だけを致しますつて仰有つたが、母様が、折角の御深切は難有う御座いますが、唯た一人の娘ですから他家へは上げないつ

もりで御座いますと、厚く御禮を申上げてお斷りなすつた。

あゝ今から人の妻になるのはいやだ。それに母樣は私を他家へは嫁かせないおつもりだが、私のやうな者でも貰らつて下さる人があれば嫁きたい。とても養子なんかは不可能の事だ。

あゝこれも運命だ、未來の事はわからない。

夕方、前に居た乳母が來た。そして、坊ちやん如何ですか、お幼少い時は本當に御丈夫で、隨分お惡戯でゐらしつたが、どうしてこんな御病氣におなりになつたのかしら、どうか早くよくして上げたい、そして奥さんでもお貰ひになるやうにしたいものですつて、眼に涙をためながら云ふので、私もなんだか悲しくなつた。四五日泊つて手傳つて貰ふ事にした。

九日

今朝は南の風が吹いてむし暑い。まるで櫻の花も咲きさうな陽氣。

兄樣は今日も大變御元氣がよい。そして食慾が進まれる。午餐に鯛のうしほをおいしく上つた。母樣も昨日あたりからお咳嗽が出ないやうになつた。よい鹽梅だ。

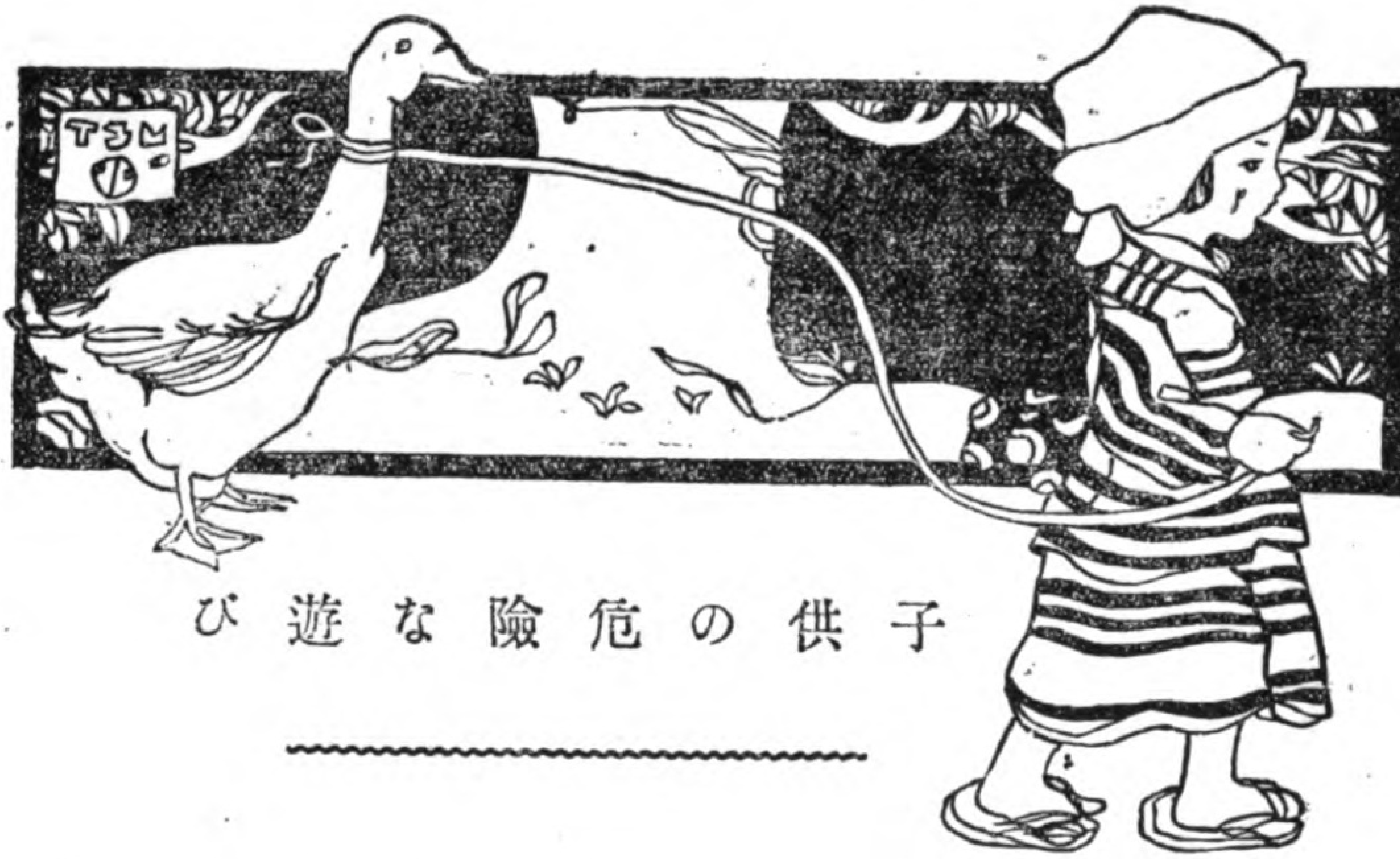
午後佛參に出懸ける。今日はお祖父樣の御命日だが母樣がお忙がしくて行らつしやれないから、私が代りに行く。吾妻橋で蒸汽を下りて、向島の堤へ添うて行く。もうボートレースがある。今日は攻玉舍の學生だ。

あゝもうボートの時節になつたのだ。

あゝこのボートを見るにつけても、兄樣が御健全であつたらばかういふ風に青春期を樂しくお過しになるものをと、また無限の哀愁を感じる。あゝこれも天命だ。思つたとて仕方がない。もう思ふまい。思ふまい。唯だ兄樣が早く御全快すればよいのだ。急いで佛參をすませ、歸途に就いた。兄樣のお土産に林檎を求む。

夕方、伯母樣が泊りがけでいらしつた。

夜に入り風はやんだが、窓をあけると恐ろしく靄の深い晩で、庭の草木は何にも見えない。



子供の危險な遊び

▲土遊び

軒下や往來に蹲踞で、蓙を敷き、土や砂を貝殼や手先で掻き集め、砂糖屋の眞似をしたり、又は土を水で捏ね返して、團子屋の眞似をしたりして遊んで居る小兒をよく見掛けますが、其土砂には溷の水を撒いたり、馬糞や、肺病患者の痰や、傳染病菌なども混つて居るかも知れません此の恐ろしい黴菌混りの土砂を弄ぶさへ危險でありますのに、其の道具は、重に飯事に用ふる器で、それを洗ひもせずに仕舞込んで置き、雨降りなどにはそれを持出して、飯事をします而して甘藷や菓子など入れて食べるので、これは實に寒心すべき事であります。

▲買喰ひ

子供に取つては此買喰ひ程愉快な事はないだらうと思はれます、金を持つて菓子屋へ行き、色々の菓子の中から、自分の好む物を選び取つたり、又飴屋や糝粉細工屋が子供の好く物を拵へて吳れるのですから、子供としては實に樂しい事でせうが、菓子屋の者が雜巾掛けをして居た手や、子供の襁褓を洗つて居た手や、臺處の下水掃除をして居た手などを一寸前掛けなどで拭きながら出て來て、菓子を取て與へます、亦飴屋や糝粉細工屋などは、醬油で煮染めたやうな汚い手拭で、汗を拭て、其手で細工をし其上不潔極まる口で膨らかした物などを其儘與へます、又糝粉屋は矢張り然う云ふ樣な手で糝粉を捏繰り反して拵へた物を子供に食べさせます、是等は衛生上甚だ危險なことです。

菊池寂阿妻



△和歌の笠印

菊池入道は後醍醐天皇の御味方として筑紫の探題英時を討たんと軍議を凝せしに、味方の小貳、大友等心を變じたる爲め、軍難儀に及びしかば、討死と覺悟を極め『ふるさとにこよひばかりのいのちとも知らでや人のわれをまつらん』と詠みて笠印に書き故郷に贈り、次男肥後三郎と諸共に、百騎の勢一足も引かず討死しけり、妻此歌を見て、かくこそあるべけれと子息武重を呼び、必ず時を待ちて敵をはかり、運を全うして家名を疵つくる勿れと、細々と遺言し、其身は一間に入り心靜かに此歌を書きのこし、入道殿の迎待ちたまふらんと自害してはてけり。

△一字の改作

花英女は長崎唐金尾某の娘にて、常の名をちせ女といひ、才智人に勝れてやさしき人なり、一年伊勢參宮の時、近江の鏡山の麓を通りて此歌を詠みしに、ふと都に聞えて、かく賤しき身にも敷島の心がけあるはやさしきものなりとて、あるやごとなき方に召出され、數の引出物をたまはり、其時に忝くも花英女と名をもたまはりけりとかや、其後人々此歌を聞きしに卑下して更にいはず、又短册などを乞ふものあれば『いますこしくもるとも又鏡山』云々と、上の句のしばしとあるをすこしにかへて書き與へけるとや、謙遜の心深く人の中にては少しも歌の話などせざりしとなり。

花英女



井上通女



△下る記歸る記

通女は讃岐丸龜の士井上儀左衞門の女なり、幼少より其君の尼公養性院と申すに仕へていとまめやかなり、尼公佛法を信じて光林寺萬慶和尚を招き法談ありし序でに和尚通女に向ひ、佛の弟子となりて彼岸に到られよとありしかば、其時此歌を詠みけり、十三歳の時江戸へ下る日記を東海紀行といひ、九年の後歸國する折に書きし歸る日記といふ又通女留別の詩に

恩情何淺九年好。別恨難堪萬里身
想見歸家隔山海。月前相望涙痕新

素心尼



△歌人の悟入

素心尼は牧村兵部大輔の娘にて、町野長門守の妻となり、後剃髪して遁世す牛込濟松寺の開基なり、悟道に入る時の歌に『塵つもる須彌も碎けて有明の月の光をはらふ松風』と詠みしかば、宗分和尚の返しに『吹きはらふ松の嵐も音たえてすむもくもるも有明の月』又最上和尚のもとより『もとよりも淸き心の鏡山とがすみがかすそのまゝのいろ』とありしに素心取敢へず『みがかずばくもりもやせん鏡山たちかへり見てかげなとどめそ』とぞ返しける。素心禪學に悟入し、才秀でたれば、寛永の比大奥に召されて、御伽衆の數に入れられけるとかや、其後何か心に愁ふることのありて此歌をよみしとぞ。

堀りく女



△潔白の犠牲

りく女は堀氏の妾腹の女なりしが、寛永のはじめ同姓何某の家に嫁し一男子を產せしかども、其姑と心合はず、憂き事の絶えるひまもなし、姑は心佞けたる人にてりく女を疎み、遂に讒を構へてりく女を離別せんことを計りしかば、りく女身の不運を歎き、我身の潔白を言ひ解かんはいと安きことなれども、武士の家に生れたる身には、それも未練のいたりなり、殊には姑のひがことを世にあらはすにも似て不孝の罪も遁れ難し、とやせましかくやせましと思ひの餘りに、此歌を書置きとなし、自害して果てたりとは惜むべく又憐むべき女性なりけり。

△たそやたそ

高尾といへる妓女、すべて四人ありしかども、三浦屋四郎左衛門の抱へにて二代の高尾は最も名高く容儀もすぐれ、はりつよく、或時の口吟みに、貞女兩夫にまみへずといへども、たらちねの爲めに身を川竹のうきしづみ、けふも又人をまてり『たそやたそたれかはけふのつまならんさだめなき世にさだめなき身は』情をうる憂きが中にも、契りおきし言の葉に義を立てゝ身は三俣に沈むといへども、清き名は世々に流れて、人之を賞讃す、世を去りしは萬治二年十二月五日なりとぞ辭世の句に『寒風にもろくもくつる紅葉かな』

高尾



園女



△春の曙秋の月

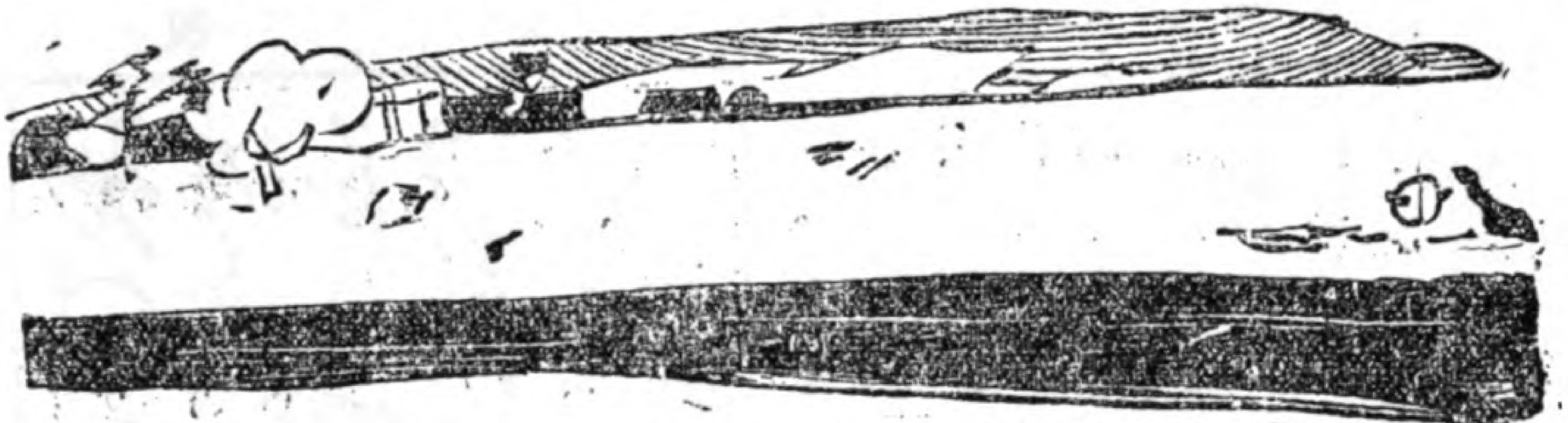
園女は伊勢の神官一有が妻なりしが、若くして夫に離れて後一生人に嫁せず、俳に遊びて其名高し、神官の妻なるが故法體せず、容美はしかりければ人の縁をもとめんとするもの度々あり、園女これを憂きことに思ひ、爾来男と同席せず、俳諧にも席を隔てゝせり、江戸深川に住せり、園女幼少の時難波の伯母のかたに居たりしが、其家の外に美しき八重櫻のあり、花の頃は人群集して眺めあへしが、心なき者は花の枝を折取る故、園女は十一歳の幼心にもいたく惜みて此歌を詠み櫻の枝につるせり。夫に別れたる後は、風流に遊びて一生を清く送れる女丈夫なりけり辭世の歌に『詠めてし春の曙秋の月夢か現かなみあみだぶつ』

鳥井與七郎妻



△虎口の危機

鳥井與七郎の妻は、河合安藝守の娘なり、夫與七郎は朝倉勢敗軍の砌、父と共に討死せられたる由を聞き自害をせんと覺悟せしところへ、はや敵兵亂れ入り、亂暴におよび、むくつけき雑兵共此妻の美しければ、擒にして連れ行き手ごめにせんとしければ、女云ひけるは、此上は力なければ、御身等の爲すに任すべし、さり乍ら母や姉の定めて案じ玉ふらん、一筆認めて知らせ申したしと硯をかりて文さら〳〵と認め之を届けて玉はれとて、使ひを出だし少しの隙間を見て遁れ、井戸のもとに到り、身を躍らして飛び込み、遂に果敢なくなりければ、さしもの荒くれ男もあはて騒ぎ、井に入りて死骸を引上て、涙を流して其邊りに葬りけり、此歌は其時の文にありしとぞ。



骨肉の情

刈藻

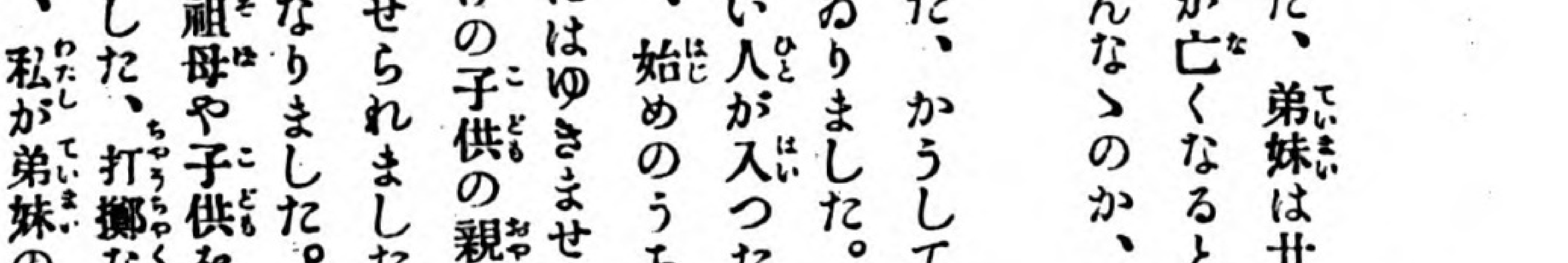
亡母の法事もすんで、繼母を迎へることになりました、弟妹は廿一歳の私を頭に六人ゐるのです、末弟は生れた許りなので、母が亡くなるとすぐ深切な家へ、里子に遣つたのです。繼母になる人の心はどんなゝのか、大勢の弟妹の面倒をみてくれるだらうか……

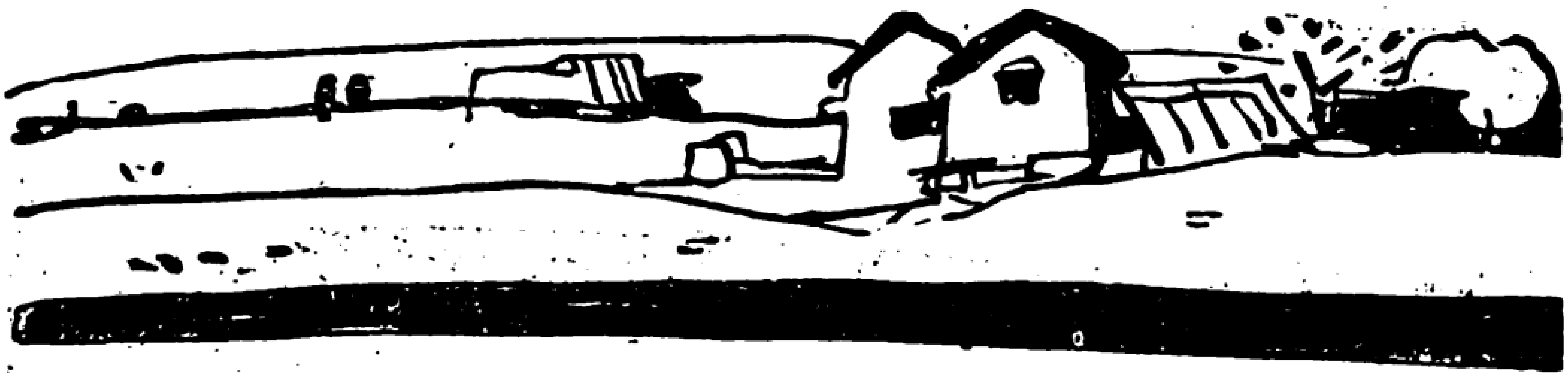
心配で〳〵で寄るとさはると、繼母の話し許りでした、かうして杞憂の思ひをしてゐるうちに、年の終りの〇〇日はとう〳〵まゐりました。

繼母の故郷は極遠方なのでした、さあ中途から新しい人が入つたのですから、何も知らない子供まで遠慮するやうになりました、始めのうちは深切にしてくれましたが、氣心が分らないので、心を許す譯にはゆきませんでした。

密かに繼母の樣子に注意してますと、どうもこれだけの子供の親となつて、世話をしてゆけ相もないやうなのです、母と呼び呼ばせられましたが、心のうちに解けないものがあつて、朝夕亡母を想ふやうになりました。

三月四月と經つうちにとう〳〵本心をあらはして、祖母や子供を邪魔にして、ある事ない事父に言つて、叱らせるやうになりました、打擲などはしませんでしたが――、そんな邪見な事は出來ないやうに、私が弟妹のそばを離





れずにゐたからでもあつたのでせう——、エラ〳〵と一とくせある眼で、一寸睨められると、大人でもゾッとしてしまひます、この眼に子供が竦んでしまつたのですもの——、傷はしくつてなりませんでした。

年もゆかない弟妹に悲惨な思ひをさせたくない、邪慳な心の繼母に大切な弟妹の世話はさせられない、どこまでも弟妹の犧牲になつて、世話をしてやらなければならない、それが私の役でまたさうするのが、亡母に何よりの功德ではないかと——、決心したのが繼母に邪魔にされる始めなのです。

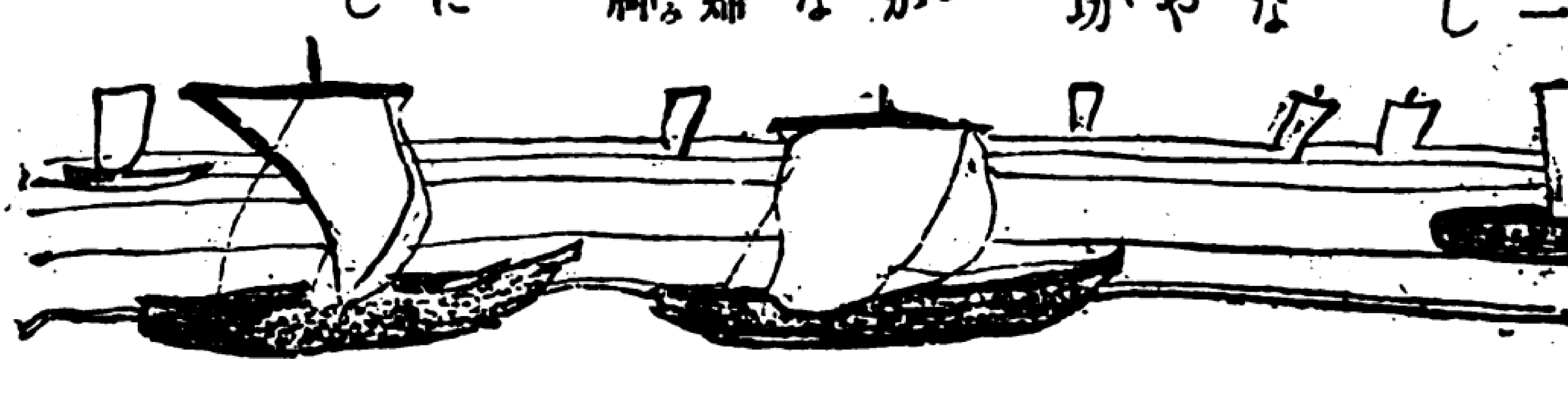
繼母が私に何事があれかしと、思つてゐた處へ幸か——不幸か——、私が繼母と弟妹の中にあつて、なにかと心遣ひがもとで、ひどいヒステリーになつたのです、家にゐるのもいやなので、父に願つて東京の知邊の家へ看護婦を連れて行くことになつたのです、この留守に繼母に謀計をされるとは、神ならぬ私は知りませんでした。

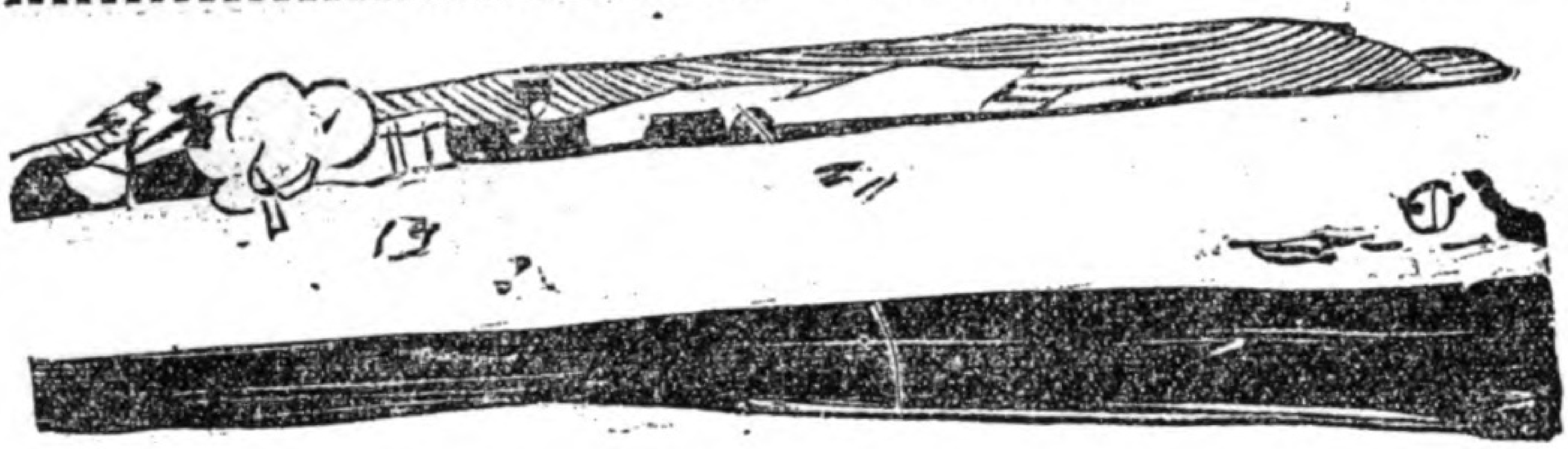
私は知邊の家に病の身を横へて、過方行末の事がつく〴〵思はれて、涙に袖を濡す許りでしたが、こゝの人や看護婦の深切に、いくらか慰められました、すると十日許り經つと突然繼母がまゐりました。

「病氣はどんな具合ですか、」

「えゝありがたうございます、いくらか快いかと思はれます。」

「さうですか——それは結構です。」





三四日前に父が心配して來て呉れたのに、なんのために繼母が來たのかと思つて……。

「お父さんが來て下すつた許りなのに――、何か用でもあつてお出なのです？」

「いゝえあなたがどうかと思つて、見舞に來たのですよ。」

「――わざ〳〵來ていたゞいてすみませんね。」

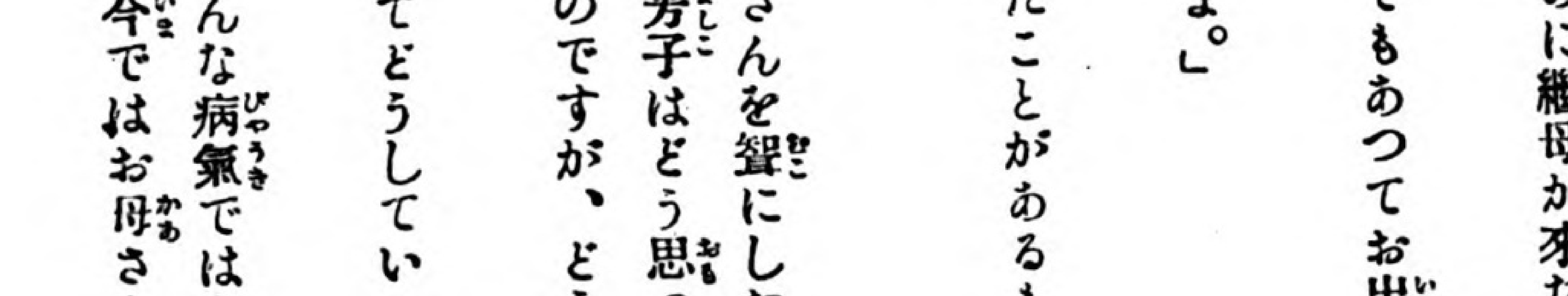
「――それにお父さんからあなたに、いゝつかつて來たことがあるものですから――。」

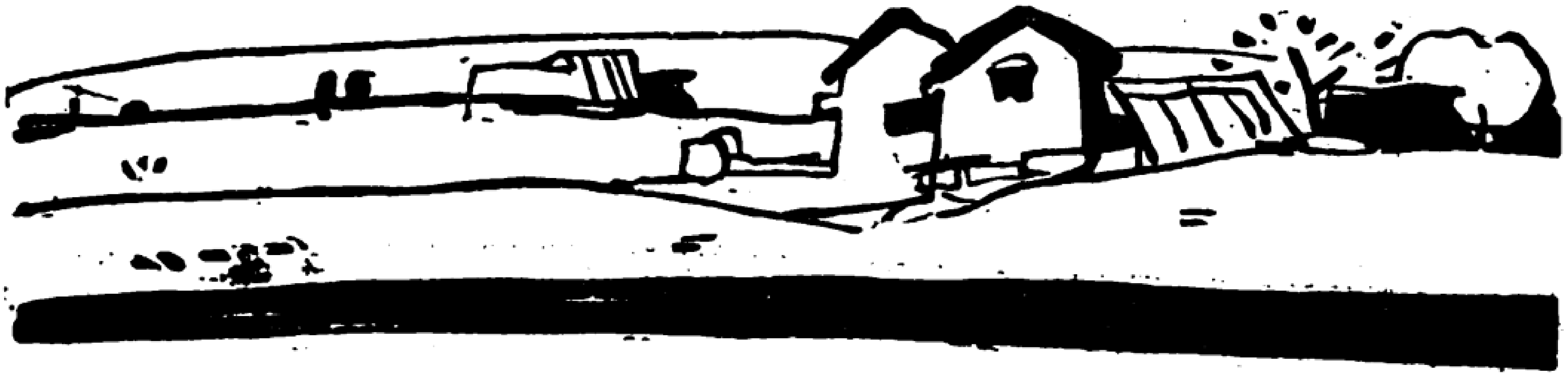
「――――――」

「お父さんがあなたを心配してゐますよ、それで××さんを聟にしたならばどうか、あの方ならば芳子にも深切だらうから――、芳子はどう思つてるか――、それにはお前から聞いて來るやうに言はれたのですが、どう思ひなさる？」

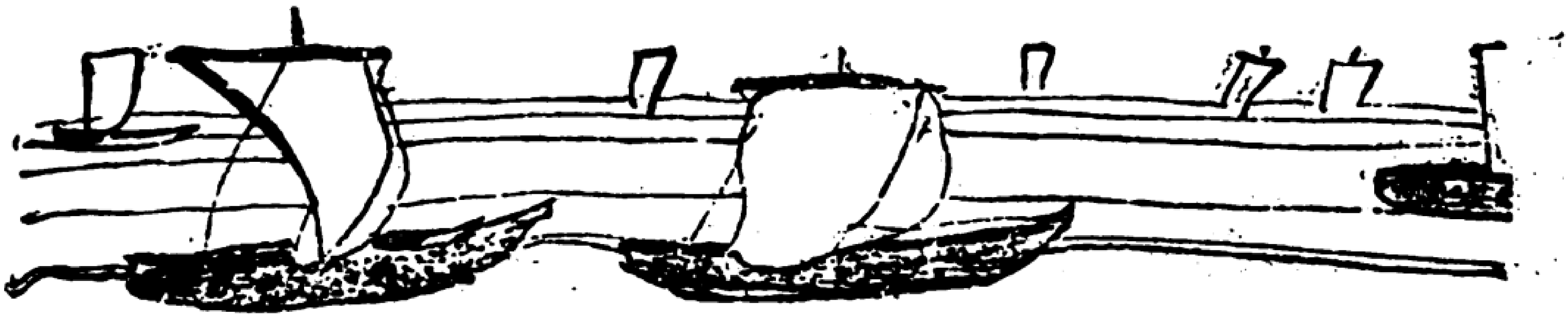
「――」結婚――夢にも思つてないのに、かう言はれてどうしていゝのか、まして病中なのに……。

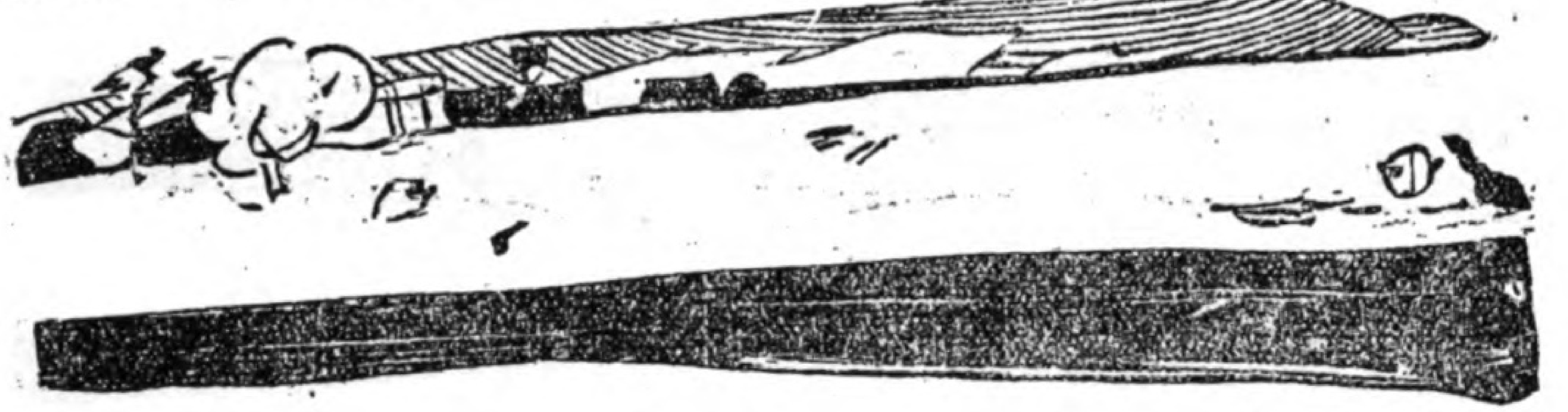
「――お父さんがさう言ふのなら――、けれど私はこんな病氣ではありますし、まだ一二年は嫁かないつもりですが――、それに今ではお母さんもお困りでせうから――。」





「そんなことを言つてゝは、嫁きそべつてしまひますし――、それは私も困りますが、それがために嫁きそべつては、お氣の毒ですから――。」
「…………。」
「お父さんは聟と言はれますが、あなたは聟取りはいやだと言つてるのですから、聟の名義であなたが、嫁る方がいゝでせう――。」
「――私も病中なのですから、全快してからの事にして――、弟にもよく相談してみて下さい、私からも話してはみますが――。」
「それは全快してからのことですが、きめるだけはきめて置きませんとね――。」
「――」今まで私は遠方から來て、何事も様子が分らないのに、あなたにお嫁にでも嫁かれては、私が困るから一二年はどこへも嫁らないで下さい、あなたにはお氣の毒ですが――、と言つて居つた繼母が、何故私が病氣でゐるのに、こゝまで來てあはてゝゐるのか、何のためなのか考へに苦しみました。
××さんとは商船學校出身の機關士で、弟が遊學してるので何かと深切に世話をして呉れてる人なのです、弟はこゝに世話になつてるのです、××さんもこゝと知合なので、××さんに始めて遇つたのは、花の四月に、弟を尋ねて來た時なのです、××さんは廿七八の學識のある、精神の確りした人なのです。實父に死別れて兄を持たない弟が、かういふ有望な方に世話になつ





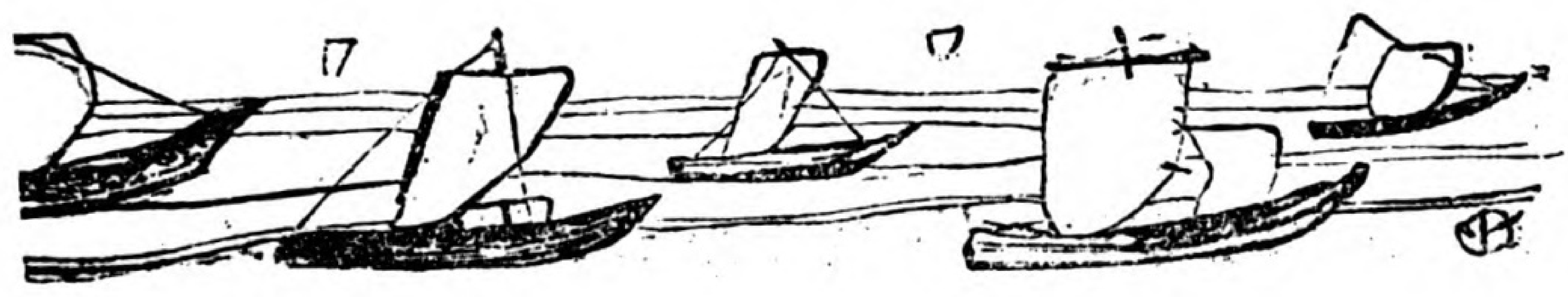
てるのを、弟のために悦んでましたが、まさか――其人と結婚するなどゝは――、繼母は翌日歸宅しました、私の病氣もなか〳〵快方に向ひません、其うち家から歸へるやうにと言つて來たので、弟を連れて歸へることになりました。

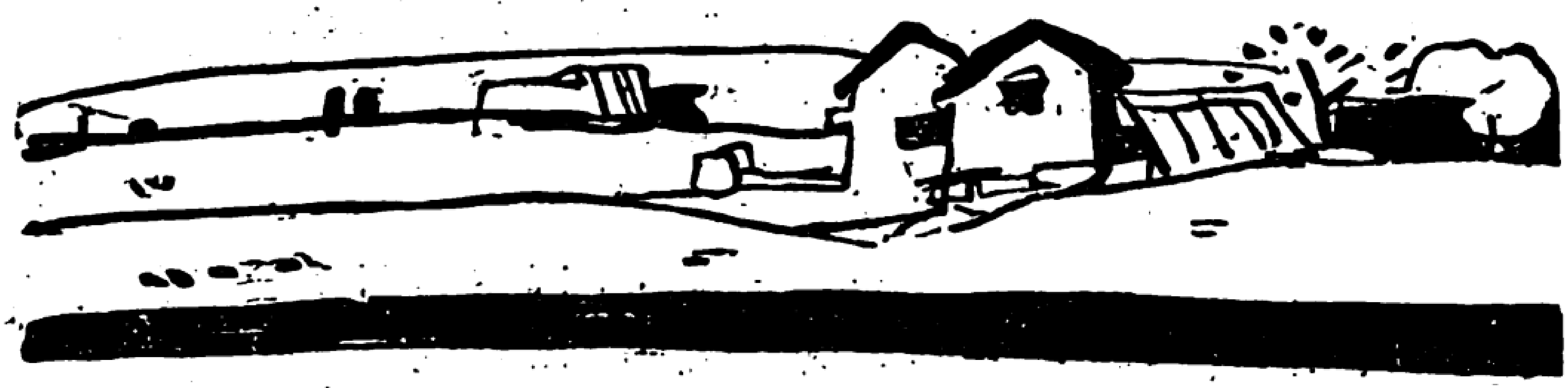
歸へると不安の念が兆して、ぢつと床にゐられませんでした、繼母の樣子が變つたのです、或日私が知人の家へ行くと、

「芳子さん――怒つてはいけませんよ、東京に戀人があるので、度々行くのだつて話しだがほんとう？」

「ヘエ――私に――そんなしやれた事なら、結構ですが――これでも父に意見でもしやうと、思つてるのですもの――、そんなうか〳〵した事はしてゐられません――。」

東京に――戀人――、私は――世間の人の淺墓なのを恨みましたが、どうでせう――どうでせう――、かりにも親となつてる、繼母が口から出たのだとは――、芳子さんは××さんを戀ふて、病氣になつたのだ、それなので度度東京に行くのだと――、あゝから知つた時の心――、私の心は張裂けるほど口惜しかつた、とう〳〵謀計られたか――、けれど繼母の口から出るには何か譯があるのだらうと、無念の心をしづめて、繼母の心をさぐりますと、父にはいゝやうな事を言つて、私には恩を着せて出したかつたのです、繼母

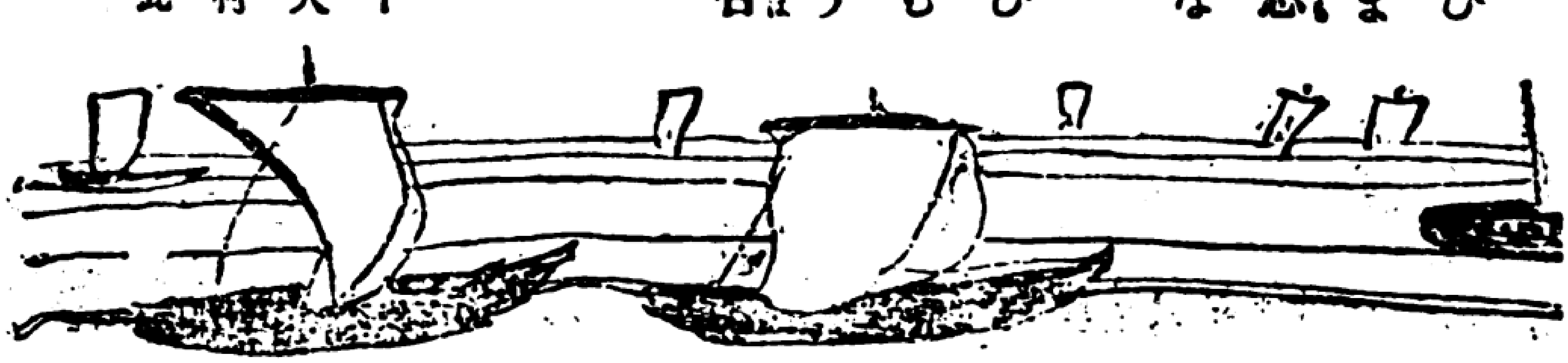




の謀計を知る事が出來たのも、亡母の守護なのでしたらう——。
其後思ふやうにならないので、子供が懐かないから、離縁して呉れと言ひだしたのです、嫉妬憎悪の強い中年女の、陰険な心ほど怖しいものはありません、こんな恐しい心の者を置いては、またどのやうの事があるか、末が思はれますので、父には氣に入らない事ですが涙を流して諫めて、十月にもならないのでしたが、離縁する事になりました。
僅かの間に父の精神まで、變らせてしまつたのです、この間血を吐く思ひをしました、繼母さへ貰はなかつたら、こんな悲惨な思ひを、しなくもすむのにと思ふと、勿體ないが父を恨みました、亡母はどんな思ひであつたらう——、と思ふと泣かずにはゐられませんでした、想ひ出して寺の方に手を合せて、忍び音に泣いた夜もありました。

△一村に羽織一枚

御行の松で名高い根岸の里も亞鉛張りの屋根、西洋造りの家、煉瓦の塀なども交りて、今では下町風の山の手式を加味したやうな場所となつて了つたが、昔は風雅に寂びた別天地で、文人や茶人などの棲所であつたことは、誰でも知つて居るところであるが、其又ズツト昔に遡ると、此根岸村に相應に暮した百姓があつて、豫て喫嗜の用意にと粗末ながら羽織一枚持つて居たが、其外には此村中で、羽織など持つたものは只の一人もなく、若し婚禮などがあつて羽織の要る時には、其只一枚の羽織が、それからそれと、羽が生へて飛ぶやうに借られたといふことである。



涙の玉緒

青柳孝子

兄上様、

御玉章によれば兄上様には、此度房子様と御結婚遊ばす様の趣、両親も早く歿なり給ひし事とて一日も早く御結婚遊ばすは、衰へし我家の再興の上にも賀すべき事にて、美しき家庭を造りくだされん事、妾も偏へに願ひまゐらせ候。されど妾は兄上様の御結婚が、房子様と聞きて一方ならず驚きまゐらせ候ふ喜びに充ちし妾の心は一時に悲しさと變りまゐらせ候。

房子様にあらずして他の方におはさば如何ばかり喜びまゐらせんものを、房子様とて何處に非難すべき點とてこれあり候べき、才色共に人後に落ち給はず、殊には高等の御教育さへ受けさせられし御身、兄上様の妻とし、妾の姉上様として決して恥かしからぬ方にはし候。

されど〳〵妾には如何にしても房子様との御結婚はお止まり下さる様願ひ上度候よ。

如何ならば斯く妾は房子様を嫌ひ申すにや、兄上様には御存じあらせらるゝ筈なければ、その事柄を拙なき筆にて、一筋に結婚と成功を急ぎ給ふ兄上様に申上まゐらせ候。

思ひかへせば一昨年の春、四方の野山に霞立ちこめて梅の花のまだ散りも初めずてふ頃、兄上様には燃ゆるが如き青雲の志に、前途多大の希望を持たせ給ひて東の都に上り遊ばされし彼の停車場の別れの際に、數多く見送らせ給ふ人々の中に、小夜子様が姿も見えて、妾と共に兄上様のお側に參りし時、妾の身の上のことども呉々と小夜子様に頼み給ひしに、小夜子様は答へもなく俯向き給ひて、名殘を惜しみ給ふ風情、げにや咲き匂ふ海棠の露に惱める如く、瞼には露さへ宿し給ふを見受けまゐらせ候。

まことや小夜子様は、その姿の女神に似通ひ給ふ美しさのみならず、その心の優しさ、愛の女神が暫時姿を人と現はし給ふ様、紅芙蓉の唇よりは愛の息吹き洩

れ、眞珠の如き双の瞳には愛の光輝きて、妾の淋しき境遇をひたすらに慰められ、同胞も及ばぬ友情を垂れ給ひき、さればこそ小夜子様の當地女學校を卒業遊ばせし時、土地の新聞紙は一様に、その才媛を賞して美しき寫眞をさへ掲げ申候。彼の時妾も小夜子様が目出度き優等の御成績に嬉しさの餘り、當日の新聞紙を添へて兄上様に送りまゐらせ候。其節兄上様には御祝として小夜子様に、寶石入の指環を御贈り給ひしかば、太く喜び給ひて片時も手離し給はず、手をかざしては染々と眺められ、温かき微笑を浮べ給ひつゝあらせ候。



さる程に小夜子様と一緒に御卒業遊ばれし、房子様が兄上様の後を追ひて、御上京遊ばされしより如何になし給ひけん、小夜子様には、何事をも進み給はず、折々吐息と共に、妾も母様さへ許し給はんには上京せんものを、と口癖の様に仰せられ候、されど兄上様の知り給ふ如く母様一人子一人の小夜子様に候へば、到底許し給ふ由なく、妾は及ぶ限りの眞心を盡してその心を慰め申候。

斯くて春は梢を散る花と共に逝き、青葉隠れにホトトギスの聲を聞きしも束の間、人はそゞろ波の音戀しき汐風戀しき頃となり申候、ある日妾は兄上様より

賜ひし御歸省遊ばす樣の玉章を、小夜子樣と共に讀みて太く喜び、御歸省の日取りを指折り數へて二人は待ちわび申候、げに待つ身の辛さ、一日は千秋に値して漸くに御豫定の七月中頃と相成申候、さるに兄上樣には如何なし給ひけん、お歸り給ふ御樣子もなければ、人の足音に若しも兄上樣のお歸りにあらぬかと飛び出で候事も屢々にて、障子に映る影にも若しやと、唯それのみを思ひつゞけ居り候ひき。

　さるに其月末の御玉章にては、今年は故ありて歸省せずと仰せられたるに、妾はまこと力を落しまゐらせぬ、今日が今日までお歸り遊ばすとのみ思ひ詰めし妾の心には悲しみの湧き出で申候、小夜子樣にも、斯くと聞き給はゞ、如何ばかり失望し給ふやらん、明けくれ御歸省を待ち給ふ心の程を推しまゐらせては、なか〳〵に告げんも辛く候ひしが、一と日妾の家に來給ふを幸ひ、百合の花白う咲く彼の庭の四阿家の邊りに逍遙の折からを見計らひ、兄上樣の玉章を御目に懸け申候。

果して小夜子樣にはいとも驚き給ひて、お顏の色さへ變りつ、文枝樣何故にお歸り遊ばさぬにや、かく待ちわぶる御身と妾のあるを存じ給はぬにや、と悲し氣に申され候、あゝ妾とて、まこと悲しく候ひしよ、兄上樣。

　かくて妾と小夜子樣とは、御歸省を待ちし日に引かへて、今は沙漠を旅すてふ人の心の如く、淋しき日を重ね、東行く雲の影追ひては兄上樣の身を偲び、飛び去る鳥の姿を見ては翼あらばと詮なき願に身を喞ち申候ひしよ。

　其後風の便りに聞けば房子樣にも御歸省遊ばされずして兄上樣と諸共に夏の暑さを、大磯の濱邊に避け給ひしよし、妾はそを眞と信じ申さず候ひしが、小夜子樣には太くそれを信じ給ひて、お歸り遊ばさぬもそれが爲めにて候よ、と仰せられ、それより後は見る目も驚くばかりの衰へ、咲き匂ふ花の一時に熱湯を浴びたる樣なる姿、妾は初め御病氣とのみ思ひまゐらせて、切に御保養を勸め候ひしが、いつかな御快方の樣子も

見えず、八月も病床に暮れて、九月も暮れ近く、庭のコスモス花白に赤に咲き初むる頃には、急に變りて怖ろして肺結核となり遊ばされ候。

さらば母樣も太く心痛め給ひて、醫師の勸むる儘に、暫時松青く沙白き須磨の病舍に療養させ給へば、妾も辭し給ふを無理から乞ひて小夜子樣にお供なしつ須磨の病舍に、晝となく夜となく、看護に盡しまゐらせて、御全快を祈り候ひしが、ア丶其甲斐なかりし悲しさよ。

唯小夜子樣の病が、御身の上のみ思ひて、其御心に及ばざりし愚かさは、臨終の際に唯一言洩らし給ひし言葉にも、すべてを推しまゐらせ候。



思へば小夜子樣には、病む身の苦しさよりも、絕えぬ思ひが、如何ばかり辛く候ひしよ、平素の氣性よりかくも親しき妾にさへ告げ給はざりし心の中、あゝ兄上樣。

病舍の秋の日は淋しく暮れて、カーテンの隙間より折しもさし昇る月の光に外を見やれば、庭の枯草のはら／＼と亂れて散るに、誰へ知れぬ淋しさ身に染むものを、醫師は小夜子樣の母樣と共に、今宵はとても、と今は最後の言葉も力なく言ひ放ち給ひ候、今の今となりては母樣も妾も期せずして熱涙瀧の如く溢れて、今は話さん言の葉も

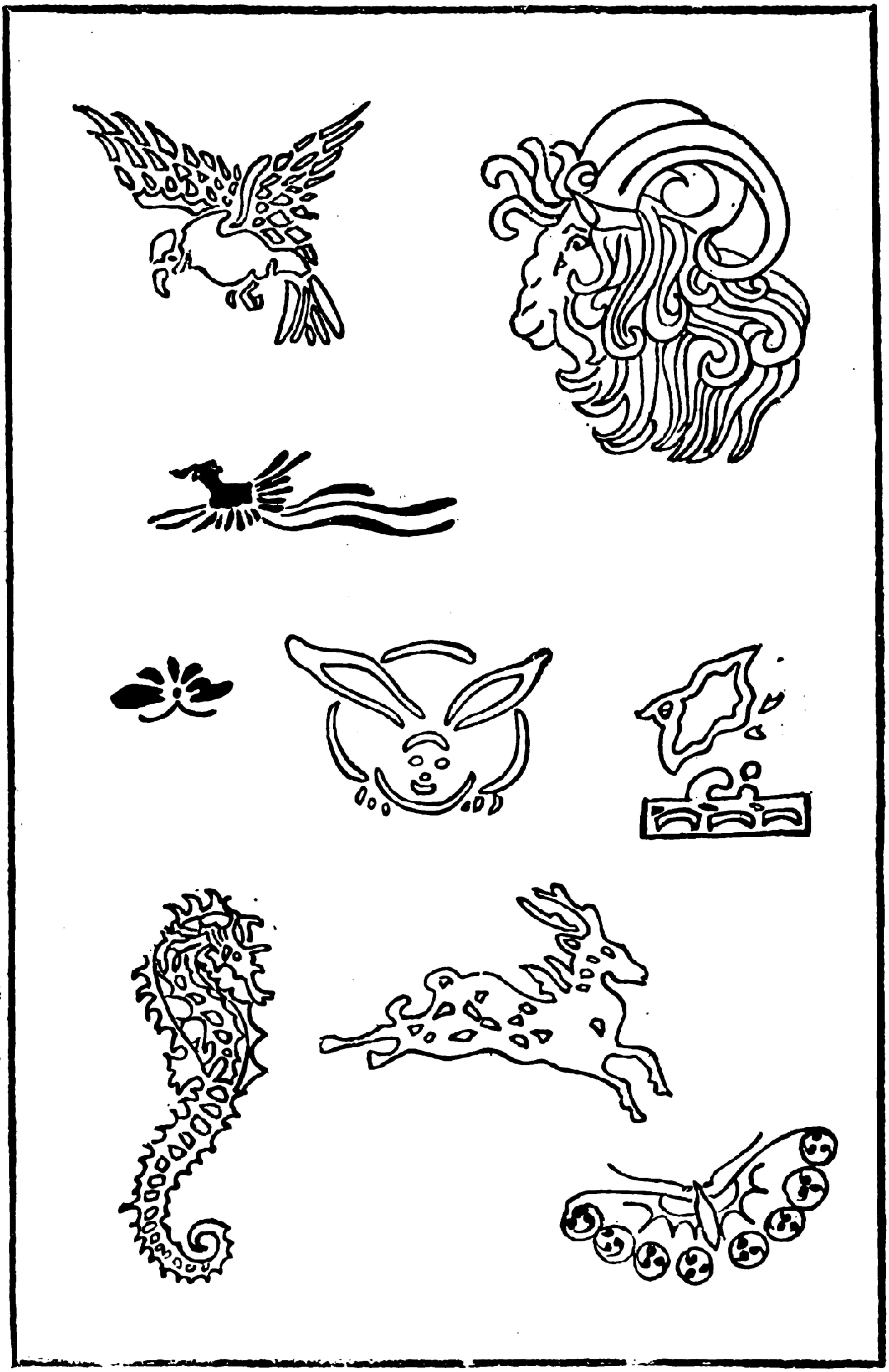
出です、妾は急ぎ御側に寄れば、すや〳〵と眠り給ふそのお顔、花も恥らひし昔の面影は、今何處にか尋ね參らせん、衰へ窶れ給ひしお姿よ、妾は又も堪へ得ずなりて、涙ほろ〳〵とお顔に落せば、それに目覺め給ひけん、力なげに眼を開かせ給ひ、今は枯木とばかり痩せさらばへる手を伸べて妾の手を握らせ給ひ、いと苦し氣に、「文枝樣妾は最早今宵限りに候よ」と仰せられ候、又母樣には「母樣妾は母樣に先立ちまゐらすこと、なか〳〵に不幸にあれ、これも詮なき事にて候よ彼の父樣のお側に參り、母樣が百の壽を祈り上げまゐらせ候、何卒妾なき後は、此文枝樣を妾と思し召し頼り遊ばせ、又文枝樣には同胞も及ばぬお情にあづかり妾いつの世にか之を報いまゐらせん、お容し遊ばせ」と泣き給ふに、母樣も妾もひしと寄り添ひ、小夜樣よ、最う何事も申さるゝことなきや、と母樣の問ひ給ふに、妾も小夜樣何事か仰せらるゝ事おはさずや、と問ひまゐせば、小夜樣は白きお顔に薄き紅ゐ染ませ給ひつ、母樣文枝樣、妾は眞と病める此身よりも此胸が辛く候、臨終の際に唯だ一言尚ほ申上げたき事あり、母樣も文枝樣も、お容し遊ばせ、とやゝ言葉は切れて、文枝樣、妾はまこと、貴女樣の眞の姉妹になりたく候ひしよ。と聲を震はせ、お顔を蒲團に埋め給ひし。

妾も母樣も御答へ申上げて言葉さへなく、聲もかれ、涙も涸れて握り合ふ手と手のわな〳〵顫ふのみ、折から小夜子樣のいと苦し氣に咳き給ふに、漸く氣を取りなほせば、御玉の緒は其儘其處に絶え申候。

あゝ臨終の際まで包み給ひしかど、まこと優しき御胸の中には、妾をば眞の姉として、兄上樣に侍きまゐらせんとのみ思ひ居給ひたるにて候よ。文枝より

▲故公爵毛利慶親公の息女萬子姫は少壯外交官として只今獨逸にある子爵武者小路公共氏に嫁してゐるが其麹町の邸にあつて自ら臺所に出て魚屋に接してかひ〴〵しく立ち働くので勇み肌の兄哥が度度驚嘆したと云ふ話は主婦としての模範を示した好適例であらう。

新案動物模樣


△鷹
△鳳凰
△蝶
△海馬
△綿羊
△兎
△千鳥
△鹿
△蝶



圓テーブルの側

松平鏡子

圓卓子の向ふ側に、詩集讀み耽つて居る幸枝さんの前髪を掠めて、葩がひつきりなしに散る。

暖かい宴の席から、夜風の寒い街頭を横切つて、またあたゝかな此室の懷に抱かれた私は、恰度紅白の縺繩の上を、靜かに渡つて來たやうなものであつた。だけどもう寒いとこへなんぞ出やあしないわ、私は此儘寢るつもりでゐるのだもの。

澪さんは眞實に快活な人だ、あれで女王樣みたいな權力を振り廻さなけりや尚更可い、私あればつかしが氣に入らない。兄妹二人つきりで云ふ目が出るから不可のだ、苦勞を知らないものは思ひやりがないつて、さう云つた人もあつた。年下のちびつこの癖して若い王者?の權を挫かうとする、私もちつと生意氣過ぎやしなかつたかしら。

赫々と燃えるストーブ。さゆらぎもない室内の空氣!ああ頭痛がする……。

『今夜は宿つていらつしやる?、え、幸さん!』

ふと冥想から醒めると、慌たゞしくソーフアーから身を起した。

『もう十一時は先刻に打つちやつたんですもの、歸塾りたいつたつて歸れやしなくつてよ。泥坊と間違へられるかもしれない!。そのつもりなんでせう、宿つてゆくつて』

うつとうしく襟首に亂れ懸る髱の毛を掻き上げて、また寄りかゝる。

『ホ…・私はね、何時迄も歸り度なんて云ひませんことよ』

音立てゝ詩集をふせると眸を上げた。まつ毛の長い綺麗な人!ストーブが熱いからつて、此室へ入ると脫ぎ捨てた紫の紋羽二重の被布が、造作もなげに袖疊みにくるりと卷かれて、空いた椅子の一つに投げかけられてある。

『私ねえ、もう疲勞ちやつたんですよ、寒いわね戶外は私早く歸つて來てよかつた、夜中まで居たら全く堪りやしなかつたわ』

幸枝さんは思ひ出したやうに、ストーブの前をかへりみ乍ら

『上野つて思つたより寂しいのね、私あんなところを一人して步くのは厭!妖怪が出さうだから』つて元氣が好い



『寒いから尙更なんでせうよ、アーク燈の白光いのが、餘計寂しくみせるのかもしれないわ、櫻花の時だつてさうですよ、幸枝さん！　あの白光の當るところねえ、もう眩しくつて見定れやあしないの、花も葉も純白くなつちやたやうでれ、』

卓子の上に、亂れ散つた葩は、恰度朱鷺色の刺繡したやうふつくらと浮いて見える。

『だから私れ、山下の灯を見た時には、それこそ生き返つたやうな氣がしたわ、明るみつて好いものれえ鏡ちやん』

つて挿してあつたりボンを拔いて解いらまつてまた結び直して　ゐらつしやる。

『私もれ、あの……。月が冴えてゐるんでせう、ひたひたつていふ俥夫の足音が、何か追ひかけて來るやうに聞えるんですもの。幸枝さん貴姉ぢやないけれど、まつたく怖くつてならなかつたわ。それに寒くつて寒くつてれ、襟卷を耳まですつぽり被つてゐたけれど、矢張駄目なの！　息が苦しくなつて了つて、私もう早く電車に乘りたくつてたまらなかつたのよ』

『幌をかけて貰やよかつたんですわ』

引きずりさうな長い袂をまくつて、手巾をとり出すと、頰ぎはをきやゆつ〳〵と拭く。

『あら、幌を退けてゐらしつたのは香山女史よ、あの、車夫がれ、懸けやうとしたら止して吳れつて、默つて手をお振になすつたの、いくら老け性だつて餘可哀想れ、ホヽヽヽヽあんな小母さまみたいな方と……幸枝さん……』

呼びかけたが笑ひくづれた。

八臺揃つて同じ方角へ軋り出した時、振り返ると、門傍に立つた澪さんの、手にした灯提の光が、月に反いてさやかに見えた。境内に入る前に二臺がそれて、あとの六臺が調子を取るやうに、山下までひた走つた、あそこで俥を捨てゝ電車に移つたのは三人きり！。

まだ、ものゝ三時間とはたゝない記憶が、昨日より一昨日より、もつと〳〵遠い昔の事のやうにしか思はれないのは、ほんとうに如何したものだらう。

『彈力の强いゴム輪の車は、まるで宙に浮くやうれえ、かタ〳〵ゴト〳〵烈しい音をさせる中に、私のばつかりするつと走るのですもの、私一人が地の中へでも消えてゆくやうな氣がして、何だか泣きたくなつたんですわ』

『また彼様ことを仰有る！　ホ・・・・・、でも貴女一人好い事をなすつたんだわ、澪さんも貴女に贔屓があるのかしれない。』



手を延べて、私の髪の花櫛とつて、御自分の前髪の毛の一筋を、幾度もいく度もしごき乍ら、

『ねえ鏡さん、淨さんが貴女に贔屓があるんですつて！』

『あら厭な』

面を反けると瞼が重たい、もう疲勢て、明るい電光に堪へかねたのだ。

『寢ませうよ、幸枝さん！、あらもう十二時過ぎちやつたんですよ、大變靜かだと思つて居たら……』

取り亂した襖下摺ひつくろふて、勢ひよく立ち上つたけれど、ふつくらした長椅子にも心は殘る。

『寢ませうねえ』

『行きませうよ、彼方へ』

脫ぎ捨ての、先刻の被布を小脇に抱へて、上靴鳴らす幸さんと手を組んで、扉を開けると、思ひ出したやうに走せ戻つた。

開かれた扉から、流れ入る冷い空氣！身を震はせて花瓶の下に、散らばつた花片の數を算へて紙に包んだ。

×

……………

圓卓子、ツーブル、ストーブ、窓掛！

昨夜の儘の室に、二人は昨夜を同じ椅子を進めて寄つたあゝ、昨夜のやうに紅梅も散る。

冬乍ら、午前十一時の日光は、可成な光線をガラスに向つて反應させてゐる。のびやかに、隈もなく明るみに浮んだ甕は、恰度、胸張つて朗かに女のやうなものではあるまいか。

幸枝さんは、ぢいつと目を下伏せに、萠を爪先でいぢつてゐらした。

『鏡ちやんにもうお話したかしら、あのお輝さんね、お嫁に行つてよ』

『さう、何日！』

『何日つて、さうねえ、年暮だつたでせうよ、まだ御存じなかつた？』

『だつて一寸も敎へちやあ下さらないんですもの、お輝さんも餘よ。……私お祝ひして上げなくちやあね』

『恥しがりん坊だから倚更なんですよ、大きな癖して』つて仰有るから、

『だつて未だお二十か一位なんでせう、私達より二つとか三つとか上だつて仰しやつたから……』

所在なさに、卓子掛の端を弄ぶ。



『死んだ光江ちやんと一つ違ひなの！　私お輝さんといふと、光江ちやんを思ひ出して仕様がない』

『眞實に夢のやうねえ、どうしてまたあの人が、劇藥なんて呑んだんで せう。……おとなしい目つきが見えるやうよ、みんな仲好だつたわれえ』

『幸さんと光ちやんと私とね、三人は離れまいと思つて居た のに……』

お察しするわ幸枝さん、私だつてこんなだものた、まして氣の合ふた血統！　幸さんの思ふ心が、私より深いと思はれぬけれど、……幸枝さん、光江ちやん、お輝さん、みんな從姉妹つなぎた森家は美くしい人に富む。私今でもよく覺えてゐますよ、年上ではあつたけれど、涙の出る程優しい人であつた、艷々したあの黒髮、紅さすと引き立つて見える面長な顔立や。硫酸に爛れて紫ばんだとは、どうしたつて思へないわ、……あゝ、さういふうちにも う一年にならうとする。

…………

『お輝さんは何處へ嫁つたの』

「矢つぱしネビーの人よ、あの人に海軍なんて向きさうもないわ、陽氣に笑ふこと一つ知らないで ……可哀想ねえ、どつか光江ちやんに似てゐるから』

幸枝さんは、伏せた瞼をぱつちりあける。

『……誰もお嫁に行かなくつちやあならないのかしら……お嫁に行つて了ふと、もうお友達でないやうな氣がするわ、大きく大きく成つて了ふんですもの、……幸枝さん、貴女もさうすると、私の事なんか忘れて了ふ？』

『あんまりよ鏡ちやん！』

恨まれるとは知り乍ら、つひ口走つた一言が泪を誘ふと殊更に詫びもならず。

『私 眠たくなつちやつたの』

つぶやきつゝ、袂を寄せて顔を被ふと、その人のなよやかな膝にくづ折れた。

今まで、腦の底の底の底の、神經に觸れない奥の隅つこに、潜んでゐた睡眠が幽かに生れ出でゝ、疲れたのか、私は其儘眸を閉ぢた。

（完）

藤の花さかりとなれば庭の面に
思ひもかけぬ波ぞたちける　　和泉式部

わが宿の八重やまぶきはひとへだに
散りのこらなん春のかたみに　　讀人不知

手輕い餅菓子の拵へ方

●紅梅餅　並の糝粉一升、白砂糖二百匁に消水三合程を溷じて造る、まづ砂糖と糝粉とを鉢にてよく混ぜ、水を加へて軟かく捏れ、大塊のまゝ濡布巾を敷きたる蒸籠に入れて蒸し、充分蒸れたる頃餅搗臼に投じてよく搗きまとめて、小さき塊に切りて再び蒸籠に移し、また蒸かしたる上、臼に入れ大まとめに搗き上げ餅板の上に載せ、其の餅少々を別にとりて紅を混ぜ、薄く展ばして其の上に前の白餅を載せ巻きて竹輪の如く揉延し、五本の竹を周圍に押付けて、梅の花形とし、庖丁に水を附けて切る、

●紅纓　製造法は前と同じ、たゞ五本竹を用ひず丸棒形のまゝ輪切にする異ひあるのみ。

●素甘　前記の白餅を、青色に染め、簀にて巻きて周圍にぎざ〳〵を附く、さて此を輪切にしたるは「木賊素甘」にして、紅白半々に重ね巻き丸めて切りたるは(木目素甘)なり。

●鶯餅　形色共に鶯に似たるより、春頃の鮮菓子として賞用せらる、まづ餅を搗き、糖蜜を加へて揉軟らげ再び搗きて、浮粉を撒布けたる板にとり、手にて小さく切取りて扁平し、並餡を箆にて掬入れ、二折にして包み、青豆粉を篩掛く、

●櫻餅　道明寺糒に水を加へて、蒸籠にて蒸し、臼にて搗きて砂糖を加へ、前の如く並餡を包みて半月形となし、鹽漬の櫻の葉にて巻く、

●草餅　二種あり、一は並の餅にして他は糝粉を微温湯にて捏れて蒸籠にて蒸かし、刻み蓬を入れてよく搗き混ぜ、前の如く潰餡を包みて木魚形又は編笠形とするなり。

●切山椒　白砂糖二百匁、糝粉二百匁を水にて捏れ合せ山椒汁少しを加へ、(實山椒を熬り、微温湯に漬けて浸出たるもの)蒸籠にて蒸すこと總て前に同じ、さて臼にて搗きたるを板上に移し、麺棒にて三分厚位に展ばし冷したる後ち庖刀にて長さ二寸五分幅三分位に切る、紅白交へたるは頗る佳なり。

●柏餅　糝粉を前の如く蒸して搗き、大塊のまゝ暫らく冷水中に漬けて冷まし、後ち取り出して手にて柔かく揉みつゝ、小さく切り、扁平にして御膳餡を箆にて掬ひ入れ、半月形に折り生の柏葉に包みて、蒸籠内に並べ入蒸し、時々蒸籠の蓋を開けて、團扇にて風を入れ、十分蒸れたる後ち濡簀の上にあぐ、されど東京などにては新らしき葉の得難きより、かれて葉を鹽漬になし、乾し置きて之を用ふ、かゝる時には餡を包みたる餅を、濡れ布巾を敷きたる蒸籠内に並べて蒸し、蒸しあげて後、冷まして葉にて巻く色は白、紅、黄等、味噌餡も亦可なり、地方にては糯粉又は糝粉と混合して作るもあり、青葉ならば包みたる後に蒸す。

●いが餅　花餅とも云ふ、製法は前の柏餅に同じ、只異なる所は、白種の上を黄、紅等にて少しづゝ色どり、形を圓くし、粳の生米の洗ひたるを上面に粘着、さて後に蒸すなり

●大福餅　上糯米を二度搗にし、潰餡を包みて圓形にしたるもの、多くは紅白とす、平燒鍋にて餅面を淡く燒きたるは正式なり、

●今坂餅　製法は大福餅に同じたゞ白餅に並赤餡、紅餅に並白餡を入れ、小判形とす。

●米饅頭　製法は矢張り大福餅と同じ、黄色

にして並木餡を包み、腰高の小判形とせり、古くよりありて有名なり

●幾代餅　短冊形の切餅を金網上にて焼きまはりに並赤餡を塗着したるもの、これは元禄の頃にや、幾代といふ遊女が餅屋の妻となりて創めたるものなりといふ

●餡衣餅　種は柏餅に同じ。搗き上げたる餅を大塊のまゝ濡餅に移し、手に水をつけて餅を小さく切り丸め、上に餡の衣を着せたるもの又蜀黍粉を原料としたるを（蜀黍餡衣餅）といふ

●牡丹餅　糯米を釜にて飯に炊き、餅鉢内に移し、濡手にて揉み混ぜ（擂木木にて搗く法もあれど飯粒潰れて見悪し）適宜の大いさに切りて小判形の握飯とし、漉餡又は潰餡の衣をつける豆粉（砂糖等分塩少許）又は胡麻、罌粟をつけるもよし、餡の色紫色なるが故に牡丹、萩などの形容字を冠せしなり

●鹿の子餅　餅、求肥、羊羹の小切を中身にし並赤餡の衣を厚く被せて丸め、周囲に蜜漬の金時赤豆をつけたるが中（京鹿の子）衣を紅餡となし白隠元豆をつける。

●焼金屯　白玉粉百六十匁に、水七勺ばかりを加へ、次に白砂糖八十匁と寒晒粉二合五勺とを混じ、蒸籠にて蒸して後搗き、浮粉を手に附けて小さく切り、展ばして並赤餡を包み、腰高の丸形とし、別に平焼鍋に胡麻油を引き、餅の上面を押附けて薄く焼色を出す。

●磯の松風　白砂糖二百匁、清水三合六勺食塩少量を程よく解混ぜ、メリケン粉百八十匁を静かに篩入れ泡立器にて手早く泡立たせて蒸籠内に角枠を据ゑ、濡布巾を敷きて、其の中に前の種汁を移し入れ、三十分間ほど蒸かしたる後、簀の上に取り出して冷し、濡したる庖刀にて切る

●時雨　蒸時雨、棹時雨、押時雨、君時雨、黒豆時雨等種類多けれど、最も普通なるは蒸時雨なり、この製法は、並赤餡を鉢に盛り、上を押均し、十字形に溝を入れて、其の溝の中に新引種と食塩すこしとを詰め再びかきまぜて粗めの裏漉にかけ、手の先にて漉し出すこれをそぼろといふ。さて別に白餡の中身を作り型の中にそぼろを押込み、中身を入れ、其の上に亦そぼろを詰めて軽く押固め抜き取りたるを蒸籠内に並べざつと湯気を透す

●鳥羽玉　白砂糖百匁、寒晒粉十匁を混和して鉢に入れ、別に求肥饅頭を作り、皮を濡して右の鉢中に投れ、取り出して、なほ糖粉を振りかく、糖粉を赤く染めたるは「紅鳥羽玉」なり。

●金鍔　小麦粉を微温湯にて捏れ、濡れ手にて少許を摘取り、薄く展べて漉餡亦は潰餡を詰め、包み丸めて焼鍋に載せ（鋼鉄形の平底鍋の上に胡麻油を引く）三本指にて押へて平くし、裏返して両面を焼き、横に転ばせて側面を焼く

●鱗皮巻　砂糖九十匁に水一合混ぜメリケン粉百匁を篩入れつゝ手にてよく煉り、水二合を加へて薄くし、胡麻油を引きたる平焼鍋に角枠を据ゑ、匙にて前の汁を掬ひ滴らし、焦げざるやう布巾の上に取り載せ、餡を置きて海苔巻鮓の如く巻き、庖刀にて小口より切る、もと犬の皮に似たりとて犬皮といひしが、字の賤しきを忌みて鱗皮とせりとぞ

●唐饅頭　銅の平底の焼鍋に、銅製の鋳型を

載せ、種汁を注込み、餡の中身を入れ、また種汁を注ぎて燒く、種汁は白砂糖百十匁、鷄卵七個小麥粉百匁、淸水少量を擂鉢にてすりまぜたるもの

●茶津宇 白砂糖メリケン粉各百匁に淸水五勺を加へて捏れ、とり粉を附けて小さく切り、薄く展して餡を包み、胡麻をまぶし、上面に菜茶を載せて燒鍋にて燒く、

●桃山 ざらめ糖三百五十匁、白小豆漉粉五百匁鷄卵四個を以つて餡を作り(黄昏餡といふ)これに微塵粉適宜を加へ、木型にて打拔きて竈内にて燒きたるもの

●栗饅頭 白砂糖百二十匁、鷄卵五個、水飴十匁、重曹一匁、メリケン粉二百匁、淸水六勺を捏れ、切りて栗餡を詰め、テンパン鍋に並べ、上に刷毛にて味噌汁を塗り、竈内にて燒く

●開華饅頭 製法前と同じ、たゞ栗餡を赤豆餡に代へ、味噌汁の代りに卵黄液を塗るを異なりとす、

＊　＊　＊　＊　＊

蒸物の拵へ方

●鯛のケンチン蒸 鯛を水洗にして水氣を拭ひ、頭を左に腹を手前にして爼板に載せ、よく鱗を去り、庖刀の尖にて鰓を除き、脊より表裏共に庖刀を入れ、腸と中骨とを去りて水洗し、再度布にて水氣を拭ひ、胸骨と小骨とを骨拔にて拔き、醤油の中に浸し、三十分間程經て引き上げ、醤油氣を拂ひ、その中へ炒豆腐を詰め込み、截り口を元のまゝに合はせ置き、手早く蒸籠の中へ竹の皮を敷き、蘿蔔を小形に切りて魚の枕とし、その上に右の魚を列べ、湯のよく沸きたる時蒸籠を載せ、蓋をして三十分間蒸し上ぐ、また大鯛ならば三枚に下ろし、更におろし身として、直ちに醤油の中へ二十分間も浸し置き、引上げて醤油氣を拭ひ、爼板に置き肉と皮との間を刺身庖刀にて切り開き、その中に炒豆腐を詰め、切り口を合せ置き、蒸上ぐるなり、炒豆腐 生豆腐と水とを共に鍋に入れ、火に架け、一と沸騰せしめて後火に布巾をあてゝその中におけ、十分に水氣を去りて鍋に移し、程よく煮出汁と砂糖と醤油とを加へ、杓子にて攪拌し乍ら汁氣の煮減る迄炒上げ、蓮根、椎蕈木耳、胡蘿蔔など細く切り、ざつと煠でゝ、味淋と醤油とにて煮附けたるを混ぜ、これに鷄卵を割込み、よくかきまぜて詰め込むなり。

●烏賊の五月蒸 烏賊の足を拔きて甲を除き、指頭を腹中に入れて腸を去り、水洗して頭より皮を剝き、鍋に湯を沸かしてその中に入れ、ざつと煠で上げて目笊にとり、水氣をきりそれより別鍋に、砂糖と醤油とを程よく入れて火に架け、沸騰するをまちて、右の烏賊を入れ蓋をせずして煮付け、直ちに鍋を下ろして笊に揚げ、汁氣を去りて腹中に炒豆腐を詰め込み、蒸籠に竹の皮を敷きてその上に列べ、前の手順にて蒸し上げ、豆腐に火の通りたるを度として取り出し、手早く團扇にて煽ぎさまして適宜の大いさに輪切りにす、また足を細かに切り、豆腐と共に炒り附くるも可なり

文殻

ゆかり

上之巻

御うはさはかねぐ〳〵承り居り候ひしかど何となく憚おほく存せられ候ひしまゝ唯今まで御あいさつも申上げずさしひかへ居り申候こと御無禮の段あしからず御ゆるしたまはり度候。

十年の永きとし月をおもひおもはれたまひし御仲らひの今ぞ全くうち絶え給はむとすなるお二人さまの初こひのなりゆきのいかばかりおいたはしき御事かとまことに〳〵御同情の涙にくれ申候げ



に一度ちりにし花の泥土に委しては再枝にかへるよしなく二度咲く花はまたもとのものにも候はねば清さま御心にはいかに口惜しき生涯かとなげかせられ候ことならむと不束なる身にもその邊の消息はよく／＼推察いたし居申候もと木にまさるうら木なしとかや俗にも申候通り清さま一生の幸福は才貌ともにおすぐれ遊ばされ御心ばせさへ並々ならずめで度き御許様の如き御方と圓滿なる家庭を御つくりなされ候ことよりほか御座なく候ものを憎くやつれなき浮世の義理は飽きもあかれもしたまはぬ御仲を無慘にも引きさき候ことかへす／＼いたはしきかぎりにぞんじ上候かくまでも御むつましきお二人様の間に私ごときふつゝか者の縁ありてや結婚といふしがらみもてこゝにいよ／＼お二人様の仲をへだて候こと心のうちの苦しさは一方ならず日夜安き心も御座なくひたすら吾身の罪ふかきをかこち人のうらみのいつかは報い來んかと末おそろしく候へども露しらで理想とやらもおこがましけれど皆人に羨まる身の上となりにしよと銀燭まぶしきその夜の胸の高鳴りも今更にうらめしく候嘸かし御許様とても本意なき生涯かなとおなげき遊ばされ候御事ならむあゝ今はいかにしてかおはしますぞ「君がこと思ひ出ては古き文殻にそのかみの甘きゆめくりかへしておはするはた妾をにくきものとやうらみておはする」など清様に語りいでゝは「もうよせようるさい」と常になきあらきお言葉もさてはまた嫉妬の念にはしたなうおもひあまりてうちいでしと邪推やしたまひけむあなうとましきことよさることはかりそめにもなきものをといひあらがはん勇氣もなくせぐりくる涙口惜し涙か何かはしらず候へどもじつとこらゆるせつなさ妻といふ名もくるしきものとさとり申候へ今の私の立場こそ誠に誠に心くるしく清さまにも御許様にも相すまぬ心地のみいたしやるせなき板ばさみにくるしみ居申候朝な夕なの切なき心つくしもていたで負ひたまひし我最愛の夫のその傷の癒えたまはんやう祈り居り候へども人の世の命ともいふべきハートのなやみはつたなき妾の甲斐なき手にはいかんともせんすべなく妾が頰の紅の色

は一と日〳〵にあせゆき申候。
さらば茲にいさぎよく自ら身をしりぞきてお二人様のために圓滿なる戀の解決を遊ばされ候やう力のかぎり御つくし申上げん妾はあゝ妾はこの頃見るものを見ぬやうになりにし故たとひ夫には空蟬のもぬけのからの愛なりとも我身には再びとなき若き鮮かなる血しほのわきたぎる生命を永久につたふべき寶なれば男の子にまれ女の子にまれ此世の光にあはんをまちて（未練とな笑ひたまひそもし今のまゝに縁の糸をたちては世の人の口はともあれ最愛の君にさへうたがはれ



んことのおそろしければ）そをかたみにいたゞきていつくにかさすらひ出でんと幾度か決心いたしこの事情様にも申上候ときたゞ冷かにうち笑ひたまひて「それにも及ぶまいさ」とは何等張合なきお言葉かとうちなかれ候いつそ「勝手にせよ」と仰せ下され候ふか「いや〳〵何はともあれその腹の子は我が種なるぞ」と熱烈の血の通へるお言葉こそきゝたしと願ひ居り候ひしものを御許様にはあのやさしき熱情なる君の妾に對してはかくまで冷たき死灰の如き言葉をかけたまふと知らせ給はゞさだめし一種の誇をや感じたまふらん

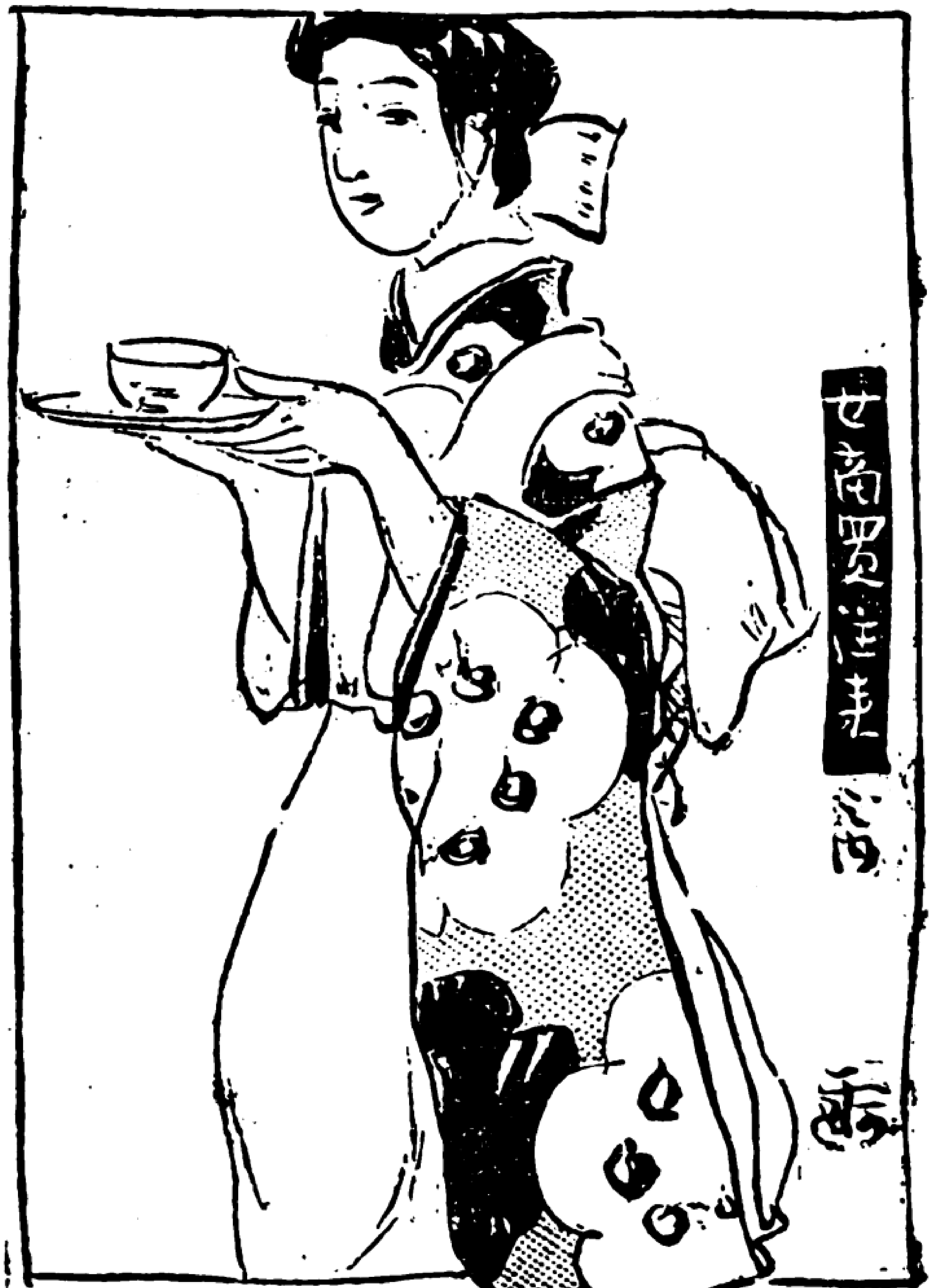
と邪推ざへいたされ候ゆるし給へざる意地わるき君にましまさぬことも濟さまより度々承りぬれど

今妾が身を退きたりとてたゞ益なきつらあてのやうに見え申候のみ赤心こめて夫の君の心の内に同情しまゐらせて相愛の君との御仲をつながせ申候とも地位ある夫の身に却てよからぬ名を負はせ申すのみ妻を離別してなどうたはれたまはんもつらく候それももとの和歌子樣ならばとにかく今はすでに御縁談もよほどすゝみて御許樣御母上樣の二つなき御縁邊とて御よろこび被遊候由も承り居り候。

先頃もふと夫の書齋にて見出でし古日記に和歌子!!!和歌子との文字は一日たりともかゝれぬはなく舊き思ひ出新らしき追憶と夫の君が唯生命のやうに愛でたまへる樣子のあり〳〵と目前に浮び候につけてもさりとは御羨ましき御許樣の御身の上にも候かな清樣の純の純なる初戀は皆御許樣にさゝげられしことなればその熱烈なる血しほの高鳴る胸にすがるとはとても〳〵此世にてはかなひがたしと覺りたる我身のうらめしとも恨めしく候さはれそは愚痴に候はん御許樣の身よりは私こそ幾十倍も羨ましきものに映じ候はや心はとにかく其肉體は私が占領いたし居り候なればあはれお二人樣とも宿世あさき緣なりしとおあきらめたまはり候やう私の身としては無理にも御願ひ申上候何卒〳〵理否にさとき御許樣のひろきみ心にたよりまゐらせてかくも身勝手なるお願ごといたし候まゝあしからず思召たまはり度候また幸福に似てさにもあらざるふつゝか者にも一片の御同情たまはり度願上候この後は何卒々々御へだてなくまことの姉とも妹とも思召し足らはぬ所はあくまでも御いましめたまはりまた私身にかなふ事ならば何なりとも御相談たまはり候て憂きふしゝげき世の中を清く安らかに送り申し候はんはせめてものなぐさめかと愚考いたし居候御同意遊ばされまじくや。

また清さまも口にこそうち出で給はね御許樣の御前途のことを御心配なされ候ことはいとしるく候御許樣結婚は絕對に心に染みずとてこのまゝ若き女盛りを空しくおすごし遊ばされ候てお一人の母上樣の御心配を

よそになされ候はいかゞのものにやもとより淺はかなる考よと御さげすみ遊ばされ候かは存じ申さず候へども女の獨身は若き内はともあれ老いての後の心細さもまた輕々に看過すべき問題には御座なく候事かと存せられ申候また結婚のことは年齡のあまりに後れ候ことは申すまでもなく好結果を得ることかたきものに御座候はずや決して〳〵お指圖がましきこと申すにては御座なく候へども御許樣いつまでも御獨身にておはしますかぎりは清樣も常に心にかゝりて忘れがたき事と推察いたし申候かつまた私もいつ〳〵までもおい



たはしと存上候て相すまぬことゝ心くるしく感じ申すべく候もとより御許樣の御心事御結婚遊ばすが果して幸か不幸かはた現在のまゝにておはしまし候が幸福かは神ならぬ先見の明も御座なく候へども結婚も亦人としての世の中の渡り樣の普通事なれば御母上樣や知人のおすゝめにおまかせ遊ばすもおよろしき處置にはこれなきかとひそかに考へられ申候まことに〳〵初めての御見參にもかゝはらずかくまでも不躾にいろ〳〵立ち入りて申上候ことさだめし失禮者と御立腹かとも存上候へどもはじめよりお他人樣の

やうの心地はせず眞實の同胞のやうに親しくなつかしくげに紫の一もとゆゑにむさしのゝ草はみながらあはれにおもはれ申候て清さま親愛の御許樣などてなつかしからでやは候ふべきげに〳〵身をつみて人のいたさぞしられける戀しかるらん戀しかりけりとつゆへだてなく御許樣なつかしう存上居候まゝかく心安だてにて立ち入りておはなし申上ぐるにて候。

さてはこの書狀と共に御送り申上げ候帶地一筋まことに粗末なるものには御座候へども色合や柄などさだめしお氣にも召したまふまじけれど姉妹のちぎりのしるしにと御送り申上候まゝお嫁入りの後の御ふだんにも遊ばされ候はゞいかに嬉しう候ふべきもし御受納遊ばされず候はゞ折角の心つくしを受けさせ給はぬかとおうらみ申すべく候まゝまげて御受納下され度候。

時下日に〳〵陽氣にうちむかひ花のいろ鳥の音にも昔しのぶの御思ひ出にせつなきこともおはさんと存上候へども何ごとも夢の世の夢とさらりとおあきらめ遊ばされ御大切なる御身御母上樣のおためにもおいたはり遊ばされ候て必ず〳〵新生面に御發展遊ばされ候やうかげながら祈り申上候かしこ。

三月六日　かつ子

和歌子樣

なほ〳〵かゝる文は人目にふれ候ては一期の大事と存じ候まゝ必ず〳〵お燒すて給はり度く願上候。

中之卷

御返事をかきかけては消しましたかきかけ何といふ思ひきりわるい我身かとほんとにあきれましたいつそだまつてこのまゝに人の情を身にしめてかげながら潔い決心を末永く見ていたゞかうかと思つたりいや〳〵それではなほあのおやさしいかづ子樣（御めん下さいましお姉樣といはして下さいませ）が何のやうにお心をおいため遊ばすかもしれんあゝいふもうしいはぬもつらし我心の奥一と通りお耳に入れまする如何におもへばとて世の義理にはかたれず何時までもかくてあるべきにあらねば一日も早く清樣御改心の程をいのりたり

し甲斐ありていよ〳〵御結婚遊ばされしとき丶御兩親樣およろこびはいはでもの事數ならぬ私までもいかばかりか安心いたしましていつ棺桶の蓋をおほはれてももう〳〵これで思ひのこす事もない只この上は奧樣を私とも思召して永遠にかはりなき御方の溫き御貞操を祈りますとは清樣への最後の言葉で御座いました。

三十四年の八月十二日よりひらかれし悲劇の幕も十年の今全く終りをつげました思へばやはり世の常の芝居にすぎなかつたのでなんとなくあさましい氣もいたします私は生命にかけて戀をしたいと思ひますわ。たとへ義理と義理の板ばさみとはいへそれなら思ひ切てくれといふやうなあきらめさせをいはれぬまでも事實に於て男の方は結婚してしまつてそしてその妻にまでもいろ〳〵と心配させ自分も氣まづい思ひをしては一生涯がさぞつまらなからうと思はれますのいえこれは私の邪推ではありませぬ清樣はほんとにやむを得ぬ義理で私を思ひきり遊ばしたのではなくてもうあなた樣と御結婚遊ばす前にもう私はとくにあなた樣に見かへられて居たので御座いますのそれでもやはりいまゝでの關係から急につれなくもならずたまに



はやさしい手紙も清樣からもらひましたなれどそれを私はほんと〻思ふほど單純ではありませんでした。かづ子樣あなた樣は清さまがつれないと仰せられますがそれはきつとあなた樣のおひがみで御座いませうあなた樣がこの和歌のこと仰せらる〻たびに「うるさいつ」と仰せられるのはそのはずほんとに和歌子といふ名がもういやで〳〵たまらないので御座いますよ御安心遊ばせよ清樣はもうすつかりあなた樣の御良人ではありませぬか和歌はもう路傍の花だつたので御座いますよだからお二人樣の千年の御壽命をかげながら祈つて居るのみで御座います今迄はとにもかくにももうもう清樣へは手紙をさし上げませぬこれも御安心あそばされませおほ〻まして清樣と途中であつてもしらぬふりするともきつと受け合ひまする申す必要はありませぬもの。それから御志こもりし御帯地まことにまことにお有り難う御座います之が清さまからの贈物なれば決して〳〵手もふれませねどお姉上樣からの御たまもの故有り難く〳〵いつ〳〵までも紀念としていただきますあつく御禮申上ますされればこそきつとお嫁入りに結びますから見て居て下さいましよえ〻あの緣談ですか早くもお耳に入つたもので御座いますねもう母の意見通りにまかせませうと存じますこれも心配下さいますな私ももはや二十四ですものおほ〻獨身なんか通しはいたしませぬから御安心下さいませね私の心の奥はまあざつとこの通り今はもう未練もなにもありません新生命をひらきますからまあ御らんなされて下さいまし。しばらくにてもおやさしいお姉樣のお心をいためましてまことにすみませんでしたこれからはお言葉に甘へ眞實の妹としてお見すてなくお可愛がり下さいませ申し上げたいことは胸にいつぱいになつて思ふやうに筆がまはりかねますとりあへず一ふで御返事申上ます。あの末筆ながら御大切なる御身ことにおいたはり遊ばされ可愛らしき坊ちやまをお生み遊ばされますやうくれ〴〵祈上ます左樣なら。

三月八日　和歌子

御なつかしき御姉上樣

下之巻

いそぎ候まゝ亂筆にて申入候一昨夜清様宅の裏口よりおいでなされ和歌子に一寸逢ひたきよし仰せられ候まゝ一まづお入りなされ候やう申候ひしがいそぐ故とのことにさらばと娘に申きけ候ひしに和歌子も心もとなげにしてその方に參り候しばし立ばなしいたし別にかはりし模様もこれなく候ひしが何ごとなりしと相たづね候へば別に何ごとにてもなしと答へしのみ私もふかくはたづねもいたさずそのまゝにすごし居り申候に昨朝めさめ候に和歌の姿を失ひ申候知人のかれこれききあはせ候にいづれもしらずとのみさてはいづくにゆきしかと上を下への大さわぎいたし候に手箱の内に書置二通一通は私へ一通はかづ子様と清様とへあてに候何ごとの書かれ候かは存じ候はねどもこの手紙着次第別封御披見下され候やう又その趣き早速御知らせたまはり度候私への申しごとはくれ/\も不孝を詫びてこの度の結婚はおことはり申しては母様の義理もかけぬべしされど私の心の意地もたてたくしばらく身をかくすとのみ又決して後を探したまふな何年後にいたりて歸宅いたし候やら或はこのまゝに死別と相なり候やら相分り申さず候故決して心あてにせず妹の由美子を我身と思ひていたはりくれよとこま/\しるしあり候されど何故にかくつきとめしこと仕出しかと其わけさへも相分らず實に/\かなしみに胸せまり申候とにもかくにもお二人様へあてたる書置にくはしき事も候ふべければ御らん遊ばされ候上御迷惑様ながら御出で下されよろずの御處置おさし閊下され度御願ひ申上候くれぐれもお早くお出まし下され度當惑のあまり御相談申上候まづはとりいそぎ要用のみかしく。

三月十一日　順子

清様御夫婦様

御もとに

頰白なく山家の花や茶摘晴れ　禾水

日に當てゝ收む蠶箔や梨の花　水紫

普茶料理

普茶料理はしつぽく料理の精進にして、これは黄檗の寺などにて古くより行はれたり、普茶とは精進のしつぽくをいひ、禁酒の時は茶で用ふ、故に普茶饗應といふ、卓子、木皿、等の配置ほゞしつぽく式に似て椅子を用ひず、六角形の座布團を設け、これに座して卓に向ふ、そが料理の珍らしきを賓客への馳走として茶の湯、會席に用ふる興味又尠からざるべし、その順序は左の如し。

△煮花　まづ客に菓子を出し風爐の火を直し、湯瓶に水を入れ、中を一遍洗ひ、壺にその湯をこぼし右の器に、葉茶を入れ、沸りたる湯をうつし置き、暫くありて茶碗を取り出し、銘々盃に載せ、獨服にして出すべし、若し茶味薄くば、その器を火にかけ、暫しありて出すべし、但し暇を取らざるやうに喫して饗をすべし、こゝにて來客を待ち合すべし。

△蘭茶　蘭の花を採り湯をよく沸立て、その中へ入れて、その儘引きあげ、又蜜の中へ入れ置き、茶を出す時、猪口の中に花一つ入れて出す、その上へ、茶を注げば蜜に閉ぢられて蕾みし花、忽ち開く、而かも其香馨しきなり、

普茶はまづ菓子と小菜とを並べ、猪口と箸とを添へて出すべし、次に茶を引くなり、茶はその猪口に受けて飲み、菓子小菜を食して、ゆる／＼飲むなり、茶四五遍も過ぎなば煮菜を二三種出し、その次に小食の饅頭か、菓子を二三種その馳走の多少により出すなり、客は四人五人乃至十人に限らず相合ふて食ふなり、菜の多少は其時の馳走によりて一定せず凡そ煎菜十種ならば小菜も又十種なるべし、生菜と菓子とは皿に盛り、煮菜は大丼に盛り、人數多き時は鉢に盛るべし、

普茶料理の仕様

△從類――材料は人參、牛蒡、栗、椎茸、麪筋、青菜、豆腐人參、牛蒡、栗を針に切り、椎茸、麪筋も細かく切り、青菜はみぢんに切り、豆腐は一挺を十二に切りて油にて揚げ、一切を二枚に切り、又細かく切り右の七種を合せ一升ほどにつき、油七八勺ばかりをよく煮立て、まづ人參、牛蒡、青菜を入れてよく煎りつけ、後ちに、椎茸、麪筋、豆腐、栗を入れてその儘引あげ、後ひろげて右の煮たる品々を高さ四五分に

長く置き、巻きて其留めに水にて葛粉をときて塗り、又油にて揚げ、厚さ六七分に切り生菜の中にある巻煎酢（酢と醤油とを合せ卸生姜を入れて漉したるもの）をつけて食すべし。

△豆腐巻＝牛蒡、木茸を針に切り、油にて煎りつけ、豆腐に葛粉少し交ぜて摺鉢にて摺り、麻の實を入れ、よくにぎりまぜ、玉子の如くに丸めて油にて揚げ、醤油にて少し煮るなり

△砕豆腐＝豆腐をよく砕き青菜をみぢんに切り、凡豆腐十挺に付油二合ほどよく煮立て、まづ豆腐を入れ、幾度もかき廻す、よく煮えたらば青菜を入れて又幾度もかき廻し、醤油にて味をつけるなり。但し青菜と豆腐とは等分にすべし。

△酢菜＝牛蒡、三つ葉、人参を針に切り、麺筋を細かく切り、右の四品を水煮にして、さて酢と醤油とを合せ、鍋に入れよく煮立て、右の牛蒡などを入れて煮るなり。

△煎麺＝麺筋をよく煮て摘み鋏に切り、水を絞り取り、さて油少し沸立て置き、まづ生姜を摺り入れ、次に麺筋を入れて煎りつけ、次に醤油少し入れて炒りあぐるなり。

△梅甘＝梅干の皮を去り氷砂糖を加へ、摺りまぜるなり、或は蓮根か梨子などを和へてもよし。

△菜尾＝青菜を少し干して塩につけ、三十日ばかり經て蒸籠にて蒸しあげ、又よく干して置くなり料理する時煮るか、又は熱き湯につけてもよし、さてよく洗ひ細かに切り、油にて炒りつけ生姜油揚などを短册にきりて入れ醤油にて味をつけるなり。

△芋巻＝つくね芋をとろゝの樣におろし、それをよく摺り葛粉を入れて又よく摺りまぜ、鍋のはだに胡麻油を少しぬり右のすりたる芋を少しづゝ掬ひ入れひらめに延ばし鉄焼のやうに焼くなり、これも醤油にて煮汁を拵へ置き、つけて食す

△胡麻豆腐＝白胡麻の皮を去り鍋にて炒り、胡麻一升水一升二合葛粉五合入れ、糊をねるが如し、箱に流し込みさまして後一寸ほどに切り、醤油にて汁を拵らへ置きつけて食す。

△饅頭＝メリケン粉をこれ、皮のやうに打のばし、それへ茶碗をふせて丸く取り、其中へ胡麻砂糖の餡を入れ湯にて煮これも醤油にて汁を加減し置き出すべし。

△唐揚＝豆腐を小く切り、油にて煎りあげ、側の鍋に湯をわかし置き、それへあげてつけ、それにて直ぐ煎り、醤油にて加減するなり。



薄命の人

夕美子

十一年の孤獨を淋しく逗子の濱近い別莊に、あけくれ涙のうちに送つてゐらした母樣、お胸の中はまあどんなで御ざいましたでせう、今思つても涙がこぼれます。幸うすい母樣から生れた私は、やつぱり多幸の兒ではありませんでした。

たしか私が五つの冬だつたと思ふ、雨のザア〱ふつた晩、母樣はねむつてゐる私を抱いて、はつをつれて人知れず潮の香むせぶ逗子の別莊へ……。

それきり湘南の人となつて濱邊へすらお出ましなく、一日床の上でねたり起きたりしてゐらした。

元より病身な母樣なので、私は氣にもとめず、たゞもう淋しくてさびしくて、風のひどい夜などは、波の音におびえて、東京へかへりませう〱つて、何度も泣いてさわいだ。その度に母樣は、

『あや子が今に學校へゆくやうになつて、母樣の病氣がなほればかへるのだから、おとなしくしてゐるのよ』つておつしやつては、熱い涙をハラ〱こぼしてゐらした。

その頃は、まだ母樣の涙のわけもわからず、ふしぎに思つても、それをきくだけの考へはなかつた時によると終日夜具に襟をうづめてればかりゐらつしやる日もあつた。そんな日は、私はもう淋しくて〱、枕邊をはなれず、子供心にも慰めるつもりなのか、おもちやを枕もとにいつぱいかざつて、自分が病氣の時にされるやうに。

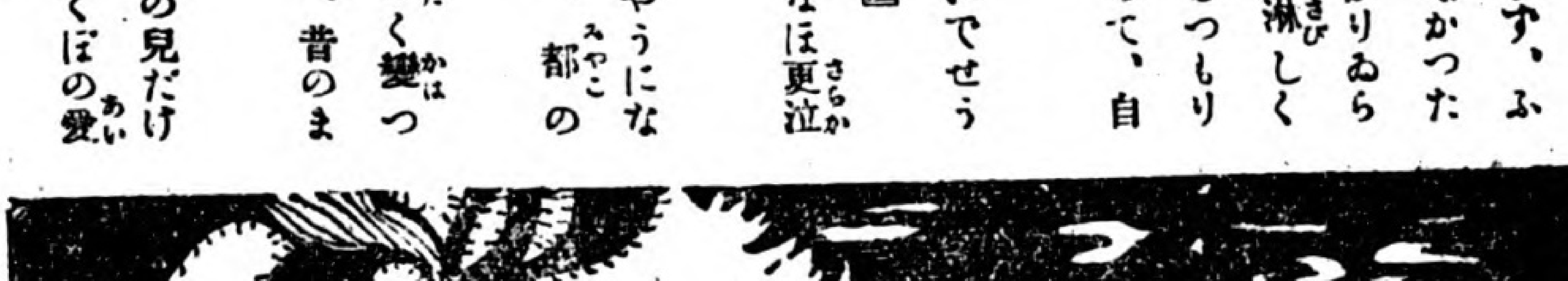
『これがニャ〱よ、これが人形さん、こわいでせうおとなにしてゐれば病氣はすぐになほるのよ』

こんな罪のないことをいつては、母樣をなほ更泣かせてをりました。

やう〱母樣のお身の上のすべてを知るやうになつた十五の春、私は母樣のみ膝をはなれて、都の人となつてしまつた。

十年あまりも足ぶみしなかつた本宅は、全く變つて、幼な心におぼえのある庭の櫻だけは、昔のまゝにうるはしかつた。

おないどしだつた美枝子、容色を賣る人の兒だけあつて、さすがに美しく、兩の頰によるゑくぼの愛らしいこと、庭の櫻にもまして美しかつた。





永の年月濱邊に生ひたつたみにくい姿の私などは、どうしてくらべものになれよう。父様はたゞもう美枝子〳〵つて大さわぎ遊ばしてゐらつしやる。美枝子と反對に、私は全く日蔭者となつて涙の袖しぼらぬ日とてはなかつた。私はくやしい、ねたましいと思ふにつけても、たゞもう母様戀しくて、片時も忘られなかつた。

土曜から日曜へかけて、いつも兄様と一緒に母様を訪づれた。その日ばかりは、奥様のさえ〴〵したお顔がみられるつて、はつもよろこんでゐた。樂しい日もくれて、かへる時になると、母様は、『もうかへるの、今度はもつとはやく來ておくれよ』つて名殘りをしさうにおつしやる。

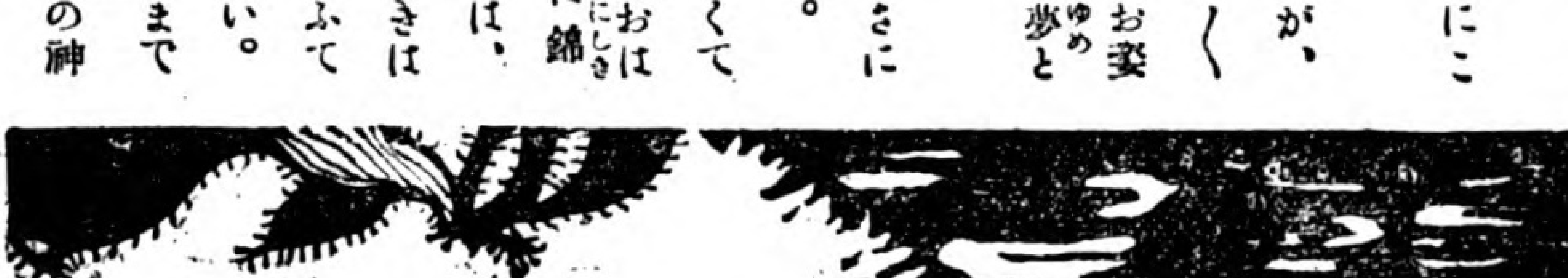
ステーション近い家は車窓からよく見える。縁にたつ母様の淋しいお姿のみえなくなるまで、兄様と二人で一生懸命にハンカチーフをふつてお別れするのが常だつた。こんな事が幾度か續いた其の年の秋、コスモスの垣に音もなくハラ〳〵とこぼるゝ夕べ、いとほしの母様は亡き人の數に入つておしまひになりました。冷めたい母様の亡きがらにとりついて、兄様と私はさん〴〵泣きましたさすがに臨終の枕邊には、父様もゐらして、お眼には涙さへひかつてをりました。

悔悟の涙？ あゝおそい、なぜ〳〵息あるうちにこの涙をみせて下さらなかつたらう。

つきせぬ恨みを抱いて、お逝きになつた母様が、この涙の一滴でも御らんになつたら、どんなに〳〵滿足遊ばしたらうに……。何年ぶりかの父様のお姿もお目にかけたかつた。あゝもう何もかも昔の夢となつてしまつた。

母様逝いて今年で十二年目……、母なき淋しさに泣きくらした私は、もう三人の母となつてゐる。

昔に變る今の我が姿、物質の望みは得られなくても、夫の愛を一身にあつめる私の幸福を、母様おはさば、どんなによろこんで下さつたらう。身には錦の衣をまとひながらも、夫の無情に泣いた母様は、ほんとに哀れだと思ふ。三人の兒の瞳のかゞやきは何千のダイヤのそれよりもより美しい我身を思ふても、母なき兒ほどいたましい。哀れなものはない。私はどうしても初子、次子、多喜男の成人するまでは、石にかじりついても生きてゐたい……。運命の神よ、兒等の上に幸多からしめよ。



幸なき兒

義兄樣失せ給ひてより、三年和坊も五ツになつたのでいよ／＼、今日は約束どほり、大村（兒の實家）へやつてしまはなければならない。迎への人は朝から來てまつてゐる。時刻は容赦なくどん／＼うつてゆく洋服にきかへた和坊は、何も知らずに活動寫眞にいくのだつてとびまはつて、ひとりでよろこんでゐる。

再びあひがたき和坊を、姉樣はひしと膝に抱きしめて、

『遠くへいつても母さんを忘れないでおくれよ』。涙は雨のまぶたをあふれてゐる。和坊は

『いやだあ、遠くへいくのはいや、活動寫眞にいくんだあ』、つてあばれてゐる。

いつまでもかうしてゐても同じこと、ながくおくほど別れがつらくなる。思ひきつて車にのせると、和坊は

『母樣もこなくちやいやあ－』つて泣き出す、とたんに、轅棒はあげられて、和坊のわれるような泣き聲を殘して、ゴム輪は音もなく消えた。

兩の袂かみしめて泣きくづれた姉樣のいたましいお姿！

『なあに、丈夫でさへゐればまたどこでめぐりあふかもしれないのだからかなしむことはないよ』‥‥

こんな強そうなことをおつしやる母樣のお眼にだつて、涙があり／＼とみえてゐる。

『今頃はさぞ泣いて入らしやいませう、お可愛さうに』つて、なつは聲をあげて泣く。

やさしい夫に逝かれ、今また最愛の兒をうばはれた姉樣のお胸のうちを思ふと、かなしくて／＼、今までおなげきをますばかりとじつとこらへにこらへてゐた私も、たまらなくなつて、姉樣のお膝にすがつてさめ／＼泣いた。

まだうら若い御身‥‥

こゝかしこからの緣談に耳をもかたむけ給はず、今は遠い西の國で、父母なきあはれのみなし兒の母とも姉ともよばれて‥‥、はかない月日を送つてゐらつしやいます。

其後和坊はどうなりましたやら、今日此の頃は音づれもたへて、木曾の深山路に生ひたちゆく兒のゆくゑも、わからなくなつてしまひました。

あはれ幸なき兒！　健在なれ――。



思ひ出づる『ノラ』試演當日の苦しみ

松井すま子

九月二十一日――四十四年

『ノラ』の稽古には三ケ月近くも續いて、いよ〳〵明日から三日間試演する事になつた。今日は其總浚ひを兼れた舞臺稽古の日なのである。舞臺稽古とは言ふものゝ、普通の劇場のそれとは違ひ、悉皆本式にやるのではあるし、それに見物人も招待する事になつてゐるのだから油斷はならない。

朝御飯をすましてから協會へ行かうかと思つたが、少し時間が早いので、昨日讀みさしの『歐米劇談』を繙いて、例のナシモヴの『人形の家』の型など、もう一度頭の中に描き度いと思つて、讀み始めた。少し讀んで行つて、自分と舞臺との比較が湧き出すと、さあもう前へ進まない、彼處であゝして、かうしてどうも力が足りないからあんな呼吸は迚も及ばないなどゝ想像を運らす――と、目前に、頬杖ついて側目もふらず監督してゐらつしやる島村先生が浮ぶ。いつも紙卷を手にしてお鬚を弄る中村先生が浮ぶ。汗たら〳〵になつて突立つた對決の場な

どが、それからそれへと走る。

どう氣を落着け樣としても、今日の試演か氣になつて、何かそわ〳〵して本も讀めない、あゝこんな事はいけないなどゝ思ふと、ぼかんと外を通る車の音に聞き取れてゐたりする。まゝよと身仕舞も手輕にして、協會へ行く。

『いつもながら、お早うございますね。今日は私の方も支度で以て大騷ぎ……』と忙しさうに椅子を列べたり、遊園を運びながら、小使の爺さんが慰め顔に、言つて呉れる。

昨日から定められた、舞臺裏樂屋の女優室に入つて、ヌランテラの踊衣裳を縫つたり、念のために小道具などを數へて見たりした。

室に慣れない故か矢張落着がない。少し後れたリンデンさんと話をして見ても、それが何うも傍道へ外れていけない。素人の所爲か、夫とも『ノラ』に付き纏ふ種々な幻影が威嚇するのか知らなどゝ、餘計な妄想ばかり湧き出る。

鐵格子の窓に背いて立てられた鏡臺に對つて、兎も角も顔を粧にかゝる。襟に手拭を掛けて、クリームを塗り込んでゐる時、急に障子が開いたので、振り返つて見ると、東儀先生は最早クログスタッドの顔にちやんとなつてゐらつしやる。

『あら、お早いんですれ。』

『どうだれ好いだらう。――もう掛つた方が宜いれ』と言つて、丁度そこへ來合せた子役のお眞ちやんとお清ちやんを連れて、頭師の方へ靴の音を立てながいらつしやる。

お庭を往來する植木屋が、ニヤ〳〵笑ひながら、二三人通つたので潛り戸を閉める。

二時半開場と云ふのが、ついのび〳〵して三時半頃漸々寫眞を取り始めた。

飯倉の廷達にも是非來るやうに言傳してやる事は遣つたけれど、もう來たか知ら、と一寸氣恥かしい氣もした。

畫面も形で寫眞を寫す爲の幕が明いた。

見物席には、三臺も寫眞器が待構へて居て、ぱつとマグネシヤを焚す。

四時になつて、序幕が開かれた。

開幕のベルが、鳴り終つて、ツ、ラ、ラツララ、ラと唄つて舞臺へ、始めて出る迄の心持と言つたら、迚も言ひ樣のない心配であつた。

三幕目の踊衣裳――人形の衣裳から普通着に着換へる所は、リンデンさんと衣裳屋さんの二人が手傳つて呉れたので、やつと間に合つて着換へる事が出來た。

やつとの思ひで、ノラを了へた。出來不出來を考へる間も無く、私は又次の『鉢かつぎ』に出る宰相の支度に掛らねばならない。

口の輕い床山さんは、ノラが『人形の衣裳を脱ぐのですよ』と言ふあの白を口眞似しながら棒茶栓の髮の合引をしめて居る處へ、島村先生だの、中村先生だの、二三人の方が見えて、『今日は何うしたのか譜

古の時程旨く行かなかつたが、少し焦つてゐやしなかつたか』と注意して下すつた。

私はもう始めから氣付いては居たが、それが何うにも仕樣がなかつたのである。さすがの雲雀も餘計悄氣てしまつた。

『鉢かつぎ』も目出度く幕になつて、再び寫眞を取直すために幕があいた。

人々は大方歸へつて、今は所々に居殘つてるばかりである。私は今迄一心になつて忘れて居たが、姪が待つてるか知らと見物席を搜した。舞臺から見下すと馴染の顏が直分つた。二人は半ば歸り掛けた樣な 落着がない樣子で、柱の影に寄つて、此方を見つめて居る。それと私の顏がぴつたり合つたので、なるべく他へ分からない樣に、「待つて居て」と合圖をした。

二人もそれに答へてうなづいた。

樂屋へ入つて、衣裳を脫いだ時、『ほらッ此汗ッ』と言ひながら、ビッショリしめつた襦袢を手に取つて衣裳屋さんが見せる。

『まあ』と一寸見た丈で、大急ぎに出て來て見ると、二人は玄關の處に待兼ねて居た。

『ねえ、意地の惡い雨だわね』と恨めしさうに外を見ながら言つた。

氣が付かなかつたけれども、隨分降つたらしい。

路の惡いのに大久保邊は暗いので隨分步き難い。途中で幾度かの歸り車に逢つた。大方今晩の見物の方を電車まで送つて行つた歸りなのであらう。

肉身の心易さ、すみちやんに手傳つて貰つて押入から有るたけの蒲團を出して、

『サア、これだけを何にか布いて、三人が寢るのよ、何う布いたらいゝでせう？』

有るたけと言つても、三布が二枚に搔卷、夜着、それに掛蒲團が一枚仕方がないから、三布を二枚並べて布いて、誰か一人中央の合せ目へ寢る事にして一枚で、『身體が少し位痛くつても我慢するのよ』と笑ひながら言つた。そしてすみちやんは搔卷を、私と喜美ちやんは掛蒲團を引張り合つて寢る事に決めて、蚊帳を釣る。枕も一つしか無いので、これは私の普通帶を、ぐる／＼卷きにして、風呂敷に包み、其上にまた手拭を捲きつけて、どうやら枕も揃つて寢る支度がやつと出來た。

その間喜美ちやんは寫眞箱を持出して、葡萄を食べながら、いろんなのを引出して、

『あらッ何んて好い格好なんでせう』とか、『まあきれいなお方ね』なんて、獨言とも付かない樣な事を言つてゐる。と突然、

『アッ姉さん／＼。此方女學館の××樣によく似て居るわね、一寸來て御らんなさい――よう姉さん』、なんて言つては、今蚊帳を釣り掛けてるすみちやんに、うるさがられる、

すみちやんは、妹の取散らばした寫眞を、一枚／＼なつかし相に見ては、箱へしまつて居たが、私の田舍の女學校の先生が、お友達五六人

と一緒に寫したのを見つめて、
『アッ、此方だわ……れ、貴女が二年間主任の先生だつたと言ふのは、此の方、其後何うなすつたか知つて〻?』と問ふ。
『いゝえ。何うなすつたの?』と少し急き込んで聞くと、微笑しながら寫眞を見て居て、
『ほら、貴女たちが東京へ來る一寸前に此地へお嫁にいらしたつて言ふ、彼の先生ねえ』
『えゝ其先生が何うしたの?』
『えゝ——其先生がねえ……アノ……ホゝ。ほら貴女がお祖母さんに、『お前の様な我まゝ娘はいらないから彼の××先生の様な先生が持ちたいつて言はれて、拗れて泣いた事などがあつたのよ』、などゝ言ふ事から、何でも此地へ來て、海軍大尉とかに嫁いでゐたが、中年程して病氣になつてから、強情を張つてゐたが、お母さんに迎ひに來られて、厭な郷里に歸つたとか、夫からして一二度音信があつた限り途斷えてゐたが、つひ此間、端書で死去した報知を受け取つた事などを話す。
そんな話につれて二人はいつしかシンミリとした調子になつてゐる。そして私は時々、すみちやんの口に上りかけた「ノブ」の話は、打消す様に努めた。
——何處かの時計が二時を打つた。風にあふられる雨が、時々思ひ出した様に亞鉛屋根に落ちた。
翌日になつた。

昨夜はつひおそくまで、すみちやんと語り明したので、夜明けがたにやつと眠りつき、昨夜のつかれもあつた故か、却々起きられない。
喜美ちやんは一人先に起きて、雨戸を開けたり、髪も結つたりしながら、時々二人をゆり起しに掛つた、けれども却々起きないので、又こつそりと、床の中へ入つて、天井を見つめたまゝ、小聲で唱歌をうなつたりなんかして居たが、果ては立つて行つて、三味線をおろして、怪しげな老松を彈いて居たが、夫も厭に成つたと見えて、
『よういゝ加減に起きて頂戴よ、私一人で淋しいわ』と、二人の傍へ坐つて、二人の耳を引張つたり、鼻を摘んだりする。
朝飯の御馳走には、料理自慢のすみちやんが、五目を拵らへませうと言ふので、八百屋へ買物に出様とする處へ、飯倉の店の者が、下駄と傘を持つて迎ひに來た。
まだ御飯前だから先にお歸りと言ても、是非お供して歸れとお仰しやつたのですからつて聞かない。待たせて置いては、氣が急くから五目は止して鶏卵を買ふ事にした。
私は鶏卵を帆立貝で煮ながら考へた、何だつてこんなに早く迎ひに越したのだらう。私の處へ二時間や、三時間長くよこしておいたつて、夫で私が二人を女優に說き付けやしないのに——母親同様の姉にさへ別扱ひにされるのか知らと、自分の僻見もあるかは知らないが、何だかチヨツト恨めしい様な心持がした。

懸賞募集『月宮殿』

（〆切五月十日）

◎百花爛漫の春すでに盡きて、新綠の遠山、濃綠の近野、宛乎として水の如く滴らんとす。清朗、覺醒の季節は動き來れり。

◎綠陰榻に倚りて、若し夫れ讀書せん乎、軟風徐ろに吹來りて鬢髮を撫で、樹頭の蟬聲、榮華の夏を誦せんとす

◎縱ひ霖雨の終日降りつくすと雖ども、迷濛たる黯雲破れて、一痕の月影天心に洗ひ出さるゝ時、萬象の淸麗は唯だ此の一點に凝りたるかと疑はる。

◎雲すでに收まり雨すでに霽ると雖ども、凉風一陣、滿庭の樹木婆娑として動き、簷滴蛙聲倚ほ斷續す。此時に當りて俯して潦水の銀環を眺め、仰いで碧空の月輪を看れば、淸更に淸、麗更に麗、誰れか嫦娥の美しきに懸戀せざらむ。

◎花の朧、雪の淸、共に大に謳歌するに足ると雖ども、未だ月の淸麗なるには若かず。春月の朧々たる、秋月の皎々たる、共に大に謳歌するに足ると雖ども、未だ雨後の夏月には及ぶべからず。

◎されば也。古來騷人雅客の偏へに嫦娥の美しきを慕ひて、幾度か月宮殿に憧憬れ、幾度かその秘事を探らんとせしこと。

◎今や此の淸朗、覺醒の季節に於て、新たに『月宮殿』は現はれんとす。記する所のものは天上の歡樂か、將た地上に投げられたる果敢き陰影か、抑も亦嫦娥にも似たる靑春少女の理想鄕なるか、天上の秘事、今は語るべからず。

△小說（十種）十五枚まで△隨筆（十種）十枚まで△日記（十種）十枚まで△手紙（十種）五枚まで

賞金 小說（二十圓）、隨筆（十圓）、日記（十圓）、手紙（五圓）

花もひと時の
恨みはあれど、
園生の小草
露の如く滴る。
麗風あたゝかく
面を吹きて、
拭ふも
嬉しき
頰の汗ばみよ。




TSUNE

閨秀歌人傳

玉簾女

和泉式部と小式部内侍

和泉式部は越前守大江雅致の女だとも云ひ、また權中納言懷平親王の女だともいひます。才氣自在に、容顏、花のやうでした。けれど、あまり多情多感なものでしたから、滔々たる時代の風潮につれて、その濁浪に動かされたのでした。初めは和泉守橘道貞に嫁して小式部の内侍をあげましたが、ふと上東門院に宮仕へをしてをります内、仇し浮名が立つた爲めに、道貞からは捨てられて了ひました。式部はこゝに全く鴛鴦の衾の冷えはてゝ、幽かな鐘の音の曙近くを告げますけれど、空閨の中に眠りもやらず、夜となく晝となく悲嘆の涙にかきくれてゐましたが、やがて又藤原保昌に嫁しました。保昌の性質は磊々落々な上に、極めて武勇な人でありました。かの皎々たる月夜に清笛を弄しながら秋風吹きすさぶ野邊に賊を屈服させたとは、今日も尚ほ逸話として遺つてをります。式部はこの保昌に從つて丹波の國に下つてゐました時、或日保昌が明日は狩獵をしやうとその準備をしてをりますと、其夜奥山に妻戀ふ鹿の聲が哀れに聞えて、何とも云へず悲しうございました、式部は胸の亂されの堪へかねて夫に「明日の狩獵を止めさせ給へや」と進めました、すると保昌は、「さらば名歌を詠め」と答へましたので、

ことわりやいかでか鹿の鳴かざらん
　今宵ばかりの命と思へば

保昌はこれを聞いて、翌日の獵をやめました。

なほ式部が和歌の才に秀でたことを申しますと、一日京都にをりました頃、下賀茂の社に詣でましたその時、履いてた藁沓に足をくはれましたので、紙で之れを卷いてをりますと、神主は戯れて、

　ちはやふるかみをば足にまくものか

といひますと、式部は直ちに、

　これをぞ下の社とは云ふ

と附けました。この絶妙な歌才に對して、神主は云ふばかりなく愕きました。

式部の子小式部の內侍も、亦た母の穎しい性質を稟けて詩才頴くやうにありました。ところが、ふと病魔に侵かされ、梨花一枝空しく狂風にちり果てたので多感の式部は何として嘆かずにをられませう、遂遂佛法に歸依して了つて我が女の冥福を祈つたのです。而して播州書寫山の僧徒性空上人に送つた歌のやうなものはまことに出世間的なものであります。

くらきよりくらきみちにぞ入りぬべし
遙にてらせ山のはの月

この性空上人は篤學なお僧さんで、世間からも崇拜



された、又式部からも非常に尊敬されてゐたのです。此の句は『從冥入冥永不聞佛名』といふ經文から出てゐるのであります。

かくて式部は漆のやうな艶やかな、綠の髮を薙り、墨染の衣を腰に纏ひました。而して御堂關白から下賜られた小御堂といふさゝやかな庵寺の堂守となつて專心に佛道に盡くし、青春の頃胸の高鳴るまゝに狂奔だつたふるまひを懺悔し、ひたすら悲風一陣空しく北邙山上の煙となつた小式部の菩提を弔つたのです。而していよ／＼臨終の際に、

水は水火はもとの火に返しけり
おもひし事よすはされればこそ

といふ辭世を作りました。

＊　＊　＊　＊

油々の雲習々の風は凝て一團の明星となりました。この百花爛漫たるやうな歌聖の内でも、ひとり紫紅色に輝いたといふのは小式部の内侍でありませう。

内侍の父は和泉守橘道貞で、母はかの和泉式部であります。内侍は牡丹花に從ふ牡丹の蕾で、ことに和歌に秀でゝをりました。全く内侍の和歌は天賦であつて、母の遺傳によるものであります。内侍がまだいたいけな五歳の頃でした。乳母の懐に眠つてをりながらひよつとして足で衣を踏み破ぶりましたので、乳母はそのはしたないのをとがめますと、

いつのまに誰がたまづさの通ひ來て

と口すさみました。乳母はこれをきいて愕き、その「心は」と問ひますと、

ふみさく音のふところにする

と答へてます〳〵乳母を愕かせました。

内侍は幼少い時から母に伴れられて雲上貴紳の間に出入り、常に絶妙の歌句を口ずさんでゐたのです。ところがまだ年も若いのにこんな佳句のあるのはその母和泉式部の潤色であるまいかと疑ふ人さへありました。或時和泉式部は保昌に從つて丹後の國にいつてをりました。此の時宮中に歌合せが催されたのです。集るものは天上の星辰耀々として輝き、殿上一列燦として居並びました。其の時中納言定頼卿は内侍を見て、「今日の歌は如何せしぞ、丹後の國には人を使はしぬるや」と問ひますと、内侍は平然として中納言の直垂の袖を押へ、

大江山いく野の道の遠ければ
まだふみも見ず天のはしだて

と即座に歌ひましたので、恥かしめやうと思つた中納言はかへつて、辱められて、一言もなく悄然と退出してしまひました。その妙齡の頃は上東門院に仕へてゐましたが、容貌の類ひなき美しさは地上の華か、天上の月かと思はれるばかり、西施、楊妃も面を掩ほふほどでありました。

そこで大二條殿といふ方は深くも内侍に想ひを懸け梅花一枝願はくば我が眺めにぞと思つてお出でになりました。ところが此の殿は所勞のために長らく病床に伏してゐまして、辛と平癒つたので、上東門院へ參りました。すると内侍が大盤所に蹲踞でゐましたので「われ死なんとせしに、漸くこゝに生を拾ひぬ、さるを何とてさは無情なき、一たびわれを訪ふて病を慰め給はずや」と仰せられますと、袖を引きとめて、

死ぬばかり歎きにこそは歎き
しか
いきてとふべき身にしあらねば

と答へました。彼女は母のやうに多情ではなく、たゞ宮仕へを専一と勤めたのです。けれども香蘭は砕けました。終に天は齢を假しませんでした。内侍は青春妙齢の時を白玉樓中の人となつたのです。その息の絶えなんとする夕べ、母なる式部の手を握りつめて

いかにせん行くべき方
もおもほえず
親にさきだつ道を
知らねば

と、つひに是れが辭世となりました。

＊　＊　＊　＊

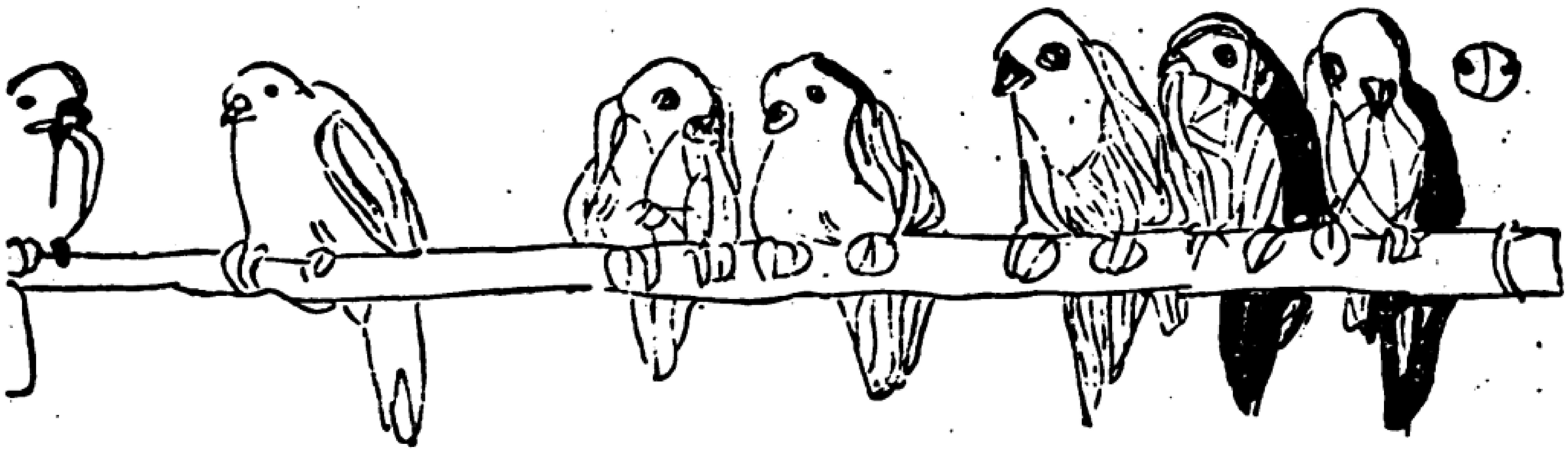
日は落ちて天地蒼然、鵜鴎啞として飛び、狭霧の中に沒する時、遠く此の妙齢の歌人の生涯を想ひますと轉た玉を惜しみ香を憐れむの感に堪へません。

壹等（金五拾圓）
薄街道　松平鏡子

貳等（金參拾圓）
最後の愛　山茶花

參等（金貳拾圓）
死蛇の祟り　毒だみ

四等（金拾圓）
人知れず泣く義理の仲垣　雨やなぎ
妙子のこゝろ　醉蓮
亡びゆく肉體　瘦地の花
靑き焔の影　黒髪
兄の病中に書きたる日記　木村柳子
骨肉の情　刈藻
谷間の姫百合　眞柴垣



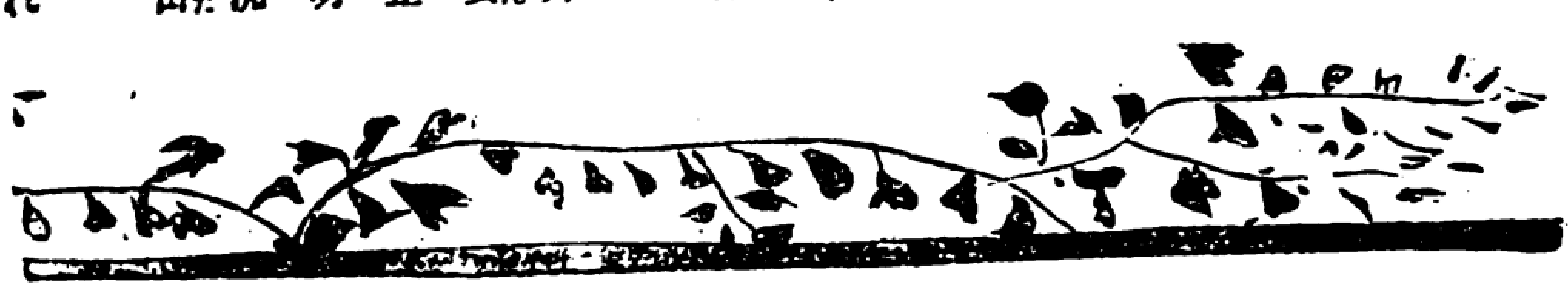
花の慰安

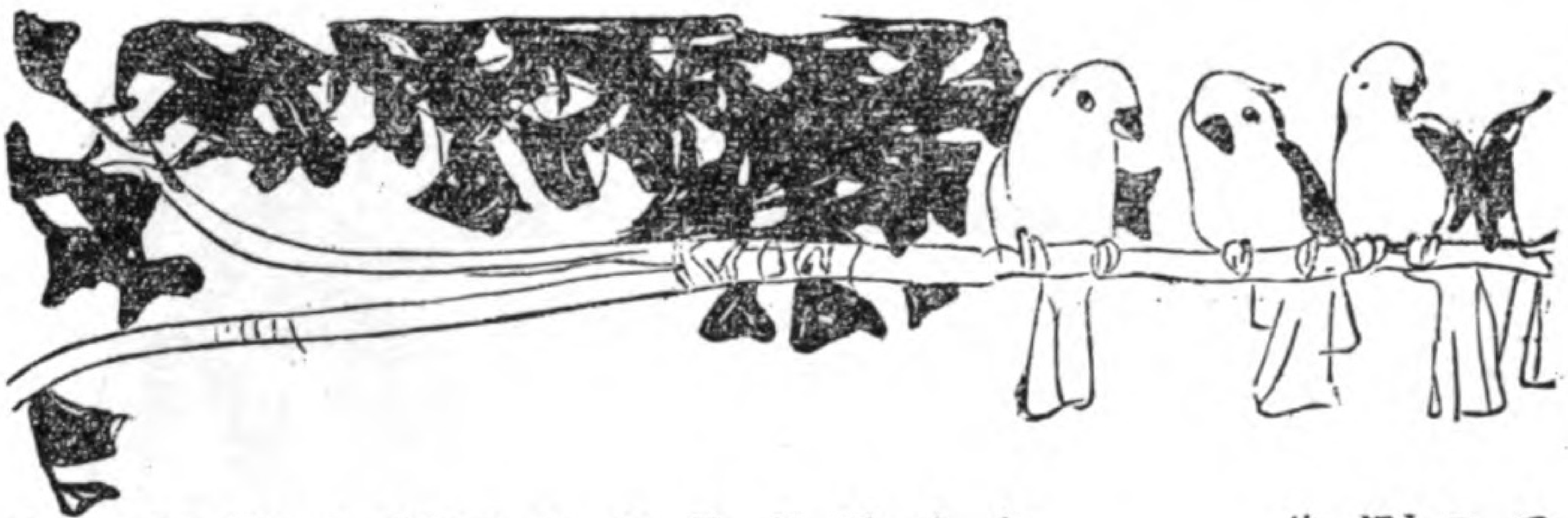
△スヰートピー

スヰートピーは一名麝香連理草と稱せられ、豌豆に似た白、黄、紅、赤、紫、藍、絞り等の花が咲きます。其の香りは香菫と同じく、西洋では此の花から香油を搾るといふことです。蔓性の二年草で、生育するに從ひ、朝顔のやうに纏はせて鉢仕立として飾るか、又は花壇に纏はしむると最もいゝ花です。種子を蒔いて育てるので、九、十月の頃、床に播種して冬季は霜覆をして冬越しするか、又は發芽後二三寸生育したら五寸位の深さの鉢に植ゑて鉢共に床に埋めて霜覆をして置けば、五六月頃から花が咲きます。此れは非常に乾燥を忌むから、適當に灌水する事が肝腎です。最近に改良を加へたものに、草の丈が僅か五六寸にも達せない様な變種がありますが、こんな物を作り出したといふのは全く園藝の進歩であります。

△睡蓮

睡蓮は亞米利加睡蓮と、小さい白い花の咲く日本睡蓮と、其他支那産、又花の大きい南洋産等數種あります。葉の形は蓴菜に似て皆浮葉で球根植物です。睡蓮とはいふものゝ蓮とは全く種屬は別のもので、蓮は鷹揚な姉の如く、これは氣のませた妹のやうであります。原種は二十種ばかりあるのですが、歐米邊で人工媒助に依つて年々新種を作り出す爲に、今日は四十種ばかりありると申します。此の花は一種特別で、或る種類は晝間咲いて夜萎み、或る種類は夜間開いて晝萎んで、五六日間は咲いて居るので、歐米邊では非常に愛でられて、一日外で働いて歸つた人も、此の花の爲に大なる慰安を得、家の細君も令孃も奏づるピアノの手を止めて暫しは共に賞するといふことです。梅雨明けの頃、日當りの良い場所を選んで擂鉢か手洗鉢のやうな口徑の廣い鉢に、最初は二分目位田土を入れ、其の上へ能く腐敗した馬糞を布き、尚ほ其の上へ油粕を振りまき、又田土を入れ





て鉢を八分目迄満たし、水を注いで滲むのを待つて種子を蒔くのです。そして五厘銅貨大の浮葉が出たら、やはり同じやうに手入れをした他の鉢に移し植ゑます。

△天竺牡丹

ダリヤの培養は極く容易い方で、たゞ植付けた丈けでも相應に花が見られますが、少し注意すれば隨分立派な花が見られます。そして四月頃植ゑると、五月下旬頃から十一月頃迄絶えず花が咲いて居るので、至極經濟な花であります又其の色と形の變化に富んで居る事は、此の右に出づるものは多くありません。四月から五月の間に貯へて置いた球根を、一旦地植して、十五日か二十日間位經過して新芽が一寸餘りに伸びた所で、更に掘起して芽を幾つにも分けます。此の場合に芽を傷けないやうに十分注意が要ります。そして一尺餘りの深さの穴を掘り、下に牛馬の糞を土に混ぜて入れ、其の上へ二三寸位又土を入れて植ゑ付けるのです。又實生は三月中旬から四五月頃へかけて行ふので、排水の良い土へ蒔くと一週間餘りで芽を出すから、眞葉の少し出初めたところで植ゑかへます。

△松葉牡丹

春彼岸頃種子を蒔いて、芽が出たら花壇か鉢に植ゑて置くと、夏秋の間に絶えず花が咲きます。其の色は紅、白、黄、紫、絞り、桃色等あつて、花に一重もあれば八重もあります。形は極めて艶麗で、家庭で培養するに最も適して居ります。挿植しても植分けしても能く繁殖します。九州邊では此の草をイミリと稱して、庭園の踏石の間に澤山見受けます。肥料は水肥を與へます。

△芍藥

芍藥は觀賞用のものと、藥用のものと二種あつて、觀賞用に栽培するものゝ種類は極めて多くあります。花は多くは單瓣で、色は白、緋、淡紅、紫、紅等あつて雌雄兩蕋を有するのが普通ですが、近頃非常に珍奇な變種が出來て居ります。之れは落花後に一回、春株分けをして芽の出る頃に二回程油粕を與ればよいのです。

懸賞十二支

嫁の子の小鼠いかゞなりぬらんあな美しと思ほゆるかな　法性寺入道

この頃の賤が耕やす唐鋤のうしと思ふも力なの世や　土御門院

高山の峯ふみならす虎の子の登らん道の末ぞはろけき　定家卿

月見てもたのみをかけて待ちわたるみちはしとなろ兎住みけり　俊頼朝臣

契あれば鵜の羽ふけるはやまにも龍の宮ひめ通ひしものを　源仲正

黒髮のうらみは長き怨み女の名もくちなはの日高川かな　讀人不知

子＝雪姫

これは戯曲『祇園祭禮信仰記』にある物語です。松永大膳久秀京都に暴威を振ひ、金閣寺に住んで居りました時、狩野雪舟の孫女雪姫に懸想して、我意に從はなければ苦しめて遣ると云つて、庭の櫻木に縛りつけました。姫は何うかして其れを脱れやうと思ひ、折から散り布いてゐた櫻花の花瓣を足の爪先で掻寄せて鼠の繪を畫きますと、忽ちそれが地から脱けだして、縛つてあつた繩を嚙み切つたものですから、姫は辛うじて危い所を脱れました。

丑＝菅原道眞

菅原道眞は音に聞えた學者だつた上に、詩歌の才さへ當時並ぶものが無かつたので、天子さまからは大層御寵愛を受け、メキ〳〵と官位を進められたものですから、程なく藤原時平に讒言せられて、あはれや太宰府に謫流されました。この時道眞は牛に乘つて行つたので、後ち天神さまに祭られてからも、靑銅の牛が必ず社前を守護る樣になつたのであります

寅＝加藤清正

豐太閤が朝鮮征伐の時、加藤清正と小西行長とが互ひに先陣を爭つて軍功を顯はしましたが、戰ひの餘暇に、虎狩を始めて、清正が例の槍で唯だ一突に仕止めたことは、三尺の童子も知つて居る有名な話であります。

卯＝大國主命

合せ繪解

とをつらの馬ならねども君が乗るくるまも的に見ゆるなりけり　和泉式部

羊飼ふ野邊に夕日の影落ちて蕪城の春のいやなつかしき　讀人不知

思ふことおほしの山に世の中をいかにせましと三聲啼くなり　源兼昌

鳴きぬるか夕つけ鳥の音羽山關路の月はまだ深き夜に　爲家卿

小夜ふけていそぐきぬたのあたりまでうたてもさらぬ里の犬かな　藤原爲顯

いかにせん伏猪もしらぬ涙の上もあまのかるもになほ亂れつつ　家隆卿

これは古事記にある因幡の白兎のことであります。自分が河を渡りたいために鰐を誑したので、大層怒られて眞裸躰に毛をむしられて了ひました。兎は途方に暮れて泣いてゐますと、大國主命が大きな袋を背負つて來て、種々と兎を慰めながら、親切にその治療法を敎へて遣りました。この大國主命が即ち今の大黑天のことであります。それ故に鼠に取合はせた方が大分ありました。

辰＝清姫

安珍といふ綺麗な坊さんに懸想して、清姫が蛇になつたことは、『日高川』で有名な話となつて居ます。その時清姫は安珍の跡を追駈けて行きましたが、途中に大きな河があつて、如何しても渡ることが出來なかつたのを、女の一念遂に蛇になつて越して了ひ、安珍の隱れてゐる寺院の鐘をグル〳〵と卷いたさうであります。女が泳いでゐる繪なので、弟橘姫とした方が大分ありましたが、御身を投じたのとは、姿勢が違ひます。

巳＝大蛇丸

信濃國劍ケ峯に、大蛇丸といふ山賊の首魁が住んでゐました。或時兒雷也及び其妻綱手に出會つて、互ひに爭ひあひましたが、兒雷也は蝦蟇の術を使ひ、大蛇丸は蛇の術を使ひ、綱手は蛞蝓の術を使ふので、終に三すくみで勝負が決きませんでした。これは鬼武が作つた『兒雷也豪傑譚』の中にあります。

午＝近江お兼

近江にお兼といふ大力な女が居ました。或時一匹の荒れ馬が狂ひ出して、如何しても捕へることが出來ず、人々あれよ〳〵と叫ぶばかりなのを、折柄洗濯してゐたお兼は、矢庭に荒れ狂ふ馬の手綱を足駄で蹈へて、安々とそれを止めたさうです。

未＝漢の蘇武

前漢の世に蘇武といふ人がありました。匈奴といふ夷狄に捕へられて久しい間歸ることが出來ませんでしたが、束の間も故國のことを忘れず幾十年の星霜を羊飼になつて暮して居りました。これは至つて有名な話であります。蘇武を壽老人と誤解した方が多うございましたが壽老人の側に居るのは鹿でありますから、十二支の中には居りませぬ。

申＝槌太夫

これは常磐津『壽靱猿』にあります。昔から靱の皮は猿に限るとしてあるので、梅の戸といふ女が殿さまの仰せを蒙つて、靱に張る猿の皮を求めにゆきますと、恰度一匹の猿が猿廻槌太夫の手から放れてまゐりました。梅の戸はこれを射殺さうとする、槌太夫は吃驚して、これを止めましたが、なにさま殿さまの仰せだとのことに、然らば射殺して疵をつけるよりは急所を打つた方が宜いと云つて、鞭を擧げようとすると、猿は無邪氣に躍つたので、遂に哀れを催して殺さずに濟んだとのことであります。これは大分難解しかつたやうです。

酉＝天鈿女命

神代の昔、素盞　男命が餘りお荒れなすつたので、姉神の天照大神は天岩戸の内に隱れてお了ひになり、此世は眞闇になりました。仍で諸々の神たちは御相談になつて、天鈿女命が盥の上でお踊になると、大神は密と細目に戸をお開けになつたところを、手力男命が手を伸してお出し申しました。其時鷄が時刻を作つたさうであります。これは能く歷史畫などにあります。

戌＝伏姫

里見義實が愛犬八房に、敵將の首を取つて來たら我が女の伏姫を遣ると申しますと、八房はその通りに敵將の首を啣へて來たので、義實は今更悔みましたが、已むを得ず伏姫を八房に與へましたことは『八犬傳』に精しく書いてあります。前回の繪は伏姫が山中の洞穴で經文を讀んでゐるところであります。これを中將姫となすつた方が大分ありましたが、中將姫は少しも犬と關係がありませぬ。

亥＝仁田四郎忠常

曾我兄弟が賴朝の館に討入つた時に、十郎を討止めた仁田四郎忠常は仲々の豪勇でした。富士の卷狩の時に、一匹の手負猪が荒れ狂つて賴朝目蒐けて牙を鳴らしながら走つて來るところを、忠常はヒラリと身を交して野猪の上に飛乘り短刀を以て仕止めたので、主公から難有い褒辭を賜はりました。

懸賞　十二支合せ當選者發表

二月號に揭げし十二支合せの懸賞は、應募者非常に多く、審査の結解答者のみにて百七十七名を得たり。依つて規定に從ひ抽籤を以て其中より九十五名を撰み、更に又抽籤を以て、一等五名、二等十名三等三十名を選み、殘餘の五十名を四等とせり、左れば、皆當者にして抽籤に漏れたる人八十二名の多きに昇れるは甚だ遺憾とするところなり、當選者並に賞與品左の如し。

一　等　（賞金五圓宛）五名

東京市神田區西小川町一の一酒卷方　長谷川清子
名古屋市東區久屋町四丁目　青井露子
東京市日本橋區吳服町三十一番地　天田とよ子
東京市小石川區白山御殿町八番地內田清吉方　中山輝男
東京市小石川區大塚窪町一番地張原方　中島喜久子

二　等　（賞金貳圓宛）十名

京都市衣棚通丸太町下ル　伊吹まき子
東京市芝區愛宕下町一の二青木石三郎方　青木光雄
東京市小石川區氷川下町一田中紋治方　原澤近子
東京市日本橋區濱町二の一　船田しづ子
東京府下新宿一丁目五十四　岩松茂子
新潟縣南魚沼郡鹽澤町山田屋方　大津なみ子
東京市小石川區久堅町一〇九小田桐方　小田桐みな子
大阪府泉北郡深井村大字深井二〇一番屋敷植野方　葉山照子
橫濱市平沼町一の八　若林たか子
東京市小石川戶崎町三四長谷川方　松田君子

三　等　（賞金壹圓宛）三十名

大阪　中村みさほ、福岡　高山春子、新潟　鹽谷きよ、神戶　杉野よし子、德島　玉置イマ、東京　小林つる子、新潟　野田トヨ子、下谷　永田ロシ、東京　小林くに子、神戶　河井浪子、橫濱　松永八重子、深川　佐々木婦見子、名古屋　飼沼方すま子、下谷　後藤とめ子、東京　北村たか、千馱ヶ谷　喜根屋家壽、千葉　上田花子、本鄕　寺町うた子、本所　原信子、大阪　榮井ゑん、本鄕　增田うめ、京橋　大竹勢津子、本鄕　淺井靜、橫濱　高橋かめ子、東京　安孫子トシ、石川　張江たつ、埼玉　淸宮市子、德島　玉置明、淺草　山木春子、麻布　松崎幸伊子、

四　等　（賞金五十錢宛）五十名

日本橋　天田とよ、麴町　小田內ひで子、東京　山本たつを、日本橋　加藤方貞子、青山　山川俊子、橫濱　鹽羽間こう、神田　石野夏子、東京　小倉はる子、名古屋　青井禎子、下谷　白川かづ子東京　竹井ふみ子、東京市　高橋絢子、青山　山本隆子、小石川笹田よし子、青山　山本とし、京橋　岡本やう子、大阪　武井梅子橫濱　野崎秀子、北海道　川井清子、京都　隱岐靜枝、京都　藤元榮以女、葛飾　佐藤きく、本所　鴨下里子、芝　岡本方常吉、本鄕　植垣よし、神戶　美津矢秋子、神戶　山田ヒデ子、越後　會田その子、大阪　新谷一子、日本橋　工藤きよみ、橫濱　加藤シゲ、本所　小林テツ、京都　青木りう女、岩內　福澤つま、三重　澤村登美子、橫濱　藤井米子、本鄕　相良シナ、新橋　後藤倉太郎、神田　渡邊タカ、巢鴨村　澤田ゆと、茨城　本間春子、四谷　松山ミヨ子、東京　本田トク、石川　張江美代、東京　石田きわ子、大阪　藤田小光、麴町　嶋崎不二子、淸國　高木長子、本鄕　五十嵐さん子、神奈川　四村つれ

谷間の姫百合

眞紫垣

うとからぬ隣ながらも蘆垣のまどふになりぬ、とかこちしは昨日、今日は晴れて庭階の蘚苔緑こまやかに新竹よりしたゝる露は池汀の杜若の上に落て花の冠に玉のかざし朝日は人皆の喜に迎られて。

今朝結びしローマ例になき上出來に、あたら籠居も如何と、お部屋のお掃除手早く濟し、お母様のみゆるし受、セルの單衣に桔梗色の帶、クリーム色のパラソール片手に、家を出たのは九時少し過、目指すは澄江のおやしき。

嚴しき冠木門潛てしき石傳へ、五行松と四季櫻の間を通り、お玄關にかゝる、ご免遊せ、聲と共に黒骨障子する〳〵と開て、お馴染の淸やは靜に手をついた、ご注進、間もなく澄江樣はにこ〳〵して出て入しつた。

まあよくさあ〳〵のお聲についてお廊下傳にお部屋に通る、南向六疊のお室、さるすべりの風雅な床柱、古銅の盃形の花瓶には、そなれが活られて、山水の軸との對照のよさ、丸窓の下、紫檀のお机にはクロース製の洋書が置れて、其間から枝折の眞紅の房が見える。

四角なご挨拶を圓く濟して、色々談話の花を咲す、淸やの運んだ玉露に舌を濕すと、澄江樣はルビーの光るお手で、九谷の器から小皿に分て下さつたは大好物の草餅、是は今朝力自慢の良作が振鉢卷で搗てくれましたの、餡は私が造ましたの、この前失敗しましたので今度はうんとお砂糖を入たの、父は胃病の媒介餅だなんていひますし、兄は過たるは猶及ざるがごとし、なんて攻撃の矢はしきりなのですよホヽ、松子樣一つ召上れ、胃散もジアスターゼもありますから、と派手に笑れる。

何がさて斯道の强者まア結構ですことゝ頂く「よくご面倒なことを遊ばしたのね」「はー日曜でないと父も兄も不在ですから、家內團欒の樂しい安息日ですの、だから出來得る限り愉快に遊び暮す定でご馳走も大かた手料理にきめて置ますの」「まあいゝお定ですこと、

どんなにかお樂でせう」「今朝なんか茶の間で食後の水菓子頂ながら、父が卓上の薔薇を指して、これを題に歌を詠ふとの事」仰畏み新口調をと思ひますけど、出るのは汗許り、兄だつて正に三十一文字相違これなく候流でせう、で母が「立居の風に花そ散ける」と詠ましたら、兄が仰山な聲してやあ驚た／＼母様は實に亂暴ですねえ風を起す程居たり立たりするのですか、其歌は僕流だ、僕に讓り渡をなんて、ホヽホヽお腹が宿がへする程笑ましたの。」

「ホヽ、ほんとにお樂みですねえ」と太息が洩る、同じ世に同じ人と生れても、心〻でかうも差があるものかしら、此家を春の花園に例たら我家は冬枯の淋しい古枯吹くにまかせて荒廢した、それにも似てゐやう、どうして伯母様と母様の間はあゝなのかしら、よく世間で犬猿の間柄なんていふけど、昔は



犬も猿と一緒に桃太郎のお供したものを、あゝ恥かしいわが家庭よ伯母様だつてもう人生の半過、ハイカラにも程度があるわ、宇冠して耄かけの大ハイカラ、無暗に過去の全盛を憧憬して、おゝいやいや、伯父様が破產したのも一つは伯母様の爲、假に私が伯母様だつたら、あのテキサスで一旗上やうと、遠く故國を後に出ました伯父様のお心を勵まし、後顧を憂ひ給ふな、お留守は立派に守て御成功を待て居ります程に、一日も早く故山に錦衣の榮たお歸をと、其首途を祝たものを、伯父様だとて最愛の妻が鶴首して己が歸りを待とならば、十年の月日も五年成功し花々しく御歸朝遊ばすだらうに、思

へば伯父樣も不運の方よ、母樣だとてあゝしたご苦勞も遊ばすまいに、松葉のいた〳〵したお言葉を、なぜ母樣は花の笑顏で受てお出のだらう、浪立ざれ、風吹ざれと細心に注意しておいでの母樣を見ると、涙がこぼれる、家庭の風波は主婦の責だなんて、母樣も天保主義ねえ、だから伯母樣の孔雀金の尾は日に〳〵長く容姿も玉藻前の樣にお美しいの、父樣つたら、浪江はハイカラの化身で、虛榮の雲にのつてるんだ、櫻の精の墨染は優美だが、孔雀の精は難有くないなんて仰るでもお敎育も充分におありのだから、下等社會のそれのやうに、口やかましくのゝしり合ふて、近隣の噂の種ともならず理想のホームなんてお世辭にはいふ人あれど。

全く表面は春海の長閑らしく見えるけど、底の方には冷く暗く恐しいつなみの前兆のやうな不安な陰惡な波がひそんでゐるのだもの、あゝ一年でも一月でも一日一刻でも母樣の、昔しのやうなさえた笑顏に接したい。

△

「松子さん何考てお出なの、ハツト顏を上ると澄江樣は櫻色の頰ににこりと笑つて、「ひどく沈でお出だこと御持論の靑春乙女がだいなしになるわ」「ほんに柄にもなくポカンしてね、何か近頃の珍談聞して下さいましな」「ぢやあ謹聽遊ばせな、珍會成立の由來をお話しますから」「ほゝ振た御演題ね、どんなお會なの」「あの御存じの通り、宅には親類緣者が多でせう、で寄合時には人の噂も惡口もといふ風で、兎角面白くありませんの、で祖父がね、例の氣性でね、

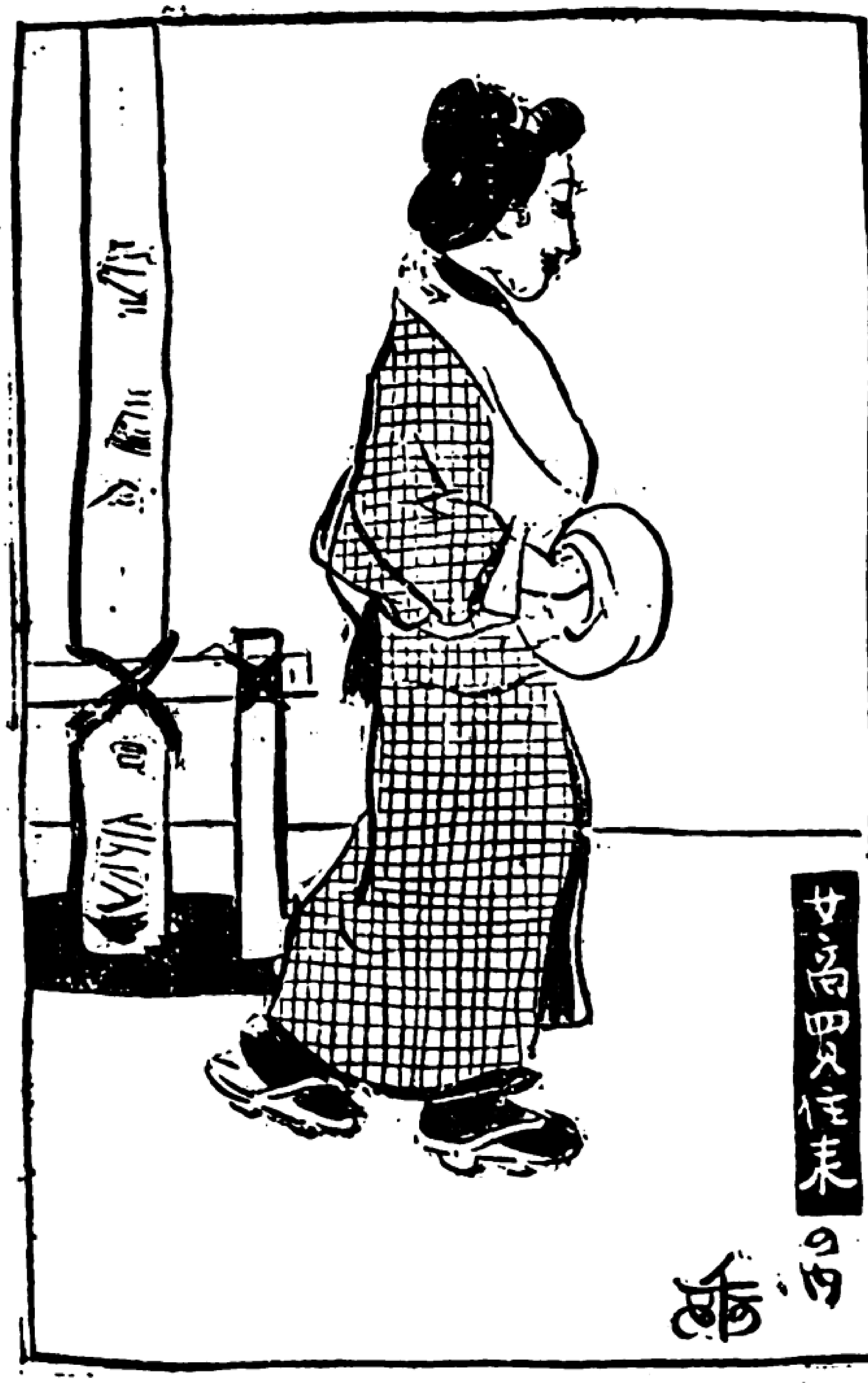
はきだして捨るも如何心なし
花にも實にもならぬ客種

と詠ましたのが皆に知れて、「ぢやあ何か有益で親類の情を深くする方法をといふので、遂に親々會なるものが成立しましたの、會長は白髮の祖父よ、で集會は月一回、會費は五拾錢で、其幾分を貯畜して基本金にするといふ決議、振た條件がいくつもあるのですよホ、、、、、「まアいゝお思ひ立ですこと」「此間東京の兄

に云ふてやりましたら返書にね、當地にても同會支部を設置いたすべく、會長は小生たるべく本部と氣脈を通じ、會費不足の際は本部基本金を以てこれにあつることですつて」

「ホヽ彼方にも皆樣いらつしやるの」

はあ大學の兄を筆頭に一高、三田、美術、高商、士官といふ風に、各方面に皆其器を發揮してゐますの美術のなんか此間のレツターにかうですよ「來春美術大展覽會開催のみぎり、繪畫一等賞の榮冠を得るはかくいふ松岡一郎、滿都市民の賞讃の聲震天動地と許り夢て候、何と幸先よくは候はずやですつて」「まあ相變らず氣焔萬丈ね」談話の花は咲に咲て、心も浮立許り、春の胡蝶のそれにも似たる此心逐うか〳〵と十一時、お暇乞してお緣に出る、軒の楊柳風にゆらぎて、築山の松ヶ枝緣清く、紅薔薇の點ふたる美しさ、石燈籠の下なる姫百合の蕾ふくよかに、目がれぬ眺め、床しき御園。折から聞ゆる紅葉狩の一曲、新綠繁きお茶室にて父君の御すさびとか、ホームホーム エデンの園にも似通たらん、かゝればこそ天使にも似し澄江樣もゐますなれ



△

母樣のお待兼を思へば足も急ぎて來かゝる往來、バ

タリと吉岡ご令閨に逢ふ、例によつての大丸髷ご面積の廣大なお顔に、白い物の二重塗、天候を伺ふ式のお鼻は得意にうごめいて、無てもと思ふ女の金歯四五枚かくては尋常のお口元人ごとながら殘念至極殊に若々しい着付。

「まあ奥様どちらへ」

「一寸伊勢松まで帶を見に參りましたけど、田舍にはね、思ふ様なのがありませんの、これが三越か白木屋ならと、東京が戀しくなりますの」

「でも奥様ご實家は奥州の山奥とか承りましたが」をグツト呑込で「ほんにお羨しく存じますこと、欲しいと思召すものは何でもご自由で、如何なよい日の下にお生れになつたんでせうホヽ」

「何も幸福なことはないですよ着物の四五枚、宿の交際費に比したら僅ですよ、それに宿が高等官といふ肩書付ですから、自然夫人とかマダムとかいはれる私もね、時々は交際社會へもね」

傳へ聞この奥様、珍流行の御粧美々しく、ゴム輪の車に風を切らせて何會かに會におでまし遊ばし、和漢洋の合併語、物の美事？　にあやつられ滔々とお話し遊ばす時、旦那様は眉をひそめ肩を縮めて穴あらばとやうの御様子いぢらしともお氣の毒千萬との事、きけば旦那様は小糠三合の御身とやら、子々孫々養子の身となる勿れの遺言するとは御親友に對しての御述懐とか、話して居る所段々まくしかけられさうだから、

「奥様、今日はちと急ぎますから失禮を」と虎口そのがれたは我れながらきつかつた、あゝ何といふ奥様だらう、今はあの様な我儘三昧、頭の先から足の先まで流行〱の御裝、だけど、是がいつまで續くものぞ、今の内こそ數萬の富なれあゝ浮雲にも似たる富、一年ごとに富はくづれ年は老い愛は枯れて泣ても叫んでもまた廻りくる光陰ではない、思へば惜しき身の昔かなで槿花一時の夢と消えて、後年如何に悔らるゝことであらう、いつしか來りし我家の門枳殼垣の間からベスは嬉しげに飛び出してクン〱と鼻をならしてゐる。

洋風肉入菓子の製法

これは西洋料理品の一種にして、まづ皮を作り置き、之に種々の材料を包みたるものなり。其の皮の製法は、國によりて各異なれど、今米國にて行はるゝものを擧げんに、ラード四十匁を平鉢に入れ、メリケン粉二百匁を加へ手にてよく捏れ、それより毛篩にて裏漉にかけ、再び前記の鉢に移し、二合程の清水を、匙にて少し宛加へながら攪拌して、程よく軟かに捏れ、伸板にメリケン粉を撒布し、その上に右の捏れたるを載せ、丸き棒にて一尺四方の大きさに伸し、直ちに大匙一杯のバタを塗り手早くナイフにて二つに切り、バタを中にして重ね合せ縦に置き直ほして、再び一尺四方に擴げ、亦それを四つ切にして、いづれも重れ更に長サ一尺五寸、厚さ五分程に伸し、縦に六分程の幅二三本を切り取り、其の殘分は又重ねて更に一分位の厚さとなし、長サ八寸、幅六寸、深サ一寸五分のパイ型にあて、周圍一寸程の大きさに切り、これを型の内部に敷き、先に切りとりたる分を型の内部の上方に沿ふて圓くあて、その殘分を再び一分程の厚さに伸して、パイ型の蓋に供するなり。又そのパイ型にあてたる上方を、手にて型の形狀に逵り、周圍をナイフにて切り去り、その内に肉類或は野菜類を入れ、前に伸し置きたる蓋をなし、周圍に水をつけて被せ、パイ挾にて種々に飾をなしそれよりテンピ或はストーブの中にて四十分間程燒くなり、尤も火加減は中火を良とす、亦焦げつかんとする時にはパイの上部に新聞紙を載せて燒くべし。燒け上がる五分前に鷄卵一個の黄味のみなとり大匙一杯の清水を加へ、よく攪拌して、刷毛にて右のパイに塗り、燒きあぐるなり、種類多く中に入るゝ材料によりてその名を異にす、

△チキンポットパイ

まづ一羽の鷄肉を骨附のまゝ細かに截り、直ちに深鍋

に入れ、一升の熱湯を注ぎて火に架け、一時間ほど煮込みて小匙に一杯(山盛)の食鹽を加へ、更に一時間程煮込み、その間に二合のメリケン粉を鉢に篩入れて、小匙に半杯の食鹽と、同二杯のベーキング粉とを混和し、清水一合を加へてよく攪拌して右の鍋の中に匙にて滴し込み蓋をして十分間程煮込み、前記のパイに入れ熱き中に食するなり。

△チキンパイ

三百匁許りなる一羽の鷄を取りその肉を十五六片に截り。直ちに食鹽と胡椒とを撒布し、別にソース鍋の中へ、大匙一杯のバタを入れて火に架けよく煮溶けたる頃一個の刻みたる玉葱と、右の鷄肉とを投入れ、程よく炒りて、大匙に一杯半のメリケン粉を混じ、よく攪拌して三合程のスープを加へ、亦食鹽と胡椒とを混じて、味の加減を爲し、中位なる十二の馬鈴薯の皮を剝き、また三本の胡蘿蔔の皮を剝ぎて五分程の輪截にし、共に微温湯と共に鍋に入れ、弱火に架けて一時間程煮て、軟かに煮りたらば、右の鳥肉と共に、前記のパイの中へ詰め、ほどよく蓋をして焼き上ぐるなり。

△牡蠣のパイ

牡蠣の剝肉百個を笊に入れ、直ちに熱湯を注ぎて、十分に水氣を切り置きそれよりソース鍋に、大匙一杯のバタを入れて火に架け、煮溶けたる頃、一個の玉葱を刻み込み、また大匙に二杯のメリケン粉と、二合の牛乳とを混じ、よく攪拌して煮えたらば鍋を下ろし、手早く毛篩にて裏濾にかけ、再び右の鍋に戻して弱火に架け、泡立器にて攪拌して、その沸騰するを待ちて食鹽と胡椒とを混じ、味の加減を試み、火よりおろして團扇にて煽ぎ冷却し、それよりパイの中にまづ牡蠣を入れ、その上部より、右のどろ〳〵の汁を詰めて、焼き上ぐるなり。

△ミンスパイ

牛肉豚肉各々百匁宛と、三十匁のハムとを合はせて、いづれも細かに刻み、玉葱一個を混じて、共に庖刀にてよく叩き混ぜ、少許の薄荷の葉を入れ、適度の食鹽と胡椒とを混じて、味の加減を試み、それより一個の鷄卵を割り込み、更によく混合せて、十五六個に分け團子程に丸め、フライ鍋にラードを入れて火に架け、よく煮滞けたならばその中へ投じ、煮揚らば、皿に新聞紙を敷きてその上に置き、又別にソース鍋に、大匙一杯のバタを入れて火に架け、煮溶けたらば刻みたる一個の玉葱と大匙に二杯のメリケン粉とを混じ、よく攪拌して、二合のスープを加へ、食鹽と胡椒とを混じて味の加減を試み、直ちに毛篩にて裏濾にかけ、再び右の鍋に戻して、前の揚げたる肉を投入れ、三十分間程煮込みそれより、煮汁を加へ、蓋をして焼きあぐるなり。

△蝦のパイ

車蝦十五六尾を擇びて鹽煮にし、直ちに水中に投じ、手早く皮を剝きて脊腸をよく去り、五分程に截り、それより、ソース鍋に大匙一杯のバタを入れて火に架け、沸騰するを待ちて、一個の玉葱を刻込みそれより大匙二杯のメリケン粉を混じ、よく攪拌して五勺程の牛乳を加へ又別器に三個の鷄卵を割り黄味のみをよく攪拌し、再び牛乳五勺を混じて右の鍋に加へ、食鹽と胡椒とを混じて味の加減を試み、程よく沸騰せしめて鍋を下ろし、手早く毛篩にて裏濾にかけ、團扇にて煽ぎ冷却し置き、パイの中にけ鑵詰の青豌豆を皿に入れその上に蝦を列べ、また青豌豆を載せ、更にその上に蝦を覆れさして上部より右のどろどろ汁を加へ、蓋をして焼き上ぐるなり。

○

鳴聲はまたきかれども蟬の羽の薄き衣は立てきにける　　能宣

○

散のころ青葉の中の櫻花風よりさきに絕なましかは　　通親

紀念增刊
月

△創業二十五週年紀念増刊▼

「月宮殿」――六月十五日發行

女學世界は、弊館創立二十五週年紀念として、其の紙數に於て、其の內容に於て、本誌に倍蓰せる臨時增刊を發刊せんとす。題して月宮殿と云ふ。其の如何に淸く美はしく如何に涼しき爽かなる、如何に氣高く神々しく、如何に輝きて威ある名題なるかな。

而してこの淸く、美しく、涼しく、爽かに、氣高く、神々しく輝けること猶月宮の嫦娥の如きは、是れ豈婦人の理想的精神美にあらずや。

◎月宮殿の口繪は、現代各名流畫家の丹靑に成り、絢爛目を奪はんとす。

◎寫眞版は鮮麗巧緻の極を盡し、溫乎として玉の如き夫人、燦爛として花の如き令孃、活けるが如く語らんと欲するの慨あり。

宮殿

◎用紙は孰れも美麗にして光澤あるものを用ゐ、而かも本誌の倍數を具ふ。

◎讀物としては方今文壇馳名の大家が心血を濺げる名篇大作を始め、婦人界各方面に亘りて趣味多き記事を滿載して江湖の喝采を博せんとす。

時は子規なく梅雨の天、晴れ間すくなき五月暗のつれ〲を喞つの時なり。この際天外の好信として月宮殿の開扉あり。豈閑却して可ならんや。

一たび月宮殿を取つて繙けば、忽ちにして窈窕たる佳人に遭ひ、忽ちにして嬋妍たる麗女に接す。面白き讀物に誘はれて手巻を措くを忘れ、日長うして展覩倦かず綺語嬌言いよいよ出でゝいよ〲こまやかに感興次第に蔗境に入つて、遂に月宮に昇り、百歳にして而して歸るを忘るの思あるべし。

見よ月宮殿

——口繪寫眞版其他　紙數本紙の二倍

▲創業二十五週年紀念増刊▼

招待の作法



鹿島浦子

人を招待する時、人に招待せらるゝ時にも、難かしくすれば、様々の作法がある。昔の日本でも客の身分により、案内狀の書式も違へば、字の書きやうまでも違つたもので非常に面倒臭いものであつたが其面倒臭いのが今は無くなつたけれども、其代り總てが西洋式になつて、晩餐會、園遊會、夜會等の會が始つた。

處がそれにも又一通りの作法がある同じ晩餐會でも公開のと個人のとは違ふし、招ぐ方でも招がれる方でもそれぞれの作法がある。

一々列擧するは容易なことではないが、晩餐會の案内狀には諾否の回答を請ふと附記することが必要であるが、夜會と園遊會には、それを書かぬのが普通である、西洋では夜會や園遊會の案内狀に諾否を求めるは下品としてあるが、日本では、矢張りそれをやる。併し諾否を求められた場合には先方では必ず早速返事をしなければならぬ。

晩餐會に諾否を求めるのは、人數によつて食卓の席の取りやうがある、それが何人來て呉れるか未定では其準備に甚だ困るので、若し二十人の食卓に五人缺けても體裁が宜しくなければ、十五人と思つて準備したところへ二十人來られては尚更困ることになる。

案内狀は少なくとも一週間以前に出すことが普通の例で、餘り差し迫つてからの案内は、缺員の補缺に呼ばれたのでは無いかとの惡感を起させることになる。だから案内狀も成るべく早く出すべきも、受けた方でも、取敢へず返事をするのが禮で、遅くなると思へは電報でゞも出さなければならぬ筈のものである。

それから呼ばれた方では、案内の時刻が午後の八時とあれば、八時に十五分前までには必ず先方へ着くやうに行かなければならぬ、それよりタトヘ一分でも遅くなれば失禮に當る、と云つて三十分も一時間も早く行くのは尚失禮に當る。

それから食堂に入るには、男客は女客の手を取つて行かなければならない而して其手を取るべき男女の組合せは豫め主人の方で極めて置くので、第一に男主人が正賓の夫人の手を取つて進み、それから男女の客が互ひに手を取つて續々と入場し、最後に女主人が男の正賓に手を引かれて行くのが禮になつて居る。席順は男主人の右が女の正賓、女主人の右が男の正賓の席で、それから順次左右に居並ぶのである。



最後の愛

山茶花

春先のうら暖かい日は離座敷の障子に映つて、時折雀がトタンの樋の中でチャラ〳〵と優しい足音を立てゝ遊ぶ。美名子はお針の木戸樣を相手に裁板を前に据ゑて、紋縮緬の長襦袢を縫つて居る、一寸針の手を止めて、

「ま、善く出來ましたわね。」

木戸樣は松に御所車の裾模樣に一寸餘り出した袘へ今ふ、、、つくらと綿を入れて撓めつ透しつして直す。

「奈何も駄目で御座いますよ。」と心から不出來で困つた樣にいふ。

庭の飛石にカタ〳〵と下駄の音がした。

「善お天氣で御座います。お孃樣奥樣がお召し物お出し遊

しますから一寸お藏へ御出下さいましつて、おや何てお綺麗で御座いませう。』と竹は障子の間から顏を出し閾に手を突いて見る。

「俄にお暖かに成りましたね、お庭の櫻もそろ〳〵眼んで來て、」

「直ぐもうお花見で御座いますわねえ。」

「木戶樣ちとお休みなさいましね、」と言つて美名子は母屋の藏へ行つた。母親は薄暗い簞笥の蔭に美名子を招いて、

「今朝勇が這麼手紙を寄越したよ。」と徒ならぬ顏色で袂から封を切つた手紙を出して見せた。美名子は眉を顰めた。

美名子は一人娘で有る。二三年前女學校も卒業した。これ迄養子の周旋をする人も多かつたけれども、言つて來る者は何れも〳〵此方で否なり、此方で思ふ丈の資格の者は到底養子になど來ないし、奈何爲樣斯爲樣と思ふ中に年は遠慮無く經つてしまつた。兩親は思案の末、もういつそ地位も肩書も無い修業中の者をと言ふ事に成り、兼て大學に秀才の聞えの高い原といふのに眼を着けた、原は豐ならぬ、商家の三男で有る。谷口家では相應の人を立てゝ申込んで見た所手もなう斷つて來た。一家は一方ならぬ失望に落ちた。斷られては猶欲しく二度人を代へて申込んだが復も斷られた。程經ても一家の心は何とも爲る事が出來無い。三度人を代へて讓歩に讓歩をして最早養子にとは申さぬ、娘を貰つて下さい、家を建て幾干かの資産も分ける。と迄言つた。到頭先方でも其の熱心に感じたと見え、夫れでは家や資産は望まないがお娘子樣はお貰ひ爲樣、兎も角も本人の成業する迄待つて下さいと言つて來た。此方は祖母が八十といふ歲では有るし一年でも早く安心させ度から、此の春の學校の休暇に式を擧げて下さい。丁度學校の近邊に相應の持家が有るから夫れを空けさすに由て暫時は其所に新夫婦は棲む樣に、との重ねての相談も都合よく纏つて谷口家では目出度い支度に忙しかつた。

所が此所に一つの故障が出た。美名子のお祖母樣の

實家は或事業の失敗から早く破產の悲境に陷り一家は離散して居た、お祖母樣の甥に勇といふのが有つた。性來柔和で一人の母親には優しく仕へた。親類一統へは少なからぬ迷惑をかけた上に、詐欺風の事迄爲た勇の兄は世間から見捨てられたけれども、夫れに引きかへ勇は何所へ行つても其の兄故に却て憐をかけられた。殊に美名子のお祖母樣は憐がつて、遊びに來ての歸りには何時も窃に紙に捻つた物も與へた。何所か勝氣で有る代り、義俠心にも富んで居た美名子の母親は、心から勇を憐み可愛がつた。勇は谷口家の爲には賴まぬ事もし火



水も厭はぬ心を見せた。其の後勇は家を出て所々に轉轉して居た間も不絶昔の恩を忘れぬ由を言ひ、母を氣遣ふ思を繰り返して寄越した。筆不精な父親の代りに美名子は母に促されて筆を執り、慰め且つ勵す意味の返事を書いた。其の後來た勇の手紙は次第に悲痛な文字で埋められる樣に成つた。美名子は漸々其の文字の裏の意味を知つた時には見下げ果てゝ甚く窘めて遣つた。其の後母親が死んで歸つて來た勇は昔の勇では無かつた。美名子は成る丈逢ふまいと勉めた。其の頃本氣の沙汰とは受け取れぬ手紙を無闇に寄越

した。美名子は餘りの五月蠅さと腹立たしさに絶交の手紙を飛ばした。兩親は心配した。勇の義理の叔父北代は再さういふ不都合の無い樣說き聞かした。其の時勇は美名子と深い關係の有るらしい事を髣髴かした。其の後勇は何所へ行つたか親戚の者も知らず谷口でも殆ど忘れて居た。所が今度美名子の緣談が纏つて、今一月の後には式を擧げ樣といふ場合へ何所からとも無く彼の手紙が舞ひ込んで來たので有る。

手紙には是非共面談致し度儀有れば時日と場所とを通知せよ。是れに應せぬ時は當方にては勝手の行動を取ると言ふ風の事が毒々しく書いて有つた。

「此方の事を知つたでせうね、手紙なんかで威すなんて卑怯だわ、構やしません打ち遣つて置きませう。」といつた。美名子は格別氣にも成らず離へ行つて縫ひかけを縫つた。夜に入つて母親は、

「奈樣に宅へ是迄世話を懸けてるか知れないのに、恩を仇で返さうとする、よく〳〵の惡い奴だ。斯ういふ場合故打ち遣つて置いても奈何かと父樣も仰有るから、須田の小父樣に御相談して勇を縮つて頂かう。」と言つて出て行つた。須田と言ふのは勇の姉の夫で親類中での德望家で有る。勇一家の爲には是迄隨分世話もした人故勇への壓しも利くだらうと思つての事で有る。

「母樣は今晩何の用が有つて須田へいらつしやるかな、明日になされば善いのに。」とお祖母樣は婆やに按摩をさせ乍ら獨言の樣に言つて居た。

美名子はお炬燵の向へ這入つて面白い世間話を爲た。貰ひ子の筆子は白い胸掛けをして、

「雨がしよぼ〳〵降つて來た、狸さんは德利持つて酒買ひに」と常の歌を繰り返して歌ふ。

次の日は美名子が母校の同窓會で有つた。丸髷の美しい奥樣姿で來たのも有つた。學びの光は心に包んで昔乍らの束髮に蝦茶袴で來たのも有つた。先生方のお話が濟むと一同打ち解けて思ひ〳〵のお話もし餘興も見た。最後には廣蓋に盛つた林檎を配つた。林檎の柄に紙切が附て居た。夫れは福引の札で有つた。お頭の

禿げた先生は、「仙臺樣の御紋と仰有る。幹事は笑ひ乍ら「笹に雀」と言ひ乍ら正宗の一合壜に鍋を添へて出る美名子が三十九番と言ふと幹事は杓文字を振り乍ら、「新世帶々々々」と言つて出た。美名子は顏を赧くした會が終ると杓文字をハンカチに包んで家路に就いた。道すがら澄み切つた夕暮の空に新芽を萠いた柳が浮きやかに靡いて居た



二三日して谷口の家へは不意に客が有つた。夫れは須田で有つた。須田は平常此の家へ出入する程近い親戚では無かつた。谷口夫婦は先づ客間に請じて密々と話をして居た、暫時して母親は出て來て、「須田の小父樣が勇に逢つて下すつた相だ。そして先方の話には、私は美名子と約束が有ると言ふ相だよ、お前小父樣に一伍一什のお話をして御覽な。」といつた。美名子は厭な氣持ちで頰の禿げた須田の前へ出た兩親は座を外した。

「昨日勇に逢ひましたが、先方では私の顏を見るともう目の色が變つて居ました。美名子さんとは深い約束が有る關係が有る、動かす可からざる證據も有る。今迄は忍んで居たけれども今度と言ふ今度は何所迄も遣つ着けると言ふのです。先方の言ふ所に違は有りませんか？」と聞く。美名子は呆れて、口を極めて、身の潔白をいひ表さうと爲たが須田は胸を開いて聞くとは見えなかつた。猶密々と兩親と話して、歸りには大い菓子箱を置いて行つた。

後で兩親のいふ所を聞いて美名子は復驚かされた。須田は、「先方の態度が非常に强硬だ、奈何でも美名子を貰はなければ止まぬ、と云ふ。私からは申惡いけれども是非今美名子さんを勇に遣つて吳れ。」と言つて歸つたと言ふ美名子は初めて面倒な事件が起つたと氣が附き、且つ何故其麽馬鹿な事を言ふのか須田の心の奥を少からず疑つた。お祖母樣へは成る丈心配をさせぬ方が善からうと言つて、悉しい事は言はぬ。雇ひ人の多い家故夫れ等に對しても一方ならず心遣ひをした。

母親は翌朝車を飛ばして遠類の北代へ行つた。其の夜は待つても〳〵歸らない。次の日も歸らない。夜に入つては盆を覆へす樣な雨が降つた。十一時過ぎに成つて、「今夜もお歸りはなからうか？」と女中供が訝し相に言ひ合つて眠むげに待つて居る所へ、母親が雨に濡れて歸つて來た。手には長〳〵油紙で卷いた物を持つて居た

昨夜は歸らうと思つたけれども、北代の小母樣の御病氣のお模樣が惡くてね、今日は餘程善く成りました。序に園屋へ寄つて這麽に遲く成つてと、女中共の手前を取り繕ふ爲とは見え透いた樣な事を言ひ乍ら、長く卷いた帶地を擴げて見せた。

美名子は父親の部屋へ入て母の話を聞いた。丁度留守で有つた北代に逢ふ爲、母は昨日から奈樣に氣を苛つて車を飛ばし廻つたか知れない。今夜はやう〳〵北代に逢つて話した所、半分聞て、分つた〳〵萬事私が引き受けた、大丈夫だと仰有るとの事、人の善い父親も少し眉を開いて寢た。此の不安な中で猶平日の心を

持つて帯の選擇をして買つて來られた母親の氣丈なのを思ひ、且つ事有つて知る親の恩の忝じけなさに、美名子は其の夜の枕に涙の溢れるのを覺えた。

次の朝一封の手紙が着いた。夫れは美名子が爲には待ち遠しい物で有つた。裏書には墨黒々と原讓と有つた。美名子は自分の部屋へ入つて開封した。中には何の思ふ事も無い淡泊な人の心の中の伺はれる丈の事しか書いてなかつた。美名子は讀み返して、もつと〳〵人にも見せられない樣な事が長く〳〵書いて有ればと厭き足ら無くも思ひ乍ら、又誰でも青年の安つぽく書く樣な與持ちの成らぬ言葉の露程も交つて居ないのを此の上無く頼もしく思つて、矢張胸には喜びが一杯で



其の儘父親にも示した。

其の後、朝から雨のしよぼ〳〵と降つて居る日で有つた。手紙を持つて來た男が有つた。父親は美名子を呼んで。

今須田から斯ういふ手紙が來た。お前に逢つて今一度話を聞き度い事が有る。來て呉れないかと言ふんだ。行くのか？」と言ふ。斯う言ふ場合輕々しう他家へ行くのは善くないとは思つたが、さりとて斯う言はれて行かねば後暗いと思はれやう、此の間の須田の態度が氣に入らぬ。行つてもつと分る樣に言はう。と頓に思ひ定めて、「行きます。」と美名子は言つて、身支度を

した。ふと棚から取り落とした壜の毀れたのも何となう氣に懸つた。お祖母樣は干柿を壺から出して袱紗に包み「是は少しだけれど、須田のお祖母樣に上げておくれ。」と言つて美名子に渡した。

須田迄は可成遠かつた。雨は小歇み無く車の幌を打つた。奈何したのか下り坂で、車夫は辷つて危く車を覆へさうとして尻餅をついた。夫れにも美名子は胸を轟かした。

須田は舊家で有る。疊も襖も古いが二十疊敷程も有る客間に、主人は火鉢を控へて待つて居た。當方を敵と見るで有らう妻君は、まだ〳〵若く美しい人では有るが、愛嬌の無い顔をして茶など運んだ。

「先方では動かす可からざる證據が有ると言ふ。現に先夜貴方のお話にも親密な文通を爲たらしいお話だつた。男女が手紙の遣り取りを爲ると言ふのは詰る所は何の爲か？　今は男は零落し詰めて居る。零落したから棄てると言ふのは道で無い。」と言ふ。先夜此方の言つた事は全然信じて居ない。妻君は襖の蔭で聞いて居るだらうと思ひ乍ら。

「零落れたから棄てる棄てぬと言ふお話ではない。約束が有る無しの詮議ならば物の分つた人の前で言ひませう。證據が有れば出して貰ひ度い。」と言つたが耳には入らず。

「世に失戀の結果の恐るべきは貴方も知つて居るだらう。よし左樣言ふ事は無いにせよ、貴方の今度の縁談は乾度彼が邪魔をして打ち毀はすだらう。そして又他の所へ行かうとすれば必復出て來て打ち毀すだらう。生涯貴方は片付く事は出來ないだらうと私は思ふ。」と言ふ。美名子は言ふに言はれぬ口惜しさに最早一刻も早く歸らうとすると、妻君は膳部を運んで來た。食事は疾くに濟んで居ると言へば、夫れでは一寸と言つて今度は酒肴を運んで來た。美名子は胸が沸々と湧き立つ樣に成つた。

結婚の日は次第に近づく。座敷には唐草模樣の油單を掛けた簞笥長持ちが並んだ、母親は後から後から裁ち物の見積りをしてお針に廻し、下女を相手に郡内の

蒲團へ嵩高に綿を入れる。
　お祖母樣は每日每夜神棚へお燈明を上げ連ねて何をか一心に祈つた。
　其の中北代の家へは親類が會した。美名子と勇に關係の有る親戚で來ない者はなかつた。其所へ勇を呼び寄せた。勇は酒を飮んで車の上に橫はつて來て、一同の前で泣いたり怒つたりした。須田は全く勇の味方に成つて居た、酒の醉を醒まさせて日夜議論に議論を重ねて、軈白黑は明白に成つた、須田は今更の樣に勇を見限つたと言つて突き放した。勇は再不都合の無い樣に其の兄が責任を持つ事にした。
　其のいさくさの間に美名子が庭の櫻は咲き滿ちた。美名子は遣り所のない不安を持つ目に眺めた。
　數日に渡る會合の結末を聞た時は手を打つて喜んだが猶何となう胸の憂を拭ひ去る事が出來なかつた。
　所へ勇の兄がぼかりと來て、お祖母樣は驚いて、まあ此方へ、」と客間へ上げた。そして酒を出した。
「勇が實に申譯も無い不都合をして何ともお詫の致し樣も有りませぬ。」と繰り返し〳〵言つて、菓子折を置いて行つた。父親は居間から出て來て、
「お母樣彼れに酒など出さなくつても可御座いましたのに。」と言つた。所へ母親も外から歸つて來て、
「まあ、陰では弟の尻押しをして置て、善くも〳〵來たものだ。何故お母樣其麼菓子折なぞ其の場で叩き返してお遣りなさいませんでした。」と口惜し紛れに言てしまつた。
「私は又、やう〳〵事の納つた場合故、荒立てまいと思ふ許りに……」と後は顫へて言へなかつた。顏の色は靑く成つて、ひよろ〳〵と奧へ入つて此の頃上げ得ない蒲團の上に仆れた。吐く息引く息は噎び入る聲に混つて、細り細つた命は今にも絕えるかと見えた。
「お祖母樣々々々貴方の仰有る通りですよ。どうぞどうぞもう御心配なさらないでねゝ」と美名子は老軀を抱く樣にした。
「お母樣私が惡う御座いました。何卒〳〵お赦しなすつて……。」

「千代が惡るい。」
「私は、私は、歳取つた身だ‥‥此の命に代へて何卒美名子には祝言をさせてと八幡樣へ御願を‥‥‥」
「あゝ〳〵もう分りました〳〵」と父親は涙を飲む。
母子は聲を潛めて泣いた。
翌日媒妁の老人は倉皇として來た。媒妁人は何も彼も知つて居た。
「唯今勇と言ふのが氣狂ひの樣に成つて來た。新らしく證據物が出たから持つて來た。是から原へも行くのだと言つた。懐から何か出さうと爲たのを制して、
「原へ行くのは此所三日の間待つて吳れ、三日の後には兎も角道を開くから。」と言ふと、
「此方には覺悟が有る。其の間に結婚爲せては許さぬぞ。」
と言つて歸つたと言ふ。母親も美名子も其所へ出た。兩親は復も大波の逆巻き來るのを知つた。美名子は千斤の錘りを一筋の糸に繋ぐ思ひがした。とは言ひ乍ら、頼む人の心は大盤石と思つた。
「よく〳〵お前は不幸だ。」
「彼麽毒蛇に見込まれたのが運の盡きだ。」
「其麽事は有りますまいが、原の方へも‥‥‥」
「最早原にも知れぬ事は有るまい。一伍一什を話した方が善からう。」
「浮り言つて誤解でもされては藪を突いて蛇だから先づ讓君を私の所へ呼んで、緩り腹に入る樣に話さう。其の方が善からうと思ふ。そして彼の方は金だね。」
「其所だ〳〵、結婚の日が今十日か十五日か先でなければ此れでは何とも成らない。」
父親は媒妁人と猶話さうとする所へ媒妁人の宅から使が來て、
只今是非御目に懸り度と仰有つて御客樣が見えてますから、お話がお濟みに成られましたら直ぐ一寸お歸り下さいまし。」といふ。
「夫れではまた今、」と言つて老人は歸つた。
物を思ふ父親は目切頭が白く成つた。

「奥樣一寸」と竹が顏を出して、
「これは園屋が輕少で御座いますがお餞で御座いますつて、夫れから爺やが歸りまして御座います。」
「お姉樣お簞笥が來ましたよ。」と峯子はばた／＼走つて來て言ふ。
出入の爺やが誂への簞笥を受取つて來て。下女が注ぐ膳先の一杯に醉つて喋々と結婚の賀を言ふ。
「まあ／＼彼れも身が極つた樣な譯でね。」と母親は言ふ。
置き所の無い心配に、立つても居ても居られない父親は媒妁人の所へ行つた。直ぐ歸つて來て坐るや、腕組をして頭を下げた。皺めた顏から露の玉がほろりと溢れた。
「千代もう駄目だぞ。美名も決心して居なけりや成るまい。」險しい私話き聲で言ひ乍ら潤んだ目に我が子の顏を見詰めた。
其所へ媒妁人はつと這入つて來た。
「實にお氣の毒とも何とも申上樣も無いが、今讓樣が來られて言はれるのに、聞く所御親戚からも御懇望が懸つて居るとの事、左樣迄にしてお貰ひするのは本意でないから此の緣談は無かつた昔にして呉れ」と
美名子は三つ兒の樣に母の膝に突伏した。

……………

此の日頃鬱る思を筆に任せて書きさして有つた手紙を取り出して、讀み返してはさめ／＼と泣いた。何か言ふ可からざる猛烈な力で胸を劈かんとする思の有るのを覺えて、其の時心の中に叫んだ。
我を救ふ物は死と、

▲小兒の齒は何處の藥屋にもある硼砂の粉を五十倍乃至百倍に溶いて之を以て洗ふてやるがよろしい。此硼砂水はアルカリ性のものだから少し位咽喉に入つても構はぬし又酸類のものを食べてゐても大丈夫だ。食物は出來得る限り堅いものを食べさせる樣にするが宜しい。同じビスケットをやつても堅いものを選んで堅いものに堪へる樣にするが肝要である。滿七歳から十二歳迄は齒の生え代る時代で其齒の衛生を怠つた爲めに自然痛みを生じ胃腸の病を惹起す十二歳迄には永久齒が揃はぬ爲めに長いのもあれば短いのもある。又ゲワ／＼して堅まつてゐぬから特別の注意を要する。

新刊紹介

○新譯源代物語(與謝野晶子著) 源氏物語は千古の名篇なれども、如何せん語句難解にして容易に意味を悟りがたき恨みあり、然るに與謝野晶子女史筆を執りて悉く之を現代語に譯したれば、一讀直ちに名篇の内容を味はしむ、森上田兩博士が本書の序文にその成功を激賞したるを以て見るも、其價値の多大なるを知るに足らん。尙ほ中澤畵伯の源氏繪卷五十四帖は頗る優美を極め、平安朝の面影を目前に展開するの趣きあり。(特價參圓五拾錢、金尾文淵堂發行)

○日常家庭調劑寶鑑(藥學士越澤渦滿著) 從來病氣に罹る時は唯だ醫師まかせにしたれども、調劑の一般智識位ゐは知り置くべき必要あり、本書は此の缺陷を補ふために精しく藥品の調劑を述べ並せて化粧品の製し方まで記したるものなれば、如何なる家庭にも一本を備へんことを勸む。(定價壹圓博文館發行)

○淘宮術と處生(醫學士森友道著) 近ごろ身體の健康を計るに主として精神修養及び靜座呼吸の兩面より以てするやうになれり、本書は更に一歩を進めて道義と健康との關係を述べ、以て處世の要訣を說きたるものなれば、新時代に活動せんとするものは一讀を要すべきものなり(定價五拾錢、博文館發行)

○新氣運(伊藤證信著) 本書は嘗て雜誌『無我の愛』に掲載せられたる文章を一括して出版したるものなり、全編を主張、告白、評論、人物、問答の五編に分ち、專ら思想界の新氣運を論じたるものなるが、其中に、婦人の現狀、その特質、その教育など、婦人問題を論じたるも數多あれば、新時代の婦人は宜しく一讀すべきものならん。(定價八拾錢、丙午出版社發行)

○閨秀小說十二篇(岡田八千代編) 本書は與謝野晶子、水野仙子、長谷川時雨、尾島菊子、田村とし子、岩田百合子、森しげ女、國木田治子、生田嘉子、小栗籌子、木内錠子、岡田八千代女史十二人の小說十二篇を輯めたるものなれば、現代女流作家の文致を窺はんとするものは勿論、苟も文章に志すものは一讀すべきものなり。(定價四拾五錢、博文館發行)

○新編女學唱歌集(天谷秀氏著) 本書は專ら本邦女子の性情に適切にして趣味ある新選歌材二拾有餘を集めたるもの、歌詞は三宅花圃、鳥山啓、武島文學士作曲は上眞行、天谷秀、納所辨次郎諸氏にして今回文部省檢査濟となりし良書なれば高女及女子師範、等の教科用として適當なるのみならず又家庭の伴侶として頗る可なり。(定價金二十一錢、東京日本橋區本町金港堂)

○わかれたる女の日記(鮫島大浪著) 表題の如き日記的の小說にして、表裝に千代紙の意匠など凝したる小册子なり。(定價四拾五錢、良明堂發行)

○櫻さく國 紅桃の卷(竹久夢二編) 例の如き夢二氏の畵報なり。(定價二拾錢、洛陽堂發行)

○中學部通信教科書 本書は尋常小學校卒業生の爲めに設けられたる講義錄なり。(入學金二拾錢、授業料一學期間參圓、大日本通信教育會發行)

○通俗教育山河拾四州(玉井紅葩著) 本書は武藏、相模、甲斐、信濃、越後、越中、加賀、越前、近江、美濃、尾張、參河、遠江、駿河の十四箇を鐵道線路に沿うて其國の山河、史蹟、傳說、俗謠等を記したるものなれば、勤學の餘暇に讀みて甚だ面白きのみならず、旅行用として亦た至つて便利多かるべし。(定價六拾錢、春陽堂發行)



誌友倶樂部

▲誌友の皆樣、今年も色々と澤山の手紙や繪はがきをよくお送り下され、誠によろこび居ります、紙上を借りまして一寸誌友のお方にお尋ね致します、キミ子樣より一二三樣と云ふ宛名の繪はがき(淺間山ヨリ足利全市ヲ望ム)印紙なくアドレスなき不思議の繪はがきが、北米に渡りて妾の所に着きましたよキミ子樣、一二三樣どちらのお方でも宜しく、住所お知らせ下さい、右の繪はがきをお送り致します、妾のアドレスは昨年の拾二月號にあります、(北米ニテ常子)

▲私は去年三月地方の高等女學校卒業致し、今は兩親の膝下で茶の湯、生花琴等の稽古いたし、又裁縫も習つてゐますが、いろ〳〵考へる事がありますので、京都か奈良か名古屋邊の、人の少ない手本となる樣な家庭へ行儀見習として參りたいと存じます、而し私は世に多い虚榮心からして都に出るのでは決して〳〵ありません、父は官吏で、宅は中流以上の生活してゐます、何分親族が名を出した人が多いので、私の姓を出しては憚ります故、御面倒ながら、記者樣に處はお尋ね下さる樣、どうか誌友の御姉樣方、よき家庭がありますなら、皆樣の御盡力でよろしく願ひます、私の思はしい處なら、すぐ參りまして、其上はどんな事でもいたします、而し夜は時間のひまをもらひたいです、(夢の人)

▲目尻の下つた內藤千代子樣は、目尻の下つた記事をなし、拗れた女の尾崎恒子樣は、拗れた女さま〴〵の女の身の上をお書き遊ばす、千代子樣のお筆は面白いが、讀んで心に印象が殘らない、恒子樣のお筆は文の上には花はないが、餘情澤山、印象が強い、千代子樣は春の女、恒子樣は秋の女、千代子樣とは手を引いて朧月夜を歩いて見度い、恒子樣とは孤燈の下で悲しい身の上ばなしでもして、しつかりと手を握り合つて泣いて見たい、それにしても一時世間の若い女の心を浮付かせた千代子樣の引込んだ跡に、恒子樣のやうな優しい涙の方が現はれたのは、私ども愛讀者の幸福此上もありません、あゝ恒子樣あなたはお年はおいくつ、私は多分もう廿七八位になつてゐらつしやる方でせうと思はれますわお子樣は旦那樣は……、私あなたに是非お目にかゝり度いの、そして私の身の上も聞いて同情して頂きたいの、失禮ですけれど、紙上でお住所おあかし下さいましな、お願ですから……(小石川の片田舍にて賤の女)、

▲松澤樣にお伺ひ申上ます、朝顏の種子は、朝鮮でも郵券五枚でよろしいですか、御面倒ながらお知らせ下さいませ、語る友も無く、只每月の女學世界を何よりの樂しみとして暮して居りますどうか誌友の皆樣、以後もお心安く、お願ひ申ます、(朝鮮元山津楠瀨政子)、

▲記者樣、私の娘に東京の或る方から結婚の申込がありました、媒介者の話では大變宜敷き縁談の樣に思ひますが、遠方の事ではあり、又聞合せする樣な御地に心安き方もないので困つて居ります所に、女學世界三月號の「結婚調べの內幕」と題する人事興信所長內尾直二樣の御談話を拜見致しましては、尙更調査の必要を感じましたが、一體人事興信所は何處にあつて、誰れでも依賴する事が出來ませうか誌上でお知らせ下さい(靑森の木村)人事興信所は京橋區弓町十七番地にあります、誰れでも依賴することが出來ます、

▲私は平和なる移民地にたのしい日を送りつゝある女學世界愛讀者でございます、どうぞ御交際を願ひます、皆さん大へん渡米お望みの樣ですれ、少しも心配は入りません、早やく御決心遊ばして入らつしやい、おまち申して居ります、シヤトル市には二つも同胞婦人の爲に日本人ホームがございます、タコマのmiss Yoshida、次號にもあなたの振つたお作を拜見したうございます(ホームリー)

▲三月號の本欄を拜借しまして淸香樣にお知らせ致しました所、意外にも全國の讀者の方々からその副業とは何んな事か、周旋せよ、と意外にも日々數通、多い日は十二三通もお尋ね下さいました、そして既に四五のお方は御着手になりましたに就て、再び希望のお方もと本欄を拜借いたします私の御紹介致しまする內職は、指先

でする貫仕事ではありません、ホンの餘暇を利用して出來る副業ですから、大都會では立派な營業する人もありますが、地方の片田舍の御方などでも氣安に出來ると思ひます、御希望の方は御申越下さいまし、資本も何もいりません、要するに、愛讀者の義務として相互の利便をはかりたさの外はありません、(京都市岩上高辻上ル藤谷吳服店内ふじ枝子)

▲四月號ゆかり子樣の初陣の記、ほんとにお氣の毒ですのね、私は一番先に目に付きました、私の第二の友に初陣の記と同じ境遇の人が居りましたのよ、もしや其の友の事ではないかと驚きました、どんなに嬉しかつたでせう又どんなに悲しかつたでせう、人知れず袖をぬらしました(淋しき白衣子)

▲お懐しい皆樣、私は此女學世界がまだ姊い時分、つまり私の春まだ淺い十四五の頃から、此雜誌が何處となく慕はしかつたのよ、ですが、投稿などと申す樣な事はとても〳〵及びもつかなかたのよ、只愛讀するのみでございましたが、次第に雜誌と申す物の意味、女學世界の價値が了解されて來まして、愈よ懐しさ戀しさが增して來ましたのよ、それも皆樣のお蔭と感謝してゐますの今私が此の女學世界が他の諸雜誌に勝つてゐますと自ら誇つてゐますのは、唯一つ嶌世心の生氣が每頁に滿ちて居ます事と思ひます千代子樣、磯千鳥樣鏡子樣は勿論、和歌、俳句に投稿なさる皆樣、誌友倶樂部の皆樣淸い美しい樂しい心は一字一字にこもつてますわね、私もこれから誌友倶樂部に每々出しますから、皆樣捨て給はずに友として下さいね、さう〳〵忘れて居ました事、私の兄樣が今はございませんが、ハガキ文學と云ふ雜誌を取つてましたが、それに太田三郎樣の草花繪物語が記載されて居りました、その時の繪は此の女學世界の挿繪よりもつとづつと色付の好いのでしたのよ、ですから皆樣と一所に繪物語の挿繪をハガキ文學の挿繪にあつた樣にお願ひ申しませんか(菊香)

▲諸姊樣、私は活花のお稽古が致したいのですが、有名な先生方では、會やなんぞが有りましてみなりや何やかに綺羅がはり、そしてお金も大さうかゝるので困ります、神田、下谷、本鄕邊にて成るべく會などのない質素な、そして費用の餘りかかりません親切な方で手輕く御敎授下さる池の坊のお師匠さんはございませんでせうか御存じのお方はどうぞ敎へ下さいませ（お茶の水ほとりにて梅子）、

▲横濱の須美子樣、御親切に有難う存じます、其れではお言葉に甘へまして、頂戴いたします、どうも恐れ入りますが、下名まで、追て郵稅等お送りいたしますから、御住所御氏名お[illegible]そへ下さいませ(阿波名東郡上鮎喰吉田輝子)

▲私は五年前から赤十字の看護婦を希望致して居りましたが、都合の惡いため目的を果す事が出きませんでした、本年も試驗を受け樣と存じましたが、期限がをくれてしまひました、姊樣達どうぞ哀れなる私をお助け下さいませ、中途でいけませんでせうが、赤十字か又は大學でもよろしうございます、看護婦になれる樣にてつゞきして下さいませ、如何なるこんなんをもいとひません、他の病院でもよろしうございます、くわしき事は、おてがみをいたゞけば、おしらせ申上げます、かしこ(札幌區南六條西十丁目井塚小さわ)

▲三月號にお出し遊ばしました藤谷吳服店内のふじえ樣、私も内職をもとめ度いと思つて居りましたに、何かたやすく出來ます由、お願ひいたし度ふございますが、御姓は書きません、只名前丈で差し上げてとゞきますのですか、次號でお答を願ひます、(山里にてさつき)

▲三月號の口繪「花咲く頃」、あの琵琶を持つた姿!!!、女學世界の口繪にまで、いつも女の手にはヴアイオリンかお琴ときまつてゐたものが、琵琶と換へられる樣になつたかと思ふと、如何に東京の婦人社會に琵琶といふものがもてはやされてゐるかゞ察せられて、思はず微笑を禁じ得ませんでした、私にとつて琵琶程好きなものはありません、琴もヴアイオリンも見捨てゝ、目下大いに研究しつゝあるのです、が古風な京都邊では、まだどうもお轉婆に見られるので弱つて居ります澤山の讀者中には、同趣味のお方もあらうと存じて、ついこんな紙上に方面違ひを申し上げました、何卒御同感のお方は地方にをける斯界の御消息をお聞かせ下さいませ、(京都小林君子)

▲花物語をおかきになりました玉露さま、ほんとに面白く拜見いたしました、以後もどうぞあんなのを、やさしい中に、りんとしたところがございますもの、ます〳〵お振ひ遊せな、玉露樣、(黃門のほとりはなのこえ)

▲海外の皆樣、私は三四年前に高等女學校を卒へて、其の後二三の專門學校にも通つたものですが、曾て海外へ是非とも遊學致し度いと思ひ

ながら、何分樣子が分らないので、困つて居ろのでございます、それ故外國におはす石たちと御交りがお願ひ致したうございます、そしていろ〳〵とお話をお伺ひ致したり、また私に出來ますことでこちらに御用がおありの方は、何なりとしてさし上げたうございます、なほ皆さまの内に、佛國にゐらつしやる方はないでせうか、らしおありなら、とくにいろ〳〵お伺ひいたしたい事がございますのですが(東京にてムゲツト)

▲四月號の破鏡の歎を拜し、人しれず泣きました、噫みどり樣の姉樣に御同情遊ばした御心中お察し申します、私の姉も是れと等しき境遇に有つて淋しき月日を送つて居りますあまりお墓さの餘りに(仙臺清香)

▲諸姉樣、私は三越裁縫部へはいり度いのですが、何卒御存じのお方はお手續きを願ひ度う存じます、(淋しく暮す常陸にて白百合)

▲内藤千代子樣、松平鏡子樣、ますますお振ひ遊ばせな、お二方ともどうしてあんなにお上手なんでせうか、女學世界と云ふとお二方を聯想いたしますのそれから磯千鳥のお作もいつも面白く拜してます、(下關にて梅香)

▲第拾貳卷第三號に、北米熊谷常子とお書遊ばされましたお姉樣に申し上げます、私も此の度から、女學世界を愛讀いたす事になりましたからエハガキ等の御交際をおねがひ申します、又私もかならず繪葉書や手紙を差上げます、尙おさしつかへなくば御住所を御しらせ下さいませ(神田區仲猿樂町四番地堀田方堀田けい子)

▲京都の藤谷吳服店内ふじえ樣、私は今大阪府の田舍に生活をして居る者ですが、小兒の時分から京都に十二三年も暮して居りましたので、御地がおなつかしうぞんじます、此の後は何とぞお交際をお願ひ申します、三月號で拜見致しましたが、二月號の淸香樣へ業務の餘暇副業に出來容易い内職が御座いますとのこと、何とぞ私にもお敎へ下さいませんか、(河内貞子)

▲釜山のムラサキ樣、私の在所に和歌の先生があります、他人樣の評に日本有數の歌學者で添作の事が別段他に優れておゐでなさるといふ事です、若し添作をお願になるなら、私の所まで沙汰さるれば、先生にお紹介仕りませう、(茨城縣結城郡豐加美村大字加養濱崎菊)

▲白桔梗樣の「桃の宵」、大層面白く拜見致しました、私は、貴女樣と同じ席の上で、桃子さんをおんぶしたりなどしてあそんだ一人で御座いますのよ、あてゝ御覽遊ばせ、本當に戀しう御座いますのね、(巴港に偲草)

▲繪はがきの交換を、米國の方と、内地の方にお願ひ致します（茨城縣水戶局區内常盤村石川古田土留次郎樣方根崎久子)

▲大阪市内又は京都、姫路にて、手藝を敎へて下さる學校がありませうか、一二年で卒業が出來て造花なり裁縫なりの店が出來ませうか、誠にすみませんが皆樣お願ひ申します、(神戶の年行姫)

▲諸姉樣、私は十卷の一月號からの愛讀者です愚な者では御座いますが、花のお姿のお寫眞をお惠み下さる樣賴みます、其かはり美しい書籍又はめづらしい繪葉書をお送り致します(兵庫縣川邊郡伊丹町宮ノ前津田方松田麗志子)

▲誌友の皆樣、私は高女卒業後、甲府の山間にさびしく暮して居るものですが、たゞ〳〵女學世界を紙上の友として愛讀して居ります、どうぞ皆樣ふつゝかながらお交はり下さい(すみれ子)

▲お茶の水橋畔の忍草樣、御なつかしうございます、私はこよなくお茶の水橋畔を戀しがつて居る少女でございます、但馬の北海岸に住んで居りますが、京都府立第二高女の去年の卒業、どうぞお差支なくば、お明かし下さいまして、親しきお交りをねがひます(白百合)

▲女學世界は日に增し錦を飾つてきました、之れも記者樣、初め諸姉樣のお力による事と深く感謝して居ります、あゝ私は此の女學世界を友とする樣に成り、どれ程我が身に質をえたでせうどうして此の戀しい友と別れる事が出來ませう、益々みなさんの御手ぶり愛讀さして戴きませう、(滋賀片山きくの)

▲皆樣、お花見さぞおたのしみでございましたでせう、田舍に移住した私は、麥の靑々としたのを見てすごしました、(神奈川縣下小麥)

▲私は寂しき片田舍の一少女でございますが、本誌を唯一の友としてをりますの、誌友の諸姉樣、御交際をお願ひ申します、ことに朝鮮の方はお懐しうございます、私の友達は中野樣とおつしやる方です、(德島岩佐秋子)

▲私事十年程も前から、足に魚の目のようなものが出來まして、醫師にもかゝりいろ〳〵と藥も用ひましたが、未だに治りませず、此頃は步行も困難で、誠に困つて居ります、どうぞよい藥がございましたらば、お敎へ下さいまし(京橋千どり)

募集（五月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以內の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館內女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文
天賞畫圖、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞畫圖、地賞五拾錢、人賞參拾錢

每月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
內｛定刊數 十二册／增刊四回 一、五、九、十一月價格同一｝	
郵稅	一册 二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十九行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●御目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十五年四月十三日印刷　〃本
第拾貳卷 第六號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　市川七作

印刷所　博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百八番地

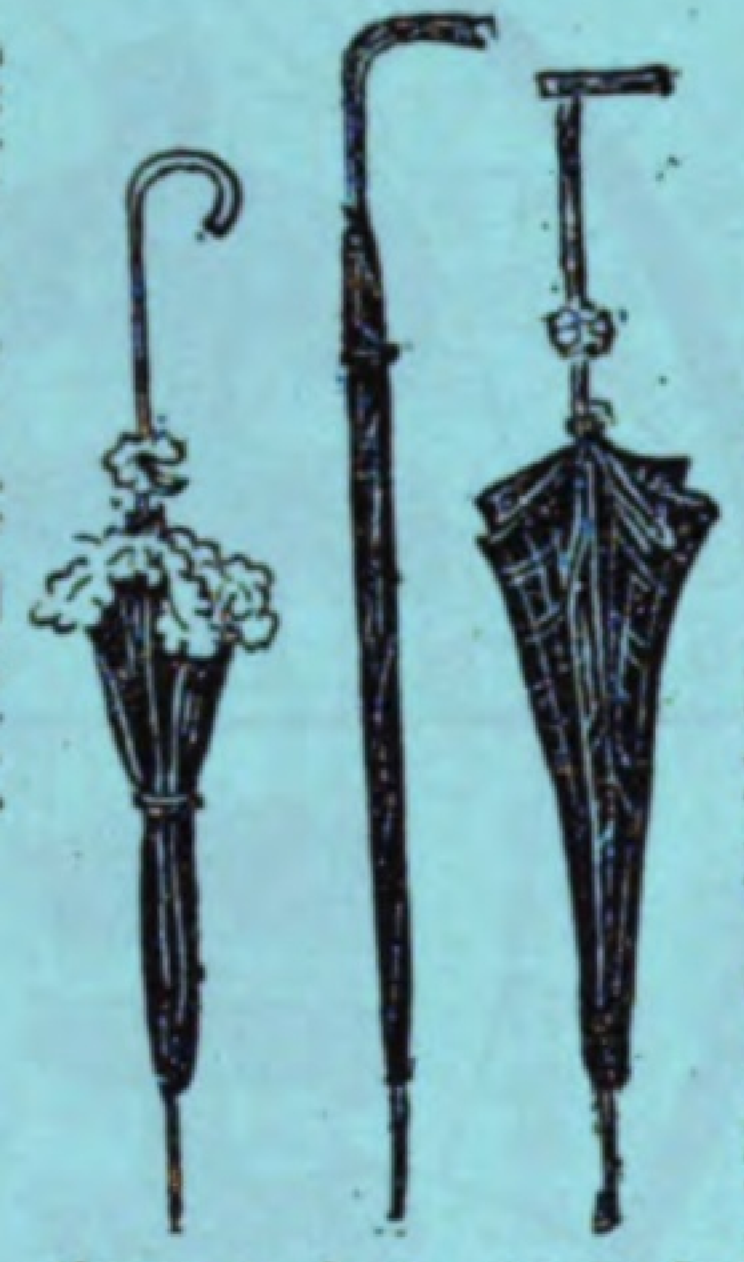
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話 本局
二千六百二十番
三千二百二十九番
三百三番
千十八番

博通社㊫博特賣品

最新流行の婦人持洋傘

●絶對的の好適品を見落し給ふことなかれ!!!



郊外散歩の好期、此際吾社は價格と實質とを對比し、破格の廉價を以て壹万本を限り特賣す、早いが御德！

●注意 御注文の際は必ず御年齢と色あい模様柄及び繡取の有無とを明記されたし色合は鐵蓊衛鼠紫紺なんど等御隨意

●天下無比の廉價!!!

●郡内上絹一號 特價二圓
●郡内コハク二號 特價二圓五十錢
●西陣無地三號 特價三圓五十錢
●西陣模様四號 特價四圓二十錢
●豐王上絹五號 特價四圓五十錢
●西陣豐王絹繡取物二割増
以上袋入體裁優美、
▲荷造送賃 市内無料内地二十五錢 朝臺清五十錢

●安心で便利で廉い買物は博通社に限れり!!!

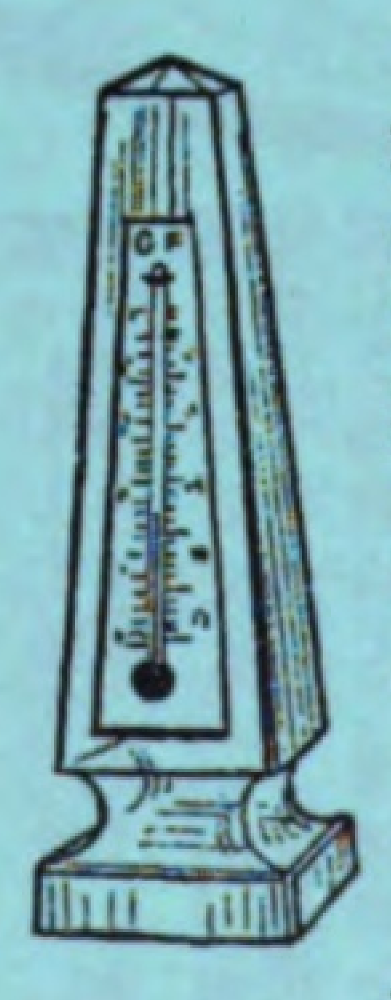
◉優美高尚 衣裳の薰（紳士淑女は必ず本品を用ひ給へ）



麝香障腦に比し貴重品を汚すことなきと芽香の萬人向きなるとは本品の獨得なり平素携帶自他に快感を與へ衣服書畫の保存に用て効能偉大

●特價桐函絹袋十ケ入 一圓六十錢
●特價桐函紙袋十ケ入 九十五錢
●防虫用五十ケ入 一圓十錢
▲送料 内地拾錢 臺朝清樺三十錢

◉新案埃及文鎮（意匠奇拔 體裁優雅）



本品は精巧なる寒暖計を美術的に封加せし恰も水晶の如きピラミット型の文鎮なり高尚優美にして實用と裝飾とを兼ね貴顯紳士或は學生諸君の机上を飾る最も趣味多き逸品なり、色採は純白綠淡江紫等

●高曲尺四寸 方仝一寸三分

◉特價壹圓貳拾錢
送料 内地拾錢 臺朝清樺參拾錢

大橋メール、オーダー、ビジネス

博通社

東京日本橋區本町一丁目

電話本局六百四十番
振替口座東京五十番

（後付の一）

經濟財政界の羅針盤

主筆 本多精一



創刊

□新日本の財政經濟……本多精一

□如何にせば減税と財政の鞏固と兩立し得る乎

((口繪))

▽倫敦橋(精巧無比三色版)▽財政三元老(二色刷)▽アート紙寫眞版十二頁

『地球』は東洋空前の大計畫を抱いて我が經濟財政の指導者となりて我が商業の顧問と爲り殖産致富資研鑽の論壇たり且つ最新知識の府たる可く朝野知名の學者實務家の賛助の下に四月十五日を期して第一號を創刊す形式に於て我國に於ける最高の輿論と學説を蒐集すること尚ほ『太陽』の我が出版界に重きをなすが如く編輯の方法程度の標準亦た相同じ之を内にしては經濟を趣く可き途に導き外に對しては直ちに日本帝國の實業に關する公論の存する所を代表す其の品位の貴きに於て其の實質の卓越する事に於て蓋し我が財界唯一の發光體なり

前金

●三冊	金八十五錢	郵税九錢
●六冊	金一圓六十五錢	郵税十八錢
●十二冊	金三圓二十錢	郵税卅六錢

發行所

東京日本橋
振替貯金口座

商業工藝界の好指針

第一號……四月十五日發行

四六倍判紙數二百四十八頁●口繪三色版二色版各一丁●寫眞版光澤紙刷十二頁
正價卅錢
郵稅三錢

□輸出超過促進策

男爵 澁澤榮一
衆議院議員 武富時敏
法學博士 添田壽一
貴族院議員 若槻禮次郎
十五銀行頭取 園田孝吉
法學博士 堀江歸一
東京海上保險會社長 末延道成
法學博士男爵 坂谷芳郎
男爵 高橋是清
東京商業會議所會頭 中野武營
森村市左衛門
三井物產會社常務取締役 山本条太郎
大藏次官 橋本圭三郎
堀越善重郎
日本銀行理事 吉井友兄
三井物產會社常務取締役 福井菊三郎

▽安田家の投資方針……安田善次郎
▽鐵道王二代の主（圖入）……
▽工業資本の運用策……橫濱正金銀行副頭取 井上準之助
▽兌換制度の正體と變體……鶴原定吉
▽日本銀行論……法學博士 山崎覺次郎
▽ストライキと勞働組合……法學博士 井上辰九郎
▽吾が家の寶（圖入）……濱口吉右衛門
▽納稅方法の改善……遞信省貯金局長 下村宏
▽經濟上に於ける日本の前途……法學博士 神戸正雄
▽國富開發保存論……貴族院議員 仲小路廉
▽三井物產會社創立當時……馬越恭平
▽僧雪村（圖入）……
▽時評……（十五節）
▽高田屋嘉兵衛……碧瑠璃園
▽紡績工場增築私見……日比谷平左衛門
▽內地に起り得べき新工業……工學博士 三上喜三郎
▽明治初年財政の實歷……侯爵 井上馨
▽西南役前後の財政……伯爵 大隈重信
▽兌換制度實施の顚末……侯爵 松方正義
▽謠曲座右銘（圖入）……
▽建築趣味（圖入）……
▽投資々料……
▽東京市內大地主……
▽評論の評論……

●今回創刊三大雜誌「**地球**」「**淑女畫報**」及「**演藝俱樂部**」の三種若くは一種の御注文にても下の割引券を適用す
●館友は館友規定引の外割引せず
●本券は前金注文の外は効用なし
●申込の節は博文館小賣係宛のこと
●本券は一回一枚限り有効として數枚御送附あるも割引の步合を增するものに無之候

……（切取線）……

博文館三大創刊雜誌 割引券

此券封入の方には各雜誌所定の前金より**五**分引の事

有効期限 四十五年五月卅一日

博文館 本町三丁目 二四〇番

●興味横溢鮮麗無比の創刊

淑女

第一巻第一號 四月一日發行

● 畫報

◎花間鳥語…………(表紙畫)
◎マダム振り(彩色石版)……北野恒富畫
◎花綻びんとして雨情あり(原色版)……山本昇雲畫
⊙後ろ姿……寺澤幸太郎畫
⊙春の朝……太田三郎畫
⊙春たけなは……武田壽畫

○北白川宮擴子女王殿下
○梨本宮妃伊都子殿下
○伏見若宮妃經子殿下
○島津公爵令孃薫子姫
○戸田伯爵世嗣夫人米子
○神田鐳三氏夫人さわ子
○横田國臣氏令孃沖子
○籾山半三郎氏嗣子夫人千代子
○岡田治衞武氏嗣子夫子敏子
○大谷蓬子夫人
○大谷紝子夫人
○西洋音樂家の集ひ
○小笠原長崎兩夫人送別午餐會
○男爵三井八郎右衞門令孃慶子
○井上勝之介氏緣女幸子
○瀧澤吉三郎氏令孃よし子

⊙花五題……岡落葉畫
⊙花見衣……竹久夢二畫
⊙花園に……萬代恒志畫

○愛のさゝやき(泰西名畫)
○和氣靄々(大隈伯爵家の方々)
○關西名家辰馬半右衞門氏家庭
○佐々木博士の三令孃
○鈴木博士令孃のぶ子
○鈴木軍醫令孃愛子
○莊清次郎氏二令孃
○井上博士令孃すが子
○前田伯爵二令孃と木村貞子女史
○幼稚園の春
○野外割烹學校の實習
○日向代議士夫人きむ子
○物集博士令孃和子
○高橋義雄氏夫人よう子
○一堂の春(明治母の會小集)
○新進刀圭家の面影

本誌割引券は前頁の『地球』廣告欄にあり、

(後付の四)

發行所

東京市日本橋
振替貯金口座

雜誌意外の部數を賣捌く●

畫報

○家庭から學校（少女の一日）
○淑德女學校成績品展覽會
○叙勳されたる兩女史
○新らしき女（青踏社同人）
○歌川若菜女史
○花妻（森律子）

●讀物

▽愛妻……須藤南翠
▽結婚法と外國の例……伯爵林董
▽露芝……關睢
▽岡田式靜坐法……婦人記者
▽女學生の交際振り……河合道子
▽女子教育に功勞ある三女史の功績……
▽婦人風聞記……花里
▽女子大學を現代的に改訂せよ……鳩山春子
▽侮辱されたる日本の花嫁……記者
▽近世花見衣……室町小督
▽奧樣繁昌記……佐野湊子
▽春たけなは……壺すみれ
▽畫家の見た女の服裝……小山正太郎
▽樺山大將夫人の儉德……婦人記者
▽大宰相の戀物語……花梨

▽話の種
▽蝶ものがたり……陽炎
▽京女風俗辯……川村文芽
▽花見覺え帳……坪谷水哉
▽三春行樂……別邸の主
▽三つの迷ひ……胡蝶
▽醜婦サンザップの性格……安藤鐵腸
▽諷叢
▽眠い春……花の里人
▽懸賞生花合せ
▽謠曲の踊りと唱歌の踊り……池村赤子
▽最も有功なる髮の洗ひ方……磯野喜代
▽四月中の御膳立、和歌俳句

四六倍判口繪光澤紙寫眞版四十頁石版三色版數頁本文百頁
正價廿五錢郵税二錢五厘
前金●三冊七拾錢（郵税七錢五厘）●六冊壹圓卅五錢（郵税十五錢）●十二冊貳圓六拾錢（郵税卅錢）

區本町三丁目
東京二四〇番
博文館

（後付の五）

演藝界の寫眞を滿載せる 創

演藝



第一巻第一號

四六倍判口繪光澤紙寫眞版卅六頁最美麗木版及コロタイプ版數頁本文二百八頁

正價三十錢 郵稅三錢

表紙―もどり駕　岡田三郎助筆

木版口繪 茶屋の二階　鏑木清方筆

帝國劇場「茨木」　コロタイプ版

市川團十郎の助六
武士道鼓吹者 桃中軒雲右衛門 ……原色版二頁

回 各劇場當狂言 寫眞版……三十四頁

本文挿入 各劇場スケッチ……（木版三色刷）

本文

戯曲 ヂオゲネスの誘惑（非水畫）……森鷗外

史劇 平家蟹（清忠畫）……岡本綺堂

（後付の六）

發行所

東京市日本橋
振替貯金口座

刊雜誌　望外の好評を受く

倶樂部

本誌の割引券は前頁の『地球』廣告欄にあり

✿史劇 卍巴（春汀畫）……井手蕉雨
✿經驗より見たる三座の熊谷……杉贋阿彌
✿劇評の價値……饗庭篁村
✿新派劇の沿革……瀨戶半眠
✿文藝協會訪問記……生田蝶介
✿女優養成に就て……生田葵
✿東京劇壇の三傑……水谷幻花
✿唯新古……岡鬼太郎
✿帝國劇場劇評……岡田八千代
✿市村座若草揃……幸堂得知
✿伊達政宗を觀る……山崎紫紅
✿櫻癡居士の追善劇……伊原青々園
✿本鄕座の新派劇……杏三
✿作者としての櫻癡居士……田村成義
✿昔のおでゝこ芝居……關根默庵
✿演藝俳神樂……えむてい
✿落語 片側町……三遊亭圓喬
✿三月狂言便覽……
✿文藝活動寫眞會……園太郎
✿現下の活動寫眞界……吉山旭光
✿能樂正面觀……花帽子
✿雲人道氣焰縱橫……市村侶佛
✿長唄研究……中內蝶二
✿講談落語評判名家選……森曉紅
✿正童會見聞雜記……鈴木春浦
✿十二階演藝……若菜胡蝶園



■前金■
參冊 金八十五錢（郵税九錢）
六冊 金一圓六拾五錢（同十八錢）
十二冊 金參圓二拾錢（同卅六錢）

四月一日發行



（後付の七）

區本町三丁目
東京二四〇番
博文館

十五版と九版發賣

內藤千代子著

ホネームーン

敬告

（讀書界の各位に）

女流の作品として空前の大歡迎大好評を辱ふせる『スヰートホーム』は重版の極紙型破損して用を爲さず改版の機運にあひ『ホネームーン』また近く改版されんとす斯く迄に有名なる著書をもし萬が一にも手にせらざる事あらば時代遲れと笑はるべし。此際至急御購讀を乞ふ。**定價各六十五錢、郵税六錢** 杉浦非水君裝幀

（地方の賣捌店各位に）

すでに御存じの如く、此の兩書の賣れ行きは劇烈にして重版また重版、而かもなほ時に品切れなきを保せず。されば何卒此際多數の御注文ありて讀書子の渴望に添はれん事を乞ふ。

何となれば天下に青春の男女全滅せざる限り本書は歡迎せらるゝを以て也。

內藤千代子著

スヰートホーム

●發賣元 東京日本橋區本町三丁目 振替口座東京二百四十番 博文館●

（後付の八）

文藝倶樂部 第十八巻第六號 増刊

講談落語 名妓揃

菊判紙數三百二十頁口繪極彩色
錦繪及艶麗美人寫眞版十數葉挿入

正價金廿五錢 郵税二錢五厘



古今名妓として世に知られた者は、尠からずあります。就中粋中の粋を抜いて、之を一堂に集めたものは、この「名妓揃」です、時は陽春四月櫻花爛熳の折柄、茲に物言ふ花有つて、大方諸君の傍へ侍べらうとするのであります。風にも散らず、雨にも萎れぬ不斷の花は其數合せて二七十四、とり〴〵美しき色を愛で玉へと申す。

口演者氏名

▽邑井貞吉 ▽早川貞水 ▽猫遊軒伯痴 ▽錦城齋典山 ▽三遊亭圓右

▽春風亭柳枝 ▽神田伯山 ▽一龍齋貞山 ▽蓁々齋桃葉 ▽古今亭今輔

▽三遊亭圓喬 ▽橘家圓藏 ▽柳家小さん ▽小金井蘆洲

□四月十五日發行□

東京本町 博文館

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界　第拾貳卷第六號（增刊悲劇十番）（每月一回廿三日印刷納本）
明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十五年四月十三日印刷納本

定價金…

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版㉛
明治45年4月(第12巻第5号、第12巻第6号)

2011年7月10日　第1刷発行　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　富士リプロ株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-4004-6　C3321